

ソード・オラトリア・オルフェンズ

鉄血

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

三日月・オーガスは走り続ける。

オルガの目指した場所へもう一度。

アイズ・ヴァレンシユタインは彼の背中を追い続ける。強さを求めて。

# 目次

## 番外編

オラ鉄ラジオ!!ぱーとわん | 1

オラ鉄ラジオ!!ぱーとつー | 5

オラ鉄ラジオ!!ぱーとすりいく | 10

オラ鉄ラジオ!!ぱーとふおく | 15

番外初日の出 | 19

初日の出ぱくとつー | 24

## 第一章

第一話 | 27

第二話 | 37

第三話 | 43

第四話 | 50

第五話 | 57

第六話 | 66

第七話 | 79

第八話 | 86

第九話 | 91

第十話 | 99

第十一話 | 104

第十二話 | 112

第十三話 | 120

第十四話 | 126

第十五話 | 132

第十六話 | 139

第十四話	284
第十三話	279
第十二話	275
第十一話	268
第十話	260
第九話	255
第八話	248
第七話	242
第六話	236
第五話	230
第四話	224
第三話	220
第二話	215
第一話	209
第二章	
第一章エピソード	205
第二十五話	199
第二十四話	193
第二十三話	187
第二十二話	179
第二十一話	173
第二十話	167
第十九話	159
第十八話	153
第十七話	145

第六話	397
第五話	392
第四話	388
第三話	384
第二話	378
第一話	373
第三章	
第二章エピローグ	366
第三十一話	363
第三十話	360
第二十九話	356
第二十八話	352
第二十七話	349
第二十六話	344
第二十五話	339
第二十四話	332
第二十三話	326
第二十二話	320
第二十一話	316
第二十話	311
第十九話	305
第十八話	301
第十七話	297
第十六話 求める強さ	293
第十五話	289

第二十話	第十九話	第十八話	第十七話	第十六話	第十五話	第十四話	第十三話	第十二話	第十一話	第十話	第九話	第八話	第七話
451	448	444	440	437	434	432	427	423	418	414	408	403	400

## 番外編

### オラ鉄ラジオ!!ぱーとわん

「こんにちはー!!司会のティオナですー!!」

「えっと、解説のアイズです・・・」

「三日月・オーガス・・・あ、です」

巨大なモニターと長机が置いてあるステージの上で彼等三人が挨拶をする。

「この話はだんまちの私達が『機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ』を視聴して、皆さんにお伝えする情報バラエティというお話ですー!!」

「だんまちのキャラって・・・三日月は関係ないんじゃ・・・」

「三日月はアイズと一緒に解説ってことで、この場に来てもらってます!今回第一回ということで、スペシャルなゲストも来てもらってます!では、どうぞ!」

アイズの言葉を綺麗にスルーし、ティオナは手を広げてステージ端へ視線を向けると、一人の男が立っていた。

「鉄華団団長オルガ・イツカだ。久しぶりだな、ミカ」

「うん、久しぶり。オルガ」

ゲストとして登場した彼にティオナとアイズは言った。

「私達は始めましてだね!私はティオナ!よろしく!」

「アイズです・・・」

「おう、よろしくな。二人とも・・・てか、この本編に出ていない俺が出ていいのか?」

「ごもつともな言葉にティオナは言う。

「別に良いと思うよ?どうせ、本編とは全く関係ない話だしねー」

「どうなんだろう?」

二人の曖昧な反応にオルガは三日月に言った。

「二人に任せていいのか?なあ、ミカ?」

「多分」



「えー、ちよつと盛り上がり過ぎたので、ちよつと話を戻します。今回は、『鉄血のオルフェンズ』を私達が視聴して感想を言っていけばいいのな?。」

「うん・・・多分それであってる」

「じゃあ、まずは第一話から見ていきましょー!。」

「ちよつとだけ楽しみ」

「あの頃の事をみんのか。懐かしいなミカ」

「うん」

—— 第一話視聴中 ——

「凄かったね、アイズ!三日月が敵をバーンってやってドカーンって敵を倒すの!。」

「うん・・・それに子供の頃の三日月も可愛かった」

「だよー!。」

「あー、二人で夢中になるのはいいんだが、これ二人の感想を聞かないといけないんだよな?。」

話に夢中の彼女等にオルガは言う。

「ああ、ゴメンゴメン。ついね・・・」

「ちよつと夢中になってた」

二人はそう言つて、オルガへと視線を向けた。

「で、どうだった?俺らの話は?気になることがあるんだつたら何でも聞いてくれ」

「三日月とは、いつ会ったの?。」

先に質問したのはアイズである。

「あー、五つくらいの時だったか?三日月が路地裏にいて、俺と始めてあったのが確かそれくらいだった筈だ」

「じゃあ、その頃から一緒?。」

「ああ」



「そういえば、三日月って始め人を殺してたよね・・・？その、怖くなかったの？」

「別に。あの時に俺の覚悟は決まってたから。オルガについていくつて」

「そっか・・・」

「他になんかあるか？」

「じゃあ、三日月や皆が背中に付けてるあれって何？」

「ティオナは手を上げてオルガに言う。」

「阿頼耶識の事か。あれはまあ、モビルワーカーやモビルスーツを使うのに俺達は使ってる。まあもつと、俺達だって好きでやった訳じゃないがな」

「それをやったら強くなれる？」

「アイズの言葉にオルガは彼女を静止するように話す。」

「止めとけ。失敗したらベッドから起き上がれなくなるからな」

「・・・そうなんだ」

「じゃあ、最後！モビルスーツって何？」

「再びティオナは言った。」

「エイハブリアクターつう、特殊なエンジンを摘んだ人型の機体をモビルスーツって呼んでるな」

「じゃあ、三日月のバルバトスも？」

「うん。バルバトスもこんなになる前はあんな風に乗る感じ」

「じゃあ最後、あの女の子って誰？」

「アトラ？俺の大事なヤツ」

「へえ・・・」

「アイズ!?落ち着いて!？」

「大丈夫、落ち着いてる？」

「何で疑問系？」

「・・・こりゃ、アトラには出ないよう言わねえとな」



「じゃあ、時間がもうすぐそこまで迫っているので、オルガさん！最後に一言お願いします！」

テイオナの言葉にオルガは頭をかきながら言った。

「あー、そうだな。これからもミカとハツシユをよろしく頼む。大事な家族だからな」

「当たり前だよ！」

「もちろん」

「二」「それじゃあ待たね（な）ー！」「三」

「そういえば・・・これって続くの？」

「さあな。好評が良ければって感じだろ」

「ふーん、じゃああれはどうする？」

「あん？」

「三日月、そのアトラやクーデリアって人の事聞かせて？」

「・・・？いいけど」

「ミカには悪いが、あれは手出したくねえ」

「同感」

続かない

オラ鉄ラジオ!!ぱーとつー

「えっ………(こど)………もっ…」

アイズはそう眩きながら映像を見つめる。

三日月の行動や三日月が死んだあとの衝撃や悲しみは大きかったが、それ以上のシーンに私は呆然とする。

アトラとクーデリア、そして三日月の子供らしき子が映るシーンを  
見て――。

「………きゆう」

パタン………

私の目の前が真っ暗になり、意識がなくなった。

「アイズさん、もうそろそろ始まりますよって……アイズさん!？」

レフィーヤが部屋で倒れているアイズに気付き、叫ぶ。

「団長！ティオナさん！アイズさんが！アイズさんが倒れてます！」

レフィーヤの叫びが館内に響き渡った。

◆◆◆◆

「こんにちはー!!司会のティオナでーす!!」

「解説のフィンです」

「三日月・オーガス」

巨大なモニターと長机が置いてあるステージの上で彼等三人が挨拶をする。

「この話はだんまちの私達が『機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ』を視聴して、皆さんにお伝えする情報バラエティっていうお話でーす  
!」

「まあ、僕は一回全部見させてもらっているけどね」

フィンはその言って苦笑いする。

「そう言えばアイズは？前のラジオ以来最近見てないけど？」

「ああ、それは……」

フィンが言おうとした時、”ピロリン”とティオナのタブレットか

らメールが送られた。

「誰からだろ?・・・あ、ロキからだ」

ティオナは送られたメールの差出人を見てそう呟く。

「えっと、『アイズたんなら、前に三日月とアトラとクーデリアの関係が信じられなかったから一人で『鉄血のオルフェンズ』を全話視聴して寝込んだらしい』・・・て、ええ・・・」

ティオナは信じられないといった風にそう呟くが、フィンは苦笑いしたままだ。

「えっ、もしかして本当の話? 団長?」

「ああ、うん。まあね」

フィンはそう言っつて、ティオナの言葉にうなづく。

「でも、アイズはそこまでメンタル弱かったっけ?」

「まあ、色々あるんだよ。色々」と

フィンはそう言っつて話を続ける。

「じゃあ時間も押してるし、早く見ようか」

「あつ、はい。ではオラ鉄ラジオスタートです!」

「と、言う訳で今日は二話から五話まで視聴していきたいと思いまーす! 前は一話だけでしたけど、今回からは複数話まとめて見ていっつてそれぞれ感想を言っつていきます!」

—— 視聴中 ——

「えーつと・・・その・・・三日月、容赦ないね・・・てか、五時放送にして良かったのこれ?」

内容が内容でティオナは三日月にそう呟く。

一軍の大人の射殺シーンに決闘終了時の落とし前シーンなどコレ大丈夫? というシーンが幾つもあった。

ある意味、深夜アニメでも良かったのでは? と思うくらいである。

「でも、彼らしいと言えれば彼らしいね。仲間を守る為の行動や、敵なら容赦ない所なんて今と変わってないからね」

フィンは五話までの内容に笑っつて答える。

「にしても、君達は中々鍛えてるみたいだね。僕も君達みたいに身長があれば良かったんだけど・・・」

「なら今度一緒にトレーニングする？それならある程度鍛える事出来るだろうし」

「いいのかい？」

フィンの返答に三日月は言った。

「別にいいよ。相手が多いと張り合いがあるし」

三日月はそう言っつて椅子に背を預ける。

「それに君達の戦い方もギャンブルみたいに運任せで、結構ヒヤヒヤするような戦術だけど、嫌いじゃないよ」

「オルガが決めたことなら俺達は絶対に成功させるつて決めたからね。だから何だつて成功させるよ」

「三日月達なら何でも出来るよーきつとー！」

「あー、うん」

ティオナの言葉に三日月は若干言葉を濁すように返答した。



### 雪之丞の解説コーナー

「あー、俺こんなのやった事ねえけど大丈夫か・・・ん？ああ、もう始まつてんのか。俺は解説、説明役のナディ・雪之丞・カツサパだ。まあ、三日月達からはおやつさんなんて呼ばれてるが、好きに呼んでくれや。で、このコーナーは、鉄血のオルフェンズについての解説を詳しく説明するコーナー・・・らしい。まあ、よろしく頼むわ」

「んでだ、今日説明するのは、エイハブリアクターについてだな」

雪之丞はそう言っつて画面に映像を映し出す。

「エイハブリアクターは厄祭戦時に開発されたモビルスーツ、戦艦、コロニーに使われる相転移変換炉の事だ」

雪之丞は画面を見ながら説明を続けていく。

「で、このエイハブリアクターは一度起動すると半永久的に運用出来るようになる。まあ、起動させた際にはリアクターの出力に応じた重力場がリアクター中心に発生させるから、その慣性制御を利用するた

めにモビルスーツのコックピットはリアクターの近辺に設置するこ  
とが多いな」

「それにリアクターには欠点もある。コイツはエイハブ粒子つう、特  
殊な粒子が生成されるから市街地に持ち込んだりすると、無線通信が  
出来なくなったり、電力が供給されなくなったりするんだよ。まあ、  
そのせいで航空機なんかが発達しなくなったんだが」

雪之丞はそう言いながら説明していく。

「分かりやすく説明するなら別作品のガンダム・・・ゼロゼロ？何？ダ  
ブルオー？まあ、そのガンダムの太陽炉ってやつに近いな」

カンペを見ながら説明する雪之丞はそう言って話を続けた。

「ガンダムフレームに使われてるツインリアクターもそうだ。そのガ  
ンダムダブルオーってヤツのツインドライヴシステムってヤツとほ  
ぼ変わんねえから、それが厄祭戦時には七十二機あったって話だから  
すげえよなあ」

笑いながらいう雪之丞は最後に締める。

「以上、雪之丞の解説コーナーでしたってな。金髪のお嬢さんも頑張  
れよ？アトラやユージンみたいが一番になれねえヤツも居たんだ。  
そんな程度で落ち込むなよ、お嬢ちゃん」

◇◇◇◇◇

「それでは皆さん、お別れの時間です！フィン団長、今日初めての出演  
でしたがどうでしたか？」

「結構楽しかったよ。また、呼んでくれてもいいくらいにね」

フィンの言葉にティオナは笑う。

「良かったあ！ならまた誰か出れない時とかにまた来てね団長！」

「うん、楽しみにしてるよ」

「それじゃあ」「バイバイ！」

「じゃあ、三日月君。早速トレーニングをしようか。僕もそれなりに鍛えておかないとね」

「分かった。じゃあ、ハツシユも呼んでやろうか」

「了解、なら先に準備してるよ」

「わかった」

その数カ月後、三日月のようにバキバキになったフィンを見て通りすがりのベートがこう呟いたと言う。

「あんなのはフィンじゃねえ」

オラ鉄ラジオ!!ぱーとすりいゝ

「こんにちは!!司会のティオナです!!」

「解説のアイズです」

「この話はだんまちの私達が『機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ』を視聴して、皆さんにお伝えする情報バラエティっていうお話なります!」

「いやー久しぶりにやるね!!ていうか、アイズは大丈夫だった?」

「何のこと?」

首を傾げるアイズにティオナが言う。

「ほら、前のラジオの時なんか寝込んだって聞いているけど、覚えてる?」

「・・・?何も覚えてないよ」

ティオナの言葉にアイズは更に首を傾げた。

「えゝ・・・覚えてない?」

「・・・うん。なんで寝込んだかフィン達に聞いても教えてくれなかった」

「・・・(絶句)」

前の記憶がぶっ飛ぶ程のショックだったのだろう。何も覚えてないアイズにティオナは絶句する。

だが、ティオナは首を振って口を開いた。

「いけないいけない。いまラジオ始まつてるんだった。さて今回はスペシャルゲストに昭弘と三日月が来てますので呼んでみましょう!」  
「今日、三日月がゲストなんだ?」

「まーね。じゃあ、入ってきていいよ!」

ティオナが音頭を取る。ステージがライトアップされ、二人の人影が見えた。そしてカーテンが開かれ、二人の姿を見た瞬間――

「・・・ブツ!」

「・・・!?!」

ティオナは吹き出し、アイズは目を大きく見開けた。

なぜなら、三日月達の格好は『豊穰の女主人』のメイド服という視



界の暴力の塊だったからだ。昭弘に至っては、前のボタン部分がパツツンパツツンである。

そんな昭弘と三日月にティオナが絶叫した。

「アウトオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

◇◇◇◇◇◇

「ちよつと!?!二人共!?!なんて格好してたのさ! 普段そんなことしないじゃん!?!」

「……………」

速攻で着替させられた昭弘と三日月に対し、ティオナがそう抗議する。その隣ではアイズが呆然としていた。

そんなティオナ達に対して、三日月が言う。

「いや、ゲストとして出るならインパクトが大きいといいからってラフタ達が……………」

「だとしてもだよ! あれはない!」

三日月の言葉にティオナはそう叫ぶ。

「もー。次はちゃんとしてよねー。ほらアイズも、何時までもボーっとしてないで目を覚まして!」

「…………、あれ? ティオナ? ごめんね?」

アイズが目を覚ます。その反応に、ティオナは「しっかりしてよねー」とぼやきながらも、言った。

「ではあらためて、オラ鉄ラジオスタートです!!」

「これ、俺いるのか?」

昭弘はボソツとそう呟いた。

◇◇◇◇◇◇

「と、言う訳で今日は六話から十一話まで視聴していききたいと思いまーす!」

——— 視聴中 ———

「あの名瀬って人! かつこいいいよね! 大人って感じだし、それにリーダーとしてもかなり頼れそうだしさ!」

ティオナがアイズにそう言うが、肝心のアイズは「うーん」といっ

た感じだった。

「確にかっこいいけど・・・でも私はやっぱり三日月かな・・・」

「三日月にゾッコンだねアイズは。よかったね！三日月！」

「そう？」

「三日月、そう言うのはちゃんと受け取ったらどうだ？アトラの時もそうだよ」

昭弘の言葉に三日月はうーんと唸りながらも口を開く。

「そういうもんなのか。でも、悪い気はしないな」

「・・・！」

「だってき。良かったね！アイズ！」

「・・・うん」

三日月の言葉にアイズは嬉しそうに頷く。

「でもさ、アトラさんってまさかのハーレムオツケーなタイプなんだね？でもそれならアイズも三日月のハーレムに・・・」

なれるんじゃないやあと言おうとしたティオナはすぐに口を噤む。

「もしかしたら・・・三日月の一番に・・・」

そう小さく呟くアイズの姿があったからだ。

(今はそっとしとこ)

触らぬ乙女になんとやらである。

「そういえば・・・ライド達年少組からお前宛に手紙を預かってるんだが？」

「・・・何の手紙？」

昭弘の言葉にアイズが首を傾げる。

「ほらよ」

昭弘から渡された手紙をアイズは開ける。

そしてその手紙を見てアイズは――

ビリビリビリ!!

破り捨てた。

「あ!!おい!!」

「ちよつと!?!」

昭弘とティオナの叫ぶ声が聞こえるが、アイズは破り捨てた手紙をゴミ箱へと捨てた。

アイズは何故か泣きそうになっている。

「何て・・・書いてあったの?」

泣きそうになっているアイズにティオナはおそろおそろ聞いて見る。

そしてアイズから返ってきた答えはというと・・・

「・・・負けてないもん」

「「は?」」

三日月、昭弘、ティオナはアイズの泣きそうな返答にそう答えるしか無かった。

◇◇◇◇◇

「えーと、もうそろそろ時間なのですが・・・アイズ?大丈夫?」

「・・・大丈夫」

まだ若干泣きそうになってるアイズに昭弘は済まなそうに言う。

「なんか・・・すまん」

「・・・別に気にしない」

気にしないとってはいるが、まだ根にもってはいるようだ。

「別にライド達に今のままだと『負けヒロイン』じゃないの? って書かれたくらいで泣かなくてもいいのに」

三日月の包み隠さない言葉にティオナと昭弘が同時に言った。

「「あ」」

ガンツ!!

アイズは頭を机に叩きつける。

顔が見えないアイズはそのまま泣き始めた。

「三日月・・・後でアイズに謝ってあげて・・・」

「・・・?なんで?」

「言い方の問題だ」

昭弘にも言われ、三日月は「わかった」と答えて、アイズを慰め始める。

そんな二人を傍らにティオナは言った。

「それじゃあ昭弘、さっさと終わらせてご飯食べに行こう！」

「お、おう」

「それじゃあ、皆様!!次はオラ鉄ラジオぱーとふおくで会いましょう!!またねー!!」

オラ鉄ラジオ!!ぱーとふおー

「こんにちはー!!司会のティオナです!!」

「解説のアイズです・・・」

「三日月です」

巨大なモニターと長机が置いてあるステージの上で彼等三人が挨拶をする。

「この話はだんまちの私達が『機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ』を視聴して、皆さんにお伝えする情報バラエティっていうお話ですー!!」

「今日のゲストは誰なの?ティオナ?」

「えー、今日のゲストはこの方達です!どうぞ!」

ティオナがそう言うと、天幕が上がる。

そしてそこには居たのは――

「おう。久しぶりだな三日月。元気にしてたか?」

「うん。久しぶり。名瀬はどう?」

「俺も元気だぜ?オルガは最近疲れているようだから連れてきた」

「・・・だからって兄貴、仕事中に無理矢理連れてくる必要はねえのに・・・」

「気晴らしたよ気晴らし。でねえとやってられねえだろ?」

「ま、まあ・・・」

名瀬と頭が上がらないオルガの二人を見て、アイズが三日月に聞く。

「名瀬さんの方が偉いの?」

「偉いって言うより、兄貴分みたいなものだからじゃない?」

「そっか」

三日月の説明に返事を返すアイズ。

そんな彼等を隣でティオナは見つめながらも言った。

「では!オラ鉄ラジオ!!スタートです!!」



「と、言う訳で今日は十二話から十五話まで視聴していききたいと思いまーすー!」

「・・・楽しみ」

「・・・」 ↑ヤバいと思っっている顔のオルガ

「おう、楽しみだな」 ↑結果を知ってるけど、あえて言わない名瀬

「うん」 ↑デザートを食べる三日月

——— 視聴中 ———

十三話最後でアイズがリモコンの停止を押す。

肩をプルプルと震わせつつも、アイズはその金の双眼を見開けさせ、三日月に責め寄った。

「・・・三日月・・・アレ・・・何・・・?」

地の底から響くようなアイズの声と共にスクリーンに指を差す。そんなアイズを見て三日月は不思議そうに言った。

「アレって・・・あの時のクーデリアが可愛かったからやっただけだ、変だった?」

三日月の返答を聞いてアイズはリモコンを握り潰す。

「あー!? アイズ!?! リモコン握り潰さないでよ!? 一応借りてる備品なんだから!!」

「・・・やっぱりこうなっちゃったか・・・」

「修羅場って奴だな。三日月の周りには面白い女が集まるなあ。見ていて飽きないぜ」

悲鳴を上げるティオナ、顔を隠すオルガ、二人の光景を見て微笑ましく様子を見る名瀬。

三者様々な反応だが、アイズとしてはどうでもいい。

ただ一つ。三日月に言いたい事がある。それは——

「三日月は・・・私の事、かわいいって思う?」

「アイズはかわいいって言うより、キレイって感じ」

「・・・そう。ありがとう」

黒いオーラを引っ込めるアイズを見て男性陣は——

「鎮火したな」

「鎮火しましたね」

アイズから溢れ出るぽやぽやとした雰囲気を見て、そう呟いた。

◇◇◇◇◇

「えーでは、オラ鉄ラジオもそろそろ終わりの時間に近づいて来ました!!名瀬さん!今日はありがとうございます!」

「良いって。俺も中々面白い物を見させてもらったしな。それに三日月達を良くしてもらって居るみたいだからこつちが礼を言いたいくらいだ」

名瀬はそう言いながら笑うと、アイズに言った。

「アイズって言ったか?三日月を落とすには大変だろうが頑張れよ?中々ライバルも多そうだしな。お前も気を張れよ」

「あ、はい……」

名瀬の言葉にアイズは小さく頷く。

「良かったね、アイズ!」

「う、うん」

「では、皆さん次はオラ鉄ラジオぱーとふあいぶで会いましょう!では!」

「三」「またねー(な)!!」

◇◇◇◇◇

「ねえ、三日月」

「ん?なに」

三日月はアイズの声に反応し、顔をアイズにへと向ける。

ジツと見つめられる三日月の瞳にアイズは少しだけ戸惑いつつも、三日月に言った。

「わ、私も……してもらっていい?」

顔を少しだけ赤くしつつも、そう言うアイズに三日月は言った。

「いっよ」

「!」

三日月の言葉にアイズは顔を上げる。

そんなアイズに――

「ん、これでいい？」

三日月は舌で唇を舐めながらそう言うが、アイズは答える事が出来ない。

そんなアイズを見ながら、三日月は隣に座るとデーツを口に入れてアイズが元に戻るまで、隣で座って空を見上げていた。



## 番外初日の出

年の始めには恒例の行事がある。

「明けましておめでとう！三日月!!」

ティオナが三日月に笑顔でそう言ってくる。

「・・・？何の事？」

三日月はティオナの言葉に疑問を浮かべてそう言った。

その反応を見てティオナが言う。

「あれ？三日月ってお正月知らないの？」

「お正月・・・なにそれ？ハツシユは知ってた？」

「いえ、知らないっす」

三日月達には知らない行事である。

火星ではそんな習慣などなかったので、今日がめでたい日など知らないのだ。

「もー、仕方ないなー。なら私が教えてあげるね。お正月ってのは・・・」

ティオナにお正月の説明を聞く三日月とハツシユ。

そして新しい年の始まりだからおめでたいと言う理由を聞いて三日月達はある程度だが、理解した。

「そんな感じなんすね。お正月って。今まで、生きるのでもいいっばい  
いっばいだったからそんな事は知らなかったすけど・・・いいっすね。  
それ」

「でしょでしょ！アイズ達も準備してるからまた声かけて上げてね  
！」

そう言ってティオナは身をひるがえして他の場所へと向かって  
行った。

「行こうか、ハツシユ」

「うっす」

三日月達も歩き始める。

一度も感じたことのない今日を体験するだろうが、二人はあまり気にせず食堂へと向かった。

三日月達は食堂で色々な人へと声をかけられる。

『明けておめでとう』『今年もよろしく』

など言われ三日月は困惑しながらも返事を返していく。

「・・・あー、うん。まあ、よろしく」

慣れない事をしながら三日月はテーブルを見ると見たことのない料理が沢山並んでいた。

地球で見た魚と言う食べ物に、エビとか言う虫のような食べ物。殆どが、生き物の肉だった。

「・・・」

三日月は無言でポケットの火星ヤシに似たデーツを口に入れる。

生き物の肉は三日月は食べない。

アトラは普通に食べていたが、これの何処が美味しいのだろうか。すると三日月の後ろから声かけられる。

「明けておめでとう」

後ろを振り返るとそこに居たのはフィンだった。

「ああ、うん」

三日月はフィンを見てそう言う。

フィンは普段と変わらない格好だったが、楽しんでいる雰囲気だった。

「楽しんでいるかい？三日月」

「うん。まあ」

三日月は曖昧に答える。

フィンは三日月の反応に少し疑問を覚えるが、直ぐに察して三日月に言う。

「ああ、そう言えば三日月は生き物の肉が駄目だったね。ならこれを食べたらどうだい？」

「ん？」

三日月はフィンから差し出された食べ物を見る。

黒い豆だろうか。見たことのない色の豆に三日月はフィンに言う。

「何これ？」

「ああ、これは黒豆っていう食べ物だよ。これなら君にも食べられる

「思ってたね」

「へえ……んじやまあ……」

三日月はそう言って手に取る。

「……うん、うまい」

普通の食べなれているヤツとは少し違い、独特な味だが、普通に食べられる。

「そうかい？これはあっちの皿に置いてあったからそっちに行くとい  
いよ」

「分かった」

フィンの指が指された方へと顔を向け、三日月は言う。

「それじゃあ、今年もよろしくね」

「うん。小さい人もよろしく」

そう言って三日月はフィンと別れた。

「……あつ……三日月」

フィンと別れた後、三日月はアイス達と出会った。

「あれ？アイス？」

三日月は普段とは違う格好と髪型のアイスに気付いて言った。

「なんか、雰囲気変わったね。後、格好とか」

確か着物と言ったのだったか。テイワズでオルガと名瀬が親子の杯を交わした時に似たような物を着た覚えがある。

「うん……ロキに言われて。少し動きづらい」

「ああ、アイツか」

三日月は目が細い赤髪の皆が神様と呼んでいる人を思い出す。

少し顔を横へと向けると酔い潰れているロキの姿があった。

「アイズはどう？楽しんでる？」

「うん」

「そっか。ならいいけど」

三日月はそう言って身を翻す。

そして他の場所へと向かおうとしたとき――。

「……待って」

「ん？」

アイズに左手を掴まれて足を止めた。

「何？」

「・・・私と一緒に日の出見に行こう？」

アイズのお願いに三日月はすぐに返事を返す。

「いいよ」

三日月の言葉に顔を少しだがアイズは輝かせる。

と、そこに――

「待つて下さい!!」

「ちよつと待いや!!」

「ちよつと待てやお前」

レフィーヤ、ロキ、ベートである。

「なんで三日月さんだけ誘うんですか!? 私だってアイズさんと一緒に日の出見に行きたいです!」

「ワイもやで!! 最近、アイズたん三日月ばかり構つとるやないか!? ワイも構つてえやあー!」

「なんでコイツと一緒に何だよ!? 他にもいんだろ!!」

三者さまざまな返事である。

と、そこに――

「はいはい! レフィーヤ達は邪魔しない! 私達は私達で楽しもうねー!」

ティオナがそう言ってレフィーヤとベートの手を掴み、引っ張っていく。

そしてロキには――

「ロキ」

低い声でロキの名を呼ぶ声。

「いつ! まつ、まさか・・・」

ロキの顔が真っ青に染まる。後ろを振り返ってはならないと自身の警報が鳴り響く中、ロキは後ろを振り向くと・・・

リヴェリアが立っていた。

「ロキ。前に酒を飲み過ぎるなど言った筈だが？」

「いやー、でも祝い日やし、今日くらい……」

「言い訳は後で聞こう。此方へ来い」

リヴェリアの死刑宣告を告げられる。

それに対しロキは――

「イヤやあ!? アイズたん助けてえな!?!」

「……ちよつと、無理」

アイズはリヴェリアを見て一言。

ロキは情けない悲鳴を上げながら引きずられていった。

「なにあれ?」

「……いつもの事」

毎年起こる事なので気にする事なくアイズは三日月の手を引つ張っていく。

カツカツと音を立てて下駄が鳴る。

そして――ホームの外へ出るとそこには――

「おー」

朝日が登る。

登った朝日が眩しい光を放ちながらオラリオ全体を覆っていた。

そんな幻想的な光景をアイズと三日月は見惚れるように眺めていた。

そして――

「明けましておめでとう。三日月」

「えっ? あー、うん。おめでとう? アイズ」

私の言葉に三日月がぎこちなく返事をする。

だけど、私はとても嬉しかった。

――今年が良い年になるといいな――

## 初日の出ばくとつー

「明けましておめでとうございます!!」

ハツシユが着物姿のアイズにそう言つて頭を下げる。

「うん。明けましておめでとう」

アイズもハツシユにそう言つて軽く頭を下げた。

周りが酒を飲んでいたり、料理を口にする中で、アイズはハツシユに言つた。

「・・・そう言えば、三日月は？何処にいるの？」

アイズは首をキョロキョロと回しているが、何処にも三日月の姿が見当たらなかった。

そう言うアイズにハツシユは「あー」と顔を指で掻きながらアイズに言つた。

「三日月さんなら今、昭弘さんの所です」

「え・・・なんで？」

驚いた顔を作るアイズにハツシユは再び口を開く。

「今年の正月は昭弘さんとベルと一緒に過ごさつて言つて——」

ハツシユがそう言つた瞬間、スツとアイズの顔から表情が死んだ。

「え」

「あ！ハツシユ！それにアイ・・・ズも・・・」

二人を見つけたティオナはアイズの顔を見て、表情を引き攣らせた。

「えつと・・・お邪魔しましたー」

ティオナはそう言つてその場を離れようとする。

「ちよつ!?!」

ハツシユは逃げようとするティオナに視線を向けるが、そんなハツシユにゴメンねと申し訳なさそうに目を向けてから、その場から離れていった。

ティオナに見捨てられたハツシユは、表情と目が死んでいるアイズに肩を掴まれると、ハツシユに向けて唇を動かした。

連れて行つて

その言葉にハツシユは冷や汗を流しながら頷くしかなかった。



「良かったのか？今日は確か特別な日だとベルから聞いたんだが……」  
「アイズだつてずっと俺と一緒にいるよりたまには皆とゆっくりした方が良いでしょう」

廃虚と化した夜の教会の外で二人は話し合う中、暗闇の中から月影に照らされて二人の人影が見えてくる。

「ん？誰だ？」

二人の影を見て昭弘が首を傾げる中、三日月は二人の人影を見て、少し驚いた表情を作つて二人に言った。

「あれアイズ？それにハツシユもどうしたの？」

そう言う三日月に対し、アイズは表情が死んだまま三日月に言う。

「三日月……今日はなんで居なかつたの？」

そう言うアイズに三日月が言う。

「去年はアイズ、皆とあんまり話して無かつたでしょ。それに俺は鉄華団の皆とこういうのやった事ないからやってみたかっただけ」

そう言う三日月にアイズはむっとする。そしてそう言う三日月に言った。

「なら……私も三日月達とやりたい」

「俺は別にいいけど……昭弘、ベル達は大丈夫なの？」

そう言うアイズに対し、三日月は昭弘に聞いてみる。

「ベルは緊張するかもしれないが……ヘスティアはどうか分かん」

「じゃあ、聞いてみるか」

「ああ」

そう言つて立ち上がる二人に、ハツシユが言う。

「三日月さん……俺は……？」

「……んじや、ハツシユも聞いてみる」

「……っす」

半ばついでと言わんばかりと返す三日月に対し、ベルが此方へと

走ってきた。

「昭弘さん！三日月さん！ご飯の準備が出来ましたよ・・・って」  
足を止めるベルに三日月が言う。

「あ、ベル。ちょうどいいや。ハツシユとアイズも一緒に参加させていい?」

そう言う三日月に対し、ベルは――

「だあああああああああ!?!」

そう叫びながら走り去っていった。

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

走り去ったベルの後ろ姿を四人は眺めながら、昭弘が一言。

「寒いし、中入るか」

「うん」

「そつすね」

「・・・はい」

落ち込むアイズを横に三人は部屋の中へと入って行こうとすると、ふと三日月が足を止めた。

「そうだ。アイズ」

「?」

首を傾げるアイズに三日月は口を開いた。

「明けておめでとう。その着物ってヤツ、似合ってるよ」

「・・・!うん」

三日月の言葉にアイズは頷いて一緒に部屋の中へと入っていった。

ベルが戻ったのはその十数分後、パーティーが始まったのはさらに一時間後だったが、パーティーに入っていた皆の顔はとても楽しそうだった。



## 第一章 第一話

強さとはどうやって手に入れる事が出来るのだろうか。  
一つが人として強くなること。そしてもう一つが人間をやめること。

ある少年は誰よりも人間らしかった。  
悪魔に自分の身体を渡しても、人間をやめる事になったとしても、守りたいものがあつた。

彼はもう一人の少年の命令を約束を果たす為に走り続け、そしてその生を終えた。

そしてその生が終わる最後に、彼ら二人は本当の居場所にたどり着いていた事を知った。

”此処じゃない何処か。俺達の本当の居場所に”  
戦場にしか居場所がなかった彼らにとって欲しかったもの。それは……

◆◆◆◆◆

「……何処だろ？ ンン」

三日月は左目しか見えない目で周りを見渡し、周囲を確認する。  
薄暗い洞窟のような、迷宮のようなその場所は三日月にとって知らない場所だった。

「右足は動く……右腕は無理か。それにバルバトスも何か変な感じになつてるし……」

この場所にバルバトスは無いのに、阿頼耶識からバルバトスの状態が分かるようになっていた。

「俺、死んだんだけどな……」

三日月はそう呟いて再び周りを見る。

「……俺が此処にいるって事はオルガや皆も此処にいるのかな？」

前に昭弘が言ってた生まれ変わりと言うやつなのだろうか？だつたらオルガや皆も此方にいるはずだ。

「……探すか」

三日月はそう言つて薄暗い迷宮の中を歩いていった。

◇◇◇◇◇

「なんかさあ、今日はあんまりモンスターと出くわさないよね」

「避けられるに越したことはないでしょう。戦わなくて済むなら、願つたりだわ」

「そういうんじゃないよ……うーん」

アイズ達はモンスターと遭遇し戦闘を消化していた。

現在は順調と言えるペースで51階層を進んでいる。

ティオナを先頭に、アイズ、レフィーヤ、そして後方を警戒し殿を控えるティオネ。四人一列の隊列を組ながら、彼女達はダンジョン特有の緊張感に晒されていた。

モンスターが姿を見せないダンジョンは無音をはらみ、同時にその静けさが不気味でもある。

いつ何が起きるかわからない迷宮は剣呑な気配をあちこちにひそませていた。

不揃いかつ巨大な段差、T字路に、三つも四つも枝分かれする道、錯綜する迷路。

不審な前兆を見落とさぬよう全方向に意識の網を張り巡らしつつ、地図を頼りに目的地までの順路を選ぶ。次層——52階層に繋がる階段への正規ルートを外れ、階層の奥へ向かっていく。

「そろそろね……泉に着く前に、注意事項を確認しとくわよ」

幅のあつた通路が間隔を狭め出し、ティオネがそう切り出した。

歩みは止めずにアイズ達は冒険者依頼の要点を確かめ合う。

「あくまでやることは泉水を確保すること……でも恐らく、カドモスとの戦闘は避けられないわ」

「あの、カドモス、というのは、その……」

「うん、すごく、強いよ……」

「力だけなら、階層主より上かなー」

特定の階層にのみ、更に必ず一体しか現れない巨大モンスターを、冒険者達は畏怖を込めて階層主と呼んでいる。

ギルドからの正式名称は、『迷宮の孤王』。

モンスターの親玉とも言える階層主はその層域では群を抜いた強さを誇る。

迷宮を攻略する上での最難関であり、多くの冒険者が力を結集させて討伐する存在だ。

Lv, 6相当の階層主を引き合いに出され、ごくりとレフィーヤは喉を転がす。

「や、やり過ぎすことは、できないんですか?」

「無理ね。あの竜が泉を番人みたく守ってる間は。泉水だけ回収して逃げ出そうなんて考えていると、死ぬわ」

「あたし吹き飛ばされちゃって、身体中がぐちゃぐちゃになったことがあるしねー」

けらけら笑って語るティオナに、レフィーヤは追い打ちとばかりに血の気を奪われた。

「カドモスを仕留めて安全を確保、泉水の採取はそれからよ」

「わ、わかりました……」

「ティオネ……作戦は?」

「定石通りいくわ。アイズとティオナ、私の総がかりでカドモスを押え込む。レフィーヤはでかい魔法を撃ち込んでちょうだい。怯んだところを、後は私達で一気に畳かける」

「レフィーヤ、今度はぼっちりお願いねー!」

「は、はいっ」

やがてアイズ達は足を止めた。先程から一本道だった通路はもう一寸先ほどで終わりを迎え、開けた空間へと繋がっている。『ルーム』と呼ばれる広間だ。

このルームに『カドモスの泉』が存在する。

「……」

テイオネが無言でアイズ達へ視線を配る。頷き合った彼女達は、テイオネを先頭にして隊列を組み直す。

足音をひそませ、残り僅かもない距離を進んだ。待て、とテイオネが手の平をアイズ達に向けながら、ゆっくりと通路の先を窺おうとする。

彼女が合図を出せばそこで一齐に突入だ。誰もが息を凝らしパーテイ全体にぴりぴりとした緊張感が生まれる。

唇を引き結ぶレフィーヤは杖を強く握りしめ、テイオネも普段のおちやらけた態度を消す。

アイズは前方だけを強く見据えていた。

身を低くして、彼女達はテイオネの合図を待つ。

「……………」

異変、いや違和感に最初に気付いたのは、アイズだった。

眉を怪訝そうに曲げて、無遠慮な動きでその場から立ち上がる。

「ちよ、ちよつと、アイズっ」

「……………おかしい」

「え？」

「静かすぎる」

レフィーヤの呟きに反射的に答えながら、アイズは身を進める。

ルームを覗き込もうとしていたテイオネも追い越し、その先へと足を踏み入れる。

途端、彼女は目を見開いた。

「なに、これ……………」

「荒らされてる……………」

慌ててアイズの後に続いたテイオネ達も、呆然と動きを止めた。

ルームには、林に届かない密度で疎らに木々が生え渡っていたが、そのどれもが無残にへし折られ、あるいは押し潰されている。周囲の地面や壁も何かが暴れ回ったかのように罅割れて粉々になっており、多くの破片が散乱していた。

何よりそれらの光景の随所には、溶かされたような跡や”魔法か何かによって焦げたような跡”がある。

一部分を濃い紫に変色させている木々からは、今も上がる黒煙と一緒にえも言われぬ異臭が漂っていた。

「くっさ……」

テイオナが顔をしかめながら鼻もとを腕で覆う。

困惑の表情を浮かべながらアイズ達はルームの奥に進んだ。これまで以上に神経を尖らせ警戒しながらも、倒された木々の間を抜ける。

至る場所が破壊しつくされた光景の中、そこだけは、聖域のように守られていた。

美しい青色の水面を揺らす清冽な泉。

ルームの最奥に位置し、壁にできた割れ目——小さな岩窟から、僅かな量の水が不定期に湧き出ている。

青いきらめきを宿す神秘的な泉水は、草花が広がる窪みに徐々に溜まっているところだった。

そして、そんな美しい泉の前でうずたかく積もる、大量の灰。

「これって……」

「……カドモスの、”死骸?”」

テイオネのこぼした呟きが、やけに大きく響き渡った。

その莫大な量の灰は記憶にある竜の巨体の規模とほぼ等しい。間の主を失って静まり返る周囲の状況と照らし合わせてみても、まず間違いない、これがカドモスで”あったもの”だ。

魔石を失ったモンスターの末路を見下ろしながら、アイズ達は立ち尽くす。

「……私達以外の【ファミリア】が、カドモスを倒したんじゃないやあ……?」  
おずおずと、レフィーヤが口を開く。

真つ先に考えられる意見に、テイオネは緩慢な動作で頭を振った。「こんな深い階層に来られるパーティは限られている。特定の【ファミリア】が私達と遠征期間を被らせているなんて、聞いていないわ」  
「……それに」

アイズが呟き、小さな砂漠と化している足元の灰へ膝を折る。  
伸ばされた手が灰を払いのけ、埋もれていたあるものを持ち上げ

る。

「ドロップアイテムが、回収されていない……」

彼女が拾い上げたのは、金色に輝く翼の皮膜、その一部分だった。『カドモスの皮膜』

彼の竜を撃破しても滅多に発生することのない、希少なドロップアイテムだ。これを換金するだけでも大規模パーティーの装備を全てまかなえるほどの、莫大な資金が手にはいる。

一度の迷宮探索で少くない金を飛ばす冒険者が、この飛びきりの戦利品を回収せずに放置するとは考えにくい。

「えっと、つまり、どういうこと？」

「何か”がいた”のよ、ここに。カドモスを殺してのける、冒険者じゃない”何か”が」

沈黙が落ちる。

問いを発したティオナも応答したティオネも口を閉ざし、アイズは金色の皮膜にうつすらと反射する自分の顔を見つめる。

レフィーヤがみな心の内を代弁するように、その細い二の腕をさすった。

「……嫌な予感がする。早く戻りましょう」

とティオネが言った瞬間——アイズの持つ『カドモス皮膜』に映った自分の顔の後ろから光が走った。

「……………ッ！」

アイズはすぐに〈デスペレート〉を引きぬきながら振り返る。そして

て——

ガギイイイイイン!!!

金属同士がぶつかる音と同時に、アイズの腕に凄まじい衝撃が走った。

「……………ツウー！」

その凄まじい衝撃にアイズは顔を歪める。

「アイズ!!」

「アイズ!?!」

「アイズさん!?!」

三人がそう叫ぶが、答える事は出来ない。  
気を抜けば確実にやられる。

そういう感じが、この相手からひしひしと伝わってくる。

目の前でつばぜり合いをしているその相手は一言で言えば異質  
だった。

大きさは自分より少し大きいか、同じくらいの人型。

悪魔を思わせるフルフェイスのヘルム目の部分はモスグリーンの  
ガラス質の目が光っている。

全身金属で出来た鎧の後ろや腰回りには穴のようなものが空いて  
いる。

そして爪のように鋭い両手に握られているのは小型の二振りのメ  
イス、両腕には穴が空いた突起が出ていた。

「つつ!!」

ギリギリと競り合いを続けるなか、ティオナがその二人の間に目掛  
けて大双刃を振りかぶる。

白い悪魔はティオナの動きに気付いたのか、アイズを足で蹴飛ばす  
と、その勢いを利用して距離を取る。

距離を取った悪魔はとてつもないスピードで、”上空を飛びながら  
”両腕に装着されていた突起状のモノの先端を此方に向けて”魔法  
の弾丸のようなモノ”を発射してきた。

殆ど目に見えないスピードで発射される弾丸は正確に私達を捉え  
てくる。

「ちよつと!! どうすんのこれ!? メチャクチャヤバイ奴じゃない  
!?!」

「それくらい見れば分かります!!」

「もしかして、カドモスを倒したのはコイツなのかしらね!!」

三人はそう言って攻撃を防いでいるが、それもいつ突破されるかわ  
からない。

おそらくこの人がカドモスを倒したのだろう。

Lvも自分と同じかそれよりも上。

もしファミリアに所属している人なら確実に有名になっているで

あろう。

そもそも、この51階層を一人で来ている事自体が異常なのだ。ティオネ達の会話を聞いていると、その悪魔は凄まじいスピードで私の後ろを取り、両手のメイスで攻撃を仕掛けてきた。

ガゴオオオン!!

再びへデスペレートとメイスがぶつかり合う音が耳に入り、それに遅れてビリビリとした痺れが腕に響く。

すると、その悪魔から声が聞こえてきた。

「さすがにあのトカゲと違って結構やるな。アンタ」

聞こえてきたのは、子供の声だった。

「……え?」

「じゃあ、そろそろ終わらせようか」

悪魔がそう言ってもう片方のメイスを振り上げた瞬間――

『……あああああああああああ!?!』

「……なんだ?」

いきなりだった。

臓腑の底から引きずりだされたような絶叫が、アイズ達のもとに届く。

ことの重大さを直感させる凄惨な人の悲鳴。入り乱れた迷路に次々と反響し、鼓膜をあらゆる角度から何度も打ちすすえる。聞き覚えのあるその声音に、弾かれたように顔を上げるアイズ達は叫ぶ。

「今の声っ!」

「ラウル……!」

悲鳴の方角へと向かいたい所だが、この悪魔を相手に向かうことは出来ない。

アイズは、ティオネ達を先に行かせようとした瞬間。

「さっきのアンタらの仲間のやつ?」

アイズの前からそう言った言葉が飛んでくる。

「……うん。だから、貴方に構っている暇はない」

アイズがそう言うと、悪魔は急に距離を取って言った。

「……んじゃ、行けば?」



「……え？」

急な彼の発言にアイズは戸惑いを隠せなかった。

そして彼は言う。

「アンタは仲間を助けたいんだろ。だったらそっちに行けば？ 俺はどうやって外に出れるか探すだけだから」

「……なら、何で私達を狙ったの？」

なら始めから攻撃をする事なく声を掛ければ良かったと思うアイズに悪魔は答える。

「……アンタ達があんな殺気ばら蒔いてたら敵かと思っただけ。でも、違うみたいだから謝るよ。ごめん」

「謝ってゆるされると思ってるんですか!! アナタ！」

レフィーヤがそう言っつて悪魔に詰め寄るが、その悪魔はそんなレフィーヤに言う。

「じゃあ、アンタ達の仲間を助けたら許してくれる？」

「……え？」

「俺だつてオルガや仲間を探したいだけだから外に出る出口を探してるんだ。ならアンタ達の仲間を助けて外に案内して貰えばいいかなつて思っただけ」

彼の提案にティオネは言う。

「……信じていいのね？」

「別に信じるかはアンタらの決める事だよ。筋は通さなきやいけないつてオルガは言うだろうし」

「……分かったわ。貴方の提案を飲むわ」

「ティオネさん!？」

レフィーヤは目を見開いてティオネを見るが、ティオネは苦虫を噛み潰したかのような顔をして言う。

「ここは、提案をのんで団長達を助けに行くべきよ」

「……でもっ！」

レフィーヤはそれでも食い下がるが、その間にティオナが割って入る。

「はいはい！ 今はこんなところで喧嘩してる場合じゃないよー！ 急

ぐよー！」

そう言つてテイオナは走り出す。

「分かつてる！」

「ちよつ、待つてください!？」

二人もそれに続いて走りだし、私と彼だけがその場に残る。

「……んじゃあ、案内してくれる？ アンタ」

「……うん、分かった。それと私はアイズつて名前がある。貴方は……？」

私は彼に名前を聞くと、彼は簡潔に答えた。

「三日月・オーガス」

「……三日月・オーガス……」

アイズは彼の名前を口にする。

彼の後ろについて行けば、今よりも強くなれるかも知れない。

「んじゃ、頼んだよ」

「……うん」

私はもつと強くなりたい。それだけを目指して。

## 第二話

走る。走る。走る。

悲鳴の方角と後は勘頼り。

現れるモンスターを強引に振り払い、通路を幾度も曲がったアイス達の視界に、それは飛び込んできた。

「なに、あれ!?!」

「い、芋虫……っ!?!」

ティオナ、レフィーヤと声が響く中、アイズは金の双眼で見張る。巨大なモンスターだ。

全身を占める色は黄緑。ぶくぶくと膨れ上がった柔らかそうな緑の表皮には、ところどころ濃密な極彩色が刻まれており異様に毒々しい。無数の短い多脚からなる下半身はレフィーヤが呻いたように、確かに芋虫の形状に似ている。

ダンジョン深層を探索してきたアイズ達でさえも、一度も目にしたこともないモンスター。

——新種のモンスター?!

進行に合わせて上下に振動するモンスターの巨体が、四Mはある天井と何度もぶつかり合い削り落とす。

横幅も道の両端にほぼ届き、通路一杯に塞ぎながらこちらへと迫ってくるその光景は、戦車という言葉をアイズに連想させた。

と、その隣で三日月が若干嫌な顔をつくり言った。

「アイツ、結構面倒なんだよな。近づいて殴ったら周りの壁溶かすし。ああいうのは遠くから殺った方がいいよ」

「

三日月はアイズにそう言って目の前の巨大芋虫を見た。

「団長!?!」

そのモンスターに追走される、フィン達二班のパーティが、戦闘を放棄して、モンスターに背を向けながら全力で逃走している。

ティオナが悲鳴に近い叫び声を散らすなか

「っっ!」

最も早く動いたのはティオナだった。

眦を吊り上げ、アイズ達の元から飛び出していく。

敵の進撃を食い止めようと、追われるフィン達と行き違い、モンスタ―へと斬りかかる。

「止せ、ティオナ―」

制止の声も聞かず、接敵。

肉薄してくるティオナに対しモンスタ―は顔面と思しき位置から、”がばつ”と嫌な音を立てて口腔を開く。

そして勢いよく、大量の液体を放出した。

紫と黒が混合したおぞましいマールブル模様の液を、しかしティオナは難なく回避し、懐に飛び込みながら空きの胴体へ、大双刃を叩き込む。

が

『ツツー！』

「っ!？」

モンスタ―の苦悶の叫び、破鐘のような啼き声が轟く一方、ティオナの瞳もまた驚愕に見開かれた。

敵の傷口から先程のものと同色の体液が迸り、眼前に飛散する。

首をひねり間一髪避けたもの、一粒の細かな液が一本の髪に触れ――じゆうつ、という音とともに溶かした。

ぞつという悪寒が全身に走り、ティオナは地を蹴つてその場から離脱する。

「えっ……!？」

後方へ着地した瞬間、ティオナは自分の目を疑った。

大双刃の片方の剣身が、”消えている”。

いや、この場合溶けたというべきか。

敵の体内に埋まったことによりあの体液に侵食され、跡形もなく。目のすぐ横の頭髮と大双刃が煙をあげている。溶解したかのような跡を残す剣身の断面を見つめ、ティオナは言葉を失った。

まさかの武器破壊。

『アア!!』

モンスターがいきり立つような咆哮を上げ、再び口腔から液体を噴き出させようとした瞬間。

「そこだ」

三日月は両腕に装備された銃口をそのモンスターの口腔へ狙いを定めて発砲する。

オレンジ色の弾丸は真っ直ぐとそのモンスターの口腔へと向かって行き、そして。

”パァン!!”という音を立てながら、まるで花火のように弾けとんだ。

弾けとんだその瞬間、モンスターの中から大量の紫液が周りに飛び散るが、アイズ達はその紫液を回避する。

その様子を見たフィンやテイオナ達は一瞬だが動きを止めた。

そう。何故なら自分達でも逃げるしかなかったモンスターを誰かも知らない少年が、正確にしかも一撃で撃ち抜いたのだ。

皆が退散する中、三日月は淡々と彼らに言う。

「あの気持ち悪い奴、口を開けた時に攻撃を撃ち込めば、中で光ってるやつに当たってすぐに倒せるよ。さっさと倒して、ソイツを助けてやれば？」

三日月はそう言って巨大なモンスターを見る。

倒したモンスターの後ろにも、同じ巨大芋虫が群れをなしてこちらへと向かってくるが、三日月はその群れに腕部砲を向けて淡々と一体ずつ確実に殺していく。

その様子を見て、フィン達は呆然とするが、すぐに我に変わりラウルの様子を見た。

ラウルはガレスの大きな肩の上でぶらんと両手を力なく垂れ下げ、時折小さな掠れ声を上げながら呻いている。

身に纏っていた軽装ごと皮膚は溶かされ、さらに黒がかった紫色に変色している有り様だ。

「早く治療してやらんと、こりゃいかんぞー！」

ガレスはそう言って、ラウルを担ぎ直す。

仲間の惨たらしい姿に、レフィーヤは顔を蒼白させていた。

——と。

「え、ちよつと……あのモンスター、ブラックライノスを襲ってるよ!?」

後ろを振り返ったティオナが叫ぶ。

「アイズ達が既に過ぎ去った十字路で、横手から現れたブラックライノスを、例の巨大芋虫は出会い頭に攻撃していた。

腐食液で体を溶かし動きを止めた後、その巨大な口を開いて上半身を一呑みにする。」

依然として三日月は足止めをしてはいるが、それもいつまで続くかわからない。

「あのモンスターは、僕達も他のモンスターも、近づいたものには全て反応して攻撃してくる」

「見境なしってことですか?」

「いや、どうか。決めつけるには材料が少ないけど……モンスターを率先して狙っている節があるように思う。ほら、先程から攻撃している彼をあまり狙っていないだろう?」

先程から攻撃を仕掛けている三日月に対して、巨大芋虫はそちらへと関心をあまり向けず、モンスターへと攻撃をしている。確かにその節が可能性としてあり得る。

三日月とモンスターを見て瞳を細めるフィンに、ティオネは懐から木の欠片を取り出した。

「団長、実は私達が向かう前に『カドモスの泉』が荒らされていました。カドモスは灰になってドロップアイテムだけが。この木の欠片も同じ場所です」

「うん。……でも、カドモスは三日月とも戦ったと思う。あの子、私と戦ってる時にトカゲより強いって……」

ティオネが言い終わった後、アイズもフィンにそう言う。

おそらくだが、彼はカドモスとあのモンスターと戦ったような言いぐさだった。

なぜなら、あのモンスターの弱点とおもしき場所を正確に撃ち抜き、それでいてなおかつ自分達に教えたのだ。

「シー……決まりか。カドモスも倒すとはね……それにしても彼は一体何者だろう。一人でこんな階層奥深くにいるなんて」

受け取った樹木の一片を見つめ、その後三日月に視線を向ける。

彼ほどの実力者であれば自分達の耳に入ってくる筈だ。

だが、それすらもなく名前すらも聞いたこともない。

”まるでどこか別の所から来たような” 感じの少年にフィンは頭を悩ます。

「フィン、あのモンスターは倒せる？」

一向に走り続ける中、アイズがその言葉を周囲に打った。

何時までも彼だけに任せて置くわけにはいかない。

アイズはそう思ってた言葉だが、仲間達の間では一瞬の沈黙が生まれる。

やや前方を走り、顔だけを向けてくるアイズに、フィンは間を開けて答えた。

「攻撃自体には効果はある。けど、それは一撃に対して一つの武器を犠牲にだ、さっきのティオナのようにね。割に合わない過ぎる」

「……」

「それに、彼の場合は自分達でもよく分からない遠距離での攻撃を持っている。下手に手を出して彼の邪魔をすれば、余計に被害が大きくなりかねない」

ただし、とフィンは続ける。

「魔法ならその限りじゃない。この状況下では難しいかもしれないけど、詠唱するだけの時間を稼いで、”群れを殲滅できるほどの強力な魔法”を打ち込めたなら……」

フィンの分析が終わる。

そして言い終わるや否や、アイズの、その場の全員の視線がある人物のもとに集まった。

自分の顔に集中する周囲の視線に、レフィーヤは、「えっ、えっ？」と顔をきよろきよろと左右に振った。

「っ！ 前からも来た！」

前方から押し寄せてくる黄緑色の巨体。

ティオナが警告すると同時にフィンも指示を出す。

「全員、右手の横道に飛び込め！」

方向転換し、唯一残された通路へアイズ達は体をねじ込んだ。それに少し遅れる形で三日月もバルバトスのスラスタ―噴かせながら、滑るように進む。

それまで進んでいた道幅より狭くなった一本道を、一列または二列で駆け抜けていく。

「ティオネ、武器とアイテムのストックは？」

「え……あ、はい、何も消費していません。ティオナの得物以外は、全て無事です」

「よし、ガレス達に武器を渡せ。この先のルームは行き止まりだ、君はラウルを伴い奥まで下がって、アイテムを使って治療しろ」

都市規模と同等以上の51階層の構造を、地図も見ず完全把握している小人族の首領に息を呑みながら、ティオネはすぐに指示に従った。

「アイズ、君は彼に報告して欲しい。この先の広場で迎え撃つて」「……分かった」

アイズはフィンの言葉にそう答え、方向転換し、三日月の元へと向かう。

「此処から先は持久戦だ！」

モンスターの全滅が先か、自分達か。

その答えはこの先の広場で決着する。



### 第三話

三日月は後ろから迫ってくるもう何度目かわからない芋虫型のモンスターを攻撃を回避し、そのモンスターの頭に砲撃を撃ち込む。汚い花火のように黒と紫の混ざったような液が周りを巻き込みながら”ジユウ”という音を立てて溶かされていった。

一匹、一匹プチプチと確実に潰していくが、その数は減る所か増える一方だった。

「一体何時まで続くんだ？ これ」

三日月はそう呟き、もう一匹の頭を吹き飛ばす。

今回は彼らに攻撃が行かないように行動してはいるが、それもいずれはボロが出るだろう。

後ろがゴチャゴチャうるさいが、それは構わない。

問題は……。

「はやくしてくれないかな。流星に俺でもカバーしきれないけど……」

三日月はそう言って残弾を確認する。

また、いずれはすぐに補充出来るようになっていえるとはいえ、もうそろそろ尽きる頃合いだ。

その時は、メイスで殴りにいかないといけないだろう。

だが、コイツ相手に殴りにいくのはあまりよくないと先の戦闘で経験している。

だったらなるべく長く時間稼ぎをするだけだ。

すると、後ろから声をかけられた。

「ミカヅキ」

「ん？」

三日月は後ろを振り返ると、そこにはアイズがいた。

「なに？」

三日月はアイズにそう言うと、アイズは三日月に平行するように走りながら言った。

「この先の広場で迎え撃つ事になった……」

「……分かった。で、そこでどうするの？アンタ達の武器じゃすぐに無くなるんだろ？」

「……魔法で殲滅する事になってるから、出来るまでの時間稼ぎをする」

「魔法？ よく分かんないけど、それでまとめてコイツらをやる感じ？」

「うん」

アイズがそう言ったその後――

自分達の前から叫び声上がる。

「ベート、ガレス、ティオナ！ ラウル達を守りつつ敵を駆逐しろ！

あの新種は僕とアイズと彼でやる――かかれ！」

どうやら前でもなにやら非常事態があつたらしい。

そして、この事態を見越していたかのようにフィンが命令を出していた。

指針を得て混乱を免れたベート達は、迎撃せんと壁に向かって走り出した。

それに連動するかのよう。

凶悪な産声を響かせながら、三十以上のブラックライノスが壁面を破って現れる。

「レフィーヤ、後退して詠唱を始めろ。この戦闘は君にかかっている。これ以上犠牲も、彼にも負担をかけさせられない。急ぐんだ」

「……！ わかりましたー！」

レフィーヤもまた、与えられた役目に大きく頷いた。

その紺碧の瞳から気負いの影も、迷いも振り払い、後方へと下がる。その後ろ姿は見届けず、フィンは最後に、金髪の少女と白い悪魔の

ような鎧を纏った彼の隣へと並び立った。

「アイズ」

「わかってる」

目配せしてくるフィンに、アイズは頷く。

「それと、君」

「……なに？」

「巻き込んで悪いね。本当だったら僕達でやらないといけないことなのよ」

「……別に気にしてないよ。それに提案したのは俺の方だし、最後まで付き合うよ」

三日月は自分よりも小さい青年にそう言っつて、前を見る。

「すまない、感謝するよ。それと……君の名前を覚えてくれないかい？ 戦闘中に君呼ばわりだと分かりずらいだろう？」

フィンの提案に、三日月は少し考えるような身振りをした後に言っつた。

「三日月・オーガス」

「三日月・オーガスか。僕はフィン。フィン・デイルナだよ」

フィンは三日月にそう答えると、三日月は返答を返してきた。

「んじゃ、足引っ張んないでね。小さい人」

三日月の言葉を隠さない返答に、フィンは苦笑して言う。

「努力はするよ」

フィンがそう言っつて、芋虫型のモンスターを観察するように見る。

と、横からアイズは呟くように詠唱をする。

「【目覚めよ】」

長短文詠唱を引き金に、『魔法』を発動させる。

「【エアリアル】」

風が生まれた。

形として視認できるほどの大気の流れが、踊るようにアイズの体を包み込む。

砂金のごとき輝きを放つその金の髪が風を纏い、波打った。

「【エアリアル】」

それはアイズが使用できる唯一の魔法。

体や武器に風の力を纏わせることで対象を守り、攻撃を補助し、速度を上げる、『風』の付与魔法。

迷宮の淀んだ空気を押しよける清涼な風に加護を宿しながら、アイズは腰に納めていた剣を引き抜く。

しかしそれを装備はせず、「フィン」と呼びかけ隣の少年に預けた。

『不壊属性』か……疑うわけじゃないけど、通用すると思うかい？」  
「多分……」

「頼りないね」

苦笑を浮かべながらフィン自身は自身の背の丈ほどある「ヘデスペレート」を持ち、代わりに予備の片手剣をアイズへと渡す。

アイズが剣を受け取って前を向くのと、戦車のような巨体が通路口を破壊しながら突破してくるのは、同時だった。

『ツ!!』

破鐘のような雄叫びを上げ、モンスターが眼のない顔をアイズ達へと向ける。

生理的嫌悪感を感じさせるその黄緑の体躯は、胴からブシュツと頻りに体液を散らしており、ずるずると進む側から足元の地面を溶かしていた。

テイオナが武器と引き換えに傷を負わせた、あの大型だ。

「風である腐食液を防げないようなら無理はしないでくれ。レフィーヤの準備が整うまでの時間を稼げれば、それでいい」

「うん」

「余計な心配だとは思うけどね」

「俺はどうすればいい？」

二人の会話に三日月は割って入るように言う。

そんな三日月にフィンは言った。

「君は、あのモンスターがこれ以上後ろに行かないように止めておいてくれないか？ もし厳しそうなら、無茶はしなくてもいい」

「分かった」

三日月はそう言って芋虫型のモンスターに一発、銃弾を叩きこむ。

また、汚い花火となって周りに飛び散るモンスターの残骸に、嫌悪感を催しながらも三日月は次々と撃っていく。

テイオナ達が既に戦端を開いている中、おぞましいモンスターの大群に向かって、アイズはヒュンツと剣を鳴らす。

風が揺らめく。

「——先に、行くよ」

アイズはそう言って地を蹴る。

爆風めいた音と砂塵を巻き起こし、アイズの姿がかき消えた。

全身に付与した風の力で得た猛烈な加速。

文字通り疾風と化し、アイズはモンスターの群れへ一直線に突き進んだ。

それに少し遅れる形で、三日月も突き進む。

『!』

その高速の突貫に反応できたのは、先頭の大型のみだった。モンスターは勢いよく開口し、既に至近距離に迫られているにもかかわらず、腐食液を放出する。

アイズは斜め下から剣を振り抜いた。

神速の一閃が、纏った風のうねりを盾に、紫液を弾き飛ばす。

防御不可能な敵の攻撃を、銀の軌跡が切り裂いた。

『』

肉薄する。

切り開かれた腐食液の間を疾り抜け、敵に次の行動を許さないまま、アイズはその懐へと入り込んだ。

硬直するモンスターに袈裟斬りを入れても、風に護られた剣は、胴体を深く斬りつけても溶けることはなかった。間髪入れず傷口から体液が飛び散るが、アイズの体を取り巻く気流がその全てを吹き飛ばす。攻守一体の風の鎧は越えられない。

アイズは金色の両目を細めると、さらに加速し剣の柄を握る右手が、ぶれた。

——『アイズ・ヴァレンシユタイン』。

最強の一角とも名高い、金髪金眼の少女の本名。

この迷宮都市オラリオ屈指の剣士として名を連ねる、第一級冒険者。

その二つ名を、【剣姫】。

『』

仮借のない、連続攻撃。

凄まじい速度と鋭さ、剣筋でモンスターを細切れにしていく。

切り刻まれたモンスターは絶叫を上げ、マール模様様の体液を至る箇所から噴出させながら崩れ落ちる。

肉体の均衡を失ったそのモンスターは、黄緑色の表皮をぶくぶくと膨れ上がり、勢いよく破裂する。

「あぶなっ!?!」

『オオオオオオオオオオ!?!』

まるで爆弾のように腐食液が周囲へと飛散した。

アイズ達から離れた位置で交戦するティオナのもとまで届き、被液したブラックライノスが悲鳴を上げながらのたうち回る。

「やれやれ、倒したら倒したで爆発するとは」

溜め息を半ばつきながら、フィンも芋虫のモンスターに接近する。

中型と言える大きさの相手は、胴体をひねり、エイにも似た広く平たい扁平状の腕で薙ぎ払おうとしてくるが———フィンはその小さな体を活かして、やすやすと回避する。

そして身に付けている腰巻きを翻し、地に伏せるような態勢で間合いを埋め、アイズの〈デスペレート〉をその疣足に見舞った。

「よし、いけるね」

モンスターの悲鳴とともに迸る体液を完璧に見切りつつ、溶けだしていない剣を見て頷く。

体液に晒された〈デスペレート〉は剣の腹から煙を上げてはいるものの、その刃は微塵も欠けていない。

モンスターの腐食液にも耐えうる特殊武装に一笑しながら、フィンはさらに斬撃を繰り返した。

モンスターの短い多脚のみ狙いを絞り、二つ三つと切断。片側半分の脚を失ったモンスターはバランスを失い、地面へと倒れこむ。

魔法の恩恵を受けているアイズには劣るが、フィンの動作は俊敏かつ要領が良く、何よりの一切の無駄のない行動へと踏み切る躊躇がない。

それは自分より巨大な相手を倒すために身に付けられた知恵と、勇気だ。

敵の無力化のみを念頭に置き、小人族の少年は戦場を駆け抜ける。

「っっ！」

アイズは近くにいたモンスターを切り捨てて、三日月を見る。もし、苦戦しているようならそちらへと向かおうと考えていたアイズは、三日月のいる方へと顔を向けると、そこはとても一言では表せない惨劇だった。

モンスター一体一体の頭や胴体がまるで鈍器で殴られたかのように潰され、腐食液がモンスターの口や傷口から周りへと流れている。

頭が弾け飛んだモノ、潰されたモノ、貫かれたモノ、踏み潰され原型を留めていないモノがあちこちに転がっていた。

そしてその光景を生み出した悪魔をアイズは見た。

どこにしまつてあったのか、まるで刃のない大剣のような武器で芋虫型のモンスターの頭が”ブチュツ”と音を立てて潰れる。

その際の勢いで腐食液が悪魔の頭にかかるが、腐食することなく、まるで血がついたかのように”ベチャリ”と白い装甲につくだけだった。

武器の刃のない大剣も、溶けることなく原型を保ったまま、健在している。

向かってくるモンスターを容赦や情けなどかける事なく、無慈悲に淡々と始末していく。

戦闘と呼べるモノではなく、圧倒的な力でねじ伏せ、一匹一匹確実に潰して殺して回る。

アイズが圧倒的スピードで敵を倒すのなら、三日月は力でねじ伏せる。

アイズはそんな三日月の姿を見て、羨ましいと思った。私も強くなりたい。ただ、純粋に強く。

アイズはそんな思いを抱きながら、三日月をその金色の瞳で見ている。

だが、一つだけ忘れてはいけない。

純粋な力や暴力では、成せないこともある。

そう、かつての■■■■・■■■■のように。

## 第四話

三日月達が新種のモンスターを食い止めている中、テイオネ達もラウルの怪我の治療を最優先にしながら、レフィーヤ達の防衛戦が行われていた。

「ラウルツ、ほら、しっかりしなさい!」

「無理つす、テイオネさんつ。俺もう駄目つすつ、このまま死にます」

「そんなことほざいてるなら私が息の根を止めるわよ!?!あんたが全快しないと、団長を助けにいけないのよツツ!」

「あ、すいません殺さないで・・・!?!」

弱音を吐くラウルに、テイオネは解毒薬と回復薬で治療を取りかかっているテイオネの冗談に聞こえない罵倒を背中で聞きながら、戦況を見極める。

通路口から現れるモンスターはようやく終わりを見せようとしていた。

アイズ、フィン、三日月は敵を圧倒しているが、数の暴力では覆つておらず、未だ予断は許されない。

戦闘が長引けば、長引くほど、それだけ勝利の天秤はモンスター側のもとに傾くことになる。

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ!」

アイズや三日月達が戦闘を繰り広げるのを遥か前方に、レフィーヤは詠唱を行う。

その瞳は使命に燃えていた。緊張や怯えは勿論ある。

だが、それ以上に、隠れた憧れを抱くあの少女から託された言葉がある。

次は助けてほしい、と。

報いなければならぬ。彼女達の働きに応え、今度こそ。

この『魔法』をもって、彼女達を救うのだと。

意を決したレフィーヤは、己の声を力強く紡いでいった。

「帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢!」



透き通るような玉音が進むにつれ、足もとに展開された魔法円が輝きを増していく。

基本アビリティから派生した、発展アビリティ『魔導』。

魔法を極めし者が「ランクアップ」を通じて発現することのできる、『スキル』とは別枠の魔力特化項目。

威力強化、効果範囲拡大、精神力効率化。魔法を使用する上で様々な補助をもたらす魔法円は、『魔導』のアビリティを手に入れた上位の魔導士の証だ。

なお、この後三日月に『威力は高いけど、チンタラ喋ってる間に狙われるから無駄』と切り捨てられるが、それはまだ先の話だ。

構築される何重もの円に、複雑な体系の紋様。

立ち上る山吹色の光に、レフィーヤの美しい相貌が照らされる。

「[雨の如く降りそそぎ、蛮族共を焼き払え]」

最後の詠唱文を唱え、魔力が爆発的に強まった。

レフィーヤはキツと双眼を吊り上げる。

「撃ちますー！」

叫ぶと同様に照準、ラウルやティオネが待機する後方を除いた、ルーム全域。

撤退するアイズ、フィン、三日月、そしてティオナ達を捉えたレフィーヤは、杖を構え魔法を行使する。

「[ヒュゼレイド・フアラールカ]!!」

夥しい火の雨が連発される。

燃え上がる鏃型の魔力弾は宙に弧を描き、モンスター目掛けて殺到する。燃烧する音と風切り音を轟かせながら敵に命中していき、モンスター達の絶叫も呑み込まれた。爆撃と言って相違いない広範囲魔法にルームが赤く染まり、瞬く間に炎の海が生まれる。

ブラックライノスが、芋虫型のモンスターが、灰すら残さず燃え尽きていった。

「ほらっ、やっぱり通用するじゃん！一発だよ、一発！レフィーヤすごい！」

「あ、ありったけの精神力をつぎ込んだのでその……」

「景気良すぎんだろ、リヴェリアと言いエルフどもはよお……くそつ、毛が焦げちまった」

「がははっ、ここまで来ればスカツとするわい」

レフィーヤとティオネ達を守るように三角形を作っていたティオナ、ベート、ガレスが戻ってくる。

唯一魔法の範囲外にいた後方の敵は、ガレスが全て倒し終えていた。

敵を掃討しティオナに褒めちぎられていると、やがてアイズ達も帰ってくる。

「……ありがとう、レフィーヤ」

「あ……は、はい！」

感情の乏しい顔を、アイズは確かに綻ばせた。

向けられた小さな笑みとその言葉に、レフィーヤは瞠目して、すぐ感極まるように相好を崩す。紺碧の瞳を潤ませ、そつと目尻を拭いた。

ほんの一時、場が祝勝の雰囲気に含まれる。

「……」

「団長？どうしたんですか？」

火の粉が舞い上がる中で、押し黙っているフィンにティオネが歩み寄る。

視界の隅では一命を取りとめたラウルが腹をさすっていた。

三日月は、纏っているバルバトスの顔を入り口へと向けながら、一言も喋ることなくじつと見つめている。

三日月の様子を見て、フィンはティオネに言った。

「このルームに逃げ込む前……危うく挟撃されかけたあの時、モンスタ―達は前からやってきた。そしてあの道は、50階層に到達できる正規ルートだ」

「……まさか」

「ただの杞憂ならいいんだけど……そうも言っていられないか」

虫の知らせを感じるように、自身の右手、親指を見下ろすフィン。ペろりと指の腹を舐めた彼は、愕然とするティオネを見上げた。

「アイズ達を集める。全速でキャンプに戻る」



50階層と51階層を繋ぐのは傾斜面の岩壁だ。

50階層西端の壁に大穴が空いており、ほぼ崖という名の険しい坂が続いている。51階層に向かう際には一足飛びに駆け下りていけばいいが、帰還する際には少々手間をかけて上っていかなくてはならない。

岩壁の至るところに付着する黄緑色の粘液に誰もが危機感を募らせながら、アイズ達は手を使わず跳躍の連続で坂を駆け上がる。

そしてアイズ達のその先には三日月がバルバトスの背中に装備されているスラスターを吹かしながら、誰よりも早く飛ぶように跳躍していく。

「ほんとにあの子の鎧ってなんなんだろう？空飛んだり、やたら固かったり、遠距離で攻撃したり、腐食液で腐食しないって万能すぎない？」  
「はっ、知るかよそんなもん」

ティオナはそう呟くが、ベートは下らなさそうにして吐き捨てるように言う。

「もうすぐキャンプだ！急ぐぞー！」

フィンがそう言って先の大穴から飛び出すと、聞こえてくるのは人のかげ声と、けたたましい炸裂音だった。

「キャンプが……！」

灰色の森を駆け抜けながら、野営地の方角から上る黒煙にティオナが反応する。

速度を一層上げ、アイズ達は大樹林を走破する。

「リヴェリア、みんな!？」

森を抜けた先に広がるのは開けた平地と、野営地を構えた一枚岩、そして岩に取り付く巨大な芋虫の群れだった。

モンスター達はその多脚で張り付くようによじ登り、頂上で防衛を行ったりヴェリア達に腐食液を浴びせている。

崖際で腐食液を防いだ団員達が、すぐに溶け出していく盾を放棄していく。

「矢を放て！」

「これが最後です!？」

「構わん、撃て！」

リヴェリアの号令のもと、よじ登ってくるモンスターに向かって数人の弓使いがなけなしの矢を放つ。

命中した先から矢は腐食して折れていくが、攻撃を受けたモンスター達はぐらりと壁から足を離し、落下をしながら数匹を巻き込んで地面へと叩きつけられる。

「まだあんなに・・・!？」

「キャンプを包囲されていないのがせめてもの救いか」

レフィーヤの悲鳴の横で、フィンは冷静に状況を把握する。

例のモンスターは知能が低いのか、太い列を作り同一方向から一枚岩をよじ登ろうとしていた。

進行箇所が集中したおかげで、居残り組の他団員達はリヴェリアの指揮のもと、拠点の防衛を続けられている。

「っ！」

仲間の危機を前に、アイズは飛び出した。

単独行動でモンスターの列の横っ腹へと奇襲する。

魔法を発動し、風を纏い、剣を振り抜く。

「アイズ!？」

モンスターを一匹仕留めるとともに、どよめきが周りから上がる。

「・・・三日月くん」

「・・・なに?？」

交戦するアイズを端にフィンはその場で立っている三日月に言う。

「アイズ一人で戦わせるのは危険だ。凶々しいとは思いますが、良かったら君も手伝ってくれるかい?お礼はちゃんとする。今は一人でも戦力が欲しいんだ」

「・・・・・・・・」

フィンの頼みを三日月は少し考える。

確かに、自分がこの場で断つてもいい。だが、この場で断ると、オルガや皆を探せなくなる。

それにここから出るといふ点も達成出来なくなる。  
なら、答えは一つしかなかった。

「・・・分かった」

三日月はそう言つてアイズのいる戦場へと跳躍する。

そして――

”ゴシヤア!!”嫌な音をたてながらアイズの近くにいた芋虫型のモンスターに顔に目掛けてソードメイスを叩きつける。

腐食耐性が高い”高硬度レアアロイ”で出来たバルバトスの武器や装甲なら問題なく戦う事が出来た。

「・・・えっ?」

アイズは驚くように三日月を見る。

なぜなら彼との契約は此処までの筈だ。それなのになぜ?

アイズはそんな疑問を浮かべたが、三日月はそんなことを気にせず、アイズに言う。

「アンタ・・・俺を外に出してくれるんだろ? だったらそれまでアンタ達を助けるよ」

「・・・いいの?」

「・・・別にいいよ。仕事だし」

三日月はそう言つて、近づく芋虫モンスターに砲撃していく。

「・・・ありがとう」

アイズは小さな声で三日月に言つたが、三日月はその言葉に反応することはなかった。

「フィン・・・彼は?」

リヴェリアがフィンに三日月の事を聞いてくる。

フィンはリヴェリアに言つた。

「彼は、52階層のカドモスの泉でアイズ達と会つたんだ。彼の力がなかったら此処まで早く来れなかったよ」

「カドモスの泉で・・・? 一人でいたのか?」

「そうみたい。アイズ達がそう言つてる」

「……彼は味方と考えていいのか？」

疑い深そうに三日月の戦闘を見るリヴェリアにフィンは言う。

「……ああ。でなきや、僕の頼みも聞いてくれないだろうしね」

フィンはそう言っつて、考えるのを止め、剣を抜く。

「反撃と行こう」

そう言っつて、フィンも戦場へと駆けていった。

## 第五話

楔のごとくモンスターの群れに突撃したアイズと三日月によって、戦闘の動きは一変していた。

恐ろしい勢いで同胞を殺していく女剣士と悪魔に、一枚岩を目指していたモンスター達は反転し、数で押し潰そうとこぞって襲いかかるうとする。

そこへすかさずベート達が参戦し、更にレフイーヤの魔法が後方から撃ち込まれれば、モンスターの統制はあっけなく失われた。

近づく敵へ手当たり次第反応するモンスターに、攪乱するように動き回る冒険者達。

敵味方が入り乱れ、あつという間に混戦模様を呈するようになる。

「ねえ、まだ武器あるー!？」

モンスターの攻撃をかくぐりながら一枚岩に向かうティオナは声を張り上げた。

その声でティオナの上空からソードメイスが勢いよく飛んできて、ティオナの前に突き刺さる。

「え?」

ティオナは武器が飛んできた方向を見ると、そこにはバルバトスを纏った三日月が見下ろすようにこちらを見て言った。

「それ使えば?」

三日月はそう言って、背中にマウントされていたツインメイスを手にとると、射撃をしながらモンスターの元へと飛翔していく。

「んじゃ、ありがたく使わせてもらうね!」

ティオナは投擲されたソードメイスを手にし、持ち上げる。

「重っ!？」

ソードメイスのあまりの重量にティオナは驚愕するが、それでも持てない事はない。

約二Mもの巨大なメイスを両手に、ティオナは仕切り直しとばかりにモンスター達のもとへ赴く。

「やーいつ、こっちだー!」

跳び跳ねるようにモンスターとモンスターの間を縫って、挑発する。

ちよろちよろと動き回る少女に、芋虫のモンスター達は腐食液を撃つ。

「よつとー」

『ツ!?!』

あつさりと腐食液を往なすと、たちまち上がるのはモンスター同士の悲鳴だった。

周りはモンスターばかりだ、あえて群れの真ん中に飛び込んで腐食液を撃たせれば容易く同士討ちが誘発される。

目論見通りに周りの敵を減らしたティオナは、凜猛に口端を裂き、残った個体へとソードメイスを叩きつける。

「いっつくよおおおお——ツ！」

渾身の一撃にモンスターの巨体が地面に叩きつけられる。

その一撃でモンスターの体液が飛び散る前に、体内にある魔石が砕かれ、すぐにモンスターの巨体が灰へと還る。

「次いー！」

溶けることなく形を残すソードメイスを両手に、ティオナは別の標的に狙いを定めに行った。

◇◇◇

既に二十のモンスターを斬り倒した頃だろうか。

死骸や腐食液が散乱する一角で、足を休め束の間一息つくアイズのもとに、ざつと着地する音が響く。

振り向くと、その尾と灰髪を揺らし、ベートが歩み寄ってくる所だった。

「おい、アイズ。半分も要らねえ、風を寄越せ」

「.....」

言わんとしていることを察したアイズは、彼の足に視線を下げる。

膝頭まで覆ったメタルブーツ。防具としてではなく武器としての方向性を持たせた白銀の長靴は鋭い曲線美を誇り、一定の堅固さを備えつつも細身な印象が強い。



脛の中心には黄玉が取り付けられている。  
アイズはそつとブーツに手を伸ばした。

「風よ」

アイズの意思を受けて揺らいだ風の流れが、瞬く間に黄玉へと吸い込まれる。黄玉は光輝きブーツ全体へと風のうねりを伝播させた。

ベートの両脚が、アイズと同じように気流を纏う。

「ヘファイトス・ファミリア」製、第二等級特殊武装「フロスヴィルト」外部からの魔法効果を吸収し、一時的に特性攻撃力を宿す特殊武装。メタルブーツそのものの打撃力と合わせ、威力は大きくはね上がる。

武器素材は魔力伝導率の優れたインゴット『ミスリル』。

白銀のメタルブーツはアイズの魔法を吸収し、風の力を手に入れた。  
いた。

「ありがとよ」

美形と言える顔立ちが、テイオナに負けず劣らずの狂暴な笑みに歪む。

だんつ、と地面を風圧で蹴り飛ばし、ベートは発走した。

「——蹴り殺してやるぜええええええ!!」

疾駆し、無造作に飛び蹴りを叩き付ける。

頭上から振り下ろされた風の蹴撃はモンスターの顔を砕き、アイズの剣がそうであったように体液も寄せ付けず吹き飛ばす。

敵の厄介な性質にはもう悩まされない。

蓄積された鬱憤を晴らすように、強烈な足刀をモンスター達に片っ端から見舞っていく。

ベートは遥か前線で戦っている三日月に視線を向け、軽く舌打ちすると、ベートは雄叫びを上げながら突撃した。

◇◇◇◇

最後のククリナイフが溶ける。

「……………」

放たれる腐食液をかわし、着地。咄嗟に腰へ手を回すが掴むものは何もない。

投げナイフの残弾も零。武器が付きた。

(こいつ等っ・・・)

思った以上に手間のかかる芋虫型のモンスターに、ティオネは眉間に皺を刻む。

武器の損失をもつたいぶり、いざ致命傷を与えようと一撃を放つても、敵の耐久力は中々どうして高く行動不能に至れるまでにいい。

負わせた裂傷から耳障りな音とともに体液を迸らせるモンスターは執拗にティオネを追い回し、それが一段と彼女の苛立ちに拍車をかける。

ティオナの行動を真似て、敵を誘導させるためチマチマ動き回っている自分に吐き気がする。

アイズはともかく、人の気も知らないで暴れまわるあの糞狼にも腹が立つ。そしてなにより――。

「何で、アイツばかり・・・」

ティオネは周りを遊撃している三日月を見て呟く。

団長に頼ってもらえばかりか、私達の中で一番モンスターを始末している彼を見て余計に腹が立つ。

ともかく今は武器の補充だ。いや、レフイーヤの援護に回った方がいいか、あまり得意ではないがこうなったら詠唱をして魔法を――。

そこまで理性的であろうとしたティオネは、盛大に、ちっ、と舌打ちを打った。

「――面倒くせえ」

仮面が剥がれ落ちる。

本性の一端を覗かせながら、ティオネは一気に駆け出し、モンスターの真正面から突っ込んで――すくい上げるように力任せの右拳を放つ。

ドゴンつとあられもない衝撃音。拳打が敵の体を貫通した。

モンスターの体内に埋まった腕が溶け出す。傷口からどぼつと溢れ出た腐食液がティオネの全身にかかり、褐色の肌を焼く。その豊満

な上半身を隠す僅かな衣装も溶け落ちる。

それら全てお構い無しに、ティオネは両目をつり上げたまま右手を更に押し込み、モンスターの絶叫が散る中で、掴み取った魔石をぶちぶちと一挙に引き抜く。

悶え苦しむように震え、灰に変わるモンスター。

黒い煙を上げ異臭を放つ自分自身に唾を吐きながら、ティオネはそこから同じ行動を二度三度と繰り返していく。

自分の体を顧みず、モンスターを殴り蹴り殺す姿はまるで狂戦士のようだった。

「ティ、ティオネさん……」

「……レフィーヤ、万能薬はある？」

レフィーヤと合流した時には、ティオネは半分へドロにまみれたかのような有り様だった。

頭から腐食液を被り、濡れ羽色の美しい髪は焼け爛れている。小麦色の肌も今はどす黒い紫と黒に変色しており、こうしている間にも音を上げ溶け出していた。

右目はきつく閉じられ、かろうじて無事な左目が視線を投げる。顔面蒼白になるレフィーヤは慌てながら小型ボトルに詰まった万能薬を取り出し、もはやぶつけるように彼女の全身へ浴びせかけた。

「ティオネ！」

「団長……」

フィンが彼女達のもとに駆けつける。

手掴みで腐食液を払い落とし、何本もの万能薬を使ってようやく体の原型を取り戻しかけていたティオネは、ばつが悪そうに身じろぎする。

この時ばかりは眉を逆立て怒りをあらわにしていたフィンは、しかし堪えるかのように、大きくため息を吐き出した。

「無茶をするな」

「あ……」

フィンは身に付けていた腰巻きをほどき、押し付けるように手渡す。

隠せ、とその何も纏っていない上半身を示して言外に告げた。

受け取った腰巻きを胸に抱いたティオネは、その頬を紅潮させる。

「団長お……！」

「話はこちらを切り抜けてからだ。覚悟しておけ」

「はあいつ……！」

感激した乙女の眼差しをそそぎ続けてくるティオネに、背を向けたフィンはため息を耐えて目もとをげんなりさせる。ティオネの隣でレフィーヤもたじろぐように距離を取った。

「何でティオネさん、あれ食らって平気なんすか……」

「お主の気合が足りんだけじゃ」

「す、すんません」

「むっ、来おったか」

ティオネ達を見やった後、ガレスの返答に思わず謝るラウル。彼を庇いつつ戦っていたガレスは、爆音とともに地面にめり込んだ獲物を、軽々と引き抜いた。

一枚岩の上から投げられた予備の戦斧。超重量の武器を肩に構え、纏う重装に取り付けられたマントを翻しながら、次には地面を削り取るようにその斧を振り抜く。

「ぬんっ！」

戦斧で地盤を掘り起こす角度でぶつけ、巻き上げられる岩片の散弾。

力自慢のドワーフならではの飛び道具にモンスター達の体は破け、砕かれていった。

「【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を卷け】」

アイズ達が奮戦する光景を眼下に、いくつもの詠唱が折り重なる。

広大な一枚岩、モンスターの襲撃に晒され傷ついた野営地。その中で戦場を一望できる岩場に集まり、エルフの団員を中心とした魔導師達が、一斉砲撃の準備を開始する。

「【閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の厳冬——我が名はアールヴ！】」

先頭に立つリヴェリアの詠唱完成を皮切りに、魔導師達が続々と魔

法の行使過程を終える。

複数の魔法円が展開される中、魔力の連なりが「いますぐ退避しろ」とばかりに下で戦うアイズ達へ警鐘を鳴らした。

アイズは近くにいたモンスターを切り伏せると、その近くで二本のメイスでモンスターを叩き潰した三日月に言った。

「もうすぐ、魔法の準備が出来る。だから退避して」

「・・・分かった」

三日月はそう言ってアイズを担ぎ上げた。

「三日月？」

「舌噛みたくなかったら黙ってて」

三日月はそう言って、背中と腰のスラスターを全開にして凄まじい勢いで戦闘域をアイズと共に離脱する。

その勢いにアイズは目を閉じる。その瞬間――。

「ウイン・フィンブルヴェトル」

壮絶な援護射撃が戦場を覆った。

氷、炎、雷。多数の攻撃魔法が雨のように着弾する。

体液を撒き散らしながらモンスター達が粉々に砕け散り、あるいは燃えて感電する。

無数の爆発が連鎖しながら、モンスター達をやきつくしていった。興奮に包まれる彼女達を一瞥しながら、リヴェリアはそつと息をついた。

数時間前に強襲された野営地の被害は大きい。物資の損失、消耗もそうだが、何より団員の多くが初見の際、あの防御不可能な腐食液の餌食にされた。防衛に徹しようとしたのが、かえって仇となった格好だ。

瞬く間に広がった混乱も手伝いリヴェリアは指揮に専念する他なく、自分が先陣を切り魔法を行使することも――かなわなかった。留守を任された自分の立つ瀬がない、とりヴェリアは静かに嘆いていた。



アイズと三日月は戦闘域から高速で離脱した後、三日月はアイズを肩からゆっくりと降ろす。

「大丈夫？」

「・・・うん」

三日月の素っ気ない言葉にアイズはそう言うと、三日月は「そう」とだけ言った。

「やっとながが食える」

三日月はそう言ってバルバトスを解除する。バルバトスを解除しないと飯が食えないのが、モビルスーツとの違いで欠点だったが、それよりも戦いやすくなるのはとても楽が出来た。

三日月はジャケツトの中に入れてあったエナジーバーの包み紙を片手で器用に剥いて口に入れる。

ボソボソした味だが、今は戦闘中だ。あまり飯をちゃんと食ってはられない。

すると何処からか視線が飛んでくるのを三日月は感じた。その視線が飛んでくる先を見ると、アイズが此方をじつと見ている。

「・・・なに？」

三日月はアイズにそう言うが、当の本人はすぐに我にかわり、「何でもない」と言つて視線をそらしてくる。

「・・・まあ、いっか」

三日月はそれに気にすることなく、食事を続けた。

◇◇◇◇◇

三日月の素顔、始めて見た。

アイズはそう思いながら三日月を見る。

あの悪魔のような強さと裏腹に見た目もそれ相応なのかと思つたがそうではなかった。

身長は私と同じくらいで年も自分と同じか、年下。

それでいて、体は完成された肉体だった。

だけど、右腕はだらんと垂れていて、恐らくは右目も見えていないのだろう。

それでも、彼は戦場の最前線で戦い続ける姿を見て、なぜこんなにも戦えるのだろうと思った。

そして、一体どんな環境であればこんなに強くなれるのだろうと思ってしまった。

「・・・なに？」

三日月が此方に顔を向けてくる。

何処かへ目指そうとしている彼の目を見てまるで吸い込まれそうな錯覚を覚える。

「あ——」

でもどうしてだろう。その瞳を見て私は——

”彼に魅入られてしまった”

三日月の隣に立ちたい。彼に追い付きたい。

それに——ああ、欲しいなあ。

## 第六話

「終わったー！」

アイズが最後のモンスターを斬り伏せ、彼女達以外に動くものはないとなった。

モンスターが倒れ灰になるのを見届けティオナが沸く中、魔法を解除したアイズは握っている片手剣を見おろす。

フィンに預けてある愛剣とは異なり、既に刃はぼろぼろで、今にも折れてしまいそうなほど磨耗している。

アイズの剣技と、何より風の出力に剣身が耐えられなかったからだ。

アイズの魔法は使い勝手がいい分、武器や防具に強い負荷がかかってしまうのが欠点だった。

だが……。

(まだ、足りない)

三日月に追いつくにはまだ足りない。もっと、もっと強く今よりも強くならなくちゃ隣に追いつけない。

私は”絶対に追いつかなくちゃいけない”

三日月のあの眼を見てから私は自分の目標が見つかった。

だから……もっと頑張らなくちゃいけない。

アイズはすぎすぎと疼痛を訴えてくる身体を、いつものように無視をする。

「手こずらせやがって……キャンプに残ってたあいつ等、無事なんだろうな」

「あれ、ベート、リヴェリア達を心配してるの？めつずらしー！」

「うるせえっ、あいつ等が荷物を守ってねえとここから帰れねえだろうが！勘違いしてんじゃねえ！」

恒例のようにティオナとベートが言い争いを始める中、弛緩した空気が流れ出していた。

くつついて離れないティオナとフィンにへたり込むラウルに背中を叩くガレス、そして笑いかけてくるレフィーヤ。そして今は顔が見



えないけれど、周りを見渡して警戒を続ける三日月。

全員五体満足で、張り詰めていた彼等の表情は和らぎかけている。私はじつと三日月を見つめるが、警戒続けたまま鎧を外さない三日月に私は眼をそらす。

そして仲間の姿を見回したアイズは野営地の様子を確かめようと、一枚岩の方角に振り返ろうとした。

その直後。

「――！」

音が響く。

木をまとめてへし折る、遠方から響いてきた破碎音が。

誰もがその方角を振り仰いだ。それぞれの武器を再装備し、臨戦態勢を纏い直す。

木々の悲鳴は依然として木霊してくる。一枚岩の上、高台から既に音の正体を視認しているだろうリヴェリア達の沈黙が、声を失ったような静寂が身構えるアイズ達の不安と緊張をかき立てる。

どれほど待ったか。

大した時間はもしかすると、かかっていたのかもしれない。油断なく音源の方角を見つめていたアイズの視界に、やがて、それは現れた。

「……あれも下の階層から来たっていうの？」

「迷路を壊しながら進めば……なんとかか？」

「馬鹿言わないでよ……」

半ば呆けたようなアマゾネスの姉妹の会話が、静まり返った場に通る。

およそ六Mといった所か。

先程まで戦っていたモンスターの大型個体より、更に一回り大きい。

黄緑色の巨体に扁平状の腕。芋虫型のモンスターの形状を引き継ぐ姿は、しかし全容の作りが大きく異なっている。

「人型……？」

芋虫を彷彿させる下半身は変わらない。ただ小山のように盛り上

がっていた上半身は滑らかな線を描き、人の上体を模していた。

エイ、あるいは扇にも似た厚みのない扁平上の腕は二対四枚。後頭部からは何本も垂れざかる管のような器官。

黄緑の肌には例の極彩色が塗料のように浴びせかけたように秩序なく及んでおり、まるで得体の知れない毒に蝕まれているように見える。

濃厚な色彩が及ぶ顔面部分には鼻も口も存在しないが、どこかその線の細さから女性のものを連想させる。

が、大きく盛り上がった腹部が女性的な要素を全て台無しにしている。

妊婦と呼ぶにはその腹は丸みを帯びてはおらず、何よりあまりにも醜悪で、どす黒かった。

「あんな、でかいの倒したら・・・」

——とてつもない量の腐食液が周囲に飛び散る。

階層主にも匹敵しようかという巨体と、その体液が溜め込まれているような黒い腹部を見て、ラウルは愕然とする。

これまでの戦闘を振り返っても、芋虫型のモンスターの大半は力尽きる瞬間、その身体を破裂させていた。

あのモンスターも、もし死に際に内包する体液を根こそぎ撒き散らすのだとしたら。

撃破したとしても、辺り一帯にいる全ての者が巻き添えだ。

だれもが最悪の光景を脳裏に想像した。

「あの巨体じゃと、魔石だけを狙うのも難しそうなのう」

「そもそもどこに埋まってるんだよ・・・」

ガレスが目深に被っていた兜をくいつと持ち上げ、ベートは苦々しそうに言葉を吐き捨てる。

灰色の樹林を破壊しながら姿を現したモンスターは、アイズ達から大きく距離を残したまま立ち止まる。

真正面から改めて見ると、その姿はケンタウロス、いやラミアに近いか。

巨大な女体型のモンスターと平地を挟んで正対する。

『……………』

「来る」

三日月の言葉と共に、女体型のモンスターが動いた。その四枚の扁平状の腕を、まるで愛する者を胸の中へ誘うように、ふわっと広げる。

舞う光。七色の粒子群。燐粉、あるいは花粉か。

極彩色の微細な光粒がアイズ達のもとに漂ってくる。

瞬間、背筋がわなないた。

第一級冒険者達は直感に突き飛ばされるまま、すぐにその場から退避する。

間を置かず、無数の爆光が連鎖した。

「きゃあああああああああ!?!」

「ぐっ……………!」

散乱していた腐食液ごと、地面が爆砕される。レフィーヤの甲高い悲鳴が響き渡りながら、凄まじい熱気が頬を叩いた。

花粉など生易しいものではない。

大気中にばらまかれるあの極小の一粒一粒が、凶悪な爆弾だ。

盛大な砂煙が舞う中で、吹き飛ばされたアイズ達は態勢を立て直す。

「総員、撤退だ」

フィンはその告げた。

ばつと多くの目が振り返る中、彼は油断なく女体型のモンスターを見据えて言う。

「速やかにキャンプを破棄、最小限の物資を持ってこの場から離脱する。リヴェリア達にも伝えろ」

「おい、フィン!?!逃げんのかよ!」

「あのモンスターを放つとくのか!?!」

ベートとティオナがフィンに噛み付く。第一級冒険者としての矜持が、何よりロキ・ファミリアとしての誇りと責任者が、眼前のモンスターを野放しにすることを許さない。

この安全階層に現れたように、今後もしあのモンスターが更に階層

を上がっていったとしたら、その時は多くの冒険達が犠牲となるだろう。

「僕も大いに不本意だ。でも、」あのモンスターを始末して”、かつ被害を最小限に抑えるにはこれしかない。月並みの言葉で悪いけどね」  
これから言い渡す内容に自分自身に嫌悪するように。

”アイズあのモンスターを討て”」

そして、フィンは三日月を見て言う。

「三日月君も悪いけど、アイズを手伝ってくれないかい?」

二人でだ、と小人族の少年は二人の顔を見上げて言った。

「待ってください、団長?!」

誰よりも早く、レフィーヤが悲鳴を上げるように叫ぶ。

ティオナ達もすぐに詰め寄ろうとするが――爆撃。

女体型のモンスターが動いた。

腕を広げ、そして蠢くように多脚を動かし進行を開始する。

「・・・時間がない。ラウル、リヴェリア達に撤退の合図を出せ!」

「ねえ、ちよつと、フィン!?何でアイズと三日月二人だけなの!?あたしもいくよ!」

「女と余所者に尻を守られるなんて、尚更冗談じゃねえぞ!」

「団長、私からもお願いします。ご再考を」

吹き飛ばされかけてもなお、しつこく食い下がろうとしたティオナ達は、しかし。

次の言葉で完全に反論を封じ込められた。

「二度も言わせるな。」急げ”」

声音が、冷酷な暴君のごとき威圧を秘める。

その小さな少年にもう誰もが逆らえなかった。

こうなったフィンには何人も口答えできないということ、ティオナ達は身をもって知っている。

うなだれながら、あるいは悔しさを堪えながら、若い団員達は撤退の準備に入った。

「せ、せめてっ、せめて援護だけでも!」

場に残されたレフィーヤが、最後まで取りすがろうとするが。

「アンタがいると邪魔だからいらない」

三日月はレフィーヤに向けて言った。

その言葉にレフィーヤは三日月に向けてキレる。

”部外者の貴方には聞いていません!!黙っていてください!!”

「・・・んじゃ、アンタが前に出て戦う?」

三日月はそう言ってレフィーヤに顔を向ける。

向けられた三日月のその顔を見たレフィーヤ達の”背筋が凍った”。

バルバトスを解除した三日月の素顔に驚いた訳ではない。

三日月がレフィーヤに向けている殺意にだ。

まるで狼に首もとを啜えられているような濃密な殺気にフィン達は冷や汗を流す。

緊迫する空気の中、レフィーヤのその細い肩を背後から掴まれ、そっと引き戻された。

「レフィーヤ・・・大丈夫だから」

「——」  
アイズが入れ違うように、前へ出て、とんつ、と優しく胸を押される。

結局、最後には突き放すように。

強すぎる彼女は、レフィーヤの事を遠ざけた。

「・・・」

レフィーヤは一瞬時を止めた後、じわつと目尻に涙を浮かべ、テイオナ達の後を追う。

走り去っていく後ろ姿をアイズは黙って見つめ、すぐに前を向いた。

「すまない、アイズ、三日月君」

「ううん」

「いいよ。別に」

派閥の首領として時には非情な命令を下すフィンが、このような場で頭を下げて謝罪するのは珍しかった。

恐らくは、半日前にアイズへ説いた責務の持論と今の指示が乖離し

ていることを、彼自身が割りきれていないのだろう。そして、赤の他人である三日月を巻き込んでしまった事に頭を下げて詫げるのも。「アンタは仲間の為に指示を出したんでしょ？ならそれはアンタのせいじゃないよ」

三日月はそう言つてフィンを見る。

フィンが最善と言うなら、それが最善なのだ。テイオナ達も本当はわかっている。

あのモンスターを相手にするのは、誰よりも二人が適任なのだ。「ここから十分に距離を取ったら信号を出す。それまでは時間を稼いでくれ」

「わかった」

「了解」

フィンは口早に指示を伝え、自身もすべきことのため素早く場に残にした。

去り際に返された〈デスペレート〉を装備し、アイズと三日月二人は女体型のモンスターと対峙する。

地を這う多脚。揺らめく複腕。極彩色に彩られる怪物的な威容。

迫る巨大な敵を前に、気負いも動悸もなく、ただ静かに。

金色の瞳を強く構え、呟く。

「目覚めよ」

風が召喚される。

ヒュンツと、アイズは愛剣を振り鳴らす。

『――！』

女体型が震える。

呼び起こされた風に反応するように、アイズと三日月を標的と見なし、その上半身を反った。

のっぺらぼうに見えた顔面部に、横一線の亀裂を走らせ、口腔を解放する。

鉄砲水のごとき勢いで撃ち出される腐食液。

量、速度ともに先の戦闘の比ではない。アイズと三日月は回避を選択し横へと跳ぶ。

すぐに轟く途方もない溶解音。アイズ達が立っていた地面をどろどろにして大きく抉り、更には奥の一枚岩まで突き進む。

岩壁が悲鳴を上げ崩れ落ち、あつという間に変色し、膨大な黒い湯気が立ち上ぼる。

「あれは食らったらヤバイな」

三日月はそう呟いて、スラスターを吹かせて加速する。

(誘い出さないと)

フィンに言われた通り、まずはティオナ達が引き上げるための時間稼ぎが優先だ。

同時に、こちらに有利な地形へと敵を誘導する。

幸いあのモンスターは自分達を狙っている、付かず離れず距離を保てば追ってくる筈———という、そのアイズの思惑は。

半分当たり、半分裏切られることとなった。

『!』

四枚の腕が、腕の前で×の字を作るように、大振りされる。

目を疑うような夥しい量の光粒が、アイズ達の頭上を覆った。

「———」

きらめきを放つ極彩色の粒子群が、アイズ達を中心に広範囲へ拡散し、降り注ぐ。

周囲一帯を焦土とする規模だ。モンスターを釣ろうと疾走していた彼女は、離脱は間に合わないと判断し、風の気流を全身に張り巡らせて防御を固める。

と———。

「———え?」

急に視界が加速した。

するとすぐに、遠方から爆発と轟音が襲う。

「無事?」

三日月がアイズを抱えながら、加速して爆破範囲から離脱したのだ。

三日月本人は、何の傷もなく女体型モンスターの方角をじっと見つめている。

巻き起こる煙を突き破り、ぬうつと黄緑色の巨体が現れた。

そして再び腐食液を吐き出す動きを見て、三日月は言った。

「距離を開けたら爆発か、アレがくる。なら距離を詰めてアイツをやるよ」

三日月はアイズにそう言うって腐食液を避けながらアイズを担ぎ突貫する。

——そしてその瞬間。

「え?」

「あ」

そして回避行動をした瞬間——モンスターの目の前で落とされる。

三日月の予想外の行動にアイズは呆然とする。

——冗談?

アイズはそう思いながらも、急いで風を纏い直す。

そして急制動と急加速を用いながらモンスターの攻撃をやり過ごし、その懐に進入、後方を取って巨体を支えるその短い脚を狙う。

しかし、女体型の反応速度も高かった。四枚の腕の内、下部にしている腕を伸ばしアイズの攻撃を防御し、残りの二枚で三日月を攻撃する。

——死角は、ない?

女体型はその図体からは想像できないほど機敏で、かつ可動範囲の広い扁平型の腕は前後左右全ての襲撃に対応できるようだった。

そのまま敵の真後ろに出ても、多脚を目まぐるしく動かした向き直ってくるが、三日月の妨害で上手く出来ていないようだった。

アイズは敵の情報を更新しながら、何度も斬りかかる。

「.....っ!」

【エアリアル】を行使して剣に強風を付与し、モンスターの攻撃を打ち払い、凌いでいく。

しばらく戦闘は膠着し、我慢比べが続く中。

状況が動いたのは、女体型の行動によってだった。

「!?!」



敵の側面及び後方を取ろうと、何度目とも知らない攪乱からの回り込みを行った時だ。

後頭部からは生えていた何本もの管が意思を持ったように蠢き、アイズ目がけて腐食液を撃ち出す。

——え、ずるい。

無警戒だった頭上からの射撃。

何条もの腐食液が殺到する光景に、アイズは身に纏っている気流だけでは防ぎ切れないと判断、剣を走らせながら斬り払う。

するとアイズの周りには数え切れないほどの光粒が広がっていた。これで終わらせるつもりなのか、今までにない量の爆粉がつき込まれる。

腐食液の砲撃まで準備しようと身を仰け反らせる女体型は——次の瞬間、動きを止めた。

「ふっー」

三日月が腐食液の発射口に何か細長いものを投げ入れたのだ。——そして。

ボゴオオオオオオン!!

極大の爆発が発射口の中で発生した。

三日月が投げ入れたのは対艦ランスメイスという特殊な武器で先端に大量の火薬等が入れられており、衝撃を加えると爆発が発生するという代物だった。

その爆発によって女体型のモンスターが更に姿勢を仰け反らせて怯む。

その瞬間をアイズは見逃す訳がなく、爆粉の範囲外へと逃れ出た。

そして——ドンツ、と。

遙か上空に閃光が打ち上げられた。

撤退完了の信号。”目標撃破の許可”。

アイズは軋む身体を無視しながら、今以上の強い風を纏う。

直後、軽く前傾し、疾走する。

』  
モンスターの反応を振り切る。これまでとは一線を画する加速か

ら敵の右脇を抜きさり、地に縫いつくその多脚を横一闪、まとめて断ち斬る。

『!?』

「やるね」

三日月の言葉にアイズは嬉しくなり、さらに加速させる。

片側の脚を全て失い、バランスを失うモンスター。右手へと傾く巨体を咄嗟に同側の二枚の複腕で支える。

足を狙い、地に落とす。階層主、及び大型級モンスター対処のセオリ。

気分を高揚させたアイズの動きは止まらない。敵の真後ろで素早く方向転換、地を蹴り爆風を巻き上げ、モンスターの下半身に上って疾走する。後頭部から生える管もすれ違いざま斬り刻み、そして肩口から伸びる扁平型の腕を、切断した。

本体から切り離された腕は器官制御が狂ったのか、地に落ちた、たったそれだけの衝撃で、ふわっと極彩色の粒子群を舞い上げる。

三秒後、爆火。

『アアアア!?』

懐で巻き起こった爆発の連鎖に、女体型のモンスターは絶叫した。

自爆が自爆を呼び込み、残った管の髪や腕を振り乱し悶え苦しむ。

トツと膝を軽く溜め、連続宙返り。

一度の回転で凄まじい距離を稼ぎながら、地を続いて蹴りつけ、舞う羽根のように後方へと進む。

スカートが裾が翻り、しなやかな腿があらわになる。

そして背後にそびえた一枚岩、その上部壁面に、“着壁”。

壁に足をつけた体勢で、大量の煙を立ち上らせる目標をその金の瞳で射抜く。

最大出力。

もはや嵐と言って過言ではない風の大気流を全身に纏い、アイズは剣を溜める。

繰り出されるのは強力な攻撃魔法に匹敵する一点突破の神風だ。

『アイズたんっ、必殺技の名前を唱えれば攻撃の威力は上がる

んやでー!』と、己の主神に騙されている彼女は。

その名前を口にする。

「リル・ラフアーガ」

主神命名の一撃必殺を唱え、アイズは風の弾丸となった。

『!!』

閃光のごとく、神速の勢いで急迫する風の螺旋。傷ついた女体型のモンスターは直前のところで反応し、残った三枚の腕を重ね盾として構えるも。

「邪魔」

三日月の持つあまりに巨大すぎるヴァルキュリアバスターソードで両断される。

そして無防備になったモンスターに。

風を纏い突きだされた銀の剣尖によって、拮抗することなく、貫通する。

』

モンスターの体が穿たれる。

とどめに等しい風穴を開けられた女体型は、硬直し、瞬く間に全身を膨張させる。

膨れ上がった体は一気に飛散し、更に、爆粉と腐食液の間で特殊な反応が発生したのか桁外れの大爆発が起こった。

◆◆◆◆

「アイズさんっ!?!」

レフィーヤの悲鳴が弾ける。

視線の先で巨大な火球がドームを形作り、周囲一帯ものを吹き飛ばした。

モンスターの自爆を回避するため、フィンの指示のもと、十分な距離を離れた上でアイズ達の戦闘の行方を見守っていた彼等【ロキ・ファミリア】のところまで爆発の余波が届く。押し寄せる熱風と衝撃に誰もが目を覆った。

視界が灼熱に包まれ、全てが赤く染まる。

爆心地には炎の海が広がりその勢いは止まらない。

灰色の森へと燃え移り、あちこちから火の手が上がっていった。

「アイズ……」

顔を火の色に焼かれながら、テイオナは視線の先の光景をじつと見つめる。

次の瞬間、彼女の目が見開かれた。

炎がうねりを上げる中で、内部から押しよけるような動きで炎の壁は震え上がり、次には風の流れによつてその身を左右に開かれる。

割れる炎の海に、青いスラスターと悪魔の影。

そして、俵のように抱えられている金髪金眼の少女が帰還してくる。

そして大歓声が上がった。

## 第七話

ダンジョンは決まった階層域ごとに、その地形を大きく変える。

地上に直結する一階層から頻繁に見られる標準的な迷路構造を始め、森、湖、荒野など様々な形態が存在し、地中の中とは思えない小世界を階層内に広げている。

下層に進むにつれ、そういった自然環境の変化は著しい。

彼等【ロキ・ファミリア】が今、進んでいる場所は岩窟だった。剥き出しの岩石から造られる通路は無秩序に張りめぐらされた横穴の他にも縦穴が存在し、天然の洞穴と言って過言ではない。

壁面上部に灯る燐光は篝火のように揺れ、薄暗い迷宮内を照らしている。

「まだまだ行けたのにー。暴れ足んないよー」

「しつこいわよ、あんた。いい加減にしなさい」

「だって、五十階層で引き返しちゃうなんてさあー」

五十階層で繰り広げた激戦の後、【ロキ・ファミリア】は未踏達階層の進出を諦め、三日月と共に地上への帰還に行動を切り替えていた。つまり、事実上の今回の『遠征』の終了を意味している。

口を尖らせブー垂れるティオナを、ティオネがたしなめている。

「団長がもう何度も説明したでしょ？あのモンスターにやられて、物資が心もとないって」

「食べ物や迷宮で調達すれば何とか持ったじゃん・・・」

「武器や道具はどうにもならないでしょう。特に得物の方はほとんど溶かされて、手もとには行きの道で使い潰した磨耗品しか残っていないわ」

「あんたの分の予備なんて零じゃない、とティオネは言う。

「三日月が貸してくれたじゃん・・・」

「あれは、私達の武器がないから貸してくれてるだけで、あんたの物じゃないでしょ」

「武器や防具は当然消耗品だ。研師や加治師の整備が受けられなければ刃はこぼれて切れ味は鈍り——防具であるのなら損傷を蓄積

し耐久性を下げ——最後には壊れてしまう。一部の不壊属性を除けば、いくら優れた武器と言えど長規模の戦闘には耐えられない。

冒険者の体力がどれだけ有り余っているかが、装備が使いものにならないければ、モンスターとの戦闘にも支障が出る。

「そう言えば、今回アイズは何も言わなかったね？普段だったら何かとごねてたのに」

アイズはテイオナにそう言われたが、その問いに何とも言えない反応をする。

「えつと・・・」

困惑するアイズの視線は三日月へと向けられる。

当の三日月はその視線を気にする事なく、物珍しげに周りに視線を向けながらも見張りをつけている。

単純に、三日月の強さが気になると言うのが理由だ。

だが、それを口にするのが何と言うか、気まずくて口に出すことが出来ない。

そんなアイズの反応にテイオナは「そういうこともあるか」と言って、再びブルー垂れる。

「うっつ、悔しい。せつかく苦労して五十階層まで行ったのに——」  
首領であるフィンの采配から、深層からの退却を実施して既に六日。

何度同じ内容で論破されているテイオナは頭の後ろで手を組んだ。装備品をなにも所持していない彼女は、隣で歩くアイズと三日月を羨ましそうに見る。

愛剣の収まった鞘をキラリと輝かせるアイズと、今は纏っていないバルバトスを持つ三日月は、その視線に気付いて全く同じように小首を傾げた。

「あのモンスターのせいで・・・結局何だったの、あれ？」

振られた質問に対しテイオナは「わからないわよ」と肩をすくめる。

「未確認のモンスター、としか言えないでしょう。・・・確におかしな点はあったけどね」

言いつつ、ティオネは胸元に手を伸ばし、モンスターの『魔石』を取り出した。

自分には欠片も存在しない深い谷間を見せつけられるティオナは、今度は恨めしそうに実姉を睨む。

「つて、それ、もしかしてあのモンスターの魔石？ティオネ、どうやって見つけたの？」

「手を突っ込んで直接引きずり出してやったわ」

芋虫型のモンスターは例外なく、倒した後はその漏れ出した腐食液で時間をかけて全身を溶かした。体内にあった魔石も例外なくだ。

あれだけの数を苦勞して撃破したにもかかわらず、ティオナ達は一つの魔石も回収できていない。

溶解することも構わず無茶な戦法を取ったティオネだけが、その破天荒な方法から魔石を入手していた。

「わ、何それ。変な色」

「ええ・・・普通の魔石とは、少し違うわね」

モンスターの胸部に隠されている魔石は大きさや形に違いはあれど、その色は一様に紫紺色だ。

ティオネの手の中にある魔石は、中心が極彩色、残る部分は紫紺色と見たことのない輝きを放っている。

ティオナが横から覗き込んでくる中、ティオネは魔石を頭上へと掲げゆらゆらと燃える燐光に照らし、目を細めて眺めた。

やがて、一行は広いルームに辿り着く。

深層域と比べ狭い道幅の関係で、『ロキ・ファミリア』はこの十七階層に上がる前に部隊を二つに分けていた。

集団の規模があまりにも大きいと身動きが取りづらくなり、モンスターの襲撃にも対応できないからである。

リヴェリアが管轄するこの前行部隊は、ティオナ達も含め十数人ほどの団員達が固まっている。フィンやガレスは後続の部隊だ。

遠征の帰り道ということもあってか、団員達、特に荷物を運搬するサポーター役の下っ端等の疲労は色濃い。

「・・・リーネ、手伝おうか？」

「えっ？あ、だ、大丈夫です!？」

ヒューマンの少女にアイズが声をかけると、滅相もないと勢いよく断られた。第一級冒険者に荷物持ちなど任せられない、という意識が見て取れる。

ほぼ名目上とは言え幹部を務めているアイズには——その浮き世離れた雰囲気もあって——ほとんどの団員達がこのような畏まった態度を取る。

「止めろっての、アイズ。雑魚に構うな」

一部始終を見ていた獣人、狼人のベートが声を挟んだ。

一八〇Cに届く長身の持ち主で、特にその引き締まった足はすらりと長い。左側の額から顎にかけて稲妻のような青い刺青が施されており、その端正な顔立ちに荒々しい印象を上塗りしていた。

彼は追い払うようにサポーターの団員を軽く蹴りつけ、アイズと向き直った。

「それだけ強えのに、まだわかってねえのか、お前は。弱え奴等にかかざらうだけ時間の無駄だ、間違っても手なんて貸すんじゃねー」

「……」

「精々見下してろ。強いお前は、お前のままでいいんだよ」

鼻を鳴らしながら口を吊り上げるベートに、アイズは沈黙する。

ベート・ローガ。

【ロキ・ファミリア】の第一級冒険者で、典型的な——いや過度とも言える——実力主義者だ。剣士として一流であるアイズのことを一目置いている節がある。

悪い人ではない・・・とアイズは思っている。

意見の対立からよく真剣な口論に発展するリヴェリアがこぼしていたが、「誤解を招かなければ気が済まない獣人だ」という皮肉らしき言葉を聞いたことがある。

テイオナともよく言い争いをするのも、あくまで一匹狼である彼の性がそうさせるのかもしれない。

——と。

「これ、持ってくよ。どこに運べばいい?」



「えっ? いいですよ! 私達がやるので!」

「別に、やることないからやるだけだよ。気にしないでいいよ」

「えっ、……でも……」

三日月が左手だけで荷物を運搬しようとする彼に、サポーターの団員が困惑している。

「……っ」

私はその様子をただ見ている事しか出来なかった。

すると後ろからテイオナから声がかけられる。

「アイズ駄目だよ、ベートの言うことなんか聞いちゃあ! 時間の無駄だから!」

「くたばれ、糞女。てめえこそあいつ等の雑用を引き受けろっての。手ぶらだろ、間抜け」

「うるさあーいっ!?!」

言っている側から口喧嘩を始めるベート達だったが、すぐに。

その言い合いは途切れることとなった。

『——ヴウオオ』

進行中のルームに獰猛な気配と、そして荒い息づかいが迫ってくる。

複数ある通路口の向こうから、大量のモンスターが姿が現した。

『ヴウオオオオオオオオオオ!!』

岩窟を震撼させる咆哮が響く。

並みの冒険者ならば裸足で逃げ出す迫力を有しながら、そのモンスターは荒縄のように筋張った肩と腕を隆起させる。踏み出された一歩によって地面が蹄型に陥没した。

筋肉質な巨大な体に、赤銅色の体皮。

モンスターの代表格にも数えられる牛頭人体モンスター、『ミノタウロス』だ。

「ほら、ベートがうるさいから『ミノタウロス』が来ちゃったじゃん!」

「関係ねえだろっ。ちっ、馬鹿みてえに群れやがって……」

ミノタウロスの群れはルームへと続々と侵入し、アイズ達を包囲するように輪を作る。

「牛?・・・人?・・・どっちだ?」

「牛・・・だと思う・・・」

三日月とアイズは緊張感のないやり取りをしながら周りを見渡す。血走った眼を向けてくる猛牛のモンスター達は、呼吸の度に体を上下させ興奮していた。

「リヴェリア、これだけいるし、私達もやっちゃっていい?」

「ああ、構わん。ラウル、フィンの言い付けだ、後学のためにお前が指揮を取れ」

「は、はい!」

ギルドから階層領域ごと定められる脅威評価、最高に認定される中層最強のモンスターに対し、アイズ達は動じることはなかった。

既にこの十七階層から三十以上も深い階層を探索する彼等とミノタウロスの間には、隔絶した力の開きが存在する。

本来、比較的浅い階層では、下の団員に「経験値」を積みせるためにもアイズ達第一級冒険者は出しゃばらないのが規則だ。いくら下っ端と言つても、この場にいる団員はみな中堅「ファミリア」の冒険者達より遥かに格上の実力者でもある、中層出身のモンスターに遅れを取ることはまずない。

が、今回は数が数だった。

テイオネの申し出からアイズ達も戦線に加わる。

『ヴオオオオオオオオッ!』

そして、その後の戦闘の一連の流れは、誰もが予期せぬ方向へと転がった。

『ヴオオオオオオオオオッ!』

「・・・ん?なんだ?」

あつという間に半数のミノタウロスを返り討ちにした時だ。

あまりの戦力差に怯えをなしたのか、一匹のミノタウロスがアイズ達に背を向けた。

そこからまるで恐慌が伝染するかのようになり、残っていたモンスター全てが足並みを揃えて一気に逃走した。

「ええっ!」

「お、おいつ!? てめえ等、化物だろ!」

その光景にテイオナとベートが驚愕する。

我先にと、もの凄い勢いでモンスター達がルームを飛び出し通路の奥へ消えていく。

アイズもその光景に金色の双眼を見開いた。

「逃げてくけど、あれほつといていいの?」

「追え、お前達!」

三日月の言葉に我に変わるリヴェリアの号令が飛んだ。

一瞬動きを止めていたアイズ達は、弾かれたようにミノタウロスの群れを追いかける。

「遠征の帰りだつて言うのに・・・っ!」

「あの、私つ、白兵戦は苦手で・・・!」

「杖で殴り殺せんだろ! 殺れっ!」

「は、はいい・・・!」

テイオネが苦虫を噛み潰したような顔をする横で、ベートの叱咤がレフィーヤを叩いた。

事情を知らない三日月以外、誰も彼もその表情には余裕がない。

ダンジョンには当然アイズ達以外にも冒険者がいる。この中層に見合った能力で迷宮探索をしている彼等からしてみれば、押し寄せるミノタウロスの群れなど悪夢そのものだ。自分達が取り逃したモンスターによつて多くの冒険者が帰らぬ者となつてしまえば、ギルドや他派閥から糾弾が上がるのは間違いない、なによりそれ以上に寝覚めが悪くなる。

「ちよつと、そつちは?!」

ミノタウロス達が十六階層に繋がる階段を駆け上がつていく。テイオナの悲鳴も虚しくモンスターの群れは上の階層へと消えていった。

「面倒な予感しかしねえぞ・・・!」

多大な足音を出しながら、被害を出すまいと階段を飛び越えて走り続ける。

アイズ達は死にもの狂いでミノタウロスを追いかけていった。

## 第八話

一階層、更に一階層、もう一階層――。

猛牛のモンスターは暴走は破竹の勢いとばかりに続いた。各階層を出鱈目に走り回り、あるいは集団から離れたミノタウロスが散り散りとなることで、アイズ達の追跡を結果的に攪乱していく。

彼女達にとって何より悲運だったのが、モンスター達は上層階層に繋がる連絡路をことごとく突き止め、上へ上へと進出していったことである。ベートの言葉は見事的中してしまった。

各階層に散らばったミノタウロスを処理するため、一人、また一人と団員の追跡部隊から姿を消していく。

中層を越え、『上層』――地上と直結する一階層から十二階層からなる層域――に突入していき、六階層へと到達する頃には、既にアイズとベート、そして三日月しかミノタウロスを追うものがいなかった。

「ひいつ!?!」

「どけえっ!」

冒険者に襲いかかろうとしていたミノタウロスを間一髪ベートが倒す。

『上層』は地上に近い階層域だ。出現するモンスターは低級と称される力の弱い種ばかりで、新米を始めとした下級冒険者達の領分である。

彼等がミノタウロスと対峙する羽目になれば、一瞬も抵抗できないまま惨殺されるだろう。

もはや犠牲者がいつ出てきてもおかしくない状況だ。

(見失った・・・!)

アイズも別のミノタウロスの撃破に成功するが、残る最後の一匹を取り逃してしまった。

選択肢となる道がいくつもある迷宮の中で、その乏しい表情の下に焦燥を隠していた。

「来い、アイズ!」

鼻を一度鳴らし迷いなく走り出すベート。

獣人の種族の彼は嗅覚が一段と優れている、ミノタウロスの残り香を恐らくは突き止めたのだろう。

後に従い通路を突き進む。そして私の後ろに続くように三日月もスピードを落とさずについてくる。

「なんででめえまでついてくんだよ！」

ベートが吠えるように三日月に言うと、三日月は何でもないように返答した。

「俺、この辺知らないし、アンタ達に着いていけば道は分かるだろ」「チツ……」

三日月の返答に舌打ちをするベート。

やがて筋骨盛り上がる赤銅の背中が見えた。最後とばかりに速度を振り絞るが、上階への逃走を許してしまう。

「……!」

五階層。

駆け上がった階段の先はルームの中央に通じていた。薄緑色の壁面で構築される迷宮はあたかも嵐の前のように静まり返っている。四辺形の広間から伸びる通路口ら各辺に一つずつ存在し、都合四つ。他の人影は見当たらない。

耳を研ぎ澄ませ、素早く辺りを見渡すと――

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「ほああああああああああああああつ!」

聞こえた。

その声が。

「っー」

一気にアイズと三日月は駆け出す。

ベートより先に飛び出し、叫び声と咆哮が絡み合う方向へと身を馳せる。

ミノタウロスと、そしてその人物はすぐに見つかった。

雪を連想させる真っ白な髪。今にも涙が滲みそうな瞳の色は深紅。

一見して兎のような外見を持つ、ヒューマンの少年。

追ってくる赤い猛牛に背を向けて、命懸けの逃走を繰り返して行く。

「ド素人じゃねえか!？」

後から追いついたベートが叫ぶ。

貧相な防具は一目でギルドの支給品とわかる。

逃走一つ取っても動作の節々からは我流の拙さが窺えた。

駆け出しも駆け出し。

ミノタウロスにとっては獲物どころか、もはやただのいい餌だ。

足に力を込め、彼我の距離を埋めようと疾走する。

アイズは少年とミノタウロスを追いかける。

『ヴムウンツ!!』

「でえっ!？」

ミノタウロスの蹄。

背後からの一撃はその細身の体を捉えることこそはしなかったものの——いや間髪一髪回避した——土の地面を砕き、ちょうど少年の足場も巻き込んだ。

足をとられ、ごろごろとダンジョンの床を転がっていく。

「——」

アイズの姿が霞む。

ベートを置き去りにし、軽やかに音もなく、視線の先の光景に向かって加速する。

三日月はアイズが加速するのを見て、その進んでいた足を止めた。

ルームの隅に追い込まれた少年はミノタウロスの巨体を見上げ、笑みと呼ぶにはあまりにも引きつった口のゆがみを浮かべていた。

埃まみれの白髪、涙腺を決壊させる赤い瞳、振りかぶられた剛腕が振り下ろされるのを待っただけの、哀れな子兔。

強い既視感を覚えながら——アイズはその光景へと追いつき、剣を一閃させた。

「え?？」

『ヴお?』

少年とミノタウロスの間の抜けた声。

背後から音速の斬撃を胴体に見舞い、手を止めず無数の線をモンスターの全身へと刻み込む。

最後の剣閃から、銀の光が瞬いた。

『グブウ!? ヴウ、ヴウモオオオオ——!?!』

原型をとどめていた巨体が、思い出したように斬撃の軌跡に沿っていくように、ずり落ちる。

断末魔とともに血飛沫を上げながら、ミノタウロスはいくつもの肉の欠片となって崩れ落ちた。

そして、彼と目が合う。

呆然と見開かれる深紅の瞳と、透いた輝きを帯びる金色の瞳。

崩れ落ちたミノタウロスの奥から現れる少年と、邂逅を果たす。

三日月とはまた違う瞳の色だとアイズは思いながら、地面に腰を付き、時を止める彼と向き合いながら、アイズはそつと声をかけた。

「・・・大丈夫ですか?」

正面から見下ろす格好のアイズの問いかけに、少年は身じろぎ一つさえしなかった。

言葉を失ったように、アイズのことを静かに見上げてくる。

少し戸惑った彼女は、もう一度尋ねてみる。

「あの・・・大丈夫、ですか?」

反応は返ってこない。

変わらない表情の裏で困り果ててしまったアイズは、座り込む少年のことをあらためて見つめる。

ミノタウロスの流血をまともに浴びてしまった体は血まみれになっており、こちらにとてつもない申し訳なさを与える。涙の引いた双眼は再び湿り出しており、アイズを真っ直ぐ見上げる顔も熱病のように、じわじわとその肌を赤くさせていった。

熱っぽく見える少年のことが心配になったアイズは、剣を鞘に収め、手を差し伸べた。

「立てますか?」

ちやうど何かを言いかけようとした少年の唇が、ピタリと止まった。

差し出される手に一瞬視線を止め、再びアイズの整った相貌を仰ぐ。

瞬く間に彼の耳や首、肌という肌が紅潮した。

「だっ——」

「だ?」

アイズに首を傾げる暇も与えず、少年はがばつと跳ね起きる。

次の瞬間。

「だああああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

全速力で、アイズから逃げ出した。

「……………」

ぽかんと、アイズは目を開いて立ち尽くす。

逃げ去った通路の奥から少年の奇声が木霊してくる中で、彼女は誰にも見せたことのないような、呆けた表情を作った。

「……………っ、……………っ、……………くっくっ!」

後ろを振り返れば、震えながら腹を抱えるベートが、笑いに堪えており、三日月はと言うと——

「……………アイツ……………すばしっこさならガリガリ以上かもね」

そんな訳のわからない事を言っていた。

「……………」

そんな恥ずかしい所を見られたアイズは頬を赤く染めて、三日月達を睨み付けた。

紆余曲折はあれ。

三日月とアイズ達の長い遠征は、こうして幕を閉じた。



## 第九話

「ここが外か」

三日月がそう言つて周りを見渡す。

地球やクリユセで見た近代的なビル群ではなく、見たことのない木造や石で作られた建物を見て感想を漏らす。

迷宮都市オラリオ。

広大な面積を誇る円形状の巨大都市は、堅牢な市壁に取り囲まれている。

修繕跡から覗く、外敵の迎撃を度外視したその設計は、防壁が持つ本来の目的とは裏腹に、内部より溢れる怪物に対して築かれた障壁の証だ。長い年月を感じさせるもの言わぬ巨岩の壁は、『古代』当時のダンジョンの要塞としての面影を残している。

外界と隔てる市壁の内側は大小様々な建物が立ち並び、そして都市中央には、天を衝く白亜の巨塔がそびえていた。

地中に開く大穴、ダンジョンの入り口を塞ぐ『蓋』として建設された摩天楼施設『バベル』。

このバベルが、ダンジョンを中心にしてオラリオは今もなお栄え続けている。

薄暮が迫る街は迷宮から帰ってくる冒険者達で溢れ、彼等の生還を祝いもてなす酒場の賑わいに満ちていた。

多くのヒューマンと亜人が肩を並べ酒をあおり、悪乗りした一部の神がジョッキを片手に乱入する。種族の壁も、敬意の念も忘れた彼等の間に響く笑い声が、この都市の——この世界の縮小図だ。

ポツポツと照り始める街灯、『魔石灯』の明かりが、喧騒の途絶えることのない都市を彩っていく。

「やつと帰ってきたあ……」

都市北部、北の目抜き通りから外れた街路沿い。

周囲一帯の建物と比べ群を抜いて高い、長大な館が建っていた。

高層の塔がいくつも重なってできている邸宅は槍袵のようでもあり、赤銅色の外観もあつて燃え上がる炎のようにも見える。塔の中で

も最も高い中央塔には道化師の旗が立ち、今は茜色に染め上げられていた。

【ロキ・ファミア】本拠、黄昏の館。

「あー、疲れたー、お肉たくさん頬張りたーい」

「私は早くシャワーを浴びたいわね」

「あはは……」

ティオナ達姉妹の言葉にレフィーヤが苦笑する。

「三日月はこの後どうするの？」

「報酬貰って、仲間を探しに行く」

「……そう」

三日月の言葉にアイズは顔を少しだけ下げる。

それも仕方のない話だろう。元々彼は部外者だ。

用が済んだら出ていく。それが当たり前だ。

アイズは暗い気持ちになりながら、三日月の後ろを歩いていく。

ダンジョンから地上に帰還したアイズ達はホームを眼前にしていた。三十人規模の一団がそれぞれの物資を抱え、あるいは引きずり、正門の前に到着した。

「今帰った。門を開けてくれ」

フィンの言葉を受け、開門される。

狭い敷地面積に建てられたホームは横が駄目なら上にとばかりに伸びた格好なので、当然門をくぐった先にある庭園もそこまで広くはない。

門と館の間の空間を利用した本当に最小限のものだ。

僅かな植栽と色とりどりの花が風に撫でられ揺れている。

フィンを先頭にアイズ達はそろそろと敷地内に足を踏み入れた。

「——おっかえりいいいいいいいっ！」

と、いきなり。

アイズ達の入門を見計らっていたかのように、館の方から走り寄ってくる影があった。

朱色の髪を揺らす彼女は男性陣には目をくれず、アイズ達女性陣のもとへまっしぐらに突き進んでくる。

「みんな無事やったかーっ!? うおーっ、寂しかったー!」

両手を突き出し飛び付いてくる彼女を、ひよい、ひよい、ひよい、とアイズ、ティオナ、ティオネがすんなり回避する。

最後尾にいたレフィーヤはとぼっちりに合い、え、ちよ、きやあー、と悲鳴を上げながら抱き着かれ、押し倒される。

「ロキ、今回の遠征での犠牲者はなしだ。到達階層も増やせなかったけどね。詳細は追って報告させてもらうよ」

「んんうー・・・了解や。おかえりい、フィン」

「ああ、ただいま、ロキ」

エルフの少女の体を堪能する女性は顔を上げ、にへらっと笑いかける。

黄昏時を見る者に思わせる朱色の髪。細目がちな瞳は今ほ弓なりに曲がり、その端麗な顔立ちとともに相好を崩している。フィンにそそがれる眼差しは子の息災を喜ぶ、神のそれだ。

天界での墮落した生活に飽き、娯楽を求め下界に降り立った気まぐれな神々の一柱。

人類ともモンスターとも次元が異なる、超越存在。

彼女こそがアイズ達と契りを交わした「ファミリア」の主神、ロキだ。

「ロキー、レフィーヤが困ってるから離れてくんない? 結構疲れてるしさあー」

「おおっと、すまんレフィーヤ。感極まって、ついなあ」

「い、いえ・・・」

ロキ達の会話に入り込むように、話を聞いていた三日月が言った。

「アンタが、ここのボス?」

「ん?」

ロキは聞き慣れぬ声に反応し、三日月へと顔を向ける。

「なんや? フィンの知り合いか?」

三日月を見て、ロキはフィンに言う。

「知り合いと言うより、命の恩人だ。彼がいなかったら今回の遠征に死人が出る所だったからね」

「ほおー・・・その話はまた詳しく聞かせてもらおうわ。んで少年、名前は？」

「・・・三日月・オーガス」

三日月の名前を聞いた後、ロキは三日月に言った。

「三日月な。・・・ありがとうな。家族を守ってくれて」

ロキからの感謝の言葉に三日月は言った。

「別に。仕事だよ」

三日月はロキにそう言っつてポケットからデーツを取り出し、口に入れる。

「変わった子やなあ・・・」

ロキはそう言っつてアイズに顔を向けて言う。

「アイズも、お帰りいー」

「ただいま、ロキ・・・」

おもむろに顔を向けてくるロキに、アイズもはつきりと言う。

どこか嬉しそうにえくぼを作った後、女神はその糸目をうつすらと開く。

「ん。体、ずきずき痛むなー。ちゃんと休まなあかんよ？」

「・・・」

魔法の酷使によつて呻吟を漏らしている体の状態を、あつさりと看破される。

全てを見透かしているような朱色の神の眼は、それ以上何も言わなかった。押し黙るアイズに一笑し、背を向けて、彼女はまた別の団員のもとへ足を運ぶ。

「アイズ、どうしたの？またロキに変なことされた？」

「ううん・・・何でも、ないよ」

テイオナの問いに答えながら、はた迷惑そうなりヴェリアに纏わりつく主神の姿を見つめ、アイズはその場から離れた。

居残り組の団員達が遠征組の持ち帰った荷物を受け取り運搬していく。すれ違いざま「おかえりなさい」とにこやかに出迎える言葉を送られる中、アイズ達は館の中へと入る。

エントランスホールはないスペースを無理矢理使つて広い設計に

したので解放感がある。

その分他の部屋や通路が割り食った形になっているが、アイズは何かと手狭で雑多なこのホームの造りが嫌いではない。

手の空いている者から入浴を済ませろと指示され、暗黙の内にアイズやテイオナ達に一番手を譲られる。

何かと優遇されている——その立ち位置を考えれば当然と言えば当然のだが——後ろめたさが少なからずあるが、浴室も効率よく使用しなければ回らないのでありがたく甘えさせてもらう。

アイズは先に大浴場へと足を運んでいった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

三日月とフィン、そして話を詳しく聞いたロキはロキの部屋で報酬の打ち合わせをしていた。

「さて・・・報酬の話なんだけど」

「うん、なるべく手短にね」

「ぎっくりしすぎやで、少年?」

自分の報酬の件についての話し合いなのだが、当の三日月は興味なさそうに言う。

三日月はこう言った話し合いに向いていない。その仕事は本来、オルガやユージンの仕事だ。

三日月は金には対して執着を持たない。

今は直ぐにでもオルガや鉄華団の皆を探しに行きたいが、今の自分には金がない。金がなかったら食べ物も買うことが出来ないし、住む場所もてに入れる事は出来ない。

だったら手っ取り早く金が必要になってくる。

だからこそ、この商談に乗った。

「三日月には先に報酬を渡しておく。命の恩人だからね。正当な報酬だ」

大量のヴァリスが入った袋をフィンは三日月の前に差し出す。

三日月はその袋の中身を確かめる事なく、自分の懐にしまい込むと

立ち上がったと言った。

「ありがと。んじゃ、俺行くね」

三日月はそう言って部屋から出ていこうとすると――

「ちよつと待っててくれないかい」

背中からフィンに声をかけられ足を止めた。

「なに?」

三日月は体の向きを変えてフィンとロキを見る。

「三日月君は無所属なんだろう? ならファミリアに入るつもりはないのかい?」

フィンは三日月にそう言った。

三日月という命の恩人を放って置くことが出来ないのが一つと、三日月と会ってからアイズの様子が少し可笑しくなったのが気になるというのが、三日月をファミリアに誘う理由だった。

「ファミリア・・・ああ前にアンタが言ってた組織の事?」

「そうだね」

「俺の家族は鉄華団だけだよ。アンタ達の組織に入って俺になんか良いことでもあるの?」

三日月の問いにフィンは答える。

「ああ、ファミリアに入って恩恵を手に入れると冒険者になれるんだ。モンスター討伐から、採取、搜索までね。それで君の仲間を探すことも出来る」

「それにウチらのファミリアはここら辺では有名やから、三日月の探しとる人もすぐに見つかると思うで」

フィンの説明の後、ロキも三日月に言った。

「じゃあ、聞くけど俺が仮に入ったとしてアンタ達はオルガや俺の仲間を探してくれるの?」

三日月はそこが気になっていた。

仮にその組織に入って給料をもらおうとはいえ、仲間が探せないようじゃ意味がない。

三日月の目的はオルガや皆を探すことだ。こんな場所で足を止めている訳にはいかないのである。

「情報があれば勿論君に連絡するよ。君には世話になっていたからね」

「……ふーん」

三日月は少し考える素振りを見せる。

そして、フィンとロキに言った。

「分かった。アンタのその”ふあみりあ”ってヤツに入るよ。でも、オルガ達が見つかるまでね」

「うん、分かった。その提案を飲もう」

フィンも了承する。

「話は済ませたかいな？後でアイズたん達にも上手く誤魔化さんといかんなあ……。んじゃ恩恵を刻むから服脱いでえな」

「分かった」

三日月はそう言つて服を脱ぐ。

そしてその三日月の身体付きに二人は絶句した。

余分な脂肪や筋肉がない鍛え上げられた身体、ラウルと同じ位の年頃だと思う三日月の肉体は既に完成されていた。そしてその背中には――。

「なあ……。三日月、その背中に着いとるこれはなんや……。？」

「阿頼耶識のこと？」

ロキが言ったのは三日月の背中に着いている三つの突起。阿頼耶識のことだった。

「阿頼耶識？それは一体なんだい？」

フィンが三日月に問いを投げる。

その質問に三日月は答えた。

「バルバトスを動かすのに必要なやつ。これでバルバトスを出している間は右目と右腕が動くんだ」

「そ、そうかいな」

三日月の何ともない言葉にロキは冷や汗を流す。

まるで開けてはいけない箱を開けるかのような緊張感だった。

そして三日月の背中に恩恵を刻み込んだ次の瞬間。

三日月の背中から血のように赤い紋章が浮かんでくる。

ロキのものではない。

円上の紋章の真ん中に十字架のような模様が描かれている。

そして円の形に合わせるように名前が書かれている。

BARBATS

バルバトス。それはかつて存在した狩人を象徴する八番目の悪魔の名前だった。

そしてさらに驚愕するのはその「ステイタス」だった。

三日月・オーガス

LV ■

力A952 耐久A822 器用 B754 敏捷B750 魔

力E215

狩人(天使)A 耐異常A 悪魔の鎧(バルバトス)

その得体の知れないスキルとステイタスを見てロキはただ、開けてはいけない箱を開けてしまったような錯覚をその身で感じてしまった。

三日月・オーガス。

彼は・・・一体どの様な戦場で生きていたのだろう。



## 第十話

三日月がロキ・ファミリア入団の話をしている間、一度自室に戻り愛剣と防具を脱装したアイズは、ティオナ達に引き連れられ上階の浴室へ向かった。

「・・・アイズの服ってさあ、結構大胆だよな」

「着ないと舌を噛み千切る、ってロキが言うから・・・」

ティオナの言葉にアイズは脱衣を進めながら、眉を下げがちにして答える。

大きく背中が開かれている薄手の服は鎧を外してしまえば、瑞々しい肌が丸見えだ。アイズの性格に似つかわしくない露出の多い服に疑問を感じたティオナは、その答えだけで「ああそういうことねー」と納得する。

主神が面倒なこだわりを持っていると苦労するというのが、「ファミリア」の通則だ。

「レフィーヤ、とっと脱ぎなさい。後がつかえるわよ」

「あ、はい・・・」

全く出し惜しみせず裸体になるティオナに対し、レフィーヤは遅々と服を脱いでいく。

恥じらいが全くないアマゾネスと、極力肌を人目に晒さないようにするエルフの、種族としての性の違いが如実に現れていた。これもまた様々な種族が同じ屋根の下で共同生活する、「ファミリア」の光景の一つでもある。

アイズはそれを眺めながら、服を脱いで浴場へと向かった。

浴室、と言っても十人も入れれば飽和する室内はほぼシャワー室と言っている。奥に石造りの湯船が存在するが、それも少人数用のものだ。

「アイズさあ、何か落ち込んでる?」

「・・・?」

「なーんか、ミノタウロスの群れを追いかけにいった後から、暗いような気がしたからさー」

テイオナの指摘にアイズは内心で驚いた。そんなに顔に出ていたのか、とも感じた。

「正直に言えば、少し落ち込んでいる。」

ベートには始終笑われ、三日月には恥ずかしい所を見られてしまったが、助けた相手に悲鳴を上げられ全力疾走で逃走されるなど流石のアイズも初体験だった。

斬り結んだ敵が尻尾を巻いて逃げ出していったことならば、数えきれないほどあるのだが……。

ミノタウロスを八つ裂きにした自分はそんなに恐ろしかったのだろうか——と考え、少しだけ、本当に少しだけ、悲しくなる。

それに——

私が隣に立ちたいと思った三日月と一緒に居いらなくなるとうのが一番悲しいのかもしれない。

アイズはシャワーヘッドの前に立ち、勢いよく熱湯を浴びながら、誰にも気づかれないようにほうと小さく吐息をした。

しばらくの間、四つの水が流れる音が響いていく。

「……むむむっ」

「なに唸ってるのよ」

姉の声を無視するテイオナは、シャワーを浴びながら自分達の胸元を凝視した。

そして——

「レフィーヤの裏切り者お……」

「ええっ!?!」

「無視しなさい、レフィーヤ」

テイオナの恨めし声が紡がれる中、更に立て続けに。

がらっつ、と突如開かれる扉から、獣のような影が飛び出した。

「うおーっ!?!安心させテイオナー!うちが大きくしたるーツツ!」

「今日の晩御飯なにかなー」

後方からのロキによる奇襲をあっさりと言なし、足払いをかけるテイオナ。

目にも止まらぬ速さで繰り出された足払いは、ロキの足をスパア

ンツと刈られ、ゴツツと頭から鈍い音をたてながらタイル状の床に墜落した。

「ごふうっ……う、腕を上げおったな、ティオナ」

「ロキ、邪魔ー」

「くうううつらなんやこの仕打ちツ——レフィーヤア慰めてくれえええええ!!」

「え、ちよ、きやあああああああ!?!」

既に慣れきった対応でアイズ達は浴室を後にする。

服を脱ぐ暇すら惜しんで侵入してきた女神に多少の危機感を覚え、後輩を生け贄に。

悩ましい声とともに助けを求める悲鳴が散る中、アイズ達は己の着替えを優先させるのだった。

「酷いですよお……」

「ごめんごめん、あたし達もロキの相手をするの面倒臭くてさー」

長い食卓がいくつも並ぶ大食堂。

身を洗い一度自分の部屋に戻った後、アイズ達は夕餉を取っていた。

ロキの「飯はいるもん全員でとる」という方針のもと、朝夕の食べ始めは見回り以外の団員が揃ってから行うので、食堂は大変こみ合っている。

椅子と椅子の間を通過して移動するのも一苦労だ。

遠征帰還直後というのもあって騒ぐ元気はないが、待望の酒食をむさぼる団員達は絶えず賑やかであった。

居残り組の者に今回の遠征の武勇伝を聞かせるなど、どの卓でも会話に花が咲く。

誰もがようやく心から肩の力を抜いていた。

「ティオネ。この後って、これからの打ち合わせとかあるの?」

「団長が今日はゆっくり休め、って。また明日からよ」

「さっすがフィン!」

食べ終えた者から食器を片付け、ポツポツと大食堂から出ていく

中。

晩酌をしていたロキが、思い出したように立ち上がった。

「忘れとった。皆ー!! 今日、新しく団員が入る事になったんやわ! 皆仲良くしたってえな!!」

「新しい団員・・・?」

アイズは首を傾げてロキの方を見る。

今日、新米冒険者が入るのだろうか。

周りを見渡して見るが、ティオナ達も知らなかったようで様々な反応をしている。

そしてロキが言った。

「入って来てええでー!」

その言葉に反射して私は食堂の出入り口を見る。

そこには――。

「・・・えっ?」

予想していなかった人物に私は呆然とした。

そう、そこにいたのは遠征の時に何度も助けてくれた私の憧れ。”私だけの英雄”。

その強さに憧れた。その意志の強さに魅入られた。

だから追いつきたいと思った。彼の隣に立ちたいと願った。

そんな彼が――。

「えーっと・・・三日月・オーガスです。まあ、よろしく」

同じファミアリアに入った事に私は感極まった。

表情に出さないようにしているが、どうしても口元が歪んでしま

う。

これ程嬉しい事はない。

周りからの声も様々な声が溢れている。

「嘘ー!!三日月じゃん!!」

「あの子、別のファミアリアの子じゃなかったの?」

「何でアイツが入るんだよ!?!」

「むむむむ・・・!」

ティオナ達は三日月が入る事に色々と感情が押さえきれない

ようだった。

すると三日月は此方に気付いたのか、此方へ歩いてくる。

私と正面から向かい合うように並んだ三日月は口を開いた。

「仲間が見つかるまで、此処に住む事になったからよろしく。金髪の人」

「・・・うん、よろしく。三日月」

私はそう返事をして手を三日月の前へと出す。

「ん？」

三日月は彼女から差し出された右手に疑問を抱くが、すぐに握手を求めていることが分かった。

「俺の手、今汚れてるけど」

かつてクーデリアに言った言葉をアイズに言う。

「そんなの関係ない」

アイズはそう言って三日月の手を握った。

握り返されるその手はとても強く、

大きかった。

こんなに小さな身体なのに彼の手はとても大きかった。

私は絶対に彼に追いつく。

私はそれを胸に秘めて、私は笑った。

## 第十一話

少女がいた。

感情豊かな少女だ。

笑い、驚き、悲しみ、喜ぶ。

ころころと表情を変えては、頬を染め、無邪気に破顔する。

目の前で開かれた本、頭の上から紡がれる幾つもの物語。

一面が穏やかな白に包まれる中、少女は頻りに話の続きをせがんでいた。

物語を朗読する声音はたどたどしい。そして慈愛に満ちている。

胸の中にもたれる少女が顔を上げれば、美しい金の長髪を揺らし、姉妹のように。少女もまた笑う。

やがて物語終わった。

深い森の奥に閉じ込められた永遠の眠り姫。

彼女は一人の若者の手によって目を覚ます。

自分を見つけてくれた彼にその心を溶かし、未長く寄り添い、幸福に暮らす。

彼女は救われたのだ。

この物語は好き？と女性は訪ねる。少女はそれに頷いた。

お母さんは？と少女は聞き返す。女性も少女の問いに頷いた。

私も、あの人のおかげで幸せだから、と彼女は屈託なく笑った。

全貌と憧れを瞳の中に抱きながら、少女は一度本に視線を落とし、再び彼女を見上げる。

女性はまた、無邪気に微笑んだ。

『あなたも素敵な相手に出会えるといいね』

笑みを咲かせ、少女は嬉しそうに頷いた。

場面が変わる。

一転して周囲は剣呑な薄暗さに包まれた。

響き渡る怪物の吠え声。

どこまでも残響するように、凶暴なその鳴き声はその光景から途切

れない。

空は塞がれ、湿った空気が漂う場は複雑な通路が錯綜している。隘路がそこら中に溢れ、もの言わない冷たい壁が周囲に続いていた。

地下迷宮の中で、少女は醜い怪物に襲われていた。

止めどなく涙を流す瞳は恐怖を帯びている。玉の肌にはいくつもの擦り傷を負い、服の裾にも土と埃に汚れていた。糸の切れた人形のように、座り込んでしまったその場から逃げ出すこともできない。

瞳の中で大きくなつていく黒い影。嗚咽を漏らす間にも怪物が徐々に迫ってくる。

何も出来ない少女の目の前で、理不尽にその歪な爪が振りかぶられた。

その爪に切り裂かれれば少女の命は終わるだろう。

”あの二人の少年の絵本”の結末のように。

だが——次の瞬間。

銀色の閃光が走る。

震える少女の前で怪物は倒れる。代わりに現れたのは、年若い青年だった。

黒い襟巻きに薄手の防具、銀の長剣。少女は瞳を一杯に見開き、彼のもとへと飛びつく。

青年は少女を抱きとめ、その頭に手を乗せた。

ぎこちない動きで髪を撫でるその手付きは何も咎めはせず、ただ優しい。涙滴をぼろぼろと落とす少女が顔を上げると、彼は不器用に微笑んだ。

少女の瞳がぐつと潤む。青年の姿に、あの大好きな物語の若者を幻視し、一層強く抱きついた。

青年は膝を付き、少女の目線に合わせて、言う。

『私は、お前の英雄になることはできないよ』

既にお前の母親がいるから、と彼は続け、ゆっくりと目を細めた。

『いつか、お前だけの英雄にめぐり逢えるといいな』

その言葉を最後に。

全ての光景が遠ざかっていく。

でも、大丈夫。

私には——あの時に出会ったから。



「.....」

意識がゆっくりと浮上していく。

ぼやけた視界の中に映るのは、夢の続きではなく、見慣れた殺風景な自室だった。

うつすらと瞼が開いていき、アイズは二度三度と瞬きを繰り返す。

しばらくそのままのままでいた彼女は、ゆっくりと手を付き、ベッドから身を起こした。

未だ覚醒しきっていない頭で周囲を見回す。

薄闇は姿を消し、部屋は明るい。

白いカーテンの隙間からは日の光が滲んでいる。

朝だ。

(.....懐かしい)

壁際に置かれた姿見を見て、目もとをそっと拭う。

久しく見ていなかった夢だ。

ここ何年も思い起こすこともなく、風化しかけていた遠い記憶。

何故今になってと考え、すぐに答えを見つける。

恐らくは、昨日助けたあの少年に境遇を重ねたからだろう。

あの白髪の彼に、幼心の自分を見たのだ。

「.....」

でも、私にはもういる。あの頃にいなかった私だけの英雄が。

夢を運んできてくれたのかもしれない白兔に、アイズは自覚がない

まま、唇を小さく和らげる。

「アイズー？起きてるー？もう朝食だよー」

ややあって、ドアの向こうからティオナの声が届いてきた。

どうやら起床時間を寝過ぎしてしまうほど、珍しく深い眠りについていたらしい。



遠征の疲労からか、それともあの追憶のおかげか。

どちらにせよ昨夜までにはなかった安らぎを覚えながら、アイズはテイオナに返事をして、支度を始めた。

◆◆◆◆◆

朝食を終えて、アイズ達は遠征の後処理を済ませることになった。

ダンジョンから持ち帰った戦利品の換金や、武器の整備もしくは再購入、アイテムの補充など、遠征から帰還した後はやらなければならぬことが山積みになっていく。扱う量が量なのでほぼ団員総出だ。

それぞれが役割を振り分けられ、正門で準備を整えたアイズ達はホームを出発する。

三日月に関しては私達と一緒に同行だ。荷物持ちとしてだが。

「夜には打ち上げやるからなー！遅れんようにー！」

ロキに送り出され、街路を経て目抜き通り——北西のメインストリートに出た。

オラリオには八本のメインストリートが存在する。都市の中央から放射状に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の八方位に巨大な大通りが伸びているのだ。円形を作る都市の形状もあって、上空から俯瞰すれば、八分割されたホールケーキに見えるだろう。

アイズ達が向かった北西のメインストリートは通称『冒険者通り』とも呼ばれ、オラリオの中でも特に冒険者の往来が激しい場所だ。

時刻は朝の九時を回った頃。多くの者がダンジョンに向かう直前の時間帯なので、明記探索の前準備のため、大通りは冒険者であふれている。

武器屋へと消える大剣を担ぐ獣人、ばたばたと忙しげにアイテムショップを駆け巡っている小人族の魔導士、バックパックを背負う冒険者お付きのサポーターも多い。

その中でも、アイズ「ロキ・ファミリア」は周囲から多くの視線を集めている。オラリオでも指折りの実力を持つ彼等の存在は誰もが知るところであり、様々は羨望とやっかみ、何より畏怖を向けられる。

集団で固まる彼等の道を阻む者は一人としていない。

自然に、アイズ達には道が開かれていった。

「なんかやだなー、こういうの。ベートは喜びそうだけど。ね、三日月」

「俺達が気にしたって周りのやつがどう思っているのかなんて変わらないでしょ」

三日月はテイオナにそっけなく言う。

すると二人の会話を聞いていたガレスがテイオナに言った。

「ベートもそこまで下品ではないぞ、テイオナ。あやつはあやつなりに、第一級の誇りと自覚がある」

「えー、ガレス、なんでベートの肩なんか持つの？絶対嘘だー」

「蔑むのと増長するのは、あやつの中では同じものではないらしい」

「意味わかんないよー」

雑用を押し付けホームで待機している青年の話も挙がる中、アイズ達はメインストリート沿いに建てられたギルド本部の前までやってきた。

白い柱で作られた万神殿は荘厳の一言に尽きる。記念碑が設置されてある広い前庭を有し、今も数多くの冒険者が足を進めている。

オラリオの運営を一手担うギルドは、伴ってダンジョンとそれに関わる全ての管理も務めている。オラリオの住人として一定の地位と権利を約束する冒険者登録から始まり、迷宮から回収される利益を都市の発展に反映させるため、ダンジョンの諸知識・情報を冒険者達に進んで公開、更に探索のためのサポートも行うのだ。

迷宮を攻略するには彼等の協力が必要不可欠と言っている。

「僕とリヴェリア、ガレスは『魔石』の換金に行く。みんなは予定通り、ここから各々の目的地に向かってくれ。換金したお金はどうかちよろまかさないでくれよ？ねえ、ラウル？」

「あ、あれは魔が差しただけっす!?! 本当にあれっつきりです、団長っ!?!」

「ははっ。じゃあ、一旦解散だ」

ダンジョンから回収した資源はギルドや「ファミリア」に買い取ってもらうことができる。

とりわけ、モンスターから排出される『魔石』は、売買を始めとした権利をギルドが独占しており、例外なく彼等のもつて換金することになっていた。

『魔石』は加工することで、『魔石灯』を始めとした様々な魔石製品を製造することができる。

照明だけではなく発火装置や冷凍器など幅広い応用が可能な魔石製品は、今や日常生活を送る上でなくてはならない存在だ。当然世界中からの需要も高い。

無限にモンスターが湧いて出るダンジョンからは無限の魔石が回収でき、ギルドはその魔石の利権を独占することで、莫大な富を築き上げているのだ。

疑いようもなく世界一の魔石製品輸出都市であるオラリオは、ダンジョンの恩恵——魔石産業による利益を受け、大陸の一国家より遥かに発展しているのである。

世界の中心とも言われる一つの由縁だ。

「さ、私達も行くわよ。アイズ、三日月をお願い」

「分かった」

一度此処で二手に別れる。

テイオネ達はドロップ品の換金を。そして私は三日月と一緒に冒険者登録だ。

三日月は一応【ロキ・ファミリア】の所属になったとはいえ、まだ冒険者としての登録はしていない。

ならば、何故あの場所に居たのか聞いてみた所、「仲間を探してる」のことだった。

仲間を探しにダンジョンの奥深くまでいくとは、他の仲間も相当な実力者なのだろう。

あまり深く探らずに私は、三日月と一緒にギルドのロビーへと入る。

ギルドの受付へと真っ直ぐ向かい、そして。

「彼の冒険者登録をお願いします」

だが、アイズはこの時知らなかった。

三日月が文字を読めない事に。  
数十分後……。

「……大変だった」

アイズは若干疲れたような表情で近くの椅子に座る。

ギルド登録する際に三日月が文字が読めない書けないということが発覚し、結局私が代理として書くはめになった。

「何か、ごめん」

「いいよ、大丈夫だから」

三日月には、今後文字の読み書きを教えないといけなだろう。

そういつた使命感を持って私は立ち上がると、後ろの受付から叫び声が響き渡った。

「だから、俺をその冒険者って奴にしてください！」

「ですから、一度何処かのファミリアに入ってくださいらないと……」  
「そのファミリアってヤツの場所がわからないんで、こうして頼んでるんすよ！」

どうやらファミリアの場所が分からない事で揉め事になっているらしい。

すると三日月は顔を上げて、呟く。

「この声……ハツシュ？」

「……え？」

三日月は立ち上がると、歩いて受付へと向かっていく。

私も慌てて立ち上がって後を追う。

そしてその場所には一人の青年がいた。

薄い茶色の髪に黒と茶色のジャケットを着ている。そしてそのジャケットの背中には三日月の着ているジャケットにも描かれている華の柄が描かれていた。

三日月は彼に近づいていく。——そして。

「ハツシュ」

「だからって……え？」

青年が三日月の声に気付き振り向く。

——そして。

「三日月さん!!」

まるで弾けたような屈託の笑顔を浮かべ、三日月の手を取った。

私はそれを見て——。

「はっ。」

威圧的にそう呟いてしまった。

## 第十二話

三日月達がギルドでハッシュと遭遇しているその頃、ティオネ達は『ディアンケヒト・ファミリア』で換金を済ませていた。

「あー、今度アミッドと顔が合わせづらいなー・・・ティオネやりすぎだつて」

「これくらいもらっておかないと割には合わないわよ。アミッドだつてわかつてるわ」

「だからってさあ・・・」

三日月が単独で倒したカドモスのドロップアイテム、『カドモスの皮膜』を高値で売りつけるのはどうかと思う。

『カドモスの皮膜』を入手した経緯を知るティオナ達は、ティオネにそれぞれが思うところの視線を送る。

「アミッドさんの知らないところで、また厄介な冒険者依頼がくるかもしれないね・・・」

「うわ、ありそう！あそこの神様が腹いせにーって！」

報酬を含めた十分な金品を抱えながら、ティオネ達はメインストリートを歩いていく。

時刻は正午には遠いものの、ダンジョンへ向かったのか冒険者の数はすっかり減っていた。残っているのは、本日は休業と思しき無装備の同業者達だけだ。武器や防具を見て回って、純粹に買い物を楽しんでいる。

するとティオナは思い出したかのように、ティオネ達に言った。

「そういえばさ、アイズ達遅くない？確かそんなに時間かかんないでしょ？冒険者登録って」

「そう言われれば・・・確かに遅いわね。一度見に行ってみましょうか」  
「賛成ー」

「はいー」

ティオネ達はそう言ってギルドがある方向へ歩いていく。そしてしばらくするとその館が見えてきた。

そしてアイズと三日月を見つけるが、その隣に一人の青年がいた。

その青年は三日月に対しては久しそうにしていたが、対してアイズはその青年に余り良い顔をしていない。

「あれって三日月の言ってた仲間……なのかな？」

ティオナの呟きにティオネは言った。

「でしようね、でないとおんなに仲良いわけないでしょうし……」

「アイズさん……結構機嫌が悪そうですね？」

レフィーヤの言葉にティオネは言う。

「最近、三日月とずっと一緒にいるから本当の仲間との距離感とかに嫉妬してたりしてね」

「……なっ!？」

レフィーヤは驚愕してアイズを見るが、その言葉を訂正するように、ティオネは言う。

「冗談よ。でも最近、アイズの機嫌が悪くなる時があるから気になるのよね」

そう呟きながらティオネ達はアイズ達の元へと向かって行った。



「ねえ……三日月、この人誰？」

アイズは無表情でハッシュを睨み付けるように三日月に言う。

その問いに三日月が答えるのではなく、ハッシュが答えた。

「俺は、三日月さんの弟分みたいなものっすよ」

「貴方に聞いてない」

ハッシュの答えにアイズはそう言って三日月を見る。

三日月はアイズに言う。

「あー……俺の世話係？」

「……っ」

三日月の一言に言葉が詰まる。

三日月の身体は右の上半身が動かない。

だからかつてのいた場所では、三日月の世話をする人が彼なのだろう。

だからこそ、私は彼を妬んでしまった。ただ、羨ましかったのだ。

三日月の隣に居られる彼が。

私の事など知らずにハツシユが三日月に言った。

「そう言えば……三日月さんって何処かのファミリアに入ったんすか？」

「まあね。でないと言えど皆を探せないし、金とかも稼げないからね。ハツシユはどうするの？」

「そつすねー。三日月さんが居るなら俺もそこに連れて貰います」

私はハツシユの言葉を聞いて――

「分かった」

「ん？」

「えっ？」

私は反射的にそう言ってしまった。

三日月とハツシユは私の方を見つめてくるが、言ってしまった勢いに任せるしかない。

「入れてくれるんすか？」

「私が頼めばロキも良いって言ってくれる……と思う」

「随分不安な言い方だなおい……まあでも三日月さんに付いていけるだけいいか」

ハツシユはそう言って頷く。

「でも、三日月の世話は私がするから」

私はハツシユにそう言っただけで三日月の手を取る。

すると三日月は私に言った。

「別にいいよ。そういうのはハツシユに任せてあるし、俺の世話なんかしなくても」

「……でも」

「アイズには、アイズのやることがあるでしょ」

「……っ」



「俺の事なんてハツシユに任せるから、早く行くよ」

三日月は私にそう言つて歩いていく。

「行くよハツシユ」

「うっす」

その後ろをハツシユが追いかける。

私はハツシユのその後ろ姿を見て――。

――ずるい――

私はそう思った。

◇◇◇◇◇

テイオネ達と合流したアイズと三日月達はアイズの要望によつて【ゴブニユ・ファミリア】の所へと向かつていた。

ちなみにテイオネ、レフィーヤ、ハツシユは一度ホームへと向かつている。

ハツシユに関しては冒険者として活動するために一度ロキに頼みにいくのだそうだ。

【ファミリア】の活動内容は多岐にわたる。

オラリオは迷宮都市の名を冠するだけあつて、迷宮探索で生計を立てる探索系【ファミリア】が数の大半を占めるが、【ディアンケヒト・ファミリア】のように商業系の派閥も少なくない。このオラリオを一歩離れば、王国、帝国などと大国を築き上げる国家系【ファミリア】も存在するほどだ。

主神同士のいがみ合いなどによつて物騒な勢力争いが盛んに勃発するため、あるいはそれを回避するため、戦力の充実という点はほとんどの派閥の共通項であるが。

【ファミリア】の行動理念は、主神の趣味と実益を兼ねたものと言つていい。

「相変わらず陰気臭い所あるよね、ここ。何かじめじめしてるって言うかさあ」

「ん、と……」

「あはは、ごめんごめん。さ、入ろう」

アイズとティオナ、そして三日月が訪れたのは、石造りの平屋だった。

場所は北と北西のメインストリートに挟まれた区画だ。

路地裏深くということもあつて家屋はごちゃごちゃと入り乱れ経路も細く狭い。雰囲気は華やかとも言いがたい。知る人ぞ知る、と口にすれば聞こえはいいが——有り体に言ってしまうえば、ティオナの言葉通り陰湿としていた。

【ゴブニュ・ファミリア】。

武器や防具、装備品の整備や製作を行う鍛冶の派閥。

知名度や勢力規模は同業大手の「ヘファイストス・ファミリア」をぐつと下回るものの、作り出す武具の性能そのものは勝るとも劣らない、まさに質実剛健の「ファミリア」だ。依頼を受けてから武器作製に取りかかることが多く、コアな冒険者が多いのも特徴の一つでもある。

扉の横に飾られているエンブレムには、三つの槌が刻まれていた。

「ごめんくださいーい」

「くださいーい……」

入り口をくぐり、工房という言葉がしっくりくる建物の中に入る。

室内は外と同じように薄暗く、炉に陣取った鍛冶師や道具を用いて彫金を施す者など、複数の職人たちがそれぞれの作業に従事していた。

「へえ……」

三日月は物珍しそうに周りを見渡している。

すると奥から一人の男がやって来た。

「いらつしやあい……って、げええっ!? 【大切断】!?!」

「ティオナ・ヒリュテ!?!」

「あのさあ、二つ名で悲鳴を上げるの止めてほしいんだけど……」

まるでモンスターに遭遇したかのような相手の反応に、半眼でぶすつとするティオナ。

にわかに【ゴブニュ・ファミリア】の団員達は慌ただしくなる。

「親方アー！壊し屋が現れましたー!？」

「くそつ、今日は何の用だ!？」

「また武器を作ってもらいにきたんだけど」

「ウ、ウルガはどうした!?馬鹿みたいな量の超硬金属を不眠不休で鍛え上げた、専用武器だぞ!？」

「溶けちゃった」

「ノオオオオオオオ——!？」

親方ー、親方ーつ、と悲鳴が散っていく横を歩き去り、アイズは奥の部屋に入る。

部屋にいるのは老人の外見をした、一柱の男神だ。

皺の刻まれた顔は整っており鼻梁も高い。白髪を生やし、口もとを隠す程度に白髭も蓄えている。

恰幅のいい体はたるむことなく筋肉が引き締まっており、どこかドワーフを思わせた。

短剣を丹念に磨いていた神、ゴブニユは、ちらりと横目で視線を送り「何の用だ」と低い声音で問いかけてくる。

「整備を、頼みにきました」

アイズの注文は、常に主神であるゴブニユ自身へ一度通すことになっっている。

彼の眼鏡にかなったのか定かではないが、とにかく依頼を出す際は『俺を通せ』とそう厳命されているのだ。

「……また派手に使ったな」

手渡された〈ヘスペレート〉をじっくり眺め、ゴブニユはそうこぼす。

不壊属性の剣は決して壊れないものの、一方で切れ味、威力の低下は発生する。

普通に扱っていればそのような事態も滅多に起きるものではないのだが、生憎アイズは普通の範疇にとどまらない。

「刃がやけに劣化しているな。何を斬った？」

「何でも溶かす液と、その液を吐くモンスターを、何度も……」  
寡黙な鍛冶神は目を細め、〈ヘスペレート〉を観察し続ける。アイズ

も進んで話す方ではないので、静寂が続く。

鈍った光沢を放つ剣身から、ゴブニユは磨耗の兆候を正確に読み取っているようだった。

「もとの切れ味を取り戻すまで時間がかかるな。代剣を出してやるから、しばらくそれを使っている」

おもむろに切り出されたゴブニユの提案に驚いたアイズは、武器は自分の方で用意すると言おうとしたが。

その眼差しに、発言を制される。

「半端な武器ではどうせすぐに使い潰す。素直に甘えておけ」  
「……」

全く言い返せず、アイズは強引に代剣を押し付けられることとなった。

腰を上げたゴブニユが別室から持ってきたのは、細身のレイピアだった。レイピアの中でも刀身は長めで、全体的に装飾は抑えられているが、鰐の部分はナツクルガードとなっている。

アイズはそのレイピアを鞘から引き抜いた。

磨き抜かれうつつすらと輝やきを放つ刃を見つめ、かなりの業物だということ察する。

単純な威力ならへデスペレートへを上回っているだろう。

「あいつらには整備を急がせる。五日経ったら来い」

「わかりました……ありがとうございます」

『神の力』を封印しているゴブニユには、鍛冶神としての技術はさておき特別な力は一切ない。

作業をこなすのはあくまで団員達の役目だ。ペコリと頭を下げるアイズに彼はふんつと鼻を鳴らし、もといた場所へと戻る。

するとアイズの後ろから――

「へえ……この部屋も凄いな」

三日月が周りを見渡しながら入ってくる。

「む?」

「あつ……三日月」

ゴブニユとアイズは部屋に入ってきた三日月を見つめる。

普段、他の人も入らないような場所へと入って来ているのだ。この男神も困惑するだろう。

——そして。

「おい、坊主」

「ん？」

ゴブニユの言葉に三日月は反応する。

「お前のその気配……いや、まさかな……」

そうこぼすゴブニユに三日月が言った。

「何、アンタ。何か用？」

「いや……何でもない。悪いな」

そう言って彼はそれまでの作業を再開させた。

何時もとは違った反応にアイズは困惑しながらも、三日月と一緒に部屋から出ようとした時。

「さて、坊主」

後ろから再度、三日月を静止させる声がかけられる。

「何？」

三日月は再び体の向きを変えてゴブニユへと視線を向ける。

「名は？」

「あ？」

「お前の名だ」

「……」

ゴブニユの問いに三日月は少しだけ黙り、そして言った。

「三日月・オーガス」

「そうか……坊主、悪いな」

「ん」

ゴブニユの返答に三日月はそう返して再び歩いていく。

この男神は一体、三日月に何を感じたのだろうか？

アイズは疑問を抱えながら三日月の後を追っていった。

## 第十三話

遠征の後に盛大な酒宴を開くのが、「ロキ・ファミリア」の習慣だ。眷属の労をねぎらうという名目のもと、無類の酒好きであるロキが率先して準備を進め、団員達もこの日ばかりは大いに羽目を外す。

遠征の後処理が一段落する頃にはすっかり日も暮れ、東の空は夜の青みがかかり始めていた。

遠征に参加しなかった居残り組の一部の団員にホームの留守を任せ、彼等に羨ましそうに見送られながら、アイズ達は西のメインストリートへ向かった。

本来、この酒宴に参加するのは遠征に参加したメンバーが殆どだが、今回は昨日入団したばかりの三日月と今日入ったハツシュが特別に参加する事になっていた。

三日月は「別にいい」と言って断っていたが、テイオナやロキに言われて参加する事になったらしい。

ハツシュに関しては三日月が行くのであれば「自分も行きます」と言って着いてきた。

オラリオの西地区は北西の大通りとは異なり一般市民が多く住まう地区だ。

魔石製品による世界中との交易を主産業とするオラリオは、製品製造を担う労働者を多く抱えている。

ギルドの計らいから生み出される雇用は、ダンジョンを求め訪れる冒険者以上の労働者を呼び寄せていると言われ、当然そんな彼等も都市に居着くことになるのだ。

「ファミリア」に加入していない無所属の労働者の多くがこの西地区に住居を構え、彼等の家族も生活することで、大規模な住宅街を形成していた。

勿論、目抜き通りである巨大なメインストリート沿いには酒場や宿屋など多くの店々が並んでいる。

垢抜けない素朴な町娘達を求め、こちらに足を運ぶ冒険者も少ない。

「あまり来ないですけど、こっちの空気も賑やかでいいですよね」  
「うん、冒険者しかない北西のメインストリートより好きだな、あたし」

物騒な装備に包まれていない人の群れはそれだけで場の雰囲気  
軽くしていた。

仕事帰りの労働者達が美味しそうに酒を飲み、純朴そうな売り子達  
が客を呼び込んでいる。

精悍な冒険者にちよっかいを出される彼女達はまんざらでもなさ  
そうで、しかしそうはさせじと若い地元の青年達が彼等の間に割って  
入り、数瞬睨み合っていたかと思うと・・・勝負とばかりに盛大な飲  
み合いが始まった。

口と腹を押さえる売り子達と周囲の客も巻き込み大騒ぎとなる。

魔石灯の光に照らし出される盛況な大通りの光景に、会話を交わし  
ていたテイオナとレフィーヤは笑みを漏らす。

「ミア母ちゃん、来たでー！」

残照が消え完璧な夜を迎えた辺りで、ロキが予約を入れた酒場に到  
着した。酒場の女将の名を呼ぶとすぐにウエイトレス姿の店員がア  
イズ達を出迎える。

この西のメインストリートの中でも最も大きな酒場『豊穰の女主  
人』は、ロキのお気に入りのお店だ。

店員が全て女性であるのとそのウエイトレスの制服が彼女の琴線  
に触れたのだと、アイズ達は既に悟っている。

「お席は店内と、こちらのテラスの方になります。ご了承ください」  
「ああ、わかった。ありがとう」

酒場にはカフェテラスが存在した。

恐らくはアイズ達一行が店に入りきらなかったための処置だろう、礼儀  
正しいエルフの店員にフィンが了承し、酒場へ入る前に団員の半数を  
テラスへ座らせる。

残ったアイズ達は入り口の方へ向かい案内された。

と、三日月がポツリと呟く。

「・・・酒臭い」

三日月にとって酒はあまり良い記憶はない。

CGSの時にいた一軍の大人も飲んでいたし、オルガも酒を飲んではいたが、あの時の酒場以降、オルガも酒を飲んでいない。

「三日月さん、酒駄目なんすか？」

ハツシユが三日月に言う。

「駄目って訳じゃないけど、好きじゃないだけ」

「そっすか」

ハツシユはそう言って周りを見渡す。

「まあ、こっだけ酒飲んでる奴がいると酒臭いっすね」

そう言ってハツシユはまた、モノ珍しげに周りを見渡す。

案内された酒場は満員だった。予約のためぼっかりと空いているアイズ達の席が不自然に映るほど、多くの種族の人間が飲み騒いでいる。ロキ以外にも従業員目当ての客は多いらしく、美少女のウエイトレス達に鼻の下を長くしていた。

が、彼女達は外の売り子達とは一味違うのか、ちよっかいを出されても軽くあしらい、時には手痛い反撃も行っている。ロキも早速獣人の店員に迎撃されていた。

店内は木張りで、他の酒場と比べると落ち着きのある内装だった。天井にある魔石灯も光量は抑えめで、どこか洒落た雰囲気がある。

「ここの料理美味しいんだよね。つい食べ過ぎちゃってさ」

「てめえはいつも食べまくってるじゃねえか・・・」

入店してきた「ロキ・ファミリア」を見て、例のごとく客の冒険者達が顔色を変え声をひそめ出すが、テイオナ達は気にした素振りも見せず席へついていく。

アイズも自分の顔に向けられる多くの視線を感じたが、何もせずそのままにした。

好奇の目に晒されるのはもう慣れてしまっている。

「・・・？」

ふと、周囲のものとは毛色の異なる視線を感じた。

言葉では上手く表すことはできないが・・・真っ直ぐな感じだった。気にはなつたが、テイオナ達にも促されたので、詮索することもな



く椅子に座った。

「よっしゃあ、ダンジョンの遠征みんなごくろうさん！ついでに三月らの歓迎も兼ねて今日は宴や！飲めえ!!」

立ち上がったロキが音頭を取り、次には一斉にジョッキがぶつけられる。団員達が盛り上がる中、アイズも杯を軽く上げ近くにいたティオナ達と乾杯した。

アイズ達が案内された席は店内の隅だった。すぐ横には窓を挟んでテラスがあり、扉を通じて自由に出入りができる。運ばれてくる料理と酒はどれも美味なものばかりで、団員達の伸ばす手も自ずと早くなる。

「団長、つぎます。どうぞ」

「ああ、ありがとう、ティオネ。だけどさつきから、僕は尋常じゃないペースでお酒を飲まされているんだけどね。酔い潰した後、僕をどうするつもりだい?」

「ふふ、他意なんてありません。さっ、もう一杯」

「本当にぶれねえな、この女……」

「うおーっ、ガレスー!?!うちと飲み比べで勝負やー!」

「ふんっ、いいじやろう、返り討ちにしてやるわい」

「ちなみに勝った方はリヴェリアのおっぱいを自由にできる権利付きやアッ!」

「じっ、自分もやるっす!?!」

「俺もおおお!」

「俺もだ!!」

「私もっ!」

「ヒック。あ、じゃあ、僕も」

「団長ー!?!」

「リ、リヴェリア様……」

「言わせておけ……」

騒ぎ合う仲間達の横で、自分の調子を守って食を進めていたアイズだったが、当然のように飛び火はやって来る。酔ってたかが外れているのか、普段は一步遠慮している後輩の団員達に気持ちよくなりま

しようとはかりに——ここぞとはかりに——杯を突きだされ、  
アイズは思わず困ったように微笑してしまった。

そしてふと、アイズは思い出した。

先程から三日月の姿が見えない。周りをキョロキョロと見渡す  
と・・・いた。

隣のテーブルでハツシユと一緒に料理を食べている。

が、三日月は肉や魚といったものは全てハツシユの皿に移して自分  
は野菜や果物といったモノを食べている。

私は立ち上がって三日月のもとへと向かう。

「三日月」

「ん？」

私の声かけに気づいたのか三日月は食事の手を止めて顔を向ける。

「なに？」

「えーっと・・・楽しんでる？」

「んー、まあ」

三日月はそう言ってカットされた果物を口に入れる。

「三日月さん、これ食べます？」

すると隣に座っていたハツシユが三日月に他の皿の料理を差し出  
す。

「んー？そこ置いていて」

「うっす」

ハツシユはそう言って三日月の前に料理を置いて、自分の食事を続  
ける。

「・・・そこ、座れば？」

三日月は前の椅子に顔を向けて、私に座るように促した。

「いいの？」

「別にいいよ。どうせ空いてるんだし」

そう言って三日月はまた一口、料理を口に入れる。

私はそんな三日月を見て前の椅子へと座った。

「・・・」

座ったのはいいが、何も話題が出てこない。

私は沈黙しながら三日月を見ていると……。

「なに？…これ食いたいの？」

口を開けていた三日月は私の視線に気づいてか、スプーンにのった料理を皿に置き、私を見る。

「え？…うん」

私はつい反応してしまい、そう答えてしまった。

私の反応に三日月は表情を変えずにスプーンを手に取り、そして――。

「ん」

私にそのスプーンの先を私に向けた。

「えっ？」

私は三日月のその行動に呆然として固まった。



「さつき、アイズさんと・・・アイズとあ、あーんして・・・ツ!?」  
動揺と困惑、その両方を混ぜたようなレフィーヤの様子に三日月は  
何も気にする事なく淡々と云った。

「食いたそうに見てたからやっただけだけど、駄目だった?」

二人の会話が微妙に食い違っている。

周りも動揺の為かその食い違いに気づいていなかった。

「駄目です!!私だってアイズさんとしてみた・・・じゃなかった、とに  
かく、駄目なものは駄目ですから分かって下さい!!」

本音が一瞬出かけたレフィーヤに三日月は言った。

「分かった」

三日月はそう言っただけでレフィーヤから視線を逸らすと、隣にいるハッ  
シユに言った。

「ハッシユ、水持ってきて」

「う、うっすー!」

ハッシユはそう言っただけで椅子から立ち上がり、カウンターへと向かっ  
ていく。

レフィーヤはそんな三日月を睨み付けながらも自分のいた席へと  
戻っていった。

そして徐々に酒場の賑やかさが戻ってきた。

最も、周囲から聞こえてくる声は三日月に対しての疑問など様々な  
話題が飛びかっていた。

そんな事件がありつつも、酒場からは笑い声が途絶えない中、ふと  
どこか陶然としているベートが何かの話を催促するように言った。

「そうだ、アイズ!お前のあの話を聞かせてやれよ!」

ロキを中心に遠征の話題で盛り上がっていた時の頃だ。

やけ酒でもしたのか、やけに機嫌の良さを滲ませる彼に、アイズは  
小首を傾げる。

「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス!最後の一匹、お  
前が5階層で始末しただろ!?それで、ほれ、あん時いたトマト野郎の  
!」

——彼が何を言わんとしているのか、理解した。

自分が助けた、あの白髪の少年。

「ミノタウロスって、17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐに集団で逃げ出していった？」

「それぞれ！奇跡みてえにどンドン上層に上がっていきやがってよっ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！こっちは帰りの途中で疲れていたってのによっ」

ティオネの確認に、ベートはジョツキを卓に叩きつけながら頷く。普段より声の調子が上がっている彼に、アイズは何か嫌な予感を覚えた。

耳を貸すロキ達に当時の状況を詳しく説明するベートは、次には口に出してしまう。

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しっていうようなひよろくせえ冒険者が！」

——止めて、と。

アイズは反射的に心の中で呟く。

「抱腹もんだったぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまってよお！可哀想なくらい震え上がっちゃって、顔をひきつらしてやんの！」

「ふむう？それで、その冒険者どうしたん？助かったん？」

「アイズが間一髪ってところでミノを細切れにしてやったんだよ、なっ？」

今、自分がどのような顔をしているのか、アイズにはわからなかった。

三日月も表情を変えてはいないが、雰囲気はあまり良くはない。

胸の奥でささくれ立とうとするこの感情をどう表現していいかわからない。何故こんなにも心が乱れかけているのか、頭の隅にいる昨日の白髪の少年に三日月に問いかける。

彼に幼心の自分の記憶を重ねて、自問する。

「それでそいつ、あのくっせー牛の血を全身に浴びて・・・真っ赤なトマトになっちゃったんだよ！くくくっ、ひーっ、腹痛ええ・・・！」  
「うわぁ・・・」

ティオナが顔をしかめながら呻いた。

それだけで悲しくなった。

「アイズ、あれ狙ったんだよな？ そうだよな？」

「……そんなこと、ないです」

目に涙を溜めているベートに、アイズはそれだけを喉からしぼり出した。

聞き耳を立てている他の客達の忍び笑いが、耳朶に噛みついてくる。

「それにだぜ？ そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちゃまってっ……ぶくくっ！ うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんのおっ！」

「……くっ」

「アハハハハッ！ そりや傑作やあー！ 冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふっ……ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない……！」

どつと周囲が笑いの声に包まれる。

レフイーヤが、ロキが、ティオネが、誰もが堪えきれず笑声を上げた。

「……帰るよ、ハツシユ」

「えっ、いいんすか？ 勝手に帰って？」

「話を聞いてハツシユだってあんまりいい気しないでしょ」

「まあ、確かにそうっすけど……んじゃ、先に帰るって言っときますね」

「ん」

三日月やハツシユにとっていい気分ではないのだろう。

そんな会話を聞いて、私は自分の周りだけ大きな穴が開いたような感覚を感じた。

自分一人を残して、世界が遠くなる。

と、ハツシユがこちらに来て私と近くにいたティオナに言う。

「あー、すみません。俺と三日月さん、先に帰らせてもらいます。場所は分かるんで大丈夫です」

気まずい表情でハツシユが私達に言う。

すると隣にいたティオナが言った。

「あー、うん。ごめんね！：あんまりいい気分になんないよね！：三日月に言つといて、あれ酔つてああなってるだけだから気分悪くしないですって・・・」

「はい、わかりました」

ティオナは顔を若干しかめながらハツシユにそう言った。

そして私もハツシユに言う。

「・・・ねえ」

「ん？なんすか？」

「私・・・今どんな顔してる・・・？」

私はそれが聞きたかった。

私は今、どんな表情をしているのか？どんな目をしているのか彼等に聞きたかった。

すると奥から三日月がやって来て、私達の話聞いていたのか言つた。

「今のアイズ、酷い顔してるよ。」

「・・・そっか。ありがとう」

三日月の答えに私は顔を下げる。

そしてそんな私を見て――

「・・・」

ただ、無言で私を抱き締める。

「・・・えっ？」

「うわぁ・・・」

「・・・周り見えます」

突然の三日月の行動にティオナ、ハツシユ、私は困惑する。

「前にアトラが言つてたんだ。泣いてる奴がいたらこうやって慰めろって」

「・・・」

「あの白いヤツだつて精一杯頑張ってるんだ。他の奴が口出すことじゃないよ」



三日月はそう短く言って私を抱きしめ続けた。  
彼の言葉が、私の心に深く刻みついていった。

## 第十五話

あの後、話が進みベートの悪ふざけがあまりにも酷かったのか皆からの制裁をベートが受ける事となった。

そして、その話を全て聞かれてしまっていた。アイズが助けたその少年に。

それなのに私は酒場を出ていく彼を追うことが出来なかった。

昔の、幼い時の自分なら追いかける事が出来ただろう。

しかし今の自分には出来なかった。

三日月の目は追いかけても良いと語っていたが、それでも今の私には追いかける事なんて出来なかった。

何故なら――。

追いかけて行ったら、”二度と彼の隣に立てない”と思ってしまったから”



東の空より朝日が上がり、広大な町並みが照らし出されている。

高い市壁に囲まれるオラリオにも朝の日差しは届き始めていた。

清涼な空気に都市全体が包まれている。

「今日も元気がないなあ、アイズたん……」

胸壁に寄りかかりながら、ロキはぼつりと言った。

ホームの空中回廊。塔と塔を繋ぐ石造りの渡り廊下から眼下にある中庭が見晴らせる。

ロキの視線の先、数本の庭木と僅かな芝生がある空間の中で、金髪の少女が一人長椅子に座っていた。

「昨日一日もずーつとあんな感じやったし……」

「珍しいを通り越して不可思議だな、アイズが時間を無為に過ごすのは」

「そっやなあ……」

回廊にはロキの他にもう一人、アイズを見守る亜人がいた。

流れるような翡翠色の長髪に同色の瞳。長身の身体は華奢な印象が強く、エルフ特有の線の細さが表れている。

その白い肌は透き通るようでさえあった。

冷涼かつ凜々しい雰囲気を纏う麗人、リヴェリアは、胸壁に肘をついているロキの隣で言葉を交わす。

「いつもなら遠征の後だろうがダンジョンに突っ込むし、止めても聞かんし……まあ、目の届くところにいてくれる分、こっちは安心してきるんやけど」

「そこは同感するが、さて」

胸壁に背を向けているリヴェリアは、見目好いロキ以上に整った美しい相貌を浅く苦笑させる。

「ああも塞ぎ込んでいる原因は、やはり酒場の一件だろう」

「そんななべートにセクハラされたの嫌やったんかなあ。あ、ちなみにべートもすごい勢いでへこんでるで」

「知らん。自業自得だ」

酒場で開いた祝宴はもう二日前になる。

アイズが一人で外に出て三日月達が帰ったあの後、テイオナ達はよってたかってべートに報復した。アイズと三日月達を不愉快にさせ挙げ句祝いの席から出ていかせてしまった諸悪の根源と見なし、縄で身動きを封じた後、店の外に吊し上げたのだ。アイズと三日月達のためにリヴェリア自身も——べートに言ってはならない事を言われたので頭を踏んづけてやった。

酔いが醒めてことの顛末を聞いたべートは、今はやってしまったとばかりにうなだれており、テイオナ達の手でアイズに近付けさせてすらもらえていない。

あの狼人にはいい薬だと言って、リヴェリアは吐息する。

「でもあんなやり取りで落ち込むほど、アイズたん繊細やないし……」  
「他に原因があったということか」

「多分な。それこそアイズたんしかわからへんって言いたい所やけど、三日月が大体察しとったようやからな……」

「あの青年か」

リヴェリアは三日月の事を思い浮かべる。

アイズが出ていく直前、三日月はアイズを抱きしめていた事を思い出す。

本人曰く、アイズが泣いていたから慰めていたと言っていたが、おそらくそれと関係あるのだろう。

恐らくアイズにとって無視できない何かがあつたのだろう。そしてそれを察しての行動をした三日月。

ロキの言葉通り、自分達では判断できない。

「そういえば、三日月はどうした？姿を見ないが？」

話題の三日月の姿を最近見ていないリヴェリアはロキに尋ねると、ロキから返答が返ってくる。

「三日月ならハッシュと一緒にフィンやテイオナらとダンジョン行ったり、街中に行ったりしとるで？」

三日月は基本的に仲間を探すのが目的で一時的に加入している。今日も仲間を探すためにあっちこちしているのだろう。

「どうするんだ。放っておくのか」

「どうなんやろうなあ。確かに元氣取り戻して、おりゃー、つてまたダンジョンにこもられても困るんやけど」

んー、と間延びした声を漏らしていたロキは、やがて「ん！」と言って胸壁から起き上がった。

「頼んだ」

「……なに？」

「リヴェリアに任せた。うちがあれこれするより、そっちの方がええやろ」

それにな、とロキはリヴェリアが何かを言う前に言葉を被せる。

「放っておくつもりもないのに、放っておくのかあー、とか澄まし顔したらあかん。何かあつたか聞きたいんやろう？」

「……」

にやけた顔で自分の台詞を真似るロキにイラツとしつつも。

見透かされている本意に、リヴェリアはその美しい眉をひそめた。

「じゃ、後はお願いな、母親」

目の前を通り過ぎていく際、肩にぽんと手を置いて、ロキは回廊から去っていく。頭の裏に手を組んで遠ざかっていくそんな主神の後姿を、リヴェエリアは無言で見つめた。

リヴェエリア・リヨス・アールヴは、「ロキ・ファミリア」の中でも古株の古株だ。

ロキはもとより、彼女はアイズとの付き合いが長く、何よりも深い。「……誰が母親だ」

言葉にしつつも、反感を抱いていない自分に対し。

やれやれと溜め息をつきながら、リヴェエリアは中庭へと向かった。

◇◇◇◇◇

「アイズ」

中央塔を囲むようにできて中庭の形は円環型だ。

周囲には複数の塔が並び立ち、日の光は入りにくいのが、団員達の手によって手入れされ草木はよく育っている。

小さな噴水や魔石灯のポールも設けられていた。

中庭に下りたりヴェエリアは芝を踏んで進みながら、アイズに声をかける。

「リヴェエリア……」

「相変わらず早いな。剣は振っていないようだが」

アイズは木陰にある長椅子に腰かけていた。

木の根本には本来の愛剣ではないレイピアが立てかけられている。大方、日課の素振りをしようと出てきたが、気分が乗らずそのままにしているのだろう。

視線をリヴェエリアと合わせていた彼女は、そつとその金の瞳を芝に落とす。

「……」

「……」

ほんの少し、間が空く。

リヴェエリアはどう切り出すか一度迷ったが、構える必要はないとす

ぐに思考を放り投げる。

回りくどいことはしない。

それが自分と彼女の間にある決まりだ。

「何があった」

アイズは顔を上げ、小さく視線をさまよわせる。

葛藤が見て取れる中、しばらくその場でたたずんでいると。

ぽつぽつと、アイズは話し出した。

「酒場であった、ミノタウロスの話・・・」

「ああ」

「私は、男の子・・・冒険者を助けたんだけど・・・」

語られていく内容に耳を傾けていたリヴェリアは、話が進むにつれ納得を得て、同時に頭も痛めた。

まさか笑いの種にされていた本人がああ酒場にいたとは。

二日前の光景と照らし合わせて、あの時何が起きていたのか悟った。そしてすぐにあの場合の話の話を止めるべきだったと自らも後悔する。

三日月はその事を知っていたからあの時、帰ったのだろうかとう理解する。そうだとしたら自分達の印象もあまり良くは思っていない筈だ。

ひとまず、疑問が氷解したリヴェリアは全てを打ち明けたアイズの顔を窺った。普段と変わらない乏しい表情に見えるが、その顔は暗い。消然としているのが手に取るように分かる。

直接少年を傷付けたわけではないが、いやその誘因を招いたことに、応えているようだ。

ダンジョンと鍛練以外の事柄に珍しく感情を動かしているのを喜ぶべきか複雑だったが、リヴェリアは落ち込んでいるアイズに再度尋ねた。

「お前は どうしたい？」

うつむきがちになるアイズに、後は何も口にしない。

強要はせず、彼女が胸の内の答えを探しだすのを待つ。

「・・・分からない、けど」

やがて。

「謝りたい、んだと思う……」

小さな声で、そう答える。

「そうか……」

「……」

会話が途切れる。そしてまた見計らったように、館全体へ伝わる鐘の音が鳴り響く。

朝食を知らせる合図だ。

——とそこに中庭に入ってくる人影があった。

「……あつ」

アイズは声を漏らす。

リヴェリアがそちらへ視線を向けるとそこに居たのは三日月だった。

何時も隣にいるハツシユの姿は見えない。

一人でいる彼にアイズは視線を向けている。

するとその視線に気付いたのか此方へ身体を向ける。

「朝飯だけど、行かないの？」

三日月は二人に向けてそう言う。

「ああ、今向かう」

「分かった」

三日月はそう言つて踵を返す。

そして三日月は何か言い忘れがあったのか足を止め、アイズに言った。

「何か迷ってるみたいだけど、自分の事は自分ではじめをつけなきやいけないから」

「えっ?」

一言。迷っているアイズにそう言つて三日月は中庭から出て行った。

「……凄いな彼は」

アイズの指針のきっかけを彼は一言で与えた。

一体彼は彼等はどういった場所にいたのかというくらい彼は強い。心も意思も実力も。

なら自分もアイズに言う事を言わねばならない。

「自信がないのなら、まだ悩め。言ってくれれば、相談にも乗ってやる」

「うん……リヴェリア」

「？」

「……ありがとう」

「……それは三日月にも言っておくれ」

変わらない少女の表情に淡い温もりを見つけ、リヴェリアは頬を緩める。

振り向いた顔を戻し、中庭から塔へと向かう。

今の彼女にとって三日月は必要な存在だろう。

三日月・オーガス。

彼等は鉄華団は一体何者なのだろうか。

リヴェリアは疑問を抱きながら食堂へと向かった。



## 第十六話

「むー」

腕を組み、ティオナは唸る。

「ティオナさん・・・？」

「なに難しい声出してんのよ」

朝の食堂でレフィーヤとティオネに見つめられながら、考え込む。

「アイズ、まだ元気なかった」

朝食を終えた今、自分の隣にいたアイズはもういない。

今日はいつもの四人で食事を取った。話題を振ってやれば、言葉少なながら普段通りの受け答えが返ってきて、その様子は何も変わりないように見えた。

しかしだ。

ティオナには分かる。

空元気と言うほど取り繕ってもないだろうが、今のアイズは本調子ではない。

「ベートに腹を立ててるだけでしょう？放っておけばいいじゃない」

「いや、多分ベートはあんまり関係ないんだよ、あたしが思うには。関係はなくなはないかもしれないけど、アイズは端からあの狼男のことは気にしてない」

「あんた、酒場であれだけベートをのしといて・・・」

「アイズ、別のことでまだ落ち込んでる」

ティオナは考えることが苦手だ。

アイズの心を慮って気を利かせてやれないだろうし、悩みそのものを拭いてやることも無理だろう。

お節介を焼きに行ってもきつと大失敗に終わる。

三日月は何か分かっているみたいだが、”自分で解決しなきゃいけない事だから”と言って何も言っってはくれない。

これまでもこれからも、ティオナは能気な振る舞いで、アイズから笑顔を引っ張り出してやることしかできない。

「レフィーヤ、ティオネ。今日の予定はなんかある？」

「いえ、特には」

「あたしは今日も団長のお手伝いに・・・」

「じゃあ暇だね、今日あたしに付き合って！」

「ちよつとっ！」

小難しいことは放り出す。

要は、ティオナがアイズのしよぼくれた顔を見たくないのだ。

高嶺に咲く小さな白花のように、控えめで、澄んでいて、風に揺れて綻ぶような、あの微笑む顔を見たい。

アイズノマド親友を自称するティオナは、椅子を飛ばして立ち上がった。

「あたし、アイズを探してくるー！」

勢いよく大食堂を飛び出す。

動き出したら止まらない猪のように、迷う事なく空を羽ばたく鳥のように、ティオナはホーム中を駆け回る。

部屋、屋根裏、書庫、応接間。手当たり次第に扉を開け階段を上っては下る。団員達の驚く顔が何度も飛び込んできた。ロキの私室にも足を運ぶが、鼻を突く酒臭さが漂っているだけで部屋の主はいない。うえー、と鼻をつまんでティオナは再び走り出す。

回廊を行ったり来たり繰り返した。

「・・・おい」

「わっ!?!」

幅狭な廊下を走っていた時だ。

長い足が横木のように壁にかけられ、ティオナの行く手を阻む。すんでのところでどうにか停止したティオナは、いきなり通せんぼをししてきたベートを睨み付けた。

「ちよつと危ないじゃんー!どいてよ、ベートー！」

酒場の一件も引きずってか、語気を強めるティオナ。

敵意を全開にする彼女に対し、口を引きつるベートは、くいつと窓の外を顎でしゃくる。

「アイズなら、中庭にいるぞ」

「え・・・」

呆気に取られるティオナを見て、ベートは足をどける。唇を結び、不貞腐れたようにその灰髪を手でかきながら、すぐその場を離れた。した。

「酒場の件はまた、アイズに謝っとく。俺も言い過ぎた」  
アイズの悩み事に気付いてか、ベートはそう言っただけで廊下を歩いて言った。

廊下の奥へと消えた背中に、何時もの様子が違うベートに調子が狂ったような表情をしたティオナは頭をかく。

そしてベートに言われた通り、素直に中庭へと向かった。  
「！」

ベートの言葉通り、アイズはいた。

木の下にある長椅子に座り、視線を空へと向けている。

ティオナはぱつと顔を明るくさせ駆け寄ったら、

「アゝイズー！」

「……ティオナ？」

目の前に現れた彼女に、金色の瞳が瞬きする。

ティオナはその細い両手を取り、長椅子から立ち上がらせた。

「買い物行こう！」



レフィーヤ達と合流し、ティオナはアイズを連れて街へと繰り出した。

都市の最北端にあるホームから近い北のメインストリート。ギルドの関係者が住まう高級住宅街も近隣に位置するこの大通りは、商店街として活気付いている。

通りの真ん中を何台もの馬車が行き交う中、多くの亜人が路上を闊歩していた。

「まったく、強引に連れ出して……」

「いーじゃん、たまにはさ！ぱーつと気晴らしに買い物行きたいって、ティオナだって前に言っただでしょー！」

「あの、ティオナさん、それで何を買いに行くんですか？」

「服、服買いに行こう！アイズもいいよね！」

「う、うん」

アイズの手をしっかりと握りながら、ティオナは先導するように歩みを進める。

北のメインストリート境界は服飾関係で有名だ。

種族間に介在する衣装の壁は意外と大きい。小人族や、低身長でがっしりと横幅のあるドワーフを始めとした体格の問題や、風土にあわせて種族ごとの毛色というものが存在する。

例のごとく、世界中の地方から多くの亜人が集まるオラリオはその問題が顕著であり、衣装を仕立てる際に客との間で発生する揉め事が後を絶たなかった。

だが、そこをあえて目を付けたのが商人達だ。

種族ごとの専門店を多数構えることで、信頼と実績をたちまち確保したのである。一部の商業系【ファミリア】が市場に加わったことも、オラリオの服飾事情の発展に拍車をかけた。

オラリオ、特に北のメインストリート周辺は、大陸中でも類を見ない数の服飾店が軒を連ねている。

「ティオナさん、大通りのお店より路地裏の方が品揃えは良くないですか？お店も一杯ありますし」

「わかってる、あたしとティオネがよく行く店が、その道曲がったところすぐなんだ！」

「えっ、ティオナさん達のお店って・・・」

レフィーヤの声音がまさかという危惧を抱くのを脇に、ティオナは相変わらずアイズの手を引いてゆく。言葉通り道を曲がり、賑やかで雑多な路地裏を進むと、ほどなくして目当ての店に到着した。

「こ、こっちは・・・」

紫の色を基調とした看板と店を仰ぎ、レフィーヤの動きが固まる。

開け放たれた扉の外からでも、非常に際どいとわかる衣装が窺えるのは、アマゾネスの服飾店だ。

「久しぶりねー、私もちよっと羽目を外しちゃおうかしら」

「アイズ、行こう！」

「え、あの——」

テイオナとテイオネに挟まれアイズが連行される中、レフィーヤも慌てて後を追う。

結論から言えば目に毒だったと言つて置こう。

◆◆◆◆

アイズ達が街で買い物を楽しんでいる中、三日月達はトレーニングを行っていた。

「くそつ、デカイ癖に速え!」

「動きは悪くないぞ、小僧! どんどん打ち込んで来い!」

「言われなくても!」

練習用の剣を持ったハツシュはガレスとの訓練をしており、三日月はその様子を端で火星ヤシに似た何かを口に入れて見ていた。

その横ではフィンがハツシュの様子を観察している。

そしてフィンが三日月に言った。

「ハツシュ君の動き、初心者じゃ出来ない動きだね。モンスターと戦うよりどちらかといえば、対人戦に向けた動きだ」

「まあ、その辺りは昭弘達が教えてたからね。結構やるよ」

「アキヒロ? その人も君の仲間かい?」

「うん。俺の背中を任せられるくらいにはやれるよ。多分、あのおっさんとも良い勝負するんじゃない?」

三日月はそう言つて再びデーツをポケットから取り出す。そしてそのデーツを目を細めて見つめる。

と、前から——。

「ぐわっ!」

ハツシュがガレスに吹っ飛ばされた。

背中から地面に叩きつけられたハツシュは「痛つてえ・・・」と呟いて再び立ち上がる。

「終わったかな?」

「うん、じゃあ次は俺達の番だね」

ガレスはハツシユにまだまだと言つてはいるが、入つて間もないレベルの状態だ。それでこの動きならすぐに強くなれるだろう。

フィンは準備をしている三日月と一緒に模擬戦の準備を始めた。

## 第十七話

西日が照り、街が茜色に染まっている。

市壁の奥で日の入りが始まる中、ティオナ達はホームへの帰り道を消化しようとしていた。

「あー、遊んだあー」

控えめではあるがアイズの顔には笑みが戻っており、強引に連れ出したことが功を為したとティオナもご満悦気味だ。最後の方は彼女の気分転換関係なしに遊び倒しだったため、レフイーヤなどは苦笑いととともに疲れを滲ませている。

四人固まって談笑を交わしながら、ティオナ達はホーム沿いに出る街路を折れ曲がった。

「あれ？」

「馬車・・・？」

館の正門に見慣れない乗り物を見つけ、ティオナとレフイーヤは不思議そうにする。近寄ってみると、豪華な黒いドレスを着こなしたロキが今まさに馬車に乗り込もうとしているところだった。

「わ、ロキ、何その格好!? 髪型まで変えちゃって!」

「ん? おく、帰ってきおったか四人娘。ぬふつ、どや、似合う?」

ロキは帰ってきたティオナ達に言った。

「はい、似合ってますけど・・・どこかに行かれるんですか?」

ロキの言葉にレフイーヤはそう言うのと、ロキはすぐに返答した。

「ん、ちよつと神どもが馬鹿騒ぎする『宴』に足を運ぼうと思つてなあ」  
「あら、でも『神の宴』には興味ないとか言つてなかった? ロキ?」

疑問に思つたティオナはそうロキに返すが、ロキは笑いながらよく分からない事を言う。

「――フヒヒ。ちよつと愉快的情報耳に挟んでなあ、貧乏神のドチビをいじりに行つてくるわ」

ロキの言葉に首をかしげるティオナ達。

とりあえず、よからぬことを考えていることだけは、その下卑た笑みを見て悟った。

髪まで夜会巻きにしたロキはそれから馬車に乗り込み、扉を閉める。商人から借りたと思われる箱馬車はまた高級感溢れる立派な作りで、車両本体には天蓋や窓が付き、数人が楽に腰かけられる空間も備わっている。御者席にいるのは「何で自分が……」とばかりにがっかりと首を折っているラウルだ。

うわあー、と気の毒そうなティオナの視線が寄せられる中、ぶるるっ、と毛並みがいい馬が嘶く。

「ほんじゃ、行ってくるわー！ご飯は適当に食べといてなー！」

ぱちんっ、という鞭の音とともに馬車が動き出す。

窓から手を振るロキを眺めた後、ティオナ達はホームの中へと入っていった。



都市が夜の闇に包まれ、星の海のごとく魔石灯の光に溢れていく。今日も酒盛りに耽る賑やかな喧騒が絶えない中、いくつもの馬車が止まり、多くの美男美女が足を運ぶ敷地がある。

笑みを貼り付ける彼等神々が目指すのは、一つの建築物。

象頭人体を模した、巨大な像だった。

真つ当な神経を持つ者ならば己の目を疑うような造りだ。一見モンスターにも見えるその外観はしかしどこか愛嬌があつて憎めない。違和感もその分激しかったが、神々は特に気にした素振りもなく、胡座をかいた巨人像の股をくぐっていく。

「相変わらず奇天烈な形しとるな……」

本日の『神の宴』の主催者である「ガネーシャ・ファミア」のホームに到着したロキは、御者の手を借りて馬車から降り立つ。

白い扉で囲まれた広大な敷地内、その中央で鎮座しライトアップされる巨象の建物を、御者と並んでしばらく眺めた。

「それにしてもラウル、女の扱い方上手くなつたなあ。いいエスコートやったで」

「は、はあ……ありがとうございます」



「で、悪いんやけど、もうちよい付き合ってくれんか？遅くなるかもしれんけど、うちが帰るまで待つとつて？報酬は弾むで！」

わかりました、と苦笑いする御者のラウルににんまりと笑い返し、じや行つてくるとロキはドレスを翻す。履き慣れていない踵の高い靴も器用に歩きこなし、広い庭を越え、建物の中へ入つていった。

ロキが長い廊下を抜け大広間へとたどり着くと――。

『俺が、ガネーシヤだ！』

『イエーツ!!』

今回の宴の主催者、ガネーシヤの馬鹿でかい声が響き渡った。

「盛況やなー、っと」

コツコツと靴を鳴らしながら、一部熱くも和やかな会場をロキは見つて回る。

滅多に宴に顔を出さない彼女は比較的早く他神達の目を集め、にわかに騒々しくなった。

『あちゃー、ロキ来ちゃったよー』

『残念女神頂きましたー』

『おいよせ、ロキの悪口は止めろ！』

『お前等あとで殺されるぞ』

周りからロキに対して様々な反応が聞こえてくる。

ゲラゲラ笑う一部の神達ににこりと微笑むと、彼等は足並み揃えて速やかに会場を出ていった。

けっ、と吐き捨てるロキは給仕の一人を呼び止め、ぐいっと乱暴にグラスをあおる。

神は基本、掴みどころがない。

娯楽を追い求め下界に降りてきた彼等は常に飄々としており、下界の者からすれば奇異に映る者が大半だ。命知らずな彼等は今のよう簡単に喧嘩を売ってくる真似もすれば、身を翻す速度もまた速い。「にしても、ドチビおらんなあー・・・ガセやったか？」

参加するつもりがなかった宴にロキが足を運んだのは、気まぐれだ。

正確には、目の敵にしているとある貧乏女神が恥も知らず、パー

ティー出席の準備をしているとちやうど今日小耳に挟んだのだ。

もし来なくてもそれはそれでよし、もし本当に来ていたとしたら・・・ドレスも用意できないその哀れかつ惨めな姿を、思いつきり馬鹿にして笑ってやろう、とロキはそう画策していた。

漏れ出そうとする邪笑を噛み殺しながら、彼女は気ままに広間を歩く。

「おお、ロキ、ロキじゃないか」

「ん？」

混み合う神の間を縫って進んでいると、声がかかる。

目を向けると、細身の男神が目を弓なりにして笑いかけていた。

富国の王子。その印象につきる。

邪気のない笑みを常に纏っており、多くの女性が妬んでしまうであろう柔らかそうな金髪が首の辺りまで伸びている。華奢な体は中背で、手足はすらりと長かった。

周囲と同じように正装に身を包む彼は、怖じけることもなくロキに「どうだ、話さないか」て気安く誘ってくる。

「よおー、ディオニュソス。来とったのか」

「ああ、せっかくの宴の場だ、情報収集もかねて足を運ばせてもらっているよ。私の【ファミア】はロキのところほど強くもなければ、常識でもないからね」

ディオニュソス、と呼ばれた彼はやはり笑みを浮かべながら答えた。

品の良い物腰は上流階級の人間の鏡のようだ。ふざけ半分で貴族の真似事をしている神々の中で、彼だけが非常に浮いているようすらある。

そんないかにもといった立ち姿は、一方で僅かな隙も窺わせないほど泰然としている。

逆にその硝子のような瞳で相手の胸の内を見透かそうとしているかのようにだった。

食えない神の石柱、というのがロキの勝手な印象だ。

と、そこに――。

「あらあ、ロキ。お久しぶり。元気になっていた？」

「おおぅ・・・デ、デメテル、いたんか」

「ああ、今の今まで私と話していてね」

グラスを手に持ちおっとり微笑むのは、豊満な身体付きをした女神である。

背に流れる神はふわふわとした蜂蜜色で、浅く曲がっている目尻は柔和、その見た目通り纏う雰囲気も優しい。

胸元が開いているドレスからはその巨大な双丘が今にもこぼれ落ちそうだった。自分には皆無であるその存在を見せつけられ、ロキは引きつりそうになる顔を何とかとどめる。

性格がおおらかであるデメテルは、あらゆる意味でその懐が大きすぎて、ロキは彼女に対して一欠片の反感も抱くことができない。

「ロキ、『ファミリア』の調子はどう？貴方の眷属の活躍を聞かない日はないけれど、みんな元気にしている？無理はさせてはいない？」

「ああ、うちの子達はみんな元気や。逆に、ちよーつと元気過ぎて、派手にスツ転ばんか心配なんやけどなあ・・・デメテルの方はどうや？」  
「うちの『ファミリア』も色々なところに御贖ってもらっているわ。ありがたいことにね。先日野菜が沢山取れたから、今度ロキのところにもおすそわけしてあげる」

「おお、ありがとなー」

【「デメテル・ファミリア」は野菜や果物などを栽培して売り出す商業系の派閥だ。

都市郊外に広い農地を有し、収穫物の多くがオラリオに出回っている。

将来農場をしたいと思っている、この場にはいない三日月には興味がありそうなファミリアだ。

「今ここで出回っているワインも、デメテルのところの葡萄を使っているんだらう？葡萄酒にはうるさい私が認めるよ、これは美味しい」

「ふふっ、ありがとう、ディオニユロス」

「えっ、ほんま!?!」

素直に賞賛するディオニユロスと、照れたようにはにかむデメテル

の話聞き、ロキは早速給仕を捕まえ、葡萄酒を頂戴する。

「で、ディオニュソスのところはどなん？大した噂はここんとこ耳にせんけど」

「私の【ファミリア】かい？可もなければ不可もなく、といったところかな。落ちぶれない程度には頑張らさせてもらってるよ」

「もう、さつきからはぐらかして。ずるいわ、ディオニュソス」

冒険者の情報を管理するギルドによれば、「ディオニュソス・ファミリア」の実力は迷宮都市の中堅どころだ。

上級冒険者と認められる第三級——【ステイタス】Lv, 2——の団員を複数人抱えつつも、華々しいダンジョン内での功績がないせいか、あまりぱっとした印象を持たれていない。

「ロキのところは遠征が終わったばかりなんだろう？何か収穫はあったか、もしよければ土産話を聞かせてくれないか」

「自分のことは何も言わんくせに、ほんままずけ聞いしてくれなあ」  
のらりくらりとかわすディオニュソスを呆れた目で見やりながら、ロキ達は雑談する。

そして、ディオニュソスが、思い出したかのようにロキに言った。

「そういえば・・・ロキ、最近君の所の”剣姫”の横に最近小さい子どもと青年がいるって話を聞いたんだけど、その話は知っているかい？」

「あー？最近入った眷属やけど？それがどうかしたん？」

おそらくディオニュソスが言っているのは、三日月とハツシユの事だろう。

ロキは彼にそう言っって葡萄酒を煽る。

「いや、最近眷属達が噂にしていたものでね。あの『剣姫』にお気に入りが出来たんじゃなかったね」

「あー、まあ確かに小さい方はそうやで？デカイ方は違うけどな」

ディオニュソスの言葉は否定しない。

アイズはどういう理由か知らないが、三日月の事を気に入っているみたいなのだ。

一回本人に聞いてみたのだが、はぐらかされて終わってしまった。

「良い情報ありがとう、ロキ。そういえば、ロキは何しにこの宴に参加したんだい？」

「んー？ちよーつと噂を聞いてな？ドチビがファミアリアを作ったてな。それを確かめに来ただけや」

「ああ、ヘステイアのことかい？彼女なら先程彼方に見えたよ」

彼が指差す方向へロキは顔を向けると、紅髪の女神と銀髪の女神、そして漆黒の髪を二つに結わえた幼い女神。

口端をにいつとロキは吊り上げ、残ったワインを勢いよく一飲みして、腕で荒つぽく口もとを拭った。

「ほんじゃ、ディオニュソス、デメテル。うちそろそろ行かせてもらわ。また今度な！」

彼等に背を向け、ロキは見付け出した女神達のもとにつま先を向けた。

◇◇◇◇◇

「.....」

遠ざかっていくロキの背中を、ディオニュソスは無言で見つめる。

その姿が雑踏の奥に紛れて消えるまで、視線をそそぎ続け、そして誰にも気づかない小さな声で呟いた。

「まだ彼の本質には気がついていない.....か」

■ ■とは人を惑わす存在だ。約束は律儀に守るモノもいれば情に寄り添うモノもいる。

だが、その本質.....自分に利益のある契約しかしないのも彼等 ■ ■だ。

そんな彼等にあの『剣姫』が見入られる。それはそれで”おもしろい”

「また何か悪巧み？」

投げかけられる声。

微笑みながら問いかけてくるデメテルに、振り向いたディオニュソスは、次には苦笑を顔に張り付ける。

「人聞き悪いな、デメテル？私がいつ悪巧みをしたっていうんだい？」  
そんな彼に対し、女神はなおも微笑んだ。  
「だって、ディオニユスがそんな顔をする時、決まって何かが起こる  
んですもの」

## 第十八話

『ガッツ!?!』

強烈な一撃が『ガン・リベルラ』を真つ二つにする。

鋭く振り抜かれたレイピアの餌食となる蜻蛉型のモンスター。片手剣ほどもある敵の体躯が灰へ変わっていく最中、アイズは振り向きざま剣を一閃二閃させる。

飛翔してきたガン・リベルラ達は同時に切り裂かれ、灰化、針に糸を通すような正確さでことごとく魔石を破壊された。

アイズはそのまま前進していく。

舞い散る灰の霧をくぐり抜け、残る最後のモンスターへと肉薄する。

『アアアアアアアアアアアアッ!』

待ち構える大型級モンスター、『バグベアー』は雄叫びを上げ、その毛むくじやらかな巨腕をアイズ目がけ振り下ろす。

眼前に迫る大爪をアイズはあえて避けず、剣で迎撃した。敵の攻撃を置き去りにする速度でレイピアを閃かし、銀の斜線を走らせると、バグベアーの腕は切り飛ばされていた。

片腕を失って硬直する熊にも似たモンスターに、アイズはすかさず剣閃を見舞う。

『』

胸部中央に深々と突き刺さり、背を抜ける長剣のレイピア。

断末魔も発せぬままバグベアーは色素を失っていき、やがて大量の灰となって崩れ落ちた。

アイズは無言でヒュンと剣を鳴らし、切っ先を地面へと向ける。そして顔を自分の少し先、三日月が戦っている方へと向けると――

「ふっ!」

ソードメイスが勢いよく振り下ろされる。”ゴシヤツ!”という鈍い音と共にアイズが先ほど倒した同じバグベアーの頭が、血飛沫を撒き散らして肉塊となって潰れた。その巨体が倒れる前に三日月は体

の向きを変えて、三日月の周りに飛び回っていたガン・リベルラを次々と腕の銃砲で撃ち落としていく。

「ん？」

『ゴアアアアアアアアアアア!!』

咆哮が聞こえた方へ頭を向ける三日月の目の前で、バグベアーがその腕を振り下ろす。

振り下ろされたその巨腕を三日月は“片腕で掴み取った”。

『グオツ!?!』

腕を掴まれたバグベアーは困惑と焦りを感じさせるように、腕に力を加える。だが、動かない。

「コイツで終わり」

三日月はそう呟いて指先を揃えると、貫手でバグベアーの巨体を貫いた。

魔石ごと貫かれたバグベアーの巨体が灰に変わっていく。中階層とはいえ、あれだけの数を息も荒くせず全て一人で倒しきった。

(・・・もつと・・・強くならなくちゃ)

アイズは胸の中でそう呟く。

三日月に追いつくにはもつと強くないといけない。そう考え込んでいると三日月が此方へと向かってくる。

周囲にはいくつもの灰の塊だけが残った。

場所は20階層。

樹木の内部を思わせる木肌は広大な迷路の形状を作り、天井や壁に広がっている緑の苔が不規則に発光している。秘境の森に迷い込んだような錯覚をもたらす大樹状の迷宮に、アイズと三日月はいた。

最初はハツシュもついて来ようとしていたのでだが、ガレスに捕まり、トレーニングに付き合わされている。

遠征の祝宴から数えてはや四日目。テイオナ達にも元気づけてもらったアイズは、それまで何もせずにごまかしてしまった時間を取り戻すようにモンスターとの戦闘に明け暮れている。

趣味は迷宮探索、と言えるほど、アイズはプライベートな時間を利用してよくダンジョンへと赴く。



こうして中層域にもぐるのも慣れたものだった。

今はもう探索自体は切り上げており、帰路の途中だ。

「ん、終わったよ」

三日月が私にそう言って顔を見てくる。

「じゃあ、拾おっか」

「分かった」

三日月は私の言葉に短く答えて地面に落ちている魔石を拾い集める。

私も手にしたレイピアの輝く刃を鞘に収め、ひとまず発生したドロップアイテムを回収し始めた。

一日かけてダンジョンに潜り続けているせいか、腰に取り付けているポーチは既に魔石で溢れかけていた。筒型のバックパックもあまり余裕がない。もう大分前からモンスターを倒す際には、魔石を直接狙う戦法に転換している程だ。

回収しきれない魔石とドロップアイテムを無闇に道端へ放置していくのはあまり誉められた行為ではない。

他の冒険者に勞せず甘い蜜をすすらせてしまうのはもとより、時には彼等に——美味しい話には裏があるとばかりに——警戒させてしまうこともありうる。

アイズは地面にあらかじめ置いておいたバックパックの中に、何とか『バグベアーの爪』を詰め込んだ。

このような時ほどサポーターのありがたみが身に沁みる。慣れっこといえば慣れっこだが、バックパックを左肩一方に背負いながらアイズは思った。

「……………」

「……………」

話題が何も出てこない。

20階層は自分の足音と三日月の足音くらいしか聞こえないほど静かだった。

中層にもなると、モンスターはともかく、上層で度々見かける同業者も少ない。時々モンスターの遠吠えが響くだけで、剣戟の音が聞こ

えてくることはなかった。

ぼうっと灯る苔の燐光に横顔を照らされながら、アイズと三日月は通路を進み続ける。

と——、三日月が足を止めた。

「……？三日月？」

私は急に立ち止まった三日月に疑問を浮かべながら、顔を見る。その青色の瞳は私の顔を写しながらも、さらに前を見ていた。

「……来る」

「えっ？」

三日月の言葉に私は前へと顔を向ける。

アイズと三日月の視線の先、冒険者の一団が横穴から出てきた。

巨大なカーゴを引きずっている彼等は充実した防具に隙のない身のこなしを纏っており、相当な実力者達であることが窺えた。

〔ガネーシャ・ファミリア〕……〕

武装に刻まれている象の顔のエンブレムを見て、アイズと三日月は冒険者達の正体を観察する。

伴って、あの黒鉄のカーゴの中身も悟った。

彼等は明日に迫った怪物祭のため、モンスターの捕獲に来ているのだ。

年に一度のファミリア祭は闘技場で開かれる。迷宮から連れてきた凶暴なモンスターを「ガネーシャ・ファミリア」のティマーが相手取り、倒すのではなく、手懐けるまでの一連の流れ——ティムを観客たちに披露するのだ。

ギルドが企画するこの催しを疑問視する者は少なくない。都市の平和を謳っておきながら、危険因子であるモンスターを自分達から地上に放つとは本末転倒ではないかという者もいれば、市民に媚を売るための見え透いた政策だと鼻で笑う者もいる。

アイズは、怪物祭に関しては何とも言えない。

モンスターをダンジョンの外に運び出すのは確かに危険だと思うものの、催し自体の狙いは市民と冒険者のための緩衝材だろう。

何かと問題を起こし、荒くれた無法者と思われがちな冒険者のイ

メージを、盛大な祭り——血を流さないクリーンな調教を通して都市民から払拭する。迷宮から効率的に利益を回収するためにも、ギルドは冒険者達を庇わなければならぬ立場にいるのだ。

「ガネーシャ・ファミリア」も主神の意向なのか、純粹に群衆を喜ばせたいがためにギルドへ協力している節がある。この催しを見るために、都市外から足を運ぶ者までいるのもまた事実だった。

各々の思惑はあるだろうが、一概に悪いと断ずるのは、それはそれで難しいと、冒険者の一人であるアイズは思っている。

「どうする？」

三日月が私にそう聞いてくる。

その問いに私はすぐに返答した。

「・・・別ルートで行こう」

「分かった」

がたがたと揺れるカーゴを眺めた後、アイズと三日月は進路を変える。

「ガネーシャ・ファミリア」の邪魔にならないよう、別ルートで上階へ向かった。



地上へ帰還し、ホームへ帰り着く頃には、すっかり夜になっていた。

「ごめんね・・・付き合ってもらって」

「いいよ別に。俺はこの後、ハッシュとトレーニングするけど、アイズはどうすんの？」

「えっと・・・一回部屋に戻る・・・かな」

私は三日月にそう言っただけで廊下を進んでいく。

そして廊下の先から誰かが歩いてくる音が聞こえる。

そして前に現れたのは——。

「お疲れ様です。三日月さん！」

ハッシュだった。

「ん」

三日月も短くハツシユに返答する。

「三日月さん、水持って来てからトレーニングに向かうんで、先行つといてください」

「分かった。じゃあ先に行ってる」

ハツシユは三日月にそう言つて走つて食堂へと向かつていった。

三日月とハツシユのやり取りに私はポツリと眩く。

「仲……結構良いんだ」

「まあ、うん」

三日月は曖昧にそう返答して歩き始める。

私も、その後ろをついていくように後を追いかけた。

三日月の身長は私よりも小さい。けれど、その背中はとても大きく感じられた。

ハツシユも私と同じように三日月の背中を追いかけているのだろう。その気持ちは何となくだけど分かる。

でも。――

三日月。貴方は一体何を目標にしているの？

私は三日月の強さ。その理由が知りたかったけれど、私は聞けなかった。

## 第十九話

三日月と一緒にダンジョンに行った翌日。

あの後、リヴェリアとロキにダンジョンに行っていたことがバレて今日、ロキとフィリア祭に行く事になった。

「えーっ、アイズ、ロキとフィリア祭行くの〜?」

部屋を訪ねにきたティオナは、怪物祭への誘いを断るや否やそう言った。

「ごめん、ティオナ……」

「うーん、でもしょうがないか。さっさと声かけておかなかった、あたしのせいだし。あーあ、ロキに先、越されちゃったなー」

窓の外は祭り日和とばかりに晴れ渡っていた。

鳥の囀ずりが穏やかに響き渡り、清々しい一日の始まりを告げている。

扉の前で悔しがるティオナは、すぐに一転して笑いかけてきた。

「じゃあ、あたしは三日月誘ってティオネ達とすぐに東のメインストリートに行くけどさ、あっちで合流できたら、一緒に祭り見ようね!」  
「うん」

ティオナの言葉に私は軽く笑い返す。その後、ティオナと大食堂へ向かった。

依然酔いが抜けきらないのか、前日と同じようにロキは朝食の席に姿を見せず、三日月とティオナ達が一足早くホームを発つ。

部屋に一度戻ったアイズは着替えを済ませた。

「……」

丈の短い上衣にミニスカート。ティオナからもらった服だ。

鏡の前に立つ自分の格好はやはり気恥ずかしさが先に立ったが、せつかくもらったプレゼントだ。このような日に着ない手はないだろう。……三日月に見られなかったのが唯一の救いだ。

念のため剣帯を服の上から巻き、護身用にレイピアを差す。一気に物々しさが増してしまったが、仕方ない。デートなどとは言いが、一緒に行動する以上、ロキの護衛も兼ねるべきだ。

ブーツを履き、アイズはエントランスホールへと足を運び、ロキが来るのを待った。

「おはようー、アイズ。ごめんなー、遅くなって」

「大丈夫です」

ふらふらと現れたロキに、アイズは座っていた椅子から立ち上がる。

どこか気だるげそうではあるが、昨日より顔色は良くなっているように見えた。

「ん？おお、その服・・・イイな!?めっちゃ可愛い！まさにアイズさんのこんな格好を拝めるとは！」

「・・・ありがとうございます」

「まさかうちのためにオメカシしてくれたん!?うつひよー、萌え萌えやー！似合ってるでー！抱き着きー！」

条件反射で反応してしまったアイズは、飛び付いてきたロキに高速で張り手を見舞い、横手の壁へ叩きつけた。顔面が壁面にめり込み、すぐにドサツと落下する。

顔を両手で覆いごろごろとのたうち回っていたロキだったが、やがて何事もなかったように立ち上がった。

「うん、アイズさんのスカートの中身確認できたし、よしとしよう」

「・・・見たんですか?」

「えっ、あ、見てへん見てへん。転がったついでに確認したなんて言えへん」

「・・・」

ロキの隠せていない言葉を聞いたアイズは再び手を上げて――

「スパアン！」

強烈な張り手をロキへと送った。

一悶着が起きた後、しばらくして。

ぼろぼろのロキに引き連れられ、アイズは怪物祭へと出発した。

「アイズ、すまん。ちよつと行くところあるんやけど、寄ってもええ？」

「はい・・・朝ごはん、ですか？」

「ん、それもあるんやけどな」

北のメインストリートを南下し、バベルが建つ中央広場に出た後、東のメインストリートへ進む。

東のメインストリートは既に多くの人で込み合っていた。この日のために立ち並んだ多くの出店は活況を呈しており、雑踏の流れを至るところで止めている。

ヒューマン、エルフ、ドワーフ、獣人、小人族、アマゾネス。老若男女関係なく他種族の人間が入り交じる光景は圧巻であると同時に壮観だ。

完全に浮き足立つ群衆は大通りを埋めつくし、都市東端にある円形闘技場にまでその列を伸ばしていた。

「ハハ、ハハ」

祭りの開催を前にして否応にも興奮が高まっている中、ロキとアイズは人の群れを縫って、大通り沿いに建つある喫茶店の前が出る。

ドアをくぐり鐘の音を鳴らすと、すぐに店員が対応してきた。ロキが一言二言交わすと二階に通される。

アイズがその場に足を踏み入れた瞬間に感じたのは、時間が止まったような静けさだった。

客の誰もが心をどこかに置き忘れ、口を半ば開きっぱなしにし、全ての視線を一ヶ所に集めている。

彼等が見入っているのは、窓辺の席で静かにその身を置いている、紺色のローブを纏った一人の神物だった。

「よおー、待たせたか？」

「いえ、少し前に来たばかり」

彼女のもとへ真っ直ぐ足を運んだロキは、気さくに声をかける。

相手もまた深く被るフードの下で微笑を浮かべた。

「なあ、うちまだ朝飯食ってないんや。ここで頼んでもええ？」

「お好きなように」

どうやらロキは彼女に会うため、あらかじめ連絡をしていたらし

い。

椅子を引いて正面に座るロキと会話を続ける女神には昔馴染みと呼べるほどの雰囲気がある。

天界での古い付き合いを感じさせるやり取りだった。

邪魔にならないよう護衛の位置に控えるアイズは、フードの奥から覗くその銀の髪を見て、初めて会った女神の正体を察する。

「ところで、いつになったらその子を紹介してくれるのかしら？」

「なんや、紹介がいるんか」

「一応、彼女と私は初対面よ」

女神の瞳もアイズの顔に向けられる。髪の色と同じ銀の双眼に、アイズは一瞬引き込まれるかのような錯覚を感じた。

「ロキ・ファミリア」と同等の戦力を保有し、一部の者からは都市最強派閥とも囁かれている「ファミリア」の主神。

同時にその美しさと蠱惑さから『魔女』の異名を持つ、美の化身。女神、フレイヤ。

「んじゃ、うちのアイズや。これで十分やろ？アイズ、こんなやつでも神やから、挨拶だけはしときい」

「・・・初めまして」

アイズは生まれてこの方、リヴェリアより美しい女性を目にしたことはなかったが、眼前の女神の美しさは完璧に王族である彼女のそれを越えていた。

絶世独立の美貌。いつそ寒気すら覚えるその艶麗さは下界の者を、同格の神々さえも惑わせる力を持っている。

ローブで身を隠しているにもかかわらず、周囲の客の時を奪い魅了しているのがいい証拠だ。

衰えぬ容色を持つ神々の中でも殊更抜きん出た美しさを誇る、『美の神』にふさわしかった。

「可愛いわね。それに・・・ええ、ロキがこの子に惚れ込む理由、よくわかった」

ロキに許可をもらい隣に腰を下ろすアイズに、フレイヤは笑みを浮かべ見つめてくる。



噂はかねがね聞いていたが、こうして相対すると、彼女の美にまつわる話が決して誇張ではない事を思い知らされる。その顔立ちもローブの上からでもわかる抜群のプロポーションも、同性である自分でさえ誘惑しかねない、魔性と言うべき色香がある。

アイズの金の瞳とフレイヤの銀の瞳が視線を交わし合う。

”ゾクツ”

久しぶりに感じた畏怖を胸に抱きながら、アイズは乏しい表情のまま頭を下げた。

くすり、と笑みを漏らす気配が伝わってくる。

「どうしてここに【劍姫】を連れてきたのか聞いても？」

「ぬふふっ……！そらお前、せっかくのフィリア祭や、この後しっかりきつちりアイズたんとラブラブデートを堪能するんじゃない？」

アイズとフレイヤの邂逅を他所に、ロキは相変わらずの調子だった。

おもむろに、手を伸ばす。

「……ま、それに、『遠征』も終わってやつと帰ってきたと思つて放つておくと、まーたすぐダンジョンにもぐろうとするからなあ、このお姫様は」

「……」

「誰かが気を抜いてやらんと一生休みもせん」

何も言い返せない。

不意打ち気味に告げられた、自分を気遣うその言葉にアイズは視線を下げる。ぽんぽんと、頭を優しく叩いてくるその手を素直に受け入れた。

フードの中で、フレイヤもまた可笑しそうに微笑む。

そして、それから間もなく、二柱の女神達はここに集まった本題とばかりに雰囲気を変えた。

この場に自分を呼び出した理由をフレイヤが尋ねると、ロキは口を吊り上げ、単刀直入に用件を切り出す。

どうやらロキは近頃妙な動きを見せるフレイヤを警戒していたらしく、先日顔を見せた『神の宴』にも尋問を及ぼせた。あれほど興味

がないと言っていた筈なのに、何故今頃になって参加したのかと。

「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」。

迷宮都市の双頭と比喩されるほど実力が拮抗している両派閥の間には、勢力争いが絶えない。

隙あらば蹴落とす関係にある二つの「ファミリア」は、伯仲たりうる存在であるからこそお互いを無視できず、一方が動けばもう一方も動かざるをえなくなる。ロキはフレイヤの思惑を知る一方で、面倒を起こすなど、そう釘を刺すのが目的だったらしい。

いつの間にか周囲の客は姿を消していた。睨み付け微笑み返す女神達からは放たれる物騒な神威に気圧され、みな出ていったようだ。ただ一人彼女達の側に座るアイズは、表情を崩さず静かに二つの横顔を見守る。

窓の外で、何も知らない人々の喧騒が響いていた。

「・・・男か」

何かを悟ったように、ロキが一言を発する。

変わらず微笑だけを返してくる美の女神に、緊張を解いたロキは思い切り溜め息を出した。

「はあ・・・つまりどこぞの「ファミリア」の子供を気に入ったちゅう、そういうわけか」

「なんや、アホくさと、と一人で見当をつけてしまったロキに、アイズは一瞬置いてけぼりを食らう。」

少ない情報で考えをまとめると、どうやらフレイヤは、他派閥のある団員を見初めてしまったらしい。『神の宴』に出たことも含め盛んに行動していたのは、その下界の者の情報を集めるためだった、ということだろうか。

「今までのやり取りで何とか推測したアイズがちらと窺うと、フレイヤは正解とも不正解とも言わず、フードの奥でただただ面白そうに笑っていた。」

「ったく、この色ボケ女神が。年がら年中盛りおって、誰だろうがお構いなしか」

「あら、心外ね。分別くらいあるわ」

「抜かせ、アホどももタブラかしとるくせに」

「彼等と繋がっておけば色々便利だもの。何かと融通が利くわ」

そこで二人の会話が一旦途切れ、しばらく間が空いた後。

ロキが笑みを作った。

「で?」

「.....?」

「どんなヤツや、今度自分の目に止まった子供ってのは?いつ見つけた?」

「.....」

「そっちのせいでうちは余計な気を使わされたんや、聞く権利くらいあるやろ」

ロキのややもすると強引な言い分に、フレイヤは窓に顔を向ける。

ローブの中で、美しい銀の髪の一房が首からこぼれる。

「.....一人は、強くはないわ。貴方や私の「ファミリア」の子と比べても、今はまだとても頼りない。少しのことで傷付いてしまい、簡単に泣いてしまう.....そんな子」

「でも、綺麗だった。透き通っていた。あの子は私が今まで見たことのない色をしていたわ」

「だから目を奪われたの。見惚れてしまった」

幼い子供を慈しむようなその声音は、次第に熱を孕んでいつているように私は感じた。

言葉を立て続けに口にした彼女は、窓の外の光景を見下ろしながらまた呟く。

「見つけたのは本当に偶然。たまたま視界に入っただけ.....」

フレイヤはそう言って顔の位置を戻す。

「もう一人は.....ただ、すれ違っただけ。誰よりも強く、決して意思を曲げない子」

フレイヤはフード越しに私の顔を見る。銀の瞳が私を見透かされるように見えた。

それと同時にすぐに理解出来た。彼女が言う”二人目”が三日月だということも。

「でも、あの子は絶対に止まらない。私の言葉でも決してね。だって、あの子の行く先には」

フレイヤの最後の言葉に、私は――。

「きつともう、何もないと私は思うわ」

自分では何もしてあげられない。

私はそう考えてしまった。

## 第二十話

ピチャツ、と水滴が落ち、小さく弾ける。

天井から滴り落ちたか細い音は空気を震わし、辺りへ静かに響き渡っていく。

”それは” ゆっくりと目を覚ました。

緩慢な動きで全身を震わせ、狭い檻の中で身じろぎをする。

どこか重苦しい静けさに包まれた空間。

四方には闇が続いており薄暗い。皮膚の上をなぞるのはひやりとした冷気だった。

迷い込んだのか、どこからともなく一匹の鼠がかすかな鳴き声とともに現れ、しかしそれを仰いだ瞬間、一目散に逃げ出していく。

それはすぐに活動を始めようとはしなかった。

覚醒した直後で意思に空白が生まれているように、あるいは状況の認識のため周囲を窺うように、沈黙を連ねる。薄闇の静寂にそれはしばし身を委ねていた。

ふと、それは気づいた。

その身を閉じ込めていた黒檻が解放されていることに。更にもう一つ。

己の同胞がすぐ近く、同じように暗がりの奥で息をひそめていることも知覚する。

それは開け放たれた扉からゆっくりと抜け出す。

ずるずると床を這いずる音を撒き散らしながら、狭苦しかった檻を後にする。それに呼応するように、周囲からも檻を抜け出す気配が続いた。

外へ。

外に出ようと。

それは闇の中を蠢く。

知性は介在しない与えられた本能が熱を灯し、自分の存在意義を思い出す。

移動していく。

この暗闇から抜け出し、音が聞こえる方向へと。  
多くの生物の気配がする、自身の直上へと。

地上へ――



「あー、いかん、もう始まつとる！」

闘技場から響いてくる歓声に、ロキは慌てたように叫んだ。

「この道で、大丈夫なんですか？」

「おう、ばつちしや！大通り経由するより断然近道やで！」

つい時間を忘れ、屋台めぐりや三日月の事で考え過ぎて、のめり込み過ぎたのが失敗だった。

肝心な怪物祭の開演時間を大きく逃してしまったアイズ達は、今は駆け足で先を急ぐ羽目になっている。

ロキの土地勘頼りに進む路地裏は細く狭く、人気が全くない。周囲を建物に囲まれ日が届かない裏道には、今は発光せず眠っている魔石灯が壁のあちこちに設けられていた。

視界の奥で徐々に頭を覗かせる闘技場施設を、アイズとロキは目指していく。

「.....?」

途中、アイズは怪訝そうな顔をした。

耳が一瞬捉えた獣の遠吠えらしき響き。

闘技場で調教師と戦うモンスターの雄叫びが風に乗ってきたのか、と納得しようとするとも、腑に落ちない表情を浮かべてしまう。

そうこう違和感を覚えている内に、アイズ達は細い道を抜け、闘技場がそびえ立つ広場に辿り着いた。

「あかん、走り疲れた．．．うん？なんや、この空気」

ロキが息を切らす中、闘技場周辺の雰囲気は張り詰めていた。

祭りの環境整備のため配置されているギルド職員の動きは不安をかき立てるほどに騒がしく、慌ただしい。今も歓声が絶えず打ち上がっている闘技場とは真逆に動揺と混乱が伝播していた。

そして何より【ガネーシャ・ファミリア】の団員達が武器を携え広場から散っていく光景は、もはや異変が起きたと判断するに十分過ぎる材料だった。

アイズはロキを見て頷きをもらうと、闘技場の南側、正門付近に足を運んだ。輪になっている少人数のギルド職員達を見つけ、アイズは彼等に情報を聞き出した。

「……すみません。何かあったんですか？」

弾かれるように振り返ったギルド職員達は、こちらを見るなり目を見開いた。

「ア、アイズ・ヴァレンシユタイン……」

彼等は呆然とした後、飛び付くように男性職員の一人がアイズに近寄り、早口で現在の状況を説明してくる。

聞くに、祭りの為に捕獲されていた一部のモンスターが闘技場地下の檻から脱走し、この東部周辺へ散らばったらしい。

恐らくは外部犯の仕業か、一部のギルド職員や檻を見張っていた【ガネーシャ・ファミリア】の団員達は、魂を抜き取られたかのように放心し、再起不能に陥らされたとの事だった。

「モンスターを鎮圧するには人手が足りません、どうかお力を……！」

その懇願を断る理由などありはしなかった。後ろを振り返り、己の主神に視線を飛ばす。

「ロキ」

「ん、聞いたとつた。もうデートどころじゃないみたいやし、ええよ、この際ガネーシャに借し作つところか」

にわかには沸き立つギルド職員達とロキが言葉を交わし、モンスターの数、種類、動かせる人員状況を私は確認する。

何故モンスターの脱走を許したのか考えるのは後回しだ。

都市の東部一帯を揺るがす事態に、私はレイピアの柄を掴み、そして引き抜いた。



大観衆の拍手と喝采が万雷のように鳴り響く。

闘技場内のアリーナでは、今まさに「ガネーシャ・ファミリア」の調教師がモンスターを手懐けたところだった。

都市東端に築き上げられた円形闘技場。周囲の建物より抜き出て高く広い巨大施設は蒼穹にも届こうかという興奮の渦に包み込まれている。

「やっぱリガネーシャのとき、すごいなー。調教を簡単に成功させちやつて。あんなの真似できないや」

ティオナはそう言つて、闘技場の舞台を見続けている。

そんなティオナにレフイーヤも自身の感想を言った。

「そうですね。ただえささえ成功率は低いのに、こんな大舞台で……」  
「華もあるわよね、一々。ただ、調教するんじゃないかと、観客を魅せる動きをしてる。お金も取れるわ、これなら」

怪物祭の観戦に来ている三人は口々に感想を言う。朝早くから入場していた彼女達は他派閥の精鋭による数々の妙技に、素直に舌を巻いていた。

そんな彼女達の隣で、三日月とハツシユはじつと見ていた。と、ハツシユが三日月に言う。

「凄いつすね、冒険者つてのは。あんなことも出来るようになるんすね」

ハツシユの言葉に三日月も言った。

「そういうのが得意つてことだろ」

三日月はそう言つてポケットからデーツを取り出し、口にする。

華美な衣装を纏う調教師の麗人は一頻り拍手に応えると、すっかり大人しくなった虎のモンスターを連れて退場していく。入れ替わるように東西のゲートから現れたのは、屈強な男性の調教師と、尾を合わせれば体長七Mにも及ぼうかという大型の竜だ。

観客の間にどよめきが走る中、凶悪な牙を覗かせるモンスターが唸り声を上げる。

「デカいな」



「あんなのもいるんすね！」

三日月とハツシユ二人はそう反応するのに対してティオナ達もそれぞれの感想を言う。

「あんな大きいのもダンジョンから引つ張ってきたの？」

「そんなわけないでしょ、都市外から連れてきたのよ。竜種のモンスターなら、ダンジョンの産まれじゃなくても力はそこまで見劣りしないだろうし」

フィールドを取り囲む観客席、その中段付近にティオナ達はいる。

戦いの火蓋が切つて落とされ瞬く間に巻き起こる歓声の天津波。うひゃー、と首を縮めて片目を瞑るティオナの隣で、耳を押さえたレフィーヤは声を張る。

「でもっ、ちよつとおかしくないですか？あのモンスター、きつとトリだと思うんですけどっ」

周囲の声援にかき消されないよう声を出すレフィーヤの疑問に、言われてみればとティオナは格闘する調教師とモンスターを眺める。

あの大きさと迫力なら今日一番の目玉であることは間違いないだろう。他のモンスターの出番を奪うような真似をしてまで、この時期に駆り出される理由はないように思える。

それとも、あるいは、演目の順番がずれ込まなければいけない何か——  
——順番が控えていたモンスターを出せなくなった何か——が起こったのか。

「それに……さつきから【ガネーシャ・ファミリア】の連中が慌ただしいわね」

「あ、やっぱりそう思う？」

フィールドから顔を上げるティオネとティオナの視線の先、主神であるガネーシャがいるのであろう闘技場最上部の席に、代わる代わる足を運ぶ団員達の姿がある。

更に彼等は観客席へ下りては手当たり次第に神や冒険者へ耳打ちを行っており、何かを要請しているようにも見えた。

どこか余裕のない彼等の動きに、ティオナ達は何かしらの事態が起きている事に薄々と感付き始めた。

「どうしますか？」

「・・・少し、様子を見てきましようか」

レフィーヤの問いにティオネは答え、観客席から立ち上がる。

「三日月、ハツシユ、ちよつと気になる事があるから此処で待って・・・つてあれ？」

ティオナはそう言いながら三日月とハツシユがいる席へ顔を向けると、そこに二人の姿は見えなかった。

## 第二十一話

かの■は突如街中に現れた。

誰もいない街の一角で灰の海が広がっている。そしてその中心に立つ■が一体、佇んでいた。

青と黒を基調とした装甲に腰には大型の剣帯が二つ装着されており、背中と両足に奇妙な噴出口が見えている。

『』  
紫色のその両目が光輝く。

『・・・ウ?』

檻から逃げ出したモンスターの一匹がその■に気付くが、もう遅い。

その■は剣の柄を取り出し、剣帯へと突き刺すとその剣帯がスライドし、鈍く光る刀身が現れる。

『』  
その■は凄まじい勢いと共にそのモンスターの真正面へ現れると――。

”グチュリ”

嫌な音を立てて、そのモンスターを貫いた。

『ヴォオア!』

モンスターが痛々しい悲鳴を上げる。

だが、そのモンスターはその■を逃がさないように、刃のない刀身を掴み拘束する。

――が、

――ガコン――

金属が外れるような音と共にその刀身が、”根元から外れた”。

――そして。

”ボゴオオオン!”

その刀身が爆発した。

跡形もなくそのモンスターが四散する。

魔石も、灰も跡形もなく残らず、そこに残ったのは焦げあとのみ

だった。

「なんだ!?!さっきの音は!?!」

「こつちから聞こえたぞ!!」

冒険者の声が遠くから聞こえてくる。

その■■■は背中と脚のブースターを吹かせ、その場から消えた。

かの■■■いや、意識のない彼の目的はただ一つ。

忌まわしき子供、三日月への復讐だけだった。



「ガネーシヤのどこの子達はなにやってるん、ミイシヤちゃん?」

「え、えつとお、市民の安全を最優先に動いてます。私達と連携してら東地区から避難を」

「ふむ……こんな状況でまともな情報なんて期待できんし、モンスターの方はやつぱりアイズに任すか」

どこか舌足らずのギルド職員の話聞き、ロキは周囲を見回す。

闘技場を囲む広場はようやく統率の取れ出した動きを見せていた。

黒のスーツを着たギルド職員が各々の役割に奔走し、武装した「ガネーシヤ・ファミア」の団員と頻りに検討し合っている。他にもごく僅かながら協力に応じた冒険者の姿もあり、指示を仰いだ側から広場から走り去っていった。

街の遥か彼方からは、今もモンスターの遠吠えが響いてくる。

「ロキ!」

「おつ?」

自分のもとに駆け寄ってくるティオナ達に、ロキはよく来たと手を上げる。

既にただならぬ状況を周りの様子から察している彼女達は、詳しい説明を求めてきた。

「簡単に言うと、モンスターが逃げおった。ここらへん一帯をさまよつとるらしい」

「え、不味いじゃん、それ!?!」

「ん、不味いなあ」

驚くティオナに対してロキは平然とした態度を崩さず。

なに暢気に言ってるの、と詰め寄られる中、彼女は苦笑しながら指示を出す。

「ティオナ達は、アイズがモンスターを討ち漏らしたら叩いてくれへんか？ そうやな、うちももう移動するから、見晴らしのいいところでも陣取つといて」

「あ、ロキ！ ちよつと待って！」

「ん、なんや？」

ロキがそう言つて去ろうとするが、ティオナはそれを呼び止めた。

「三日月とハツシュがどっかに行っちゃったんだけど、ロキは知らない？」

「三日月？ 三日月ならついさつきモンスターのところに行ったで？ ハツシュもな」

ロキの言葉に三人は啞然とする。

三日月達の行動の早さに脱帽するしかない。

すると今度はレフィーヤがロキに言った。

「じゃあ、アイズさんはもう、モンスターのもとに向かったんですか？」

「いや、まだ行つとらん」

「はあ？ じゃあどこにいるのよ？」

レフィーヤとティオナの疑問に、ロキは指一本で答えた。

遙か頭上高い闘技場の一角を指を示す。

「あそこ」

◆◆◆◆◆

風の音が響いている。

美しい金の長髪をあおられながら、アイズは闘技場の上から街の光景を俯瞰していた。

本来立ち入る事のできない闘技場の外周部。もはやまともな足場

でさえない天頂部分の縁はこの付近一帯の中で最も高度が高い。この場からは、東のメインストリートから入り乱れる街路の隅々まで一望することができた。

街に散らばったモンスターを追って闇雲に走り回っても非効率、時間の浪費は避けられない。

——高所から敵の位置を掌握してから、早急に狙い撃つ。

アイズが耳打ちされた、ロキの一計だ。

「……見つけた」

肉眼で捉えることは勿論、地上にはダンジョンにはない風の流れがある。魔法の一部を乗せ咆哮の振動が敏感に感知するアイズは、瞬間にモンスターの位置を割り出していく。

近辺で確認できたモンスターは計七匹。現時点で脱走したと情報のある九匹の内、あと二匹が見当たらない。

時間もかけられないので搜索を諦めたアイズは、腰から抜いていたレイピアに風を纏い直す。

「目覚めよ」

縁の端に足をかけ、背中から打ち寄せる観衆の大音声に押されるように、体を前に倒した。

人工の断崖から身を躍らせる、一時の浮遊感。

傾いていく視界の中で、最も距離の近いモンスターをその金の瞳で射抜く。

全力で仕留める。

「リル・ラフアーガ」

蹴りつけられる壁。

自身を弾丸のように発射し、アイズは長距離からの突撃を敢行した。

「!?」

「なんだっ!?!」

貫く。

街路の中心を行進していた『トロール』を背後から砲撃しながら粉砕する。

巨人のモンスターを相手に取ろうとしていた冒険者達は一斉に驚愕し、そのあまりの轟音に逃げ遅れていた市民達も肩をはね上げる。

(二つ！)

大量の灰が爆散する中、凄まじい勢いで石畳を抉り削っていくアイズはすぐさま反転する。突風とともに十字路を疾走し——道の先に見えたモンスターを、次には斬殺する。

『——ガッツ!?!』

(二つ！)

止まらない。

三階建ての屋根へ跳躍し、いくつもの建物を一足飛びに駆け抜け、目標を視界に入れると同時に地面へと降下する。石畳を走る影に反応し降り仰いでくるモンスターめがけ、一撃で仕留める。

(三つ！)

金の疾風と化したアイズは剣を掲げ、街中を駆け巡っていった。

◆◆◆◆◆

その頃、三日月は裏路地に逃げたモンスターをソードメイスで仕留める。

「まず、一匹」

三日月は仕留め終わったモンスターを目にする事なく周りを見る。さつきからバルバトスが何かに反応するかのように自分に伝えてくる。

「何か、嫌な感じだな」

三日月は薄々なにかを察知してはいるが、それが何か分からない。おそらくバルバトスもこれと関係があるのだろう。

「まあ、考えても仕方ないか」

そう言ってスラスターを吹かせようとした瞬間。

「!!」

空から黒い影が落ちてきた。

三日月はその影を避けて距離を取る。

「・・・なんだ？」

砂煙の中に何かいる。

三日月は警戒しながら砂煙が晴れるのを待つと、だんだん晴れてきた。

そして青色の装甲が特徴的なそれを見て――。

「コイツ・・・あの時の」

三日月は見覚えのある。そしてコイツの動きも。

『!!』

機械じみた咆哮と共に二体の悪魔が交差した。



## 第二十二話

「職員の指示に従って避難してください！この近辺にはモンスターはいないので、どうか冷静に！」

「娘がっ、娘がいらないんです!?この騒ぎではぐれてしまつて……!」「落ちついてください。ご息女の特徴を教えてもらえますか?」

混乱を来たす市民をギルド職員達が必死に誘導している。絡み合う怒号と悲鳴を受け止め、他の冒険者の手を借りながら、彼等は避難活動に努めていた。

ハーフェルフの女性職員と獣人の母親が会話をする様子を見下ろしていたロキは、再び上がったモンスターの断末魔に顔を上げる。

「ティオナ達には悪いけど、アイズ一人で片が付きそうやな……」

闘技場から移動し高くそびえる鐘楼に上った彼女は、視界奥の光景を眺めながら呟いた。

視界の先では金髪の少女が広大な街の区画を絶え間なく動き回っている。

今もまた補足したモンスターを一匹切り伏せた。

「でも、問題は三日月やな。あれ、結構ヤバイやつやで」

ロキはそう呟き、少しだけ目を開ける。

三日月が相手をしている謎の敵。実力を見てから言えばあの青い奴が上。三日月は押されている。

「ちよつとマズイで……アイズが間に合うとええけど」

ロキはそう呟き、周りの様子を見る。

「にしても……うっさん臭いなあ、この騒ぎ」

ギルド職員や「ガネーシャ・ファミリア」の行動の賜物で周辺地域の住民は全て無事。眼下にいる彼等の声に聞き耳を立てれば、今のところ避難を終えた者達には掠り傷一つないらしい。

市民の安全に尽力した彼等を誉めるべきなのだろうが、ロキにしてみれば拍子抜けもいいところだ。

（死んだもんはおろか、怪我人もナシつてのは話が上手すぎやろう……。人類を襲わんモンスターがどこにおんねん）

「まあ、この先、何が起こるかかわからんけどな」

視線の先のモンスターがまたアイズに仕留められる。

こんな芸当ができる、あるいはしでかす輩は——とそこまで考えて脳裏に過ぎったのは、フードに隠れた蠱惑的な微笑みと、きらめきをこぼす銀の髪だった。

「——あん？」

唐突にロキは足元を見た。

ぐらり、と感じた震動。

よろめくには至らないものの、鐘楼を一瞬揺らめかした。身を乗り出し、街の周囲を見回す。

「地震、か……？」

◇◇◇◇◇

「うわー、本当に出番なさそー」

家屋の屋根伝いに移動していたティオナ達は足を止めた。

討ち漏らすどころかアイズは的確にモンスターを屠り、ティオナ達の援護を無用のものとしている。

ふわりと、ここまで伝わってくる風の余波に髪を撫でられた。

「餌を用意されておいて、そのままお預け食らった気分ね」

「あ、わかるかも」

「……お、お二人とも、武器もないのによくそんなこと言えますね」  
今日のティオナ達はもともと武器を携行していない。各自の得物である大型武器や杖は怪物祭観戦の邪魔になるだろうという判断からだ。防具は言わずもがなである。

手持ち無沙汰になりかけている中、体があればこと足りるとばかりのアマゾネス姉妹の会話に、レフィーヤは空笑いをする。

「……？」

「ティオナ？」

「どうかしたんですか？」

眉を訝しげに曲げ、過敏な野良猫のように周囲を見回し始めるティ

オナ。

表情を張り詰めさせる彼女は口を開いた。

「地面、揺れてない?」

「・・・本当、ね」

「地震・・・じゃないですよね」

地震というにはあまりにもお粗末な揺れは、テイオナ達に不穏なもの覚えさせる。

ダンジョンで培われた感覚が、どんな些末な出来事にも、いかなる前触れに対して彼女達を敏感にさせていた。

そして。

自然に身構えていた彼女達のもとに、何かが爆発したような轟音が届く。

「!?!」

引き寄せられるように視線を飛ばすと、通りの一角から、膨大な土煙が立ち込めていた。

『き——きやああああああああああつ?!』

次いで響き渡る女性の金切り声。

揺らめきを作り煙の奥からあらわになるのは、石畳を押し退けて地中から出現した、蛇に酷似する長大なモンスターだった。

ぞつつ、と首筋に走る嫌な寒気。

テイオナ達は顔色を変えた。

「テイオネツ、あいつ、やばい!!」

「行くわよ」

叫ぶと同時に走り出す。

一足遅れてレフィーヤも駆け出し、屋根の上を飛んで一直線に突き進んだ。悲鳴を上げ市民が一齐に逃げ惑う最中、テイオナ達は通りの真ん中へ、だんつ、と勢いよく着地を決める。

「こんなモンスター、ガネーシャのところはどっから引つ張ってきたのよ・・・」

「新種、これ・・・」

煙が完全に晴れ渡り、モンスターはうぞつと頭部をもたげる。

細長い胴体に滑らかな皮膚組織。頭部——体の先端部分には眼を始めとした器官は何も備わっておらず、若干膨らみを帯びたその形状はひまわりの種を彷彿させた。

全身の色は淡い黄緑色で、ティオナ達に嫌な既視感を覚えさせる。顔のない蛇、と形容するのが最も相応しいだろう。

「ティオナ、叩くわよ」

「わかった」

「レフィーヤは様子を見て詠唱を始めてちょうだい」

「は、はいっ」

目付きを鋭くするティオネの指示に、ティオナ達と、そしてモンスタ―も反応した。

地面から生える体を動かし、対峙する双子の姉妹に意識の矛を向ける。

次の瞬間、全身を鞭のようにして襲いかかった。

「！」

力任せの体当たりをティオナとティオネは回避する。

巻き上がる石畳に、ばらまかれる破碎音。石の塊が周囲の商店に当たり、穴だらけにしていく。幅十Mはある広い通りに再び煙が立ち込めていった。

”ぞるるるっ”と嫌な音を立ててその細い体をくねらせるモンスタ―に、ティオナとティオネは、すかさず死角から拳と蹴りを叩き込む。

「っ!？」

「かったあー!？」

皮膚を打撃した瞬間、彼女達は驚愕した。

渾身の一撃が阻まれる。

素手とはいえ、並のモンスタ―ならばそれだけで肉体を破碎できる第一級冒険者の強撃だ。にもかかわらず貫通も撃砕することもかなわなかった。凄まじい硬度を誇る滑らかな体皮は僅かばかり陥没しただけで、逆にティオナ達の手足にダメージを与えてきた。

皮の破けた右手を軽く振るい、ティオナは目を見開く。

』!!』

ティオナ達の攻撃に悶え苦しむ素振りを見せたモンスターは、怒りを表すようにより苛烈に攻め立ててきた。

氾濫した川の激流のような勢いで体を蛇行させ、押し潰すあるいは蹴散らそうとしてくる。

アマゾネスの姉妹は危うげなく往なした後、敵の到る場所に何度も拳撃を見舞う。

「打撃じゃあ拉致が明かない！」

「あく、武器用意しておけば良かったー!?」

舌打ちと叫び声を上げる間も蛇型のモンスターとの戦闘は続いた。

攻撃をもらえば一溜まりもない敵の攻撃をことごとく避ける。モンスターは暴れ狂うように全身を叩き付けるが、軽やかに周囲を跳び回るティオナ達には掠りもしなかった。

お互いの決め手を見出だせないまま、状況が停滞する中。

その外で、レフィーヤはティオナ達の稼ぐ時間を受け取り、詠唱を進めた。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり】」

魔法効果を高める杖はなく、片腕を突き出しながら呪文を編む。

速度に重きを置いた短文詠唱。出力は控えめな分、高速戦闘にも十分に対応できる。

更に目標はティオナ達の攻撃にかかりつきりで、レフィーヤを歯牙にもかけていない。これならば余裕をもって狙い撃てる。

山吹色の魔法円を展開しながらレフィーヤは速やかに魔法を構築した。

「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！」

そして最後の詠唱を終え、解放を前に魔力が集束した直後——ぐるんつ、と。

それまでの姿勢を覆し、モンスターがレフィーヤに振り向いた。

「——え」

その異常な反応速度に、レフィーヤの心臓は悪寒とともに打ち震える。

今の今までこちらに無関心だった筈のモンスターが、その顔のない頭部を差し向けた。

ティオナ達が既に退避を始めているのを視界に——『魔力』に反応した、と。

レフイーヤがそのように直感した、次の瞬間。

レフイーヤの目の前から腕ほどもある”触手”が飛び出し、無防備なレフイーヤを貫こうと触手が伸びた。

◇◇◇◇◇

「くっそ、まだ逃げ切れてねえ奴もいるじゃねえか！」

ハツシユはそう言って剣を腰に下げて街中を走り回る。

三日月に頼まれ、街中に逃げたモンスターを倒さないといけないのに、周りの市民達もまだ、避難仕切れていない。

この状況でモンスターと戦っても被害が大きくなるだけだ。

「まだ、モンスターも何処にいるかわかんねえつてのに！」

と、前で爆音が聞こえた。

「えっ?」

ハツシユは顔を爆音が聞こえた方へと顔を向けた。

「あそこか!!」

ハツシユはそう言って爆音が聞こえた方へと走る。

そしてその状況が見えた。

ティオナとティオネがモンスターを惹き付けようとしており、レフイーヤという奴が何かしようとしていた。

そして詠唱が終わったレフイーヤにモンスターが急に動き始める。

「!!」

あのまま放って置けば彼女がヤバイ。

それを感じたハツシユは走り出す。

そして彼女の前に飛び出した触手にハツシユは——

「くっそ……間に合ええええ!!」

手を伸ばした。

(俺は三日月さんに頼まれたんだ!!)

ハツシュ。アイツらが危なくなったら頼んでいい？

俺は決めたんだ。ビルスの代わりになるって。

——あの人に追い付くって——

◇◇◇◇◇

”ドン”

とレフィーヤは”誰かに突き飛ばされた”。

「えっ?」

レフィーヤが呆然と声をあげて自分の代わりに貫かれた”ハツシュ”を見る。

貫かれたハツシュはその口から血を吐き出す。

「なん・・・で?」

「ハツシュ!」

貫かれたハツシュにティオナ達が叫ぶ。

ハツシュの身体から触手が引き抜かれ、その身体が背中から地面に倒れ込む。

そんなハツシュを前に蛇型のモンスターにも変化が現れた。まるで空を仰ぐように体の先端部分をもたげたかと思うと、ピツ、ピツ、と幾筋もの線をその頭部に走らせ——”咲いた”。

破鐘の咆哮が轟き渡る。

開かれた何枚もの花卉の中央には牙が並んだ巨大な口が存在し、粘液を滴らせている。

「ハツシュ!しっかりして!ハツシュ!」

「あー、もうっ、邪魔あつ!」

駆けつけようとするティオナ達に触手の群れが襲いかかる。黄緑色の突起は拳で何度も打ち払うが、すぐに起き上がり、蠢く林を形成して彼女達の行く手をはばんだ。

ティオナの呼びかけも虚しく、モンスターは倒れ込むハツシュとレ

フイーヤの眼前に迫った。



## 第二十三話

三日月は頓着するこの戦闘に苛立ちを覚えていた。

あの、青いやつ。アイツが強いのは分かっている。

前もそうだった。やたらしつこかったギャラルホルンのあのパイロット。

アイツらのせいで仲間が死んだ。シノが死んだ。昭弘が死んだ。

そして・・・オルガが死んだ。

そんなことがないように、俺が戦っていたのに結局全員守れなかった。俺が最後に出来なかった。

後悔した所で仕方ないし、した所で変わらない。

これから先、俺が弱かったらそんなのが続く？

俺はオルガの命令を果たさなきゃいけない。オルガの目指した場所に皆で行かなくちゃいけない。

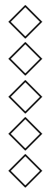
だから――。

「おい、バルバトス。」使つてやるからもつとよこせ」

三日月はバルバトスにそう言う。

そしてそれに答えるように――

バルバトスもまた、その言葉に――



何で、とレフイーヤは思った。

上空の太陽を遮る長大な体躯。黒い影が、何度も立ち上がろうと試みているハッシュの体を覆いつくす。嫌悪しか喚起しない食人花は生え渡る牙から粘液をボタボタと滴り落とし、ハッシュの横にたらしていく。

周囲の悲鳴が遠い。逃げ遅れた市民達は青ざめ、今まさにハッシュが喰われようとする光景を見て立ちすくんでいた。恐慌を来たしかける彼等の腕をギルド職員や冒険者達が取って急いで避難させてい

く。

ハツシユが顔を歪めて食人花を睨み付ける。

レフィーヤは今まさに食べられようとする彼に、嫌だ、と思った。腕よ足よ体よ動けと念じる。どこでもいいから動いて立ち上がれと、震えるのみで一向に起き上がれない全身へ鞭を打つ。しかし時は無情だった。レフィーヤの再起を待たず、醜い大口が彼に迫ってくる。

ああ、とレフィーヤは嘆いた。

目の前の光景がレフィーヤの瞳に写す。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

同じだ。また、同じ。

きつと。

きつとまた、自分は――。

『アアアアアアアアアアアアッ!?!』

視界に、金と、銀の光が走り抜ける。

敵の首を斬り飛ばした壮烈な剣の閃きと、美しい金の髪の毛の輝きが、彼女の瞳を焼いた。

きつとまた、自分は――彼女に助けられる。

◆◆◆◆◆

絶叫を轟かせ、断たれたモンスターの首は建物の一角に突っ込んだ。

全力で振り抜いたレイピアをきらめかせ、勢いよく石畳に着地したアイズは後方を振り返る。

ハツシユに食いつく既のところまで切断したモンスターの体は勢いよく仰け反り、ぐにやりと折れ曲がりながらその場に崩れ落ちた。

「アイズ！」

テイオナ達を襲っていた触手もまた力を失ったように地面に落下する。

間一髪だった、とこの場所に急行してきたアイズは思う。

他の脱走したモンスターを討った際、全く情報にないこの謎のモンスターを遠方から確認したアイズは——テイオナ達がそうであったように——突き動かされる形でこの戦場へと進路を取っていた。魔法を酷使し飛び込みざま斬撃を見舞ったことでハツシユは九死に一生を得たが、少しでも遅れていたら彼の命は危なかったかもしれない。

こちらに向かってくるテイオナ達を視界に入れつつ、ハツシユとレフィーヤの方を見やる。

未だに倒れている青年とエルフの少女の安全を案じたアイズは、すぐさま駆け寄ろうとしたが。

微細な地面の揺れが、その足を止めた。

「……！」

すぐにその揺れは大きな鳴動に変わった。

アイズが剣を構える中で、辺りの石畳が隆起する。

「ちよ、ちよっ」と

「まだ来るの!？」

テイオナ達の悲鳴を皮切りに、黄緑色の体が地面から突き出した。

アイズを取り囲むように、三匹。

閉じた蕾を一齐に開花させ、見下ろす格好でその巨大な口を彼女に向ける。

生暖かい呼気に頬を打たれながら、眦を鋭くするアイズがいぎ斬りかかるうと——前触れなく。

”ビキッ!”

という亀裂音の後に、レイピアが破碎した。

「」

「なっ——」

「ちよ——」

手の中にある得物が壊れる光景に、アイズだけでなくテイオネとテイオナも言葉を失った。

風の出力とアイズの激しい剣技に耐えかね、細身のレイピアがとうとう音を上げたのだ。

今の今まで景気良く向こう見ずに——いや愛剣のつもりで取り扱ってしまった。根元から折れた刀身は張り詰めていた弦が切れたようにそこからひび割れ、砕け散り、いかに限界を超えていたのかを物語る。散っていく銀光。

いけない、怒られる。

借りた代剣をあれもなく破壊したアイズは、まず先にそんな事を思ってしまった。

『!!』

食人花が蠢く。

三匹同時に襲いかかってきた相手に、アイズは跳躍して回避しようとしたその時。

空から——

黒い人影が二人、土煙を上げて墜ちてきた。

「

一瞬、思考が停止する。

その一瞬の内に——。

”グチャリ”

生々しい音をたてて、二匹の食人花が千切れとんだ。

「えっ?」

「な、何っ!?!」

「ちよつと!?!」

あの一瞬で起きた出来事にアイズとティオネ達は訳が分からず、そう呟いた。

何かが落ちてきたのは分かるが、その後何が起こったのかが分からない。

土煙が晴れてくる。そしてそこにいたのは

「三日月?」

”バルバトスらしき”鎧と、もう一人、青色をベースとした鎧を纏った謎の人物。その見た目はバルバトスにどこかに似ていた。

その二人が私達の事をはじめから居なかったように刃の無い剣と巨大過ぎるメイスで斬り結ぶ。

ガゴオオン!!

巨大なメイスと剣が衝突する。

火花が飛び散り、足元の石畳が二人を中心にひび割れた。ギリギリと金属が鳴り響く中、ヴィダールが距離を取り、片手で握られたハンドガンで三日月を正確に狙って撃つていくが、その攻撃に三日月は手に持った巨大メイスを盾にして防ぐと、それをヴィダールに向けて投擲した。

その攻撃を回避したヴィダールは足を変形させ、三日月目掛けて振り下ろす。

徒手空拳になった三日月はその攻撃に対して両手で受け止めた。

そして――。

”キュルルルル”

「えっ?」

アイズは”バルバトスに装備されていた”ソレ”を見て再びそう呟く。

背中から伸びた”ソレ”はまるで猟犬のようにヴィダールをしつこく追いかける。

何度も弾いていくが、それでも追いかけていき――

”ガコン!”

と金属が突き刺さる音とともにヴィダールは壁へと叩きつけられた。

建物に巨大な穴が空き、ガラガラと音をたてながら瓦礫が落ちていく。

そしてその瓦礫の中からヴィダールは飛び出すと、不利だと理解したのか空高く飛翔していった。

その二人の戦いに私達は言葉を発することも動くことも出来きず、モンスターに至っては身動きすら出来ていなかった。

そんな私達に気付いていないのか三日月は足元に力を入れる。

「逃がすわけないだろ」

三日月はそう言って追いかけてしようとした時。

「三日月?」

私の声に三日月は足を止めた。

## 第二十四話

三日月の様子がいつもと違う。

私は今の三日月を見てそう感じた。

なんと言えはいいのだろうか。今の三日月は怖い。

まるで・・・悪魔のような・・・。

黙り続ける自分に、三日月は私に言った。

「なに?。」

声音はいつもと同じ筈なのに、プレッシャーが三日月から発せられている。

でも、傷ついて動けないハツシュを放って置くわけにはいかない。

私は背中を向けている三日月に言った。

「ハツシュが・・・レフィーヤを庇って動けないの。傷が深くて早くしないとこのままじゃ・・・。」

「ん」

言葉を言いきる前に三日月は私に一本の小さなボトルを渡してくる。

その見覚えのあるボトルを見て私は呟いた。

「エリクサー?。」

万能薬。一本だけでもかなりの値段がするそれを三日月は私に渡しに言った。

「それで、ハツシュが治るんでしょ」

三日月はそう言って目の前のモンスターを見る。

「俺が時間稼ぐから、ハツシュを治してやって」

三日月は巨大すぎるメイスを構え直し、前の食人花を見る。

食人花モンスターは三日月を見て何処か怯えているように見えた。

「私もやる」

「え?..ちよつと!？」

私もそう言ってティオネに万能薬を渡す。武器が無くても時間稼ぎくらい出来る。

私は三日月の横に立つ。あのモンスターは魔法に反応して狙って

くるのが分かっている。なら私にもやることはあるはずだ。

「あれ、アイス。武器はないの?」

先の戦闘で壊れてしまったレイピアの柄を見て、三日月が私にそう言ってくる。

「さっき、無茶させて壊しただけだから」

私は三日月に一言言ってモンスターを見る。

さっきまで怯えたような様子のモンスターは私と三日月を前にすると再び触手を鞭のようにふるい始める。

そんなモンスターに私は飛び込もうとした時。

「ん」

三日月から何かを渡される。

バルバトスの巨大化したその手に握られていたのは、片刃の反った刀身を持つ剣だった。

確か、刀という武器だったか。「タケミカヅチファミリア」の人達が使っている武器に非常似ていた。

「使っているの?」

私が三日月にそう言うと、三日月は私に言う。

「別にいいよ。俺にはもう必要ないしね」

三日月はそう言って私に腕を伸ばす。

黒光りする肉厚の刀身は三日月用に作られたのか、かなり頑丈そうだった。

私はその太刀を握る。ずっしりとくるその重量に私は違和感を覚えながらも、私は風を太刀に纏わせ、モンスターに向かって飛び込んだ。それに遅れて三日月も動き始める。

レフイーヤとハッシュュから遠ざけるように前進し、連続で触手による攻撃を回避する。

空を切った敵の口が地面に突き刺さり石畳を噛み砕く。さらに伸びてくる夥しい触手の鞭は、太刀で切り払いつつ、紙一重のところまで避けていく。

三日月の方にも攻撃が飛んでいくが、それに対して三日月は力任せに巨大メイスで押し潰していつている。



うねる蛇状の体が通りを暴れまわり、並んでいた屋台をまとめて吹き飛ばしていく。

殺到するモンスターへの攻撃に、私は一度距離を取ろうとしたその時だった。

「――」

アイズの視界に人影が映り込んだのは。

一般人。逃げ遅れたのか。

屋台の影に隠れるようにして獣人の子供が座り込んでいる。恐怖に震える彼女の目と視線がぶつかった。

かねてからの回避方向である右手に逃げれば、あの長大は体躯に屋台ごと巻き込まれること間違いない。

判断は一瞬だった。

風の気流を全開で纏う。

既に潰されている左手の退路に、アイズは突っ込み。

そして、捕まった。

◇◇◇◇◇

「大丈夫ですか!？」

悶え苦しみながら倒れ伏した格好になっていたハツシユに、外から手が伸ばされる。

「かはっ、げほっつ、あ……?！」

血の欠片を交ぜながら咳き込むハツシユは、ギルド職員を見る。

「アンタは?！」

身動きすれば痛みが走る自分の身体に、その柳眉を寄り合わせながら、ハツシユは何とか視線を周囲に巡らせた。

通りは荒れていた。石畳の通路はことごとく巻き上げられ、両端の商店は全壊か半壊の差があるだけで全てひしゃげている。周りに並んでいた屋台はもう原型をとどめておらず跡形もなかった。

視線を奥に向けるとそこには――。

「三日月さん……!！」

自分の憧れる人がそこにいた。  
バルバトスも本来の姿となつていてのを見て、ハツシユは安心する。

そしてさらに周りを見渡すと、自分の横に一人、凍りついたようにその戦場を見る少女が一人。

レフィーヤと言ったか。そんなエルフの少女が凍りついたように三日月達が戦っている戦場を見つめている。

そんな彼女を見てハツシユは胸の奥が怒りで熱くなる。

そしてハツシユはそんなレフィーヤに言った。

「アンタはそこでなにやってんだよ……！」

ハツシユの言葉にビクリと肩を震わせて、レフィーヤは顔をこちらへ向ける。

「え……？」

その顔は後悔と、自分が無力な事を物語っているように見えた。

そんなレフィーヤの顔を見て、ハツシユは過去の自分を思い重ねる。阿頼耶識の手術の失敗で動けなくなったビルスが死んだとき、何も出来なかつた自分に。

「アンタはまだ、戦えるだろ！そこでなにやってんだって言うてんだよ！」

一人そこで座り込んでいたレフィーヤにハツシユは叱咤を入れる。

「でも……私……」

自分より強い癖に、いぎとなつたら何も出来ないのか。

ハツシユはレフィーヤにそんな感情を抱きながら、さらに言う。

「アンタにだって追い付きたい奴がいるんだろ!!俺にだっている!今の俺は弱いからまだ追いつけねえけど、だからその人に追いつく為に俺は”此処で止まる訳にはいかねえんだよ!”三日月と約束してんだ。絶対に追いつくって!俺より強いアンタが、こんなとこで止まったら絶対に追いつきたい奴に追いつかねえぞ!」

ハツシユの言葉にレフィーヤはうつむいて、目を瞑る。

そして左手を握り締め、勢いよくその両目を見開いた。  
立ち上がる。

「・・・っ!？」

「——私はレファイヤ・ウイリデイス!ウイーシエの森のエルフ!」

瞳目するハーフェルフの彼女に見上げられながら、弱音を全て追い払うように声を上げた。

「神ロキと契りを交わした、このオラリオで最も強く、誇り高い、偉大な眷属の一員!ここで、止まるわけにはいかない!」

言葉が力に変わる。魔法と同様、自身を奮い立たせる。

ハツシユはそんな彼女を見て、自分もまた立ち上がった。

全身がズキズキと痛む。だが、傷は塞がっているし、まだ動ける。ならまだ、戦える。

お互いに追いつきたい人がいる。今はまだ足手まといかも知れない。これまでもこれから、自分達は彼等に守られていくのだろう。彼女達を助けようと死力をつくしても、最後にはきつと遠ざけられる。

大丈夫だからと言われ、側にいることも許されない。

(どんなに強がっても、私はあの人達に相応しくない!)

(どんなに頑張っても追いつかないのは分かってる。けど・・・)

追いかけても、追いつかない。追い縋っても、差はなお開く。

劣等感に苛まれるほど、卑屈に陥ってしまうほど、あの憧憬は遠すぎる。

(でも(な)・・・!)

追いつきたい。

助けたい。頼りにされたい。力になりたい。

できることならば、一緒にいたい。

自分を受け入れてくれた彼等の、自分を何度も救い出してくれた彼女達の隣にいたいことを、許される存在になりたい。

「俺が絶対、アンタより先に三日月さんに追いついてやる!」

「何言ってるんです?私が貴方より先にアイズさんに追いついてみせます!」

お互い二人は顔を合わせて言う。

「だったら・・・」

「なら・・・」

そして――

「どっちが先にあの人に追いつくか、競争だ（です）！」

そして二人は駆けていった。

憧れの人に追いつくために。

## 第二十五話

距離は埋めた。

十分に近付き自身の射程圏内に目標を捉える。

「俺が三日月さんの代わりにアイツを引き付ける。アンタはどうすんだ？」

ハツシユの問いにレフィーヤは答える。

「私は魔法であのモンスターを倒します！今から詠唱を行いますから、ちゃんと引き付けてください！」

「言われなくてもー！」

レフィーヤの言葉にハツシユはそう言って、剣を片手にモンスターの元へと駆け抜ける。

アイズに群がるモンスター達を見据え、レフィーヤは詠唱を開始した。

「ウィーシエの名のもとに願う！」

追い続けるしかないのだ、結局。

あの憧憬に追い付くためには。

「森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来たれ！」

血反吐をいくら吐こうとも、何度も地に足をつこうとも、溢れる涙でその頬が枯れることはなかったとしても。

追い続ける者には、追いかけることしか許されない。

「繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ！」

意志は折れる。何度でも折れる。折れない誓いなどありはしない。その折れた意思を何度でも直す者が、諦めの悪い者がいるだけだ。いくら無様に転ぼうとも、何度でも立ち上がる、不屈を叫ぶ者がいるだけだ。

「至れ、妖精の輪！」

レフィーヤは歌う。

守られるだけの自分を脱却するため、憧憬に追い付くため、詠唱を奏でる。

「どうか——力を貸し与えてほしい！」

歌を届けよう。

歩みの遅い自分が、遙か先にいる彼女にも聞こえる歌を。自分を奮立たせた彼にも。

例え振り返ってもらえずとも、彼女の耳に届け、彼女を癒し、彼女を守り、彼女を脅かす敵を打ち払ってみせよう。

森を踊る妖精のように。愛する者を救ってきた精霊のように。

自分だけに許された歌を、どこまでも。

この魔法を届けよう。

「[エルフ・リング]」

魔法名が紡がれる。それとともに、山吹色の魔法円が、翡翠色に変化した。

「レフィーヤ!？」

「っ!？」

収斂された魔力にテイオナが気付く。伴って、アイズの風に牙を突き立てていたモンスター達も、より強い魔力の源へ振り返った。

アイズの瞳もまた驚愕に見開かれる。

「三日月さん!」

「ハツシュ?」

それと同時に、ハツシュも三日月のもとへ到着する。

そして三日月に言った。

「三日月さん、ここは俺に任せて下さい!」

「.....」

ハツシュの言葉に三日月は無言でハツシュを見つめる。

三日月の青い瞳はまるで自身を見定めているように見えたが、ハツシュは引かない。引くつもりもない。例え駄目だとしても、食いついていく。そのつもりでこの場所に来たのだ。

その覚悟が三日月に伝わったのか、もしくは偶然か。

三日月はハツシュに言った。

「分かった、こっちは頼んだよ。ハツシュ」

「.....ニホー!」

三日月が後ろへと下がる。後は自分で何とかしなければならぬ。だけど……。

「アイツにも負ける訳にはいかねえんだ！だから、退くわけにはいかねえ！」

ハツシユはそう言つてレフイーヤのもとへ行くモンスターを手当たり次第攻撃していく。

そしてその遥か後ろでは、

「——終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を卷け」  
レフイーヤの詠唱が続く。

完成した筈の魔法へ更に詠唱を上乗せ、別種の魔法を構築していく。

——魔法の習得可能数は上限が存在する。

「ステイタス」に確保される魔法スロットは最高三つ。つまり才能ある者でも三種類の魔法のみしか行使することはできない。

その中でレフイーヤが最後に習得した魔法は——召喚魔法。

同胞の魔法に限り、詠唱及び効果を完全把握したものを己の必殺として行使する、前代未聞の反則技。

二つ分の詠唱時間と精神力を犠牲にし、彼女はあらゆるエルフの魔法を発動させることができる。

その魔法にちなみ、オラリオの神々が彼女に授けた二つ名は、「千の妖精」。

「閉ざされる光、凍てつく大地」

召喚するのはエルフの王女、リヴェリア・リヨス・アールヴの攻撃魔法。

極寒の吹雪を呼び起こし、敵の動きを、時さえも凍てつかせる無慈悲な雪波。

詠唱が紡がれる中、レフイーヤの玉音に加えもう一つ、美しい玲瓏な声音が重なり合う。

翡翠色の魔法円がまばゆい輝きを放ち出した。

『ッ!!』

食人花のモンスター達、三匹が急迫する。

破鐘の鳴き声を上げ、未だ高まる魔力の高まりへと殺到した。

「はいはいっと！」

「大人しくしてろッ!!」

「ッッ！」

『!?!』

だが、神速とばかりに一瞬で追いついたティオナ、ティオネ、アイズがモンスター達の前に立ちふさがり、殴り蹴り弾いてその突撃を阻む。

彼女達の背中に守られるレフィーヤは、次いで腹を庇い前屈するように身を丸めた。

地面から槍ぶすまのごとくモンスターの触手が突き出すが、その攻撃に、

「やらせるかよッ！」

「ふッ！」

ハッシュと三日月が押さえつけた。

その光景に目を丸くしながらもレフィーヤは、紺碧の双眼を吊り上げ一気に詠唱を終わらせた。

「【吹雪け、三度の厳冬——我が名はアールヴ】！」

拡大する魔法円。

そして唇が、その魔法を紡いだ。

「【ウイン・フィンブルヴェトル】!!」

三条の吹雪。



射線上からアイズ達が離脱する中、大気をも凍てつかせる純白の細氷がモンスター達に直撃する。体皮が、花卉が、絶叫までが凍結されていき、やがて余すことなく霜と氷に覆われた一輪の食人花は、完全に動きを停止させた。

佇立する一体の氷の像。モンスターが溶けることのない氷結の檻に封じ込められる一方で、街路全体もまた氷の世界へと、白と蒼の凍土へと変わり果てていた。

蒼穹に舞う氷の結晶が、日の光を反射し、きらめくように輝いていた。

「ナイス、レフイーヤ！」

「散々手を焼かせてくれたわね、この糞花っ」

歓呼するティオナと若干鶏冠にきているティオネが、氷ついたモンスターへの懐へ着地する。

深い蒼色の氷像へ、二人は滑らかに淀みなく、申し合わせたように同じ動きをなぞった。

「ツッ！」

「いつつくよおおお——ツ！」

一糸乱れない、渾身の回し蹴り。

褐色の素足が体躯の中央に炸裂すると同時に、夥しい亀裂が刻まれ、食人花の全身は文字通り粉碎された。

「アイズー」

「・・・ロキ？」

ティオナ達がモンスターを粉々にする横で、アイズは自分と呼ぶ声に視線を向ける。

半壊した商店の屋根に立つ二つの影。見覚えのあるすすり泣く獣人の少女と、彼女を腰に抱き着かせたロキだ。

アイズの主神は、ほいっと言って剣を放り投げた。

「これは・・・」

「ん、そっから、ちよちよっとな」

ロキが指差す方向は、モンスターに潰された屋台の一つ。

日差しを反射する刀剣類の光を覗かせるのは、武器の出店。

朝、見て回った際に見つけたものと同類の店だ。

「じゃ、頼むなー」

笑いかけてくるロキに、いつのまに少女と一緒に回収したのかという言葉は呑み込んで、アイズも小さく笑った。

「……………」

その中で三日月は一人、バルバトスを解除して、ヴィダールが飛び去った方向をじっと見ていた。

アイズはそんな三日月が気になったのか、三日月に言った。

「……………三日月?」

「……………」

私の声かけに反応しない三日月に、私は不思議に思っ三日月の前に立ち、再び言った。

「三日月」

「ん?」

二回目になってようやく気づく三日月に私は言った。

「さつき、返事しても反応なかったけどどうかしたの?」

「さつきから、”右の耳がちゃんと聞こえないんだ”。ゴメン」

「えっ?」

三日月の言葉に私は一瞬、頭が真っ白になった。

## 第一章エピソード

その後、色々なことがあった。

怪物祭の事件は「ガネーシャ・ファミリー」と冒険者の手によって犠牲者はゼロ、被害も最小限に押さえられた。だが、その中で私達が心配したのは三日月の件だった。

なぜなら、三日月の右耳が聞こえなくなるという障害を負ったからだ。あれから三日月に聞いてみても、殆ど話そうとしてくれない。話しても、俺のやったことだからと言って済ませるばかり。

バルバトスの姿が変わった時から三日月の様子が変になった。私は三日月の障害の原因がアレにあるのだと予想するが、決定的になる情報がなかった。

辛いときは私達を頼ってほしいのに、三日月はハツシュにだけ頼り、私達には頼ってくれない。

三日月・・・貴方は一体何を隠しているの？

私の疑問に誰も答える人は誰もいない。

だから、私は”私一人で何とかする”。

三日月は、私が何とかしてみせる。だからもう少し待ってて。



抜けるような蒼穹が広がっていた。

澄みきった空はどこまでも続き、どこまでも高い。

うろこ状の白い雲が浮かぶ中、穏やかな日の光を浴びながら、今日もアイズはダンジョンに向かう。

いつもと変わらず賑わう街の大通り。

売り子の声、客の喧騒、石畳を蹴る多くの靴の音。

往来する馬車は車輪を回し、嘶きを周囲へと響かせていく。大通りは沢山の笑顔と活気に溢れていた。

アイズと三日月は人込みに紛れながら、様々な亜人とすれ違ってい

く。

歩みを進めるにつれ、武装した冒険者達の視線が自然と彼女のもとに集まっていった。ひそめられた話し声が耳に届いてくる。

曰く、最強の女性冒険者。

曰く、不死身の剣士。

曰く、できないことはない。

過剰な評価。

畏怖が畏怖を呼び、名声だけが独り歩きをしている。

そして時折、三日月のことも耳に入る。

悪魔。

彼の戦いぶりやバルバトスの見た目から、彼は悪魔と呼ばれている。彼は悪魔なんかじゃない。私はそう言い返したいけど、言えなかった。

好き勝手に述べられる内容に対し、アイズは頓着しないようにしていると、ふと、視界に過った光景があった。

目尻に涙を溜める、幼いヒューマンの少女。

雑踏から弾き出され、一人路傍にいる彼女に近寄ろうとする者は誰もいない。

歩みを止めたアイズはしばらく悩んだ末、少女とともに足を運んだ。

「どうしたの・・・？」

「・・・うえええっ」

静かに声をかけると、途端、少女はじわっと目を潤ませ、堰を切ったように泣き出した。

これに驚いたアイズは何とか泣き止めさせようとするが、ろくな言葉もかけられない。

悲しげな嗚咽だけを浴びせられ、彼女自身困り果て、立ち尽くしてしまう。

ともすれば、滑稽だった。

独り歩きしている名声にせせら笑われる。

そこに凜然とした【剣姫】の面影は欠片もなく。蓋を開ければ、ア

イズ・ヴァレンシユタインは、このような些末なことにもうろたえる。最強だろうがモンスターをいくら倒そうが、何もかもできるわけではない。

むしろ、できないことの方が有り余る。

「・・・少し、待ってて?」

響き渡っていく泣き声からややもすると逃げ出すように、アイズは一旦その場から離れる。

と、三日月は泣き続ける彼女にポケットからチョコレートを取り出して言う。

「食べる?」

三日月の声に彼女は顔を上げる。

そして彼女は言った。

「・・・食べる」

「・・・ん」

三日月はそう言ってチョコレート少女に渡すと、少女はチョコレートを食べ始める。

そして泣き止む彼女に、三日月は顔を近づけて匂いを嗅いだ。

そして――。

三日月は顔をあげると、彼女を連れて表通りに出る。

「あつ、三日月・・・」

私はそう言って三日月についていく。

「あれか」

三日月がそう言うと、少女が笑顔になって走り出す。

「お母さん!!」

人混みに紛れる少女に私は顔を上げると、あの少女の母親らしき人と少女が一緒にいる所が見られた。

そんな二人の様子を見て、三日月は言った。

「行くよ」

「えっ? うん・・・」

身を翻して歩き始める三日月に私は彼の後ろについていく。私が出来なかつた事を三日月はすぐに解決してみせた。彼が見せた優し

さを見て、彼は悪魔なんて呼ばれる人じゃないと私は再度思う。

「なに?」

見つめる私に気づいたのか、三日月はそう言っ私を見る。

「・・・なんでもない」

私はそう言っ目をそらす。

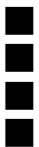
「ふーん」

立ち止まるアイズを置いて三日月は再び歩きだす。

何も知らない、すれ違った一つの足音が、彼女から遠ざかっていく。

澄んだ風に白い雲はなびく。

見上げたオラリオの空は、今日も青かった。



遙か地中の底、その■は眠っていた。

かの厄災は未だに目を覚まさない。

## 第二章 第一話

暗い部屋だった。

光源は壁にかけられた小型の魔石灯一つのみしかなく、隅には影が溜まっている。石の香りもほのかに漂う陰湿な室内を唯一彩るのは、銀や鉄とともに加工された水晶の品々であり、壁や天井からぶら下がるそれら洒落た装飾品が、時折蒼くきらめいていた。

蠟燭の火のような微弱な灯りに照らされるのは、赤い絨毯、木編みの籠、小棚、そして粗末な作りのベッドだ。

やがて一室に二人の人影が入ったくる。

一人は全身型鎧を身に付け、もう一人は薄汚れたフード付きのローブを頭から被っていた。

言葉少なに会話する彼等はバックパックを始めとした荷物を部屋の隅に置くと、木製のベッドへと直行する。

顔面すべてを覆い隠す兜、つま先まで包む装靴、全身型鎧の下のインナーまで脱ぎ出す男性——引き締まった体をした冒険者は、あつという間に半裸になった。下半身の衣服を残してベッドに腰かける彼の側で、ローブを纏う人物は、外衣の上からでもはつきりわかる豊かな胸もとや細い腰をあらわにしていふ。

「おいつ、早く脱いでくれ。ここまで来て生殺しなんて、勘弁してくれよ」

「待て。がつつくな」

興奮を隠せない男の声に、起伏のすくない響きを持つ高い声音が返る。細い指がローブを始めとした衣を脱ぎ去っていき、最後には古びた紐を解いて、長い髪を背へと流す。

艶かしい女だった。

男性ならば飛びつきたくなるほどの美しい曲線を描く身体。張りのある大きな双丘は欲情をそそる。

そんな中、ベッドへ腰かける男は、扇情的な体はもとより、フード

を取り払った女の顔に息を呑む。

魔石灯の光が陰影を作っている美貌に、喉の鳴る音が響き渡った。

「何でこんな綺麗なのに、顔を隠しているんだ？」

「お前みたいな男に、一々絡まれるのを防ぐためさ」

半ば陶然としている男は、その淡々とした返答にも笑みを漏らし、一糸纏わぬ女を引き寄せる。

「さっきの話だが、何の依頼を受けたんだ？」

ことに及ぶ直前、女が口を開く。

仰向けに寝る彼女へ唇を落とそうとしていた男は動きを止め、ああ、と間を空けて呟く。

「変な依頼だった。30階層に行つて、わけのわからんものを回収してこいなんて……」

何かを思い出すように視線を上げる冒険者の男。

決して大柄ではない彼のたくましい体を、女は黙って見上げている。

「おっと、これは極秘だった。聞かなかつたことにしてくれ」

「そうか……」

女はそう言つて、男の視線を絡め、手を彼の頬に伸ばした。

触れるか触れないかのところで撫でるように指をなぞらせたかと思つと、すつ、とそのまま首へ這わす。

そして一気に、握り締めた。

「!？」

鍛えられた男の首に五本の指が食い込む。全裸で無手だったことから無警戒だった男は驚愕をあらわにし、表情を激変させその指に手をかけるも、女の細腕はびくともしない。

激しい抵抗をもつとせず、メリメリと音を立てる凄まじい握力。

男の瞳は血走り、開閉を繰り返す口唇が掠れた音を漏らしていく。

その様子を無感動に見つめる女は、次には——ぼきり、と。

あっけなく、男の首の骨を折った。

「……………」

だらりと力を失いのしかかってくる冒険者の男を、女はぞんざいに



横へ放り捨てた。鈍い音を立て、こと切れた男の体が床に転がった。うっすらとした灯りに肌を舐められながら、彼女は静かに起き上がり、その長い脚でベッドから立ち上がる。足もとの死体には一瞥もくれず、部屋の隅へ向かう。

裸のまま男の荷物に歩み寄り、無遠慮に中身をこじ開けた。

しばらく物色を続けていると・・・女の手は唐突に止まった。

「……………ない」

眩いた後、体の動きを停止していた女は、ちつ、と大きな舌打ちを放つ。

ぎりつと歯を噛み締め、男の亡骸を睨んだ。忌々しそうな目付きで苛立ちを隠せないでいると、癩癩を起こしたかのように立ち上がる。

女は乱暴に死体へと近付き、そして――。

グシャツ、と。

踏み潰された男の頭部が鮮血を撒き散らし、部屋を真っ赤に染め上げた。

それと同時期――ダンジョンにて青い人影がモンスターを手当たり次第虐殺していた。

意識のないソレは探し続ける。

自分を扱うにふさわしい相手を。

◇◇◇◇◇

カアン、カアン、と金属を打つ音が生じている。

周囲から頻りに鳴り響いてくる甲高い打撃音。舞い狂う音の後に眩い火花が飛び跳ね、辺り一帯に閃光を撒き散らす。

槌を振るい、大粒の汗を流す精悍な男達の声も折々聞こえてくるこの場所は、鍛冶場と呼ぶに相応しかった。広い屋内の壁際、激しく燃え立つ計四つの大型の炉が真っ赤な炎を猛らせ、熱気を立ち込めさせ

る。

獸人やドワーフの職人が鎚を振りかぶる横で、見習いらしき小人族の少女が薪や道具を抱えてせっせつと忙しなく周囲を駆けずり回っていた。

『うおおおおおおつ!! 大切断、てめえつ、くたばりやがれえええええええええ!!』

とある作業場の一角では、大の男達が五人がかりで特大の超硬金属を鍛えあげている最中だった。大型級のモンスターの頭さえかち割れそうな巨鎚を交互に振り下ろし、並みならぬ硬度の金属の形状を変え、不純物を取り除いていく。

不眠不休の怨嗟も込められた、友人の少女に対するそんな雄叫びを耳にしながら。

三日月に至っては自身の身体よりも大きい巨大なメイスを職人に見せて、「これより重いヤツある?」と言って職人を困らせている。

その職人ですら机を押し潰した三日月の巨大メイスを持ち上げられていないのだから、この場にはきつとないだろう。

そしてアイズは肩身狭そうに、とある神物の前でたたずんでいた。

「まさか、五日で使い潰すとはな・・・」

重く、そして呆れ返ったような鍛冶神の言葉に、びくりとアイズの肩が震える。

ドワーフを連想させる小柄ながらたくましい体つきの初老の男神は、ちらつと彼女の顔を見やり、奥の三日月にも視線を向けて溜め息を吐き出した。

怪物祭からしばらくしての朝。

アイズと三日月は今、整備を頼んでいた愛剣〈デスペレート〉を受け取るため、【ゴブニユ・ファミリア】の本拠『三鎚の鍛冶場』に訪れていた。工房でもある広い平屋の中心にいる彼女達の周りでは、鍛冶師の団員が早朝にもかかわらず汗水垂らして働いており、鍛練の作業に没頭する者、炉の炎を調節する者、設けられた掲示板に貼り出されている武器の依頼書を確認する者など様々いる。

忙しなく動き回る彼等に囲まれるアイズは〈デスペレート〉を受け

とると同時に、ゴブニュから整備の間借り受けていた代剣——レイピアを返却していた。

無残にも刀身が砕け散った、ガラクタの状態に変えて。

「お前らはほんとうに鍛冶屋泣かせだな」

「……ごめん、なさい」

台の上に乗っている”レイピアだったもの”を、ゴブニュと挟んで見下ろしながら、アイズはしゅんと頂垂れる。

仲間の壊し屋のことも含まれた神の皮肉に、かき消えそうな声で謝った。

怪物祭にて脱走したモンスター達と交戦し、その中でももの見事に破碎した代剣は、今は台の上で無数の破片となって転がっている。柄のみが原型を残したレイピアはもはや誰の目から見ても修復不可能だ。

アイズの剣技と『魔法』に耐えきれなかった武器の末路が今、目の前のこれである。

また「ロキ・ファミリア」かよ、というげんなりした視線を周囲の職人達から浴びながら、アイズはひたすら恐縮する思いだった。

そしてゴブニュは後ろにいる三日月に言う。

「坊主、それより重くてデカイ武器はワシの所にはないぞ」

男神の言葉に三日月は言った。

「そっか、分かった」

三日月はそう言って、自身の武器を魔力に戻して私の所へと向かってくる。

羨ましいなあと私は思いながらも私は目の前の男神に代金について恐る恐る話してみる。

「……あの、お代は？」

「四〇〇〇万ヴァリス、といったところか」

——ガンツ！と音を立て『四〇〇〇万』という言葉がアイズの頭上に降って直撃する。

その重みに頭の天辺をさすりながら……しばらくダンジョンにもぐって返済しなきゃ、と。

腕を組んでやれやれとこぼすゴブニユの顔を見ながら、申し訳なく、そして落ち込みながら私は思った。

少年への謝罪は、まだまだ先になりそうだ。

と、後ろから三日月がデザートを食べながら私に言った。

「そんなに落ち込むなら、始めから壊さなかつたらよかつたんじやないの？」

「ごもつともである。」

## 第二話

風を斬る音が響く。

斬撃の後に遅れて響く細い風切り音は、剣身に乘せられた速度と鋭さの証拠だった。一振りのサーベルで幾重もの銀の軌跡を、肌寒い朝の空気に刻み込んでいく。

まだ日が出ていない時間帯、アイズは一人、ホームの中庭で日課である剣の素振りを行っていた。

この早朝の素振りは誰にも言われたわけでもなく、アイズが九年前から自ら始めたことだ。

日々の反復を行うように、あるいは更なる剣技の向上を目指すために、ホームにいる間はほぼ毎日のように行われてきた。ダンジョンで上げる戦果に比べれば地味にちがいないが、こうした技の研鑽を、彼女は決して怠ろうとしない。むしろ怠ることができない。アイズが恐れていることは、多くの者達とも同じ、前に進めなくなることだからだ。

芝生がある中庭の一箇所へとどまり少々染み込んでいるレイピアの扱いの誤差を修正するように、縦、横、斜め、と愛剣を無尽に振り鳴らす。下半身の動きは最小限に抑え、あたかも指揮棒をもちいる指揮者のように、振る。

やがて日の出を知らせる光が、白み始めていたオラリオの東の空を赤く照らし出す。

アイズは最後というように庭木から落ちた一枚の緑葉をヒュンツと斬り上げ、両断し、剣を鞘に収めた。

「……………」

鍛練を終了させたアイズは、自分を見つめる視線に気付く。

振り向くと、庭と繋がる塔の出入口付近で、エルフの少女、レフィーヤが目を見開きながらたたずんでいた。

胸に分厚い本を抱えている彼女はアイズの剣舞に魅入っていたように固まっており、目を向けられると、思い出したようにはっとして、それから笑顔で拍手をし出す。

「す、すごかったです、アイズさん！私つい見とれちゃってっ、声をかけるのも忘れちゃいました！」

「えっと・・・ありがとう？」

その賞賛に、アイズは小首を傾げながら応えた。日課である事柄を褒められたところで、どう反応していいのかわからない。

興奮しているのか、頬を染めて近付いてくるレフィーヤは、自身の紺碧の瞳をきらきらと輝かせ尊敬の眼差しを向けてくる。

「本当にこんな朝早くから剣を振られているんですね・・・だからアイズさんはあんな強くって・・・私も見習わなきゃっ」

目の当たりにした鍛練の積み重ねが、アイズを「劍姫」と呼ばれるまでに押し上げた要因の一つであると確信するレフィーヤは、語尾に力を込めて精進しようと思気込む。

そんな後輩の少女の姿に、アイズは微笑ましそうに口もとを綻ばせた。

「アイズさんは、剣術を誰かに教わったりしたんですか？魔導士の私から見ても、すごく切れがあるなってわかるんですけど・・・」

「・・・お父さん、かな」

アイズは視線をさまよわせ、少し考える素振りを見せた後、ぽつりと質問に答えた。

「お父様が・・・そういえば、アイズさんのご両親は今何を・・・？」

と、レフィーヤがそこまで言葉を続けたところで、アイズは視線の端に二人の影が見えた。

そちらに視線を向けると、そこにいたのは三日月とハツシユだった。

三日月は上着と服を地面に脱ぎ捨てて上半身裸のまま、ハツシユと一緒にトレーニングをしている姿があった。

よく彼等と一緒にトレーニングをしている姿を見かける。

「凄い」

「本当ですよね・・・」

私は三日月達を見てそう呟いた。

彼の身体は服の上からでも分かるように、柔軟な筋肉で構成されて

おり余分な脂肪が一切ない。

いつてしまえば人体の究極というべきの理想だ。ベートでも彼処まで到達していないというのに、彼はどれほど努力してあのような肉体を維持し続けているのだろうか。

そんな彼を見て私は少しだけ試したくなつた。今の私が彼とどれだけ差があるのかを。

「アイズさん?」

レフィーヤが私を訪ねてくるが、私はそれに気にする事なく三日月達のいる場所に足を進める。

そして私は声をかけた。

「三日月」

「ん、何?」

私の声に三日月は反応してトレーニングを止めた。

「どうしたんすか?」

ハッシュもそう言ってトレーニングの手を止める。

そんな彼等に私は言った。

「私と模擬戦やってくれてもいい?」

「アイズさん!」

レフィーヤが目を見開きながら言ってくる。けど、どうしても確かめたい。

「別にいいけど、やってどうすんの?」

三日月が私にそう聞いてくる。その質問に私は言った。

「どれだけ三日月と戦えるか確かめたい」

本音を言えばそれだった。私は三日月と一度も模擬戦をしたことがない。一回だけ、始めて会った頃に彼と戦ったことはあったが、それもすぐに終わってしまった。

だから確かめたい。私の目標である三日月がどれだけ強いのかを。

その答えに三日月は一言だけ言った。

「分かった。朝飯食べたらやろう」

そう言って三日月は服を拾い上げる。彼が背を屈めた瞬間、キラリと三日月の背中から何か光った。

「三日月？背中になにか——」

ついでると、言おうとした瞬間に私とレフィーヤは言葉を詰まらせた。

三日月の背中。正確には首すじより少し下から銀色の突起が三つ、三日月の背中から飛び出ている。

「何？」

三日月が言葉を詰まらせる私達にそう言っただけで視線を向けてくる。私は三日月の言葉に少し掠れる声で言った。

「三日月・・・その背中・・・」

いつも遠くで見ている分からは分からなかったが、明らかにその背中についているソレは異質だ。そんな私に三日月はなんともないような声音で言う。

「ああ、阿頼耶識の事？別になんともないよ」

「でも、何でそんなのが・・・」

私の言葉に三日月が言う。

「強くなるためだよ」

「えっ？」

強くなるため。彼はそう言った。そんなもので強くなれるのだろうか？私の疑問に三日月は言葉を続ける。

「コレがあればバルバトスも使えるし、それにみんなを守れるんだ。だから別に気にしなくていいよ」

三日月はそう言って服を着て何時もの上着を着る。

「んじや、先に行ってるから」

「それじゃあ、お先に失礼させてもらいます」

三日月とハツシユはそう言っただけで、中庭から出ていった。

「行っちゃいましたね・・・」

「・・・うん」

レフィーヤの言葉に私はそう答えるが、私の頭の中は別の事を考えていた。

(バルバトスが使える？それに強くなれる？)

アレを付ければ私も今より強くなれるのだろうか？その言葉が私



の中にずっと渦巻いていた。

### 第三話

シャワーを浴びて身を綺麗にしたアイズは、ふらりと手狭であるホームを移動し、大食堂へ向かった。

既に食堂には数名の団員がおり、朝食の料理や皿を配膳している。厨房から漂う香ばしい匂いには朝早くから活動していたアイズのお腹を大いに刺激した。こそつと窺ってみたところ、本日は野菜をふんだんに使ったスープとサラダ、野菜と塩漬けにした肉のサンドイッチ、そして野菜入りのオムレツのようだ。

先日「デメテル・ファミリア」から届けられた大量の野菜が猛威を振るっている。

彼の派閥の野菜はとても甘いので、アイズは好きではあるが。そういえば、三日月も野菜を作っているところを見たと言う話を聞いたことがある。野菜しかあまり食べない三日月は自分で野菜を作ることが好きなのだろうか？そんな事を思いつつ、アイズは他の者達に紛れてさりげなく配膳を手伝った。

長方形の食卓に食器が並べられていく、が。

「うおっ、アイズさん、いつの間にも！」

「ありがとうございます、でも大丈夫ですから！」

感謝されると同時に、めっそももない、と団員達から断られてしまう。まるで王宮に住まう姫君のような扱いでやんわりと遠ざけられた。

派閥の幹部に雑事などやらせては面目がない、というところだろうが・・・ティオナ達ともまた異なった彼等との距離感に、ほんのり寂しさを感じないと言えれば嘘になる。

しよぼん、とアイズの肩が心なし、しおれる。

『ティ、ティオネさん、朝食は俺達が・・・』

『団長の朝ご飯は、わ・た・し・が作るのよ！手出しは無用よ、引っ込んでなさい！』

ちらつと見える、厨房にこもり団員を押しつけ朝食作りに勤しむティオネの姿。みなと賑やかに交流している———ようにアイズの

目には見える——彼女に、テイオネはすごい、と思いつつ、優しく大食堂から追い出されてしまった。

「あ、お疲れ様です。アイズさん」

「あつ、うん・・・ハツシユはなに急いでるの？」

手持ち無沙汰になったアイズが当てもなく廊下を歩いていると、曲がり角からハツシユと出くわす。駆け足でいる彼に私はそう言うのと、彼は足をその場で止めて言った。

「今から三日月さんと一緒に畑の水やりをするんすよ。んで、今からその畑に向かつてる最中です」

どうやら話に聞いていた通り、三日月は畑を作っているらしい。今からハツシユはその場所に向かう途中で、私と出会った所なのだろう。

「んじや、三日月さん待たせてるんで行きますね」

「待って」

ハツシユがそう言って、走り出そうとした時に私は彼を呼び止める。

「どうしたんすか？」

ハツシユは私を見ながらそう言って足を止める。

「私も、一緒に行つていい？」

手持ち無沙汰でやるのが特に無いのだ。それなら身体を動かしていた方がいい。

私の言葉に、ハツシユが言う。

「別に構いませんけど、今からだと少し朝飯に遅れますよ？」

「構わない」

別に朝食が少し遅れたって構わない。それに三日月が野菜を作っているところを少し見てみたかった。

「んじや、こつちです、ちよつと走るんで着いてきてください」

ハツシユはそう言って走り始めた。私も彼に合わせるように駆け足で走る。

「ハツシユは毎朝こうやって畑に行くの？」

走る彼に私は興味を持って聞いてみる。彼が一番三日月と行動し

ていることが多いのだ。ならハツシユも水やりなどしているのだろうか？

そんな私の質問にハツシユは走りながら答える。

「まあ、そうっすね。俺が好きでやってる事っすから別について感じですけど、基本俺は三日月さんに頼まれたり、三日月さんが行けない時にこうやって行くことぐらいですかね」

「・・・そうなんだ。信頼されてるんだね」

「三日月さんは、最後に俺を見てくれたんですね。始めは見向きもされなかったのに、今はこうやって見てくれてるんで。それに俺は三日月さんに言ったんすよ。絶対にアンタを追い抜いてみせるって」  
それまでは俺は三日月さんと一緒に何処までも着いていきます。

彼の言葉にチクリと胸に痛みが走る。

三日月に信頼されているのも羨ましいけど、彼は自身に目標を持っていた事にだろうか。

私の目標は今のところ、彼の隣に立ちたいからこうやって頑張っている。けど、彼は？彼は何の目的があつて三日月を追い抜いてみせると決めたのだろうか？

「ハツシユはなんで、三日月を抜かしたいの？強くなるため？」

だから聞いてみた。聞いてしまった。

そんな私の質問に彼は少し考える仕草をして、言った。

「・・・俺は鉄華団に入る前、スラムに住んでいて親のいないガキ同士で集まって暮らしてたんだ」

ハツシユはスラムで生まれそこで暮らしていた。聞いてはいけない事を聞いてしまった私は後悔する。けど、彼の話は最後まで聞かないといけないという、責任感もあった。

「・・・それで？」

だから私は聞いてみる。彼が三日月を越えたいと決めた理由を。

「ビルスはその俺らの兄貴分だった。俺達の生活を楽にしてやるって、兵士になるってスラムを出ていった」

「なのに戻ってきたビルスは腰から下が動かなくなってたんだ」

そんな過去を話すハツシユの声はどこか辛そうだった。

私は黙って聞く。

「動かなくなつた理由は阿頼耶識の手術が失敗したからだつた。動けなくなつたビルスは俺に言つたんだ。惨廃になつてごめんなつて」

「・・・その後、その人はどうなつたの」

「俺が帰つた時に首を吊つて死んでいた」

「そう・・・なんだ」

その結末に私はそう呟く。聞かなきゃ良かった。ハツシユもそんな事を思い出したくなかつたと思う筈なのに。

私の呟きにハツシユは言葉が続ける。

「俺達みんな思つてたんだ。ビルスに着いていきやなんとかなるつて。なのに・・・だから俺が次のビルスにならなきゃなんねえんだ」

ハツシユはそう言つて口を閉じる。

そして次には何ともないように私に謝る。

「すみません。暗い話になつちまつて。もうすぐ着くんで、もうちよつと早く行きます」

「・・・うん。こつちもごめんなさい。興味本意で聞いて・・・」

私の謝罪にハツシユは気にしてないように言った。

「別にいいですよ。好きに話したのは俺なんで」

彼はそう言つて走るペースを早くする。

彼の話聞いて、私は三日月のその背中が私が思つていたよりもずっと遠いと感じてしまった。

## 第四話

少し走った後、三日月はいた。

小さな鉢でいくつもの野菜に水を与えている。

背中を向けている彼にハツシユが後ろから声をかけた。

「三日月さん！手伝いに来ました！」

ハツシユは大声で三日月に声をかける。そのハツシユの声を聞いて三日月は言った。

「ん・・・じゃあ、そっちのお願い」

「分かりました！」

三日月の指示にハツシユは水いれを持って歩いていく。

「ん・・・？あれ、アイズもいたんだ？」

「うん・・・やる事ないから手伝いに来た。何か手伝える事ある？」

三日月の言葉に私はそう言って三日月を見る。

「じゃあ、これあそこの日の当たる場所に運んでくれない？ハツシユ一人だと時間かかるし」

三日月はそう言って苗が入った鉢を見て、私に言う。

「うん、分かった」

私はそう言って鉢を手に持つ。

「・・・んっ」

ずっしりとした鉢を私は手に持ち、三日月に言われた場所へと運んでいく。日に当たる場所に私はその鉢を置いてもう一つの鉢の元へ歩いていく。

「ハツシユ、こっちのヤツ水お願い」

「はい！分かりました！」

ハツシユと三日月の声をよそに私は黙々と鉢を運ぶ。

私が一通り運び終わった後、三日月が私とハツシユに言う。

「一通り終わったし、朝飯食べに行こうか」

「了解っす」

「うん」

三日月の言葉に私達は返事をして作業を終える。

私達が作業を終えて食堂へ向かって歩いてしていると、曲がり角から現れた狼人のベートとばったりと出くわす。

出合い頭にぎよつとした彼は、口端を軽く痙攣させながら、無理矢理とわかる笑みを浮かべた。

「・・・よ、よお」

どこかぎこちないベートの態度に、首を傾げようとしたが、すぐに原因に思い当たる。

酒場『豊穰の女主人』であった、白兔の一件だ。ベートの暴言に当時のアイズは確かに怒り、そしてその後には落ち込んでいたこともあって、碌に口を利いていなかったような気がする。

ベートも酔っていたとわかつていたので——好感度はやや減少しつつも——アイズはもうそこまで引きずっているわけではない。

ので、おはようと、挨拶を返そうとしたが。

「おっはよーアイズ！」

「ぐおっ!?!」

どんつ、とベートを押しつけ、ティオナが正面からアイズに抱き着いてきた。

軽く仰け反り、きよんとするアイズの体を笑顔で抱きしめるティオナは、背後を振り返りベートに向けて「べーっ」と舌を出す。ぐぎぎぎつ、と歯を食いしばるベートを他所に私の隣にいる三日月やハッシュにも笑顔で挨拶をした。

「おはようー三日月、ハッシュー！」

「うん、おはよう」

「おはようございませす、ティオナさんー！」

三日月はいつものように挨拶し、ハッシュは礼儀正しく挨拶をする。

「アイズー、あのオオカミ男と話してもいいことないから、あっちに行こ？三日月とハッシュも一緒にどう？」

「まあ、飯食いにいくからいいよ」

「三日月さんが行くなら俺も行きます」

そんな三人の会話にベートが騒ぐ。

「おい、こらっ、聞こえてんぞド貧相女!?!それにお前らも!勝手に言つてんじゃねえ!」

「ド貧相とか言うなああああああ!!」

「あ、あの……」

「——朝っぱらからうるさいぞ!廊下で騒ぐでない、お主等!」

その後、ドワーフのガレスに、アイズ達は食事の時間まで一頻り注意されるのだった。

「さあ、団長。私のお手製の料理です、たーんと食べてください」

大食堂で朝食が始まる。

湯気が立つスープやふわふわのオムレツに各々手を伸ばす中、上座にいる「ファミリア」団長、小人族のフィンの前には、巨大な魚を丸焼きにした野生味溢れる女戦士料理が置かれていた。

その体の大きさと歪で強固な鱗から度々怪物と勘違いされる魚類、巨黒魚だ。オラリオ南西に存在する汽水湖から取れ、都市にも多く出回っている。子供でありながら一Mを超える魚の丸焼きに、フィンは黙って遠い目をした。

ご機嫌なテイオネに強引に食べさせられる彼のもとへ、気の毒そうな視線が集中砲火する。三日月に限っては視線も向けられない。やはり魚が嫌いなのだろうか?

「アイズ、今日は何かする予定あるの?」

「ん、と……」

五十人以上の団員が一齐に食事をとる大食堂は話し声が絶えない。ざわめきに囲まれながら、アイズからもらったサンドイッチをひよいっとつまみ、テイオナが尋ねてくる。

「二昨日、剣を壊しちゃったからその弁償と、この後三日月との模擬戦かな」

「それって、ファイリア祭で使っていたレイピアのことですか?」

隣にいるレフイーヤにコクリと頷く。

昨日のゴブニュとの会話を————しばらくダンジョンにこ



もって必要資金を確保しようとしている意向を、若干羞恥を覚えながらテイオナ達に語った。

「三日月と模擬戦するのは?! いいなー、三日月つてば、模擬戦だと全力出してくれないんだよねー。何でもフィンに全力は出さないように言われてるって言うてさあ」

「三日月、全力出せないの?」

私は前に座っている三日月に私は尋ねる。

「出せるけど、出すなって言われてる。でないと、勝負にならないって言われてるから」

三日月はサンドイッチに手を伸ばしながらそう答え、口に入れた。おそろくだが、今の三日月の強さは私達の中でも一番強い。

ステータス差もそうだろうが、対人戦の経験が三日月が高すぎるからだ。モンスターと戦うよりも人型の相手に対して三日月の動きに迷いが一切無い。

下手をすれば重傷者が出る三日月との模擬戦に対してフィンがつけた制限が確か・・・。

「メイスで殴るか格闘戦しか出来ない・・・だっけ?」

「うん。すごいやりづらい」

三日月はオムレツを食べながら答える。

魔力を弾丸のように攻撃することもできなければ、尻尾みたいなモノで攻撃することもできない。

本来の戦闘スタイルでないというハンデを持っているのだ。やりづらいことこの上ないだろう。

でも仕方ない事なのかも知れない。何故ならそれ相応の理由があるのだ。

「三日月が強過ぎて、私達以外じゃ誰もやりたがらないもん。それに武器で打ちあった時なんて力任せで叩いてくるから、私でも普通に吹っ飛ばされるし」

マトモに打ち合える相手がいないというのが理由に他なら無かった。力では上位に入るテイオナですら無理なく突破して力負けするくらいだ。私だったら普通に飛ばされる。

「レフィーヤも一回やったんだよね？三日月と模擬戦」

「あ、はい。詠唱もさせてもらえず、一瞬で距離を詰められて一撃で・・・」

詠唱をさせる前に一瞬で叩く。魔道士泣かせだ。

「その後、三日月に、チンタラ喋る暇があるなら身体動かせばいいのに、って駄目押しされたもんね。レフィーヤは」

「そんな事出来るなら苦労しませんよ・・・」

レフィーヤは若干涙目になりながらそう言っただけでサンドイッチを食べる。

術師にそう言われても困ると言うことである。

「じゃあ、この後は三日月と模擬戦かー。私も見に行っている？」

「別にいいけど。特に面白いことなんてないと思うけど？」

「いいの！参考になるだけでも見るだけの価値はあるよ」

三日月の言葉にティオナはそう言っただけでサラダを食べる。

「ふーん・・・そういうもんか。・・・ごちそうさま。じゃあ先に行ってるね。アイズ」

「うん」

三日月はそう言っただけで席から立ち上がり、歩いて行った。

「じゃあ、模擬戦が終わったらダンジョンに行くんでしょ？私も一緒に行っている？もちろん三日月も誘ってさー！」

「でも、ティオナ・・・」

「大丈夫、大丈夫！あたしだって作り直してもらったヘウルガのお金、用意しないとイケないし」

「わ、私も邪魔でなければ、お手伝いさせてください！」

ともに資金稼ぎしようとティオナが提案し、負けじとばかりにレフィーヤも協力を申し出る。そういえば、ハッシュはどのようなのだろうか？

「ハッシュはどうするの？」

「俺は・・・まだレベルってやつが低いんで辞めときます。代わりに武器か防具でも探しながら訓練しときますね。三日月さんも連れてくなら野菜の世話もしなきゃいけないっすし」

「そっか・・・」

確かにそれもある。三日月はあの野菜を大切に育てていたし、私達が行くのは中層だ。ハツシユだといっていけないかもしれない。そんなことを考えていると、テイオナが言った。

「じゃあ、決まりだね！三日月との模擬戦を見たら、一緒にダンジョンに行こう！」

「はい！」

「うん」

私達はそう返事をして食事を続けた。

## 第五話

朝食を食べた後、私達は訓練所へと向かった。

訓練所には三日月とハツシユが二人でトレーニングをしていた。

そんな二人に私は声をかける。

「三日月」

私の声に反応して三日月が振り返る。そして私を視認すると、三日月は言った。

「ん？なに？」

「模擬戦終わったら一緒にダンジョンに行かない？テイオナ達と一緒に」

三日月は少し考える素振りを見せた後、言った。

「……いいよ」

三日月の返答に私は少しだけ頬を緩める。

そんな私に三日月は言った。

「んじゃ、今からやる？」

「うん」

三日月の問いに私はそう答えて〈デスペレート〉を鞘から引き抜いた。シャランと音を立てて銀色の刀身が鈍く光る。

三日月もバルバトスを纏いながら巨大すぎるメイスを手にして構えた。

そんな私達に審判として連れてきたフィンが言った。

「じゃあ、今から模擬戦を始めるよ。三日月に関しては今回、アイズの要望で全力を出しても良いけど、大怪我をなるべくさせないようにしてね」

「わかった」

三日月はフィンの言葉にそう答えた。

「アイズも夢中になって周りが見えなくならないようにね」

「うん、気をつける」

私もそう答えて剣を構えた。

そして――

「では、始め！」

フィンの言葉と同時に私は駆け出す。

「目覚めよ」

駆け出しながら私は〈デスペレート〉に風を纏わせて弾丸と化する。始めから最高速度、今出せる最大の一撃。その一撃を私は三日月に対して放つ。その一撃に対して三日月もその巨大なメイスで迎撃した。

私の〈デスペレート〉と三日月の巨大なメイスが衝突する。

ガアアアン!!と火花と爆音と共に私達は吹き飛ばされた。

「ふっ!!」

吹き飛ばされたその衝撃を利用して私は地面に足をついて一回転、二回転した後、体勢を整え三日月へ突撃する。

立て直す速度もかなり早くできた私は、そのまま体勢をもとに戻そうとしている三日月に向かって剣を振り上げる。と、次の瞬間。

「ガコン」という音が三日月から聞こえてくる。私はすぐに攻撃の体勢を止めて防御の姿勢を取った瞬間。

三日月の両腕から魔力の弾丸が私に目掛けて撃ち出された。

「——っ！」

発射される魔力の弾丸を私は斬り伏せていく。一発、二発、三発と弾いていくが、それでも数が多く、いくつかは弾き逃して腕や足にかすり傷を作った。

弾丸の嵐が収まった頃には三日月はもう体勢を戻し、こちらへ牽制の射撃をしながら私に向かってくる。

そして巨大なメイスを私目掛けて振り下ろした。

三日月のその攻撃に対して私はすぐさま回避行動を取る。

彼の攻撃を受けたら最後、私だと一撃で仕留められる。

三日月の巨大メイスが回避した私のすぐ横を通り過ぎ地面へと叩きつけられた。

地面へと叩きつけられた巨大メイスは地面に巨大なヒビ割れを作り、大量の土煙を上げる。その破壊力を見て私は顔を少しだけ引き攣らせた。あんな攻撃、当たったらしばらくどころか当分再起不能になる可能性が高い。

三日月の攻撃を見て、レフィーヤとティオナも顔を引き攣らせている。

「三日月、全力でやるって言ってたけどアイズ殺す気でやってない？アレは流石にやり過ぎなんじゃあ・・・」

「地面があんなにヒビ割れるって、直撃でもしたら私達でも致命傷ですよ・・・？」

ティオナとレフィーヤの言葉に賛同をせざるを得ない。

なるほど、これはフィン達からも手加減するように言われている訳だ。私の予想よりも遥かに超えていた。

「考えてる暇なんてあるの？」

三日月が私にそう言って、尻尾状のブレードを私目掛けて射出された。「キュルルル」と音を立てながら、まるで生き物のように私を追ってくる。

「【吹き荒れる】！」

私はそう言って剣に纏わせていた風を一気に開放する。

暴風となった風でそのブレードは吹き飛ばされるが、すぐに三日月のもとへ戻っていく。

落ち着いている暇もなく三日月は私へ接近し、巨大メイスを私めがけて投擲した。

その攻撃を私は回避し、三日月目掛けて疾走する。

それに対して彼は背中中のブレードを射出し迎撃しようとするが、私はそれを弾き、三日月目掛けて「ヘスプレート」を振り下ろした。

その攻撃に三日月は両腕をクロスさせて防御の姿勢を取る。が、私の方が速い”。

私の刃が三日月に当たる瞬間。

「ガッ」と私の剣を持つ腕が掴まれた”。

「えっ？」

掴まれた違和感に私は唾然するように呟く。このタイミングで防御姿勢を取っていた三日月が掴める筈がない。私は剣を振り下ろした腕、掴まれた場所を見るとその掴まれた手が何なのか分かった。

それは三日月の「巨大な腕から伸びた金属で出来た腕」。

それによって受け止められた私は成すすべもなく。

「捕まえた」

三日月に両腕を掴まれ、身動きが取れなくなった。

そして、身動きが取れなくなった私に対して三日月が言う。

「これでアイズは何も出来ないだろう？俺の勝ちでいい？」

「っ、まだ！」

三日月の言葉を否定する様に私は、〈デスペレート〉に纏わせていた風を開放する。が、三日月は吹き飛ばさなかった。

「——なんで？」

吹き飛ばさなかった三日月に私はそう呟く。

「気になるなら足元見てみれば？」

私の呟きに三日月がそう答える。三日月の返答に私は言われた通り視線を足元に向けると、理由が分かった。

三日月の足裏、正確には踵部分。鉄柱が地面に突き刺さり、吹き飛ばされない様に固定されていた。

「さっき吹き飛ばされたんだ。警戒くらいはするよ」

つい先程、一度見せただけで対応する三日月に私はただ呆気に取られるしかなかった。そんな私に三日月は言葉を続ける。

「でも、さっきのはヤバかった。サブアームが間に合わなかったら多分負けてたと思う」

「・・・でも、結局届かなかった」

三日月の褒め言葉は素直に嬉しかったが、三日月には届かなかった。そのことが悔しくて私はそう呟く。

「なら、次はもつと強くなればいい。アイズならすぐに追いつくんじゃない？」

三日月はそう言って手を放す。

「俺の勝ちでいいよね？」

三日月はフィンにそう言うと、フィンもそれに答える。

「ああ、三日月の勝ちだよ。アイズもそれでいいね？」

「・・・うん」

私はフィンにそう言って〈デスペレート〉を鞘に納める。

「俺は一回風呂に入ってくるけど、皆はどうすんの？」

「んー、僕は少しやる事やってから行こうかな。僕もたまには気ままに、じっくりと探索しておきたいし」

派閥の首領として『遠征』では常に団員達を統率する身であるが故に、プライベートな迷宮探索も時には楽しみたいとふは笑う。

「じゃあフィンも決まりねー」とティオナがにこやかに言い、また自動的にティオネも参加が決定した。

「せっかくだし、リヴェリアもどうだい？最近雑務に追われていただろう？」

と、いつの間に行ったのか、フィンはリヴェリアにもそう言う。

「・・・そうだな、私も行かせてもらおう。私達が留守の間は、悪いがガレスに任せるか」

リヴェリアもフィンの言葉に乗り、これでアイズ達を入れて七人。レフィーヤを除いて五名もの隊員が第一級冒険者と、三日月という豪華なパーティーが出来上がった。

「あ、このことベートには内緒ね！聞いたら絶対に付いてくるし、付いてきたらうるさいし」

朝のことをまだ根に持っているのか、ティオナは意地の悪い笑みで釘を刺す。

フィン達は苦笑を浮かべつつ、いつぺんに派閥の主力が出払うのも考えものなので、異議は挟まなかった。

「それじゃあ、各自準備を行って、正午にバベルに集合と行こうか」  
『おー！』

片腕を突き上げるティオナとティオネを真似て、アイズも恥ずかしがるレフィーヤとともに控えめに右手を伸ばす。

「三日月は僕達に声をかけるか、アイズかティオナと一緒に来てくれてもいいよ。道に迷うかもしれないからね」

「分かった」

三日月はフィンの言葉にそう返して風呂場へと向かった。

リヴェリアが場に委ねるように両目を瞑る中、一同はフィンの提案に賛同するのだった。



そして、私も三日月の言葉を胸に刻みつける様に心に決める。  
(後、もう少しで三日月に追いつく。もっと・・・強くならなくちや)

## 第六話

数え切れない冒険者が行き交う北西のメインストリート、『冒険者通り』。

青い青空からそそぐ陽光が種々様々な鎧の上で照り輝く中、亜人達は慌ただしく迷宮探索の準備に追われている。鎧戸と重い扉を一杯に開放する大通りの商店はさあさあと彼等を手招いているかのようだった。薄暗い路地裏にひそむ露天商は怪しい薬を片手に笑みを張り付け、駆け出しの少女を呼び止める。

急ぐ者達の肩と肩がぶつかり合い、怒声や罵声もまた絶えない。

今日もダンジョンへ潜ろうとする冒険者達を前に、通りは賑わいに満ちていた。

「アミッド、高等回復薬ちょうだい！一番効き目のいいやつ、沢山！」

「私もティオナと同じものを・・・五つ。あと、精神力回復薬も」

「かしこまりました」

光玉と薬草のエンブレムが飾られた清潔な白一色の建物内。

周囲に存在するカウンターの一つでティオナとアイズの注文に応えるのは、白銀の長髪を揺らす少女、アミッドだ。彼女は背後の棚にずらりと並べられた色とりどりの瓶を集め、カウンターの上に置いていく。群青色、柑橘色に染まった数々の回復薬が、アイズとティオナの顔を溶液の中に反射させた。

「本日からダンジョンへ長期の探索に行かれる予定ですか？」

「うん、ティオナとレフィーヤと三日月と・・・あと、フィンとリヴェリアも一緒」

「三日月？・・・最近噂の悪魔と呼ばれている人ですか？」

「あれ？知ってるの？」

アミッドの言葉にティオナはそう言って聞き返す。

「ええ、最近街では噂になってますから。街中で現れたモンスターを一撃で屠った悪魔と」

「・・・そうなんだ。ねえアミッド、何か欲しいものある？30階層までは絶対行くだろうし、教えてくれればあたし達、取ってくるよ！」

「よろしいのですか？それでは・・・白樹の葉を数枚、採取頂けますか？」

『ティアンケヒト・ファミリア』の治療院で、ティオナとアイズは道具を調達する。ティオネ探索にもお使いを頼まれている彼女達は、羊皮紙のメモに目を通しながら、回復薬の他にも多くの品物を注文している。

補給が困難であるダンジョンに長期滞在するというのなら、武器や道具、物資は必要以上に揃えておかなくてはならない。多少荷物はかさばろうとも、予想外の事態を見越しておくことが冒険者の心構えというものだ。

懇意にしているアミツドの頼みも快諾しながら、アイズとティオナは道具を山程買い込んでいった。



「レノア、邪魔するぞ」

「ああ、リヴェリア、来たか。・・・おや、小娘も一緒かい」

「ご、ご無沙汰しています」

北西のメイנסトリートを曲がった路地裏の奥深く。地下への階段を下り、傷んだ木の扉を開けたその先にその怪しげな店はあった。

室内は広く、薄暗い。天井にぶら下がったまるで火の玉のような魔石灯が、造り付けの棚に置かれた蛇や蜥蜴、蠍などといった不気味な生き物のビン詰めを照らし出している。店の奥では何かを煮詰めているのか、大きな黒い鍋から赤い湯気が立ち上っていた。レフィーヤが未だに慣れないとばかりにきよろきよろと落ち着きなく店内を見渡す中、カウンターの奥にいる老婆はリヴェリアに杖を差し出す。

「魔宝石の交換は終わったか？」

「不備はないよ、要望通り特製のやつを取り付けた。全く、『遠征』だかなんだか知らないが、四つの魔宝石も駄目にして・・・」

黒いローブに長い白髪、そして鉤鼻の店主は、小言を並べながらもその皺だらけの口に笑みを浮かべている。彼女から整備に出してい

た白銀の長杖を受け取るリヴェリアは、両手で持ちながらじつくりと見下ろした。女神も嫉妬する美貌を、杖に九つ備わった宝石が輝きを放ちながら見上げ返す。

打撃用の種類ならいざ知らず、魔道士専用の杖は、一般的に武器屋では取り扱っていない。

『魔力』を高め『魔法』の威力を変動させる魔道士の杖は、刀剣を始めとした白兵戦の武装とは勝手が異なり、作成側も魔法に精通していなければならず作り手が非常に少ないのである。

魔法関係の品を扱う者達は魔術師と呼ばれており、言うなれば杖の鍛冶師だ。

魔術師が手掛ける杖は、エルフの森に多くが存在する聖木や、特殊な金属・鉱石を材料にすることで魔道士の能力を上昇させる。中でも自然界には存在せず、彼等しか作り出すことのできない色彩様々な魔宝石は魔法効果を大幅に向上させる事ができる。この宝石がある杖となない杖では性能が雲泥の差だ。レフィーヤが今持っている己の杖も、先端中心には青白く光る魔宝石が据えられている。

奇怪な品物が置かれている店内には、魔道士の琴線に触れる短杖や木の杖が多数並べられていた。他に何かめぼしい道具はないかと思いついて回る中、レフィーヤはカウンターの奥に置かれた本の存在に気付く。

「えっ・・・あ、あれって、魔導書ですか!？」

「ああ、気付いたかあ。その通りだよ」

驚愕するレフィーヤに店主は頷いた。表紙には複雑な文様が刻み込まれた分厚い一冊の本は、『魔法』を強制的に発現させる『奇跡』の詰まった貴重書だ。この本を作り出す事が出来る者は、もはや世界に数えるほどしかない。

「まさかレノア、お前が作ったのか?」

「いひひっ、まさかあ。あたしはそんな大それた魔術師じゃあない。魔法大国に知人がいてね、よしみで一冊分けてもらったのさ」

リヴェリアの問いに、店の主は胡散臭い口調で答えを返す。

位の高い魔導書になるとら単純に『魔法』を発現させるだけでなく、

一定確率でスロット数を拡張することができる。上限である三つの魔法スロットを超える事はできないが、スロットが一つの者は二つ、二つの者は三つと、素質として個人が定められた使用魔法の数を増やす事が可能なのだ。魔導書が一級品装備以上の価値で取り引きされる理由である。

「まあ、魔法を四つ以上扱っちゃおう。お前達。には、無用の長物だろうけどねえ」

己の出自も、所属派閥も決して明かさない魔女を彷彿させる店の主は、レフィーヤと、そしてリヴェリアを見て、大きな皺と一緒に口を吊り上げる。

「お前達、魔法大国の連中に目の敵にされているよ」

「わ、私もですか!?!リヴェリア様だけではなくて!?!」

「小娘の方が千だとか何とかよっぽど大層な二つ名をつけられているじゃないか。いひひっ、夜道には気をつけな」

「余計な脅し文句は止せ、レノア。レフィーヤも真に受け取るな。もう行くぞ」

「釣れないねえ、リヴェリア・・・あ、そうそう。最近面白い話を耳にしたんだが聞かない?」

「・・・なんだ?」

彼女からの話にリヴェリアは顔を向けて言う。

老婆は口をにいと、歪め言った。

「最近、別の大陸で、巨大な人工物が発見されてねえ。今、その発掘作業が行われているって話だ」

「人工物?」

旧時代のもものが発掘されるのは珍しくない今の時代、何故彼女はそんな事を言うのだろうか?

「なんでも、ソイツは今まで発掘されたものよりもずっとデカくて見たことない素材で出来ているんだとき。ソイツの周りにも変なモノがいくつか採掘されているらしいね」

「そうか、覚えておく」

「・・・また何かあれば来な」

ゴクリと喉を転がして聞きはいつていたレフィーヤを引き連れ、怪しげに笑う店主に見送られながら、リヴェリアは店を後にした。



「ねえ、アイズ。この後アイズはどうするの?」  
「えっ?」

ティオナの言葉に私はそう呟く。

「だから、この後予定あるかなってさ」

「・・・別に特にないよ?」

「そう?じゃあ、アイズは三日月迎えに行く?私、まだ時間あるからちよつと見ておきたいのもあるし」

「わかった」

私はそう答えてホームへと歩き出す。

と、後ろからティオナが大声で叫ぶ。

「後で合流ねー!」

「・・・うん」

私はそう答えて再び歩き出した。

しばらく歩いてホームに到着した私は三日月を探す。だが、どこにも見当たらない彼に、私はキョロキョロと首を動かしながら歩いていると、曲がり角でハツシュを見つけた。

「あつ、ハツシュ」

「あれ?どうしました?アイズさん?」

首を傾げて私を見る彼に、私は三日月の居場所を聞く。

「三日月を探してるんだけど、知らない?」

「三日月さんつすか?三日月さんなら風呂入る前に野菜のプラントを移動させていましたよ?俺も手伝いましたからね。今、残ったヤツに水やるって言ってましたし」

「・・・そっか。ありがとう、ハツシュ」

「別にいいつすよ」

私はハツシュに礼を言って彼と別れる。

「畑の所かな」

私はそう呟きに、三日月がいるであろう畑の場所へ向かう。  
少し歩くと、三日月はそこにいた。

「三日月」

「・・・あれ?どうしたの、アイズ」

「ちよつと早いけど、迎えに来た」

「・・・ああ、もうそんな時間か」

三日月はそう言っ頭をかく。

「風呂入ってないけどもう行くか」

そう言っ歩き出す三日月に、私は慌てて声をかけた。

「急がなくてもいいよ。まだ時間あるから」

時間までまだ余裕はあるのだ。急ごうとする彼を呼び止めると、三日月は振り返り言っ。

「そう?じゃあ入ってくるね」

三日月は再度歩き出そうとした時、思い出したかのように唐突に振り返り私に言っ。

「そうだアイズ。手伝ってくれない?」

「・・・何を?」

三日月の言葉に私は首を傾げ、答える。

「風呂」

「・・・えっ?」

三日月の予想外過ぎる言葉に私はそう返してしまっ。

## 第七話

「えっと・・・今なんて言ったの？」

アイズは三日月の言葉に困惑しながら言う。

自分の耳が大丈夫であれば聞き間違いでは無い筈だ。だからこそ心配になる。

「・・・？風呂に入るから手伝だってって言ったけど」

聞き間違いじゃなかった。

三日月の爆弾発言にアイズは顔を赤くして、三日月に言う。

「えっと・・・三日月一人だと出来ないの？」

「右手が動けば話が別だけど、動かなくなった時はハツシユか、仲間に手伝ってもらってた」

「——っ」

そう言えばそうだ。三日月は右腕が使えない。水浴びをすることは出来ても、体を洗うことが出来ない。だから、仲間に頼るしかなかった。

「嫌なら別にいいけど」

三日月はアイズにそう言って聞いてくるが、アイズはそれに答えた。

「やらせて」

「・・・別に無理しなくていいよ」

「私が決めたことだから別にいい」

「そう、ならお願い」

三日月はそう言って、大浴場へと歩いていった。



(勢いで、言っちゃったけどやっぱり恥ずかしい)

今、アイズはタオル一枚、身体に巻いて大浴場で三日月の背中を洗っていた。

この状況をレフィーヤに見られれば、おかしくなるか、見ていられ



ない光景を目にするだろう。

(三日月の背中、小さいのにこんなにもしつかりしてる)

アイズはそう思いながら三日月の背中を洗っていく。恥ずかしさも確かにある。だが、このチャンスを逃す訳にはいかなかった。

三日月に聞きたい事がいくつかあったから。

「・・・三日月」

彼の背中を洗いながら私は言う。

「なに？」

「三日月の背中についてこれって、何？」

三日月の背中に突き出すように出ている三つの突起。アイズはそれを触りながら三日月に聞いて見る。

「阿頼耶識の事？」

「アラヤシキって言うの？」

「うん」

アラヤシキ。聞いたことのない言葉に私は疑問を浮かべる。これが何か三日月の強さと関係があるのだろうか。

「いつ、これを着けたの？」

「ずっと昔」

ずっと昔。子供の頃からだろうか。三日月の事をもっと知りたくて聞いて見る。

「どれくらい？」

「子供の頃」

「何歳の時にやったの？」

「・・・」

三日月が押し黙る。まるで思い出すかのように沈黙する彼にアイズは手を止め、お湯を三日月の背中に流す。

泡が水と共に流れ落ち、三日月の体が綺麗になっていった。

そのお湯が流れる音が終わると同士に三日月が言う。

「確か・・・一番最初は俺が初めて“人を殺した”歳だから七歳くらい」

「えっ・・・」

人を殺した。三日月はそう言った。つまり彼は犯罪者ということ

だ。アイズは周りを見渡すがこの大浴場には今、二人しかいない。だから「私以外に知らない」。

「・・・どうして、殺したの?」

ちよつとだけ気になり聞いて見る。彼が悪い人には見えない。むしろ仲間にはとても優しい彼が、人を殺すなんて絶対に何か理由があると思うから。

「ソイツがオルガを殺そうとしたから殺った。それだけ」

「オルガ? 三日月の仲間なの?」

その人の事が気になり、アイズはは三日月に聞く。

だが、それがアイズにとっての間違いだった。

「うん。俺達の家族」

家族。今のロキと私達のような関係だろうか? 私はもう少しだけ聞いて見る。

「三日月はオルガさんの事、大事・・・なの?」

「うん」

アイズの問いに三日月は即答した。そして三日月は言う。

「だって俺は、俺の命はオルガにもらったものだから。俺の全部はオルガの為に使わなくちゃいけない」

何も言葉が出なかった。

「どういう・・・こと?」

アイズは掠れた声でそう呟く。

アイズの呟きに三日月は疑問を浮かべる顔をしながらも言う。

「俺があの日、オルガにあった時から決めたんだ。俺の命はオルガがくれた物だから、俺の全部はオルガの為に使わなきゃいけないって。だからオルガが目指す先が俺の目指す先なんだ」

意味が分からない。何いつてるの? いつもの三日月に戻って。

私はそう思いながらも、黙って三日月の言葉を聞き続ける。

そして、三日月の事を理解してしまった。

三日月は私の事を見ていない。後にも先にも、三日月の視線は才

ルガという人にしか向けられていない」。

それを確かめたくて、私は言った。

「三日月は・・・私とオルガって人とどっちが『一番』?」

今までの話で分かっているはずなのに、でも聞かずにはいられなかった。そして三日月は私に一言。

「ごめん」

三日月は私に謝った。

謝ってほしいわけじゃない。ただ、自分が勝手に聞いてみただけだから、そんな顔をしないで。

「・・・そっか」

「でも私、頑張るから。三日月に追いついて三日月も守れるくらいに頑張るから」

三日月の強さの理由。私はそれが分かった。

三日月には守りたい人がいる。それだけで三日月は強くなった。

だから、追いていかれないように強くなるためじゃない。三日月や皆を守る為に強くなりたい。強くなる理由が他に分かった気がする。

と、

「アイズは家族を守りたいの?」

「うん」

「そっか、ならすぐに出来るかもね」

三日月はそう言って立ち上がる。そして私に言った。

「俺もあるよ、目指す所」

「どんな所?」

私は聞き返してみる。三日月の目指す先がどういったものかを。

「飯がいっぱいあって、寝床もちゃんとあって、皆で馬鹿笑い出来るそんな場所に行くこと」

「叶えばいいね。三日月の夢」

「うん」

私の言葉に三日月はそう言って大浴場から出ていった。

一人大浴場に残されたアイズはポツリと誰もいない大浴場で呟く。

「三日月、凄かったな」

アイズはそう呟いて口を湯船につけた。



「神様！行ってきますー！」

白髪の少年が小さな女の子にそう言って手を振る。

「行ってらっしゃい、ベル君！気を付けるんだよ！」

「はい！気をつけて行ってきますー！ 昭弘さんも今日からしばらくダンジョンに行くんですよね？」

少年は神様と言った女の子の少し後ろにいる大柄な体軀をした青年に聞く。

「ああ、しばらくな。それに家族が此処にいるって事も分かったからな。それに アイツ なら絶対に ソコ に向かう」

低い声で少年にそう言って、昭弘は荷物を肩に背負う。

「ベル、もう時間だろ。俺達にかまっていなくてさっさと行ってこい」

「あ、はい！じゃあ行ってきますー！昭弘さんも家族、見つかるといいですーね！」

「ああ、そうだな」

それじゃあ行ってきますー！と大声で叫ぶ彼にツインテールの彼女は彼に言う。

「もう、行くのかい？」

「ああ、世話になった」

「ボクとしてはもう少しゆっくりでも良いと思うんだけどね」

彼女は昭弘にそう言って笑うが、彼は静かに言う。

「俺の家族が此処にいるって事が分かったんだ。なら、早いとこ合流した方がいい」

「そう言うもんなあ」

「そう言うもんだ」

彼女の疑問にそう答えて明弘は言った。

「もし、家族と合流できたら一度顔を出す。ソイツも連れてな」  
「うん、楽しみにまってるよ。アキヒロ」

「ああ、楽しみにしている」

昭弘はそう言って歩き出す。彼の大きなその足はしつかりと前を進み続けていた。そして空を見上げながら彼は思う。

(三日月、お前は一体どこにいる？昌弘、アストン、ラフタ……もし会えたらその時に詫びさせてくれ)

## 第八話

「……………」

黄昏の館の中央塔、その最上階。

酒瓶や物珍しいアイテムで溢れ返っている自室で、ロキは一人、黙って情報紙を読み取っていた。

商人や一部の「ファミリア」が販売している数枚重ねの羊皮紙の巻物は、共通語でびっしり書かれた記事がいくつも載っている。

中には精緻な挿画がついているものもあり、大胆で目立つタイトルやウィットに富んだ文面など、客の購買意欲をそそるよう趣向が凝らされていた。

面白おかしく綴られる噂話が半分を埋める情報紙の中で、ロキはモンスターが街頭で暴れ回る挿画付きの記述——先日怪物祭に関しての文面を目で追っていた。

「ん……：：：やっぱどこも似たり寄ったりのことしか書いとらんかあ」  
椅子に腰をかけるロキは、ぽいっと情報紙をテーブルに放る。卓上には今しがた読んでいたもの以外にも数部の巻物が広げられていた。そしてそのほとんどが、挿絵を併用した大々的な記事で怪物祭の事故を取り扱っている。

【ガネーシャ・ファミリア】の不手際、都市外の密偵による襲撃、あるいは気まぐれな神による愉快犯……祭の途中で脱走し都市を騒がせたモンスターの一件に、紙面では様々な憶測が飛び交っているものの、ロキの求めるような情報——食人花モンスターについて——  
——が載っている記事は一つもない。

ふうむ、と頭の後ろで両手を組みテーブルを見下ろしていたロキは、何かを考えるように視線を天井に向けた後、やおら立ち上がった。部屋を出て螺旋階段を下りていく。空中回廊を経て塔の一つに足を運んだ。

通りかかる部屋の前で誰かいないか見て回りつつ、ぶらぶらとするように歩きながら、やがて団員達がよく集まる応接間に辿り着いた。「おろ、ベートだけか？アイズたん達は？」

「・・・ダンジョンだとよ。フィン達とあの気にくわねえ野郎を巻き込んで、しばらく帰ってこねーらしいぞ」

談話室としてもよく使われる廊下に面した部屋には、ベートが一人でソファアールの上に寝転がっていた。彼はロキを一瞥した後、寝たままぶつきらぼうに答える。

「なんや、取り残されたん？」

「ちげえーよー！」

上体を起こし、声を荒らげるベート。馬鹿を言うなどばかりに半眼を作り上げ、持ち上がった尻尾でばちん！とソファアールを叩く。ともすれば凶星を指されたようにも見える彼の姿に、ロキはまあまあと云って宥めた。

それから今日の予定を訊ねると、「・・・何にもねえよ」と亭杵を挟んでそっぽを向かれる。

「・・・なあべート、悪いんやけど、今日一日うちに付き合ってくれんか？」

「ああ？」

なにすんだ、と怪訝そうな表情を浮かべるベートに、ロキは答えた。

「ちよつと、『調べもん』をしたいんや」



アイズ達は予定通り、正午頃バベルを発った。

ダンジョンに入ると早速とばかりに『ゴブリン』や『ゴボルト』が現れ、そしてすぐに追い払われる。道すがら前衛に配置されたティオナとアイズ、そして三日月がばったばったと敵を倒していくと、その瞬殺振りに敵わないと悟ってか、彼女達の前に立ち塞がるモンスターは激減していった。

周囲にいた冒険者も関わるまいと言うように姿を消す。

アイズ達はあつという間に『上層』を超え、『中層』の17階層半ば

まで足を進めた。

「あー、やっぱりこれがあると落ち着くなー」

「テイオナさん、作り直してもらっていた武器、完成したんですか？」

「うん、《ウルガ》二代目！できたてほやほやだよー！」

レフィーヤの問いにテイオナは、片手で持った大双刃《ウルガ》を軽々と回しながら答える。

探索前に「ゴブニュ・ファミリア」から受け取ってきた超大型の専用装備に、彼女は機嫌の良さを滲ませた。

以前のものに比べ若干剣身の厚みが増し、一方で鋭さも増しているのだろうか。アイズの持つ《デスペレート》以上の費用をかけて作られている上級鍛冶師達の力作をもって、テイオナは無謀にも飛出してくる虎のモンスター『ライガーファング』を一撃で叩き斬る。

「ゴブニュ・ファミリア」の苦労が目につかぶわね・・・」

嘆息しながらもテイオナがモンスターの死骸から『魔石』を摘出する。

サポーターを兼任するレフィーヤとともに、彼女は筒型のバックパックを背負い戦利品を収集していた。フィンやリヴェリアがゆるりと傍観する中、アイズの屠ったライガーファングからも紫紺の結晶とドロップアイテム『ライガーファングの毛皮』が採取される。

代剣の弁償代金のためにも戦闘は積極的にこなしていかななくてはならないが、本番はここよりも更に下部の階層である『下層』、そして『深層』からだ。

資金集めも、下層、深層で探索を行った方が遥かに資金集めの効率がいい。

目標資金額四〇〇〇万の道のりは遠い。アイズはこっそりと気合を入れながら、まずは下層域を目指すべくパーティの先陣を切っていた。

「階層主いないけど、誰か倒しちゃったの？」

「ソー、街の冒険者が総出で片付けたみたいだよ。交通が滞るからって」

大人数のパーティでも通行が可能な洞窟状の巨大通路を経て、アイ



ズ達は17階層最奥にある大広間に到着する。会話するティオナとフィンの視線の先、冒険者の行く手を阻む『迷宮の孤王』の姿はなく、代わりに『ミノタウロス』を始めとしたモンスター達が広大な空間にのさばっていた。

間の主がない広間をアイズ達はまっすぐ縦断した。襲いかかってくるモンスター達をティオナとフィンも加わって軒並み倒していく中、白兵戦が苦手であるレフィーヤもリヴェリアの指導のもと、苦戦しながらも杖術で撃退していく。

そんな中でも一番モンスターを倒していくのが三日月だ。尻尾状のブレードでミノタウロスを突き刺し、他のモンスターに向けて放り投げたり、巨大メイスで叩き潰す、両手の大型のネイルで敵に突き刺し盾にするなど、やりたい放題。もはやモンスターが可哀想に思えるくらいに蹂躪、瞬殺していく。

「ん、終わり」

等の三日月は特に感情を表に出すことなく、そう口にして『バルバトス』を解除していく。

そんなことがややあつて、大広間の奥の壁に空いた洞窟——次階層の連絡路へと進んだ。

「ん、ようやく休憩」

傾斜を描く洞窟を抜け、ティオナが一段落とばかりに伸びをする。18階層に降り立ったアイズ達を迎えたのは、頭上よりそそぐ暖かな光、そして木々が疎らに生えた森の入り口だった。

モンスターが溢れる地下迷宮に相応しくないほどの穏やかな光と清浄な空気。まるで地上に舞い戻ったような錯覚を催すこの階層は、アイズ達が以前の『遠征』の際に利用した50階層と同じ、ダンジョンに数層存在する安全階層だ。

「いつ来ても綺麗ですね、この階層は」

「うん、そうだね……」

森を始めとした自然を好むと好むエルフの性か、頬を緩ませるレフィーヤにアイズは頷く。

「三日月はどう？」

「あー、うん。綺麗だと思う?」

若干疑問系の三日月にアイズは苦笑する。

「今は・・・どうやら『昼』のようだな」

手で傘を作り、リヴェリアが頭上を見上げる。

森の中で大きな日溜まりを作るほど枝葉の屋根が薄れているその先、階層の天井には、無数の水晶が隙間なくびっしりと生え渡っていた。

中心には太陽のように輝くいくつもの白水晶の塊、そしてその周囲には優しく発光する青水晶の群れ。咲いた菊の大輪を連想させる水晶がそれぞれ光を放つことで、18階層には地下でありながら『空』が存在している。多くの冒険者達の目を奪ってきた、ダンジョンの神秘だった。

形作られたこの地下の『空』は時の経過によって水晶の光量が落ちていき、『朝』、『昼』、『夜』の時間帯を作り上げる。

また時間帯の変化は一定ではなく、地上とは少しずつずれが生じ、時差は大きくなったり小さくなったりと変動していた。

「ねえねえ、どうする?このまま19階層に行っちゃおう?」

「街に立ち寄る方が先よ。来るまでに集めたドロップアイテムを売り払っておかないと、どうせすぐに荷物が一杯になるわ」

アマゾネス姉妹が会話を交わす中、アイズは三日月が何か食べているのに気づき視線を向ける。

「三日月、何食べてるの?」

「ん?ああ、これ」

三日月はそう言って上着のポケットから何かを取り出す。それは何かの植物の実か種らしきものだった。

「それは・・・なに?」

「デーツ。上の店で売ってた。食べる?」

三日月は私にデーツを持った手を私に向けてくる。

「じゃあ、食べる」

興味本位でアイズは三日月からデーツを数粒受け取り、口に含む。甘い味が口の中に広がる。噛めば噛むほど甘さが出てとても美味し

かった。アイズはもう一口に含み、噛んだ瞬間。

「~~~~~ツツ!? ケホツケホツ!」

噛んだ瞬間、凄まじい苦味やエグみがアイズの口の中を襲った。

「アイズさん!? 大丈夫ですか!」

レフイーヤがアイズが突然咳き込んだことにより、心配するように声をかけるが、アイズはそれどころではなかった。突如口の中を襲ったあの味にアイズは目に涙を浮かべながら三日月に聞く。

「三日月・・・さっきの・・・」

「それ、ハズレが入ってるからそれ食べたんだと思う」

三日月はそう言ってデザートを口に含んだ。

「・・・ハズレ?」

だとしたらとんでもない物を食べさせられたものだ。だけど、あの甘さは確かにクセになる。ハズレを引かなければだが。

今度買ってみようかなと思うアイズは最後に残ったデザートを口に入れる。それは当たりだったのか、口直しにはちょうどいい甘さだった。



15階層・・・

「オオラア!!」

昭弘は巨大なハルバードをモンスターに振り払う。その振り払われた軌道にいたモンスターは一瞬にして灰へと変わった。

「くそっ、一つ一つは弱えが数が多いな」

昭弘はそう呟き、《グシオン》を解除する。

「しっかし、相変わらずコイツにはなれねえ。自分がモビルスーツになったみたい、でやりづらい」

阿頼耶識で操るとはまた違った感覚でまだ慣れない。

「文句言った所で仕方ねえか。早く三日月を探さねえと」

三日月がこの「オラリオ」と言う場所で「冒険者」というものをやっているのは分かっている。三日月が此処にいるのなら、「死んだア

イツらも此処にいる筈だ。

慣れない場所で一人でいるのは危険過ぎる。昭弘は更に下の階層へ続く階段を下りていった。

## 第九話

「あー、この街に来るのも久々のような気がするなー」

ティオナの言葉が向かう真正面、大陸の片隅を切り取ったかのよう  
な高く巨大な島の頂上付近に、その『街』は築かれていた。

木の柱と旗で作られたアーチ門が記す名は『リヴィラの街』。

中層域に到達可能な限られた上級冒険者達が経営する、ダンジョン  
の宿場街である。

この街の起こりは、もとを辿れば、より能率的に未到達階層を開拓  
するためダンジョンに大規模な中継拠点を設けようとした、過去のギ  
ルドの計画によるものだ。他階層から進出してくる断続的なモン  
スターの侵攻に加え、多くの人員や防衛費——雇った第三級以上の冒  
険者への報酬——など莫大な費用という点から蹉跌を来たしその  
計画を、冒険者達は勝手に引き継ぎ、この『リヴィラの街』を築き上  
げたのである。

「あの、前々から気になっていたんですけど……ここに書かれてある  
三百三十四っていう数字って、もしかして……」

「ああ、『リヴィラの街』が再築されてきた数だ。今は三百三十四の  
代……つまり過去に三百三十三回壊滅してきたことになる」

「さ、三百三十三回……」  
「凄いね、それ」

リヴェリアの返答に、アーチ門を見上げるレファイヤーは呆然とし、  
三日月はありきたりな感想を口にする。

モンスターが産まれない安全階層とはいえ、ここはダンジョンだ。  
突発的なイレギュラーがいつ何時起こることも知れない——事実イ  
レギュラーが発生する度に『リヴィラの街』は崩壊してきた。

そんな中、冒険者達は危機を悟ればこの街をあつさりと放棄し、地  
上へと帰還する。

そして全てが打ち壊された後、再びこの階層に舞い戻り、街を作り  
直すのだ。

多大な投資をした補給基地を死守・維持をしなければならなかった

ギルドとの違いはそこにあつた。意地汚い冒険者のしぶとさを象徴するような街を、侮蔑と呆れ混じりの賞賛をこめて、『世界で最も美しいならず者達の街』と呼ぶ者もいる。

「突っ立つてないで、早く入りましょう？一休みもしたいし」

ティオネの呼びかけからアイズ達は街へと足を踏み入れる。

湖に面した島の東部、そして高さ二〇〇Mはある断崖の上に存在する街は、水晶と石の地形も利用して造られた街壁によって取り囲まれている。少々無造作に置かれた岩々の塊はモンスターの襲撃にも耐えられるほどの厚みと高さを持っていた。

アーチ門をくぐった矢先、アイズ達の目に飛び込んでくるのは、天幕や木の小屋、あるいは出店風の多くの商店だ。断崖の斜面に折り重なるように設けられた店々は街の再築が容易な低費用のものばかりで、建物と呼べるほどの建築物は殆どない。

天然の洞窟を活用した酒場の前を通り過ぎる傍ら、レフイーヤが今後の予定を確認するように口を開く。

「買取り所で魔石やドロップアイテムを引き取ってもらって、それから……」

「宿はどうするの？またいつもみたい、森の方でキャンプ？」

「ンー、今回くらいは街の宿を使おうか。野営の装備も持ってきていないしね」

「でも、団長……一週間も寝泊まりすれば結構な金額になると思いますよ？ここはリヴィラなんですから……」

ティオネの言葉にティオナが文句を言う。

「ティオネ、けち臭ーい。いーじやん、たまにはさー」

「ケチ臭い言うな!!あんたはすぼら過ぎんのよ!」

ティオナとティオネのやり取りに、笑みを漏らしたフィンが提案する。

「いいよ、宿代は僕が全部出そう。アイズ達はお金を貯めなきゃいけないみたいだしね」

「……ごめん、フィン」

と、隣で三日月も言った。

「俺も出すよ。どうせ金なんてほとんど使ってないし」

「良いのかい？僕が払ってもいいけど？」

フィンの言葉に三日月は言葉を返す。

「別にいいよ。俺だってアンタ達には世話になってるんだ。ハツシユも世話になってるからその返し」

三日月とフィンの言葉を聞いて非常に申し訳なく思うアイズに、フィンと三日月は「大丈夫」と返事をする。

「……………」

「リヴェリア……？」

フィンと三日月に礼を告げたアイズは、ふと、一人黙っているリヴェリアの様子に気付く。

彼女は水晶の白と青が美しい街並みを見回しながら、その唇を開いた。

「街の雰囲気、少々おかしいな」

「そういえば、いつもより人が少ないような……」

リヴェリアの言葉にレフィーヤも周囲を見やる。

アイズ達とすれ違う冒険者は片手で数えるほどしかいなかった。入り口付近では気にならなかった人気の少なさも、街の中ほどにある広場に差しかかると、流石に違和感がある。

常に賑やか、とまではいかずとも雑踏とざわめきが絶えないダンジョンの街は、今は閑散と言つていいほど静まっていた。

「えーと……どうする？」

「ひとまず、どこかお店に入ろうか。情報収集も兼ねて、街の住人と接触してみよう」

ティオナの言葉にフィンが答えた。街中長槍を携える彼に率いられながら、アイズ達は広場から移動する。

よく見れば商品を放つたらかして空けられている店も少なくない中、天幕でできたとある買取り所に店主の姿を発見し、足を運んだ。

「今は大丈夫かい？」

「ん？おお【ロキ・ファミア】じゃないか。客かい？」

暇そうにしていたアマゾネスの店主に、ああ、とフィンは答える。

小さな天幕はカウンターで内と外に仕切られており、店主のいる内側には冒険者から買い取った品々で溢れていた。

ティオネとレフィーヤが所持していた魔石とドロップアイテムを手渡していくのを脇目に、フィンは世話をするように尋ねる。

「街の様子がいつもと違うようだけど、何かあったのかい？」

「・・・ああ、あんた達、今街に入ったばかりなのか」

魔石を鑑定しながらちらりとアイズ達を見やった女店主は、辟易したように話した。

「殺しだよ。街の中で、冒険者の死体が出てきたらしい」

三日月以外、アイズ達は目を見張り、驚きをあらわにする。

続きを促すまでもなく、彼女は顔をしかめながら語った。

「ちよつと前に見つかつたらしくてね。狭い街さ、あつと言う間に話が広まって、ほとんどの奴等が野次馬に行つちまつてるよ。この街で殺し沙汰なんて、酔った馬鹿二人が喧嘩でくたばって以来、しばらくなかつただけどねえ」

編み込んだ髪をピンと弾きながら、アマゾネスの店主は吐息をつく。そんな彼女に、フィンは質問を重ねた。

「何者かの手によって殺されたのは、確かなのかい？」

「さあね。あたしも他の奴等が騒いでいるのを耳にただけだから、詳しくは知らないよ」

「その死体はどこで見つかったのか、わかるか？」

「ここから上の方にある、ヴィリーの宿さ。人が溜まつているだろうし、行ってみればすぐにわかるんじゃないかい？」

リヴェリアへの返答を最後に、店主は黙々と鑑定を進め、魔石とドロップアイテムの買値を提示した。

アイズ達は戦利品を全て売り払い、天幕を出る。

「・・・どうしますか、団長？」

「ここで宿を取る以上、無関心でも無関係でもいられないだろう。行ってみよう」

ティオネにそう返しながらフィンは歩みだした。聞いた情報の通り、崖の縁に多くの店がひしめいている現在地から、街の上方へ向か



う。

と、三日月がいつもと違う様子で周りを見渡しながら歩いているのを見て、今のアイズは聞いた。

「三日月？どうしたの？」

「殺しがあつたんなら、周りを警戒するくらいししないと皆が安心できないでしょ」

「・・・慣れてるんだね」

「慣れてるっていうか、別にいつも通りだよ。昔からそうだったし」

三日月の言葉にアイズは少し顔を暗くする。

確かに三日月はそういった事に慣れていると言った。

けど、それは三日月にとつて当たり前でアイズ達にとつては当たり前ではない。人を殺したと言っていた三日月にアイズが見ている世界と三日月が見ている世界が、違うというのが実感させられる。

「・・・アイズ？」

喋らなくなった自分に声をかける三日月にアイズは返答した。

「・・・ううん、何でもないよ」

「そう？·ならいいけど」

そう言つて三日月はまた周りを見渡す。

そんな彼にアイズは言った。

「三日月」

「なに？」

「私も手伝つていい？」

私の問いに三日月はすぐに返答する。

「じゃあ、俺は右側見るから、アイズは左側お願い」

「うん」

アイズはそう返事を返して、左側を見る。

街はとても静かで、そしてとても不気味だった。

## 第十話

街の中心地を過ぎた辺りで、姿をくらましていた冒険者達を発見した。

大して広くもない路地に密集する人集りは、とある洞窟の入口前に出来上がっている。今は傾いている壁にかけられた看板は、共通語で『ヴェリーの宿』と書かれていた。

話に聞いた宿屋はここで間違いなさそうである。

「なんか、いっぱいいるね」

「・・・うん」

「うわー、ちよつとこれ、進めなさそう・・・」

「宿の中はつ、入れないんでしょうか？」

多くの亜人が形成する人立ちはとてもではないが割って進めそうもない。そこら中からざわめきが聞こえてくる中、今のティオナとレフィーヤが首を伸ばしていると、フィンが動く。

「ちよつと僕が見てくるよ。リヴェリア達はここにいてくれ」

小柄な小人族の体格を活かし、彼は人集りの足もとを縫うようにスルスルと奥へ入っていった。

おおー、とアイズや三日月が感心する横で、一人取り乱すのはティオネである。

「団長つ、待っててくださいい!?——ちよつとあんた達、どきなさいよ!」

「ひっ、【ロキ・ファミリア】・・・!!」

ティオネの形相と叫びを浴びせられた冒険者達が一斉に左右に割れる。

怯えながら道を開ける彼等にどうも気まずいものを覚えつつ、アイズ達は逸るティオネを先頭に人混みの中を進んだ。洞窟の入り口には見張りらしき冒険者が数人立っていたが、フィンに丸め込まれたのか、あっさりとアイズ達を宿の中に通す。

天然の洞窟を宿屋にしている『ヴェリーの宿』は、アイズ達が横に並んでも優に移動できる広い通路が、曲がりくねった状態で奥へと続

いていた。頭上も高く、洞窟特有の閉塞感はそこまでない。

入り口をくぐって間近には受付場所らしきカウンターが置かれており、周囲の壁には少々奮発したような燭台型の魔石灯が数本設置されていた。観賞用の絵画のように三振りの短剣も等間隔に飾られている。足元に敷かれている毛皮の絨毯は、モンスタードロップアイテムだろうか。

この広い玄関だけでも、『ヴィリーの宿』は『リヴィラの街』の中でも上等は宿屋であることが窺えた。剥き出しの石壁と壁の割れ目から生える青水晶に囲まれながら、アイス達は先に進んでいたフィンと合流し、宿屋の奥へと向かう。

通路の左右にはいくつもの縦長の穴があり、帳——臙脂色模様の布帛がそれぞれ垂れ下がっている。中を窺ってみるとベッドが置かれた空間があり、どうやらこの帳が客室の扉代わりのようだ。アイス達は三名ほど冒険者が入口前に待機している部屋を見つけ、うろたえる彼等に頼み込み、中へ踏み入らせてもらった。

「……っ！」

部屋に入ったアイズは一瞬、言葉を失った。

洞窟の一番奥まった場所にある部屋は、真っ赤に染まっていた。そして惨憺たる姿で床に横たわるのは、頭部を失った男の死体だ。

下半身のみ衣服を纏った、鍛えられ筋張った褐色の肉体。無造作に投げ出された手足は男の苦悶を物語っているかのようだった。頭は踏み潰されたのか、首から上は弾けた果実のように成り果て生前の容貌は知るよしもない。大量の血の海に浮いている薄紅色の肉片と、脳漿が辺りに散らばっていた。

「見ないで、レフィーヤ」

有無を言わせない口調でアイズは、レフィーヤの視線を死体から遮る。狼狽する彼女を背後にやりながら、あらためて部屋全体を見渡す。

もともと赤い生地絨毯は血溜まりによって赤黒く変色し、木編みの籠、小棚、そしてベッドまでもが飛び散った鮮血を浴びている。持ち込まれた複数の魔石灯で隅々まで明るく照らし出されている長方

形の部屋の内装は、今や無残な色合いに塗装されていた。

部屋に飾られてある多くの水晶の装飾品が、固まりかけている赤い血を滴らせている。

「ぐる……」

眉間を歪めながらティオナが呟くと、室内にいた二人の男性が振り返った。

遺体の横で膝をつき、現場検証をしていた彼等の内の一人が、アイズ達を見るなりその太い眉を吊り上げる。

「ああん？おいてめえ等、ここは立ち入り禁止だぞ?!見張りの奴等は何やってやがんだ!」

「やあ、ボールス。悪いけど、お邪魔させてもらってるよ」

怒るヒューマンの男に、フィンは勝手知ったる様子で話しかけた。

筋肉隆々の巨漢だ。凶悪な人相に黒い眼帯をしたいかにもといった風貌で、見るものを萎縮させる迫力を備えている。

上半身には袖無の戦闘衣を身に付け、盛り上がった肩や腹筋を剥き出しにしていた。

ボールス・エルダー。

この『リヴィラの街』で買取り所を営む上級冒険者だ。『オレのものはオレのもの、てめえのものもオレのもの』と言ってはばからない彼は、事実上の街のトップでもある。

そんな彼にフィンはまあまあと両手を上げた。

「僕達もしばらく街の宿を利用するつもりなんだ。落ち着いて探索に集中するためにも、早期解決に協力したい。どうだろう、ボールス?」  
「けっ、ものは言いようだなあ、フィン。てめえ等といい、「フレイヤ・ファミリア」といい、強え奴等はそれだけで何でもできると威張り散らしてやがる」

「アイツ自分のこと棚にあげてない?」

と、ティオナが不遜な口ぶりでフィンと話をしているボールスを睨みつける。

「それで、どうなっているんだい?この冒険者の身許や、手にかけて相手について何かわかったことはあるのかい?」

「ああ・・・くたばった野郎は、ローブの女を連れこんできた全身型鎧の冒険者だ。兜まで被っていたから顔はわからねえが、連れの女が消えているから、犯人はソイツで間違いねえ・・・そうだな、ヴィリー？」

「ん、少なくとも俺はこの部屋にその男と女しか通してねえよ、ボールス」

ボールスの他に部屋にいた獣人の青年、ヴィリーはその確認に頷いた。中背中肉でボサボサの髪、左右の頬には赤の線でペイントされている。

宿屋の主人である彼は捕捉するように話を続ける。

「昨日の夜に、二人で来てよ。どっちも顔を隠して、宿を貸し切らせてくれって頼まれたんだ」

「たった二人なのに、客室を全て貸し切り・・・ああ、そういうことか」  
「ああ、そういうことだ。うちの宿にはドアなんて気の聞いたもんはないからよ、喚けば洞窟中にダダ漏れだ。やろうと思えば覗き放題だしな」

フィンと言わんとしていることをすぐに察し、話に耳を傾けていたレフィーヤも何かを悟ったのか、かくつと相貌を真っ赤に染める。

「まあ、男の浮かれたような声に何しに来たのかわかつちまったからな、こつちは白けたが、もらうもんはもらつちまったし・・・くたばつちまえなんて思いながら部屋を貸したら、このざまだ。ゾツとしちまったよ」

軽い調子で語る彼だったが、その顔には肝を冷やしたという感情の名残がありありと残っていた。片手を首に回す彼は参ったように溜息をつく。

リヴェリアが悼むように遺体の潰れた頭部へそつと布を被せる中、フィンは質問を投げる。

「そのローブの女の顔は見なかったのかい？」

「フードを目深に被ってたんだ。男と同じで、顔は全然分からなかった。・・・あー、でも、ローブの上からでもわかるくらい、めっちゃくちゃいい体してたな」

「おお、実はオレ様も街中で、ちらつと見かけたんだが……ありやあーいい女だ。顔は見えなかつたが、間違いねえ」

力説するヴィリーに続き、ボールスまでもがその話をする。

鼻息が荒くなっている彼等に、テイオナを始めとした女性陣が冷たい視線を送る。

アイズは三日月に視線を向けるが、三日月はそんな話に興味すらないのか、死体の状態を観察していた。ちよつとだけほつとするアイズを片隅にリヴェリアが言った。

「宿の支払いは、証文で行わなかったのか？」

「悪い、してないんだ。破格の魔石を気前よくどんどんと渡されちまって、釣りはいらないうつていうもんだから、それで済ませちまった」

リヴェリアの質問に対してヴィリーがすまなそうに答える。

「まあ、今からこの野郎の身許を直接聞くところだがな。——おい、

『開錠薬』はまだか!？」

廊下に向かってボールスが叫ぶと、ヒューマンの冒険者がちようど駆けつけてきた。

慌てて来た彼は、部屋の前で待機していた獣人の小男とともに入室し、携えていた小瓶を渡す。

ボールスが遠慮なく仰向けの遺体をひっくり返すと、襟巻きをしている小男はそばに歩み寄った。

かがみ込み、小瓶の栓をきゅぽんと引き抜く。赤い液体を背中に垂らすと、彼は模様を描くように肌の上で指をなぞり始めた。

『開錠薬』って、確か……」

「我々の恩恵を暴くためだけの道具だ。正確な手順を踏まなければ、それ単体だけでは神々の錠は解除できないがな」

レフィーヤの隣で、死者を辱める真似をするボールス達をリヴェリアは険しく見据えていた。

「あーいうの、どこで覚えて帰ってくるんだろうね……」

「冒険者が金にがめつくして何でもする『物好き』なのは、今に始まったことじゃないでしょ」

呆れ顔のテイオナ、半眼を作るテイオネの視線の先、獣人の小男は

「ステイタス」が隠れている背中に指を淀みなく走らせていく。

溶液を垂らし複雑かつ正確な動きを刻めばいかなる神々の錠も解錠できる道具を駆使し、ややあつて、碑文を彷彿させる文字群をその背に浮かび上がらせた。

「へえ、こんな風になつてんだ」

三日月は眩きながら物珍しそうに見る。

「ボールス、できた」

「おう、でかした」

小男が退く中、錠を開けた「ステイタス」を見下ろすボールスは、しまった、と言うかのようにぱしんと頭を叩く。

「いけねえ、【神聖文字】が読めねえ……オイお前等、外に出て、もの知つてそんなエルフを一人二人連れてこい！」

「待て。【神聖文字】なら私が読める」

「私も」

使い走りへ声を張るボールスに、リヴェリアとアイズが口を開いた。

眼帯をしていない右目を丸くした彼は、肩を上げて道を開ける。進み出た彼女達は「ステイタス」を俯瞰し、【神聖文字】の解読に移った。

やがて、ゆつくりと、彼女達は唇を動かした。

「名前はハシャーナ・ドルリア。所属は……」

「……【ガネーシャ・ファミア】」

アイズがリヴェリアの言葉を引き継いだ瞬間——場は水を打ったように静まり返る。

一瞬、室内から音が消え去った。

そして次には、にわかに騒然となる。

「【ガネーシャ・ファミア】!?!」

「おいっ、間違いじゃないのかよ！」

瞬く間に上がる悲鳴のような声々に、アイズも、リヴェリアも遺体の【ステイタス】に視線を縫い付けたまま動かない。張り詰めた眼差しを浮かべる彼女達に、三日月以外の皆も目を見張った。

骸の正体は都市有数の実力派【ファミア】——【ロキ・ファミ

リア」にも迫る派閥の団員という情報に、ヴィリー達が顔を青くする中。

わなわなと震えるボールスは、平静を欠いた声で、何よりも看過できない事柄を叫んだ。

「冗談じゃねえぞ——【剛拳闘士】つつつたら、L.V. 4じゃねえか!?!」

アイズ達の口からもたらされた、第二級冒険者の死。

同時に導き出されるのは、ローブの女——犯人は少なくともL.V. 4以上の実力者という事実。第一級冒険者に相当する殺人鬼が、まだこの街に潜伏しているやも知れない可能性に、凍てつくような戦慄が走り抜けた。

◇◇◇◇◇

「ハア、ハアハア……クソ!?何なんだよ!?アイツは!?!」

男はそう叫びながらも、ダンジョンの中を走り続ける。

男達がモンスターを倒そうとしていたら急に横やりが入り、そのモンスターを搔つ攫つて倒した青い奴がいた。男はそれに対して、文句を言おとしたのだが突如その青い奴がその男達に攻撃し始めたのだ。一番低いL.V. でも2という中層までなら普通に行けるメンバーだった筈なのに、一瞬にして“二人が殺された”。

そんな奴にその男は逃げ出した。

あんな化け物に勝てる筈がない。男はソレを察して逃げ続けた。

かなりの距離を走った所で、男は足を止め後ろを振り返る。

「ここまで来ればもう大丈夫だろ……」

男は安堵し、溜息を付いた瞬間。

“カチャリ”

と、金属の音が鳴り響く。

「誰だ?」

男がそう言っつて振り返ると、そこにいた。

血で塗られた剣を片手に青い装甲をつけた“怪物”が。

「……嘘だろ?」



いつの間に後ろに居た？それよりも、何故コイツは俺のいる場所が分かった？

思考を巡らせる男にその怪物は剣を構え、そして――  
男を貫いた。

「ゴボオ!？」

男が大量の血を吐き出す。血の海に倒れ伏し、男がその怪物に顔を上げて最後に見たのは。

足裏に付けられた刃で、自分を踏み潰そうとする悪魔の姿だった。

コイツでは駄目だ。

せめて、あの『怨敵の横にいたあの女と同じ実力者』でない自身を扱うに相応しくない。

『魔石を吸収』し、意思を持った悪魔はダンジョンの中を放浪する。

## 第十一話

収まらない声々が石の壁に、青い水晶の柱に吸い込まれていく。

その場にいる多くの冒険者が取り乱す中、騒然となっている洞窟の宿は混乱の一途を辿っていった。

ダンジョン18階層『リヴィラの街』、ヴィリーの宿。

頭部を失った遺体が晒す「ステイタス」を、アイズ達はそれぞれの表情を浮かべながら見下ろしている。

「・・・ほ、本当に、この人は力づくで殺されてしまったんでしょうか？その、毒とか・・・」

「見動きを取れなくなったところで、息の根を止められたってこと？」  
尋ね返すティオネに、レフィーヤはぎこちなく頷いた。

と、今の今まで遺体を見ていた三日月がアイズ達に言う。

「コイツ、多分首の骨が折れてる」

「・・・え？」

三日月の言葉にアイズは三日月を見る。それに対して三日月は飛散した頭部の下、首周りに視線を向けたままアイズ達に言った。

「ほら、ここ。首周りにアザが出来てる。多分、手なんかで首を絞められたんじゃない？首はどんなに鍛えても意味ないから、多分油断してる時に一撃でやられた感じか」

三日月の言葉にアイズ達が呆然とする。

「聞いている？」

三日月は返事がないアイズにそう言って此方に視線を向けてくる。

「・・・えっ、う、うん。詳しいんだね三日月」

「こういうのは、仕事で良くあったからね。コイツの様子を見れば分かるよ。それで、犯人は分かりそう？」

「ンー、今の所はまだ情報不足だね。ことに乗じることで油断させていたとはいえ、第二級冒険者の寝首をかける女、か・・・」

「・・・【イシユタル・ファミア】のところの戦闘娼婦？」

フィンの言葉にティオナが考えを口にする。だが、フィンは「ンー」と死体から視線を離さず口を開いた。

「そうだったとしたら分かりやすくもいいんだけどね、まあ、疑つてくれと言っているようなものかな」

「そうよ、あからさま過ぎるじゃない」

フィンの返答にテイオネが声を続けた——その直後だった。

室内にいた取り巻きの一人が、半狂乱でアイズ達に指を向ける。

「そ、それらしいこと言ってるけどっ!!今ちようど街にやって来たって顔をして、本当はお前等の誰かがやったんじゃないか!?!」

その発言を皮切りに、ボールス達は一斉に振り向いた。

泣く子も黙る第一級冒険者達に疑惑の目が向けられる。第二級冒険者を実力で殺害できる有力な容疑者は、確かにこの場ではアイズ達を置いていないだろう。

「え〜?」とテイオナは心外とばかりの表情を浮かべ、テイオネは反感のこもった眼差し、リヴェリアも片目を瞑り、レフィーヤはとうとすわとばかりに慌て始めた。フィンは苦笑しながら頬を指でかく。

アイズも困ったように、少々身動きした。三日月はというと、自分には関係ないと言わんばかりの顔である。

「こいつらがやったとすると・・・」

「ああ、まずフィンとこのガキはありえねえ・・・」

アイズ達を取り囲む冒険者の輪。怯えたようにじりじりと距離を取るヴィリーに、緊張で喉を鳴らすボールスが頷く。小柄な小人族であるフィンと、片腕が使えない三日月は案の定、男であるため真っ先に容疑者から除外される。

冒険者達は順々にアイズ達を見る。目撃されている謎のローブの女は、外衣の上からでもわかる豊かな体つきだ。

アイズ、レフィーヤ、と視線が移り、リヴェリアとテイオナに彼等の目が止まる。

薄い胸周り・・・とりわけ露出の高いテイオナの体格を凝視した彼等は、うむ、と一様に頷く。

「こいつはないな」

「ああ、ないな」

「うぎーっ!?!」

両手を振り上げ暴れようとするティオナを羽交い締めにするアイズ。

ばたばたと部屋の一角が騒がしくなる中、冒険者達の疑いの目は、最後にティオネへと向けられた。

「・・・お前なら、男なんていくらでも誑し込めるだろうなあ?」

ボールスの言葉が響く中、他の冒険者の視線がティオネにまとわりつく。

「——ああ?」

そんな彼等に対し、ティオネは。

目を開き、途轍もない表情で、憤怒の炎を爆発させた。

「私は団長のものだって言ってるんだろ!!」

「てめーらなんて知るか!!」

凄まじい罵詈雑言が続けざまに炸裂する。

竜のごとき形相を浮かべるティオネはがなり立て、踏み出した一歩で床を踏み砕いた。

どうしようと、今にも飛びかかろうとする実姉を今度はティオナが抑える中、逆鱗に触れた冒険者達は例外なく、盛大に青ざめる。

「・・・あー、ボールス。ご覧の通り、彼女達には異性を誘惑できる適性がない」

「お、おおう・・・疑って悪かった。す、すまん」

情けない声でこくこくと頷くボールス。

自身も疲れきったように伏し目がちになるフィンだったが、気を取り直して、あらためて室内を見回す。

「んー、三日月ちよつといいかい?」

「・・・なに?」

近くにいた三日月にフィンは質問を試みる。

「君だったらこの状況をどう見る?君の意見を聞いてみたい」

フィンの質問に三日月は頭をかきながら言う。

「あんまり、そういうの得意じゃないんだけど?」

「それでも、一応ね」

三日月はフィンの言葉に「んー」と唸りながら辺りを見渡す。と、三

日月の視界に派手に荒らされたバックパックがあるのに気づく。

「ん?」

「どうしたんだい?」

三日月の反応にフィンが聞き返す。

「いや、なんでアレ荒らされてるんだろうって?」

三日月はそう言つて荒らされたバックパックに近付く。

物色された跡のあるバックパックにフィンは呟いた。

「ローブの女は、ハシヤーナの特定の荷物を狙つて近付いたのかもしれないね」

「おー、分かりやすくいいなあ。それでハシヤーナの野郎はまんまと色仕掛けに乗つて、殺された訳だ」

「この荷物の状態を見るに・・・焦つていたというより、相当苛立つていたようだな」

フィン、ボールス、リヴェリアと声が続く中、アイズも荷物のもとまで歩み覗き込む。

強引に引き裂かれているバックパックは中身をかき出され、周囲にはいくつかの道具も散乱していた。確かに焦つて中身をぶちまけたというよりは、どこか乱暴にもものに当たつていた感情が品々から見え隠れしている。

「その特定の荷物が見つからず、痲癩を起こして死体に当たつた・・・筋は通りますね」

「なんかティオネみたいだねー」

「私だつてこんなことしないわよ!?!」

一緒にするなとティオネがティオナに吠える。

喚く彼女達を放つておき、フィンは何か手がかりはないかと荷物をあさる。

「ン?」

破損したアイテムや回復薬が多く占める中らフィンが取り出したものは、一枚の血塗れの羊皮紙だった。

見守つていたアイズの横から、ティオナ、レフィーヤが顔を出す。  
「なにそれ?」

「冒険者依頼の・・・依頼書ですか？」

羊皮紙を開くと、大半の文字は飛び散った血で汚れ、碌に読むことはかなわなかった。

それでも真っ赤に染まっている紙から、いくつかの文字を拾い上げる。

「30階層・・・単独で、採取・・・内密に・・・」

フィンの唇から紡がれる言葉を聞き、アイズ達の思考が膨らんでいく。

やがて一同の推理を代表するように、フィンが独り言のように呟いた。

「ハシャーナは依頼を受け、犯人に狙われる『何か』を30階層に取りに行っていた・・・？」

周囲に染み渡るように、一度部屋に静寂が訪れる。

「・・・ボールス、一度、街を封鎖してくれ。リヴィラに残っている冒険者達を出さないでほしい」

要請を行うフィンののもとに、部屋の者達の視線が集まる。

石のような顎をさするボールスは、眼帯をつけた顔をしぶそうにする。

「まだ犯人が何気ない顔で街を出歩いているってか？オレ様だったら、とつくにトンスラこいてるがなあ」

「ハシャーナほどの人物が極秘に当たる依頼・・・犯人がさがしていたものは、よほどの代物だった筈だ。殺人まで犯している。もしまだ確保できていないとしたら・・・手ぶらでは帰れないだろう」

それに、とフィンは続けると、ペろりと右手の親指を舐める。

「きつとまだいると思うよ・・・勘だけどね」

「わかった」

神妙な顔で、ボールスは頷き、部屋の者に指示を出す。

「北門と南門を閉めろ。それから街の中の冒険者達を一箇所に集めるんだ。従おうとしねえ奴は、犯人だと決めつけて取り押さえちまってもいい。ヴィリー、新しく街に来た冒険者には事情を話して別のところにまとめとけ」

「わ、わかったっ」

ボールの部下達が慌ただしく動き出す中、ティオナ、ティオネ、レフィーヤ、そしてアイズはその様子を外から眺める。

「なんだか、すごいことになってきたね」

「うん・・・」

「ここまでできたら、ハシャーナの吊い合戦ね。絶対に犯人を捕まえるわよ」

「は、はいっ」

アイズはティオナ達に相槌を打ちながら周りを見渡す。が、その視界に三日月がいなかった。

凄く嫌な予感がアイズの中に渦巻いていく。

「・・・三日月!」

突如いなくなった三日月にアイズは部屋から飛び出すが、そこには誰もおらず、水晶がうつすらと光輝くだけ。

「・・・アイズ?どうしたの?」

ティオナが不思議そうに声をかけてくる。そんな彼女にアイズは言った。

「三日月が何処にもいない」

「あれ?本当だ。どこに行っただんらろ?」

ティオナはそう言ってキョロキョロと周りを見渡すが、アイズはそんなティオナを置いて走り出した。

「ちよっ!?アイズ!どこいくのさー!」

「三日月を探しに行く」

「もー!!待ってよー!!」

アイズの返答にティオナも走り出した。

「一人で探すより二人で探した方が早いから、一緒に探すよ!」  
「・・・うん」

アイズとティオナは二手に分かれ、三日月を探し始める。

リヴィラの街は、今まさに揺れ動こうとしていた。



???

「・・・ここは、何処だ?」

一人の男が目を覚ます。立派な軍服姿の褐色肌のその男は周りを見渡す。

何も無い平原に、遠方に巨大な都市が広がっていた。

「ここは、地球か?ギヤラルホルンの統括地では無さそうだが・・・」

男はそう呟き、腕を組むがすぐに考えるのを止めて言った。

「考えても拉致がない。なら、とりあえずは進むのみ!」

男はそう言っ歩いていく。その都市に。

厄災が眠るその場所へ。



## 第十二話

三日月は街の外に出て周りを見渡す。

「……この辺か」

さつきからバルバトスが反応している。この辺りに「何かいる」  
周りには木々がまばらに生えているが、「生き物の気配がない」  
。

「……石？」

三日月はそう言つて、魔石を拾い上げる。

あのモンスターを倒した時しか出ないコレがなぜここにある？  
と、その時だった。

「……っ！」

三日月が眉を寄せ、上を見上げる。

その木々の間にソイツはいた。

ソイツは三日月に向けて「巨大な鎌状の武器を振り下ろした」  
。

ガゴオオオオン!!

金属同士がぶつかる音が周りに響き渡る。

ビリビリと衝撃が腕に走るのを感じながら三日月は一瞬で展開し  
たバルバトス越しでソレを見た。

フード状の装甲の隙間から見える黄色い眼光を放つ双眼に、特徴的  
な赤い二本角。片方が欠け、鎌状になった大型のバトルアンカー。そ  
してその黒い装甲でまるで幽霊、または死神を思わせるようなソレ  
は……。

「コイツも『ガンダムフレーム』か」

三日月はそう呟き、巨大メイスを構える。

「!!」

「殺る」

ここに二体の悪魔が交差した。



「三日月……何処！」

アイズは街中を走り回る。屋根から屋根へ。路面から、細道へ。疾走し駆け抜ける。

三日月の強さなら此処までする必要はないだろう。だが、アイズの中の嫌な予感がグルグルと渦巻いていた。

三日月が何かに関わろうとしている。そのよくわからない感覚が先程からアイズに訴えている。

そしてアイズが、門をくぐり外へ出て更に加速しようとしたその時――。

「っ!?!」

バズッ!

アイズの足元の地面に魔力弾が突き刺さった。

先程の攻撃を回避出来たのは、ただの偶然だった。

とっさの事にアイズは後方へ跳んだが、アイズの視線の先は先程、自身に攻撃を仕掛けた相手に向けられていた。

特徴的な二本角に深い青色の装甲、一部の黒い装甲の間にフレームが見え隠れしている。

ソレはかつて三日月と街中で「互角に戦っていた」あの怪物だった。

「っ!!」

アイズはすぐに腰の剣帯から《デスプレート》を引き抜き、すぐさま戦闘態勢に入る。あの三日月と互角で戦えるような相手だ。かなりの強敵だろう。けど――

「どいて。私はやることがあるから」

「!!」

アイズはヴァイダールに向けて駆け出す。

それと同時にヴァイダールも咆哮するように顔をアイズに向け、バーストサーベルを片手にアイズに突貫した。

◆◆◆◆

ボールスによって封鎖命令が下された『リヴィラの街』の中は、い

つにないざわめきと動揺が伝播していた。

騒ぎは一向に収まらない中、力自慢のドワーフ達によってアーチ門前に鎮座していた大岩が押し出され、二つの出入り口である北門と南門が塞がれる。

白と青の水晶の街はら今や冷たい牢獄と化していた。

「集まるのが早かったね」

「呼びかけに応じねえ奴は、街の要注意人物一覧に載せるとも脅したからな。そうなりやどこの店でも即叩き出しだ。この街を今後もし利用してえ奴等は、嫌々でも従うつてもんよ」

「それに、一人でいるのは恐ろしい、か」

ああ、とフィンの呟きにボールスが頷く。彼等の視線の先で揺れ動いている人集りは、程度の違いはあれその顔に恐怖を抱えていた。

既にボールスの口から第二級冒険者が殺害された事は伝えられている。第一級冒険者に匹敵する殺人鬼が街のどこかに潜伏しているとなれば、個人行動に危惧を抱くのは当然の成り行きだった。

場所は水晶広場。

街の中心地であり、見通しのいい開けた空間には街中でも最も広い。広場中央には大きな白水晶と青水晶の柱が寄り添っており、その側には血塗れの全身型鎧を始めとしたハシヤーナの私物も運び込まれている。

周囲には水晶や出店が立ち並ぶこの広場で、冒険者一同は集結していた。

「お前等以外の第一級冒険者が見つかりやあ、分かりやすかったんだがな・・・」

「最初から騒動を起こすつもりでいたんだろう。変装しているか、あるいは公式のLV・を偽っているのか・・・安易に疑われない対策の一つや二つは取っている筈だよ」

「相手も馬鹿じゃねえか」

双子水晶の下で冒険者達を見回すフィンとボールス。

ざっと数えても、集まった人数は街の住人を合わせ五百に届く。迷宮の拠点として賑わう『リヴィラの街』の平均的な総人数と比較する

と、少なくともなければ多くもない数だ。

「・・・アイス達は？」

アイズ、ティオナ、三日月の三人の姿が何処にも見当たらないのを確認して、フィンはそう言った。

「アイズとティオナは三日月を捜索しに単独行動してる。三日月に関しては今も行方が分からないままだ」

フィンの言葉にリヴェリアはそう答えると、フィンは目を丸くする。

「三日月が行方不明？　どういう事だい？　リヴェリア」

「言葉通りだ。三日月が突然姿を消した。もしかしたら何かしら手がかりを見つけたのか、それとも・・・」

「共犯者・・・とでもいいいたいのかな。リヴェリア」

あくまでも予想だと返すリヴェリアに、フィンはレフィーヤに言った。

「レフィーヤ、君はアイス達を探しに行ってくれないかい。単独行動でもしかしたら、という事もあり得る」

「わ、分かりました！」

フィンの命令にレフィーヤはそう言って走り出す。

そしてボールスに言った。

「ハシャーナを襲ったのは女冒険者だ。そこから相手を探してくれないかい？　ボールス」

「そういうことならまかせておけ！」

ボールスはそう言って他の冒険者に指示を出す。

「ようし、女ども!?! 体の隅々まで調べてやるから装備を脱げーッ!!」

『うおおおおおおおおおおおおおッ!!』

ボールスのその要求を聞き、全ての男性冒険者達が歓声を上げる。そんな彼らに対して、ふざけんなーッ! 死ねーっ! と女性冒険者達からは罵倒の声が飛んだ。

「・・・やれやれ。これじゃ時間がかかりそうだな」

フィンはそう呟いて肩を落とした。

## 第十三話

「.....」

かつん、かつん、と靴音が反響していく。

魔石灯の光が心もとない長い階段。ロキは壁に手をつきながら段差を降りていく。

——ギルドの起源は今から約千年前にまで遡る。

『古代』と呼ばれている時代、この地では地下に置いた大穴から溢れ出るモンスターと人類がしのぎを削り合っていた。

大穴を塞ぐ『蓋』——塔と要塞の完成が求められる中、ギルドの前身機関が主導するモンスターの地上進出阻止の計画は、しかし、何度もくじかれる事となる。

完成のあと一歩のところまでことごとくモンスター達に破壊され、その度に数え切れない犠牲者が出た。

偉大なる多くの英雄もまた、散っていった。

やつとの思いで塔を一度築き上げるも、もう何度目とも知れない計画崩壊に、人類が絶望に打ちひしがれていたその時——天から光は降り注いだ。

神々の降臨である。

モンスターに蹂躪される下界の各地に神が現れ、この地にも多くの神々が降りた。そしてうろたえる人類に『娯楽でやって来た』と言ってはばからないそんな彼等の中に、その男神はいた。

精力的に塔と要塞着工に取り組んだ一柱の神。

この地に最初の『神の恩恵』をもたらしたのは、他ならない彼であった。

他の神々の協力もさることながら、彼の尽力によってモンスターの侵攻を防ぐことに成功し、オラリオの原型となる要塞都市は完成に至ったのだ。

現代でもなお、多くの者達に崇められているその神の名が——  
ウラノス。

「.....よお、ご無沙汰やな」

階段を下りた先は、長い年月を感じさせる石造りの広間、祭壇だった。

大きな石版が床を覆い、隠された神殿の地下を彷彿させる。暗闇に包まれる周囲を照らすのは魔石灯ではなく、赤い炎を揺らす四つの松明だ。

そして、四角を描くそれら松明に囲まれる祭壇の中心。

大きな石の玉座——神座に腰掛けている巨体の老神は、フードの奥から視線を投げ、その蒼色の瞳をロキに向けた。

「何の用だ、ロキ」

重々しい声音が空気を揺らす。

ニMを超すたくましい体はローブに包まれていた。皺が深く刻み込まれている整った顔立ちは顎に白髭を生やし、同色の髪がフードからちらついて見える。静謐な表情はまるで彫像のように揺れ動くことはない。

「なに、ちよつと顔を出しに来ただけや・・・ちよつと、な」

祭壇の中心に上がるロキは、神座の前まで歩み寄る。

「フィリア祭では散々やったな。色んなところから叩かれているみたいやけど、大丈夫なんか？」

「都市の運営はロイマン達に一任している。私が関知するところではない」

オラリオの礎を築いて以降、ウラノスは『君臨すれども統治せず』の姿勢を崩していない。

都市の管理はロイマン達職員に任せ、彼自身はこの祭壇にとじ込もっている。余計な諍いを防ぐため『神の恩恵』を職員たちに与えることもなく、ギルド自体はあくまで都市の管理者という立場に徹していた。

【ウラノス・ファミリア】と名乗らないのは、武力の放棄を謳うためだ。彼が私兵を隠してもしない限り、ギルドに戦う力はない。

「ロイマン達も貧乏くじや。こんなジジイにあれやこれやと面倒を押し付けられて」

「何が言いたい」

ロキの言葉にウラノスが返す。

ウラノスがこの場所から離れようとしなのは、ギルドが懇願するように主神をこの祭壇へ閉じ込めているからだ。その理由は、彼がダンジョンに『祈禱』を捧げているため。

ウラノスが『祈禱』を捧げること——彼の強大な神威がダンジョンを抑え込むことで、モンスターの大量発生は発生しない。多くのモンスターを地下にとどめ、『古代』では頻繁に巻き起こっていた地上進出を食い止めている。

少なくとも、ギルドはそう信じ込んでいる。

ロイマン達は何より、現在のダンジョンの均衡が崩れる事を恐れているのだ。

ロキから言わせてみれば、神にお祈りをさせるなっちゅーに、とぼやく思いだが。

「今年のフィリア祭は色々あったなあ。すこぶる気色悪い、けつたいなモンスターも出てきた。あれをどこから運び込んだのか、どこの誰が命じたのか・・・気になってなあ」

「.....」

尋問するように言葉を並べるロキに、ウラノスは沈黙するのみであった。

身動きすることなく、神座に深く座り続ける。

都市を統べる裏の支配者、ギルドの手綱を根本で握る神物に、ロキは事件の核心を尋ねる。

「食人花のモンスターの糸を引いとるのは、ギルドか？」

パチっ、と松明の炎をが弾ける。

火の粉が宙を舞い、その巨体を炎の光に照らし出されながら、ウラノスは口を開いた。

「それは違う」

蒼い瞳をロキの朱色の目と合わせ、そう告げる。

「それは、な」

呟くロキは、距離を置いて座っている神の顔を見つめた。

フードの奥に隠れている厳しい顔は、最初から変わらず静謐なまま

でいる。その蒼く透明な瞳の奥をしばし覗き込んでいたロキは「そうか」と声を落とした。

「邪魔して悪かったな。お勤め、頑張ってたな」

くるりと回転し、ロキはウラノスに背を見せる。

松明の燃える音だけが響く祭壇に靴音を溶かしながら、出口の階段へと向かった。

色々思うところはあるが、ウラノスは事件の首謀者ではなさそうである。答えはまだ保留にしつつも、ロキはそう判断した。

と――

「さて」

「ん？なんや？」

ウラノスの呼び止めにロキは足を止め、振り返る。

ウラノスが呼び止めること滅多にないが一体何を言いたいのだろうか。ロキはそう思いながらも、ウラノスを見る。

「ロキ、あの『悪魔』を飼っているようだが、早い内に手を切っておく事だ」

「ほお、理由を聞いてもええか？」

ロキはウラノスの言葉に聞き返す。

ロキの言葉に対してウラノスは口を開いた。

「あの悪魔は厄災だ。神をも殺せる力を持ち、願いを叶えるたび、契約者を、周囲を蝕み続ける」

そして何よりと、ウラノスは言った。

「あの『悪魔』達は契約者とその周囲のモノを最終的には食い殺す。もつとも、貴様のファミリアの中でその悪魔に魅了されたものモノもいるようだが」

「・・・何やて？」

ウラノスの言葉にロキは言葉を返した。

悪魔に魅了された者。三日月に積極的に関わろうとしていたのはアイズやティオナだが、そのどちらかが、悪魔に魅了された？

そんな疑問にロキは考えて込む。



そんなロキにウラノスは言った。

「故に、なるべく早い段階でその悪魔を〃殺して〃おくべきと忠告しておこう」

「・・・分かったわ。その忠告有り難く受け止めさせて貰うで」

ロキはそう言つて、踵を翻し出口へと歩いていった。

その背をウラノスは黙って見つめるだけだった。

## 第十四話

「いやに硬いな。コイツ」

三日月はそう言つて、巨大メイスをガンダムグレモリーに叩きつける。

だがその攻撃ですら、フード状の黒い装甲に弾かれてしまった。

お返しとばかりにグレモリーはバトルアンカーを振り下ろすが、三日月はすぐに後ろへ下がりがり、両腕に装備された射撃武器で牽制する。だが、それも意味なく弾かれてしまう。

「メントイ」

三日月はそう呟きながら、グレモリーを見つめる。

あの黒い装甲を突破し、アイツを倒そうとするのなら装甲の隙間を狙うか、メイス尖端のパイルバンカーで仕留めるしか方法がない。

「まあ、やる事は変わんないからいいか」

三日月はそう言つて巨大メイスを構える。

ガンダムグレモリーはそんな三日月に手にしたバトルアンカーを振り回すが、三日月はバルバトスのテイルブレードを射出し、グレモリーの機動力を奪おうとする。

キュルルルルルル！

不規則な動きで、テイルブレードはグレモリーの背中についたスラストアスターを執拗に狙い続ける。

が、グレモリーもスラストアスターを取らせまいと回転しながら、テイルブレードに向けて腕部に装備された砲撃ユニットで攻撃を続ける。

だが、それが三日月の狙いだった。

「ゼロ距離ならー」

三日月は巨大メイスの先端をグレモリーの黒い装甲に付け、パイルバンカーを射出した。

バゴオン!!

強烈な衝撃が三日月の腕に響き渡る。

ゼロ距離で発射されたバンカーがグレモリーの装甲を貫通する事は出来たが、本体にまでその攻撃が届いていなかった。

軽く刺さっただけの杭をグレモリーは引き抜くと、その杭を三日月目掛けて投擲するが三日月はソレを難なく避ける。

「ブルワーズの時のグシオンよりも硬いなあれ」

三日月はそう呟きながら、太刀に持ち替えて装甲の隙間を狙おうとしたその時。

グレモリーに数発の砲撃が直撃した。

「なんだ?」

突然の横槍に三日月は視線をそちらに向けると、そこには見慣れた影があった。

「もしかして・・・昭弘?」

三日月は「グシオン」を見ながら、この人物が自分が知っている人物か聞いてみる。

その三日月の声にグシオンを使っている人物は言った。

「俺じゃなかったら誰がコイツを使うんだ?」「三日月」

三日月の耳に入ってきた声は聞き慣れた声。

自身が唯一、背中を任せられる仲間の声だった。

「やっぱり昭弘か。こっちに来てたんだ」

「ああ。このオラリオとか言う場所で、お前の噂を聞いたんだよ。」

「悪魔がこのオラリオに出た」ってな」

「・・・へえ、そうなんだ」

昭弘の言葉に三日月は興味なさそうに返事をして、前のグレモリーを見る。

「昭弘、アイツ、あの武器」で倒せる?」

「はっ! やってやるよ!」

三日月の言葉に昭弘はそう言ってライフルを構える。

「じゃあ二人がかりでやろうか。サポートするから昭弘、後よろしく」

「ああ、任せろ!!」

三日月と昭弘は同時にグレモリーに突撃する。

「オラア!!」

昭弘は四本の腕を使い、ライフルでグレモリーを正確に狙っている。

ガンガン!!と弾は弾かれていくが、鬱陶しそうにするグレモリーに三日月は突撃する。

「ふっ!!」

三日月はテイルブレードを射出しながら、ガンダムグレモリーの背後に回る。グレモリーはそれに対応する為に振り向こうとするが、テイルブレードが音をたてながら足元からグレモリーの装甲の隙間目掛けて貫こうと迫ってくる。

グレモリーはテイルブレードを無視し、三日月目掛けてバトルアンカーを振り回す。だが、三日月はそのバトルアンカー目掛けて巨大メイスを叩きつけた。

ガギイイイン!!

金属音と火花を散らしながら二つの武器が重なり、鏝迫り合いになる。

ギチギチと武器が音を立てる中、有利なのは三日月のバルバトスだった。

拮抗していた鏝迫り合いが徐々に、だが確実にグレモリーを追い詰めていく。

「昭弘、今」

「分かってるよ!!」

三日月の掛け声に、昭弘は叫びながら後腰に装備された盾を展開する。そして盾の両端についたグリップを握りながら、盾を展開させた。

盾の中心部分が真ん中からパツカリ割れ、ハサミのような形状に変化していく。

そして完全に変化仕切った後は、もはや盾の面影はなく、完全にハサミと言うよりはペンチに近い形状に変形していた。

「ぬおおおおおおおおお!!」

グシオンの顔が変形し、二つのライトグリーンの目が現れる。

スラスターを全開にし、昭弘はペンチを三日月が抑え込んでいるガンダムグレモリー目掛けて突撃した。

ガゴオオン!!

高い金属音を上げながら、グレモリーをそのペンチで挟み込む。  
三日月もそんなグレモリーに対して、逃げないよう前に抑え込んだ  
ままだ。

「これで終いだ!!」

昭弘はそう言つてペンチのグリップを握りながら、押しつぶし始めた。

ガコン!!カコン!!と、グレモリーの装甲下にあるフレームが音を立てて、押しつぶされる。

手を伸ばすガンダムグレモリーに対し、昭弘はそんなこと関係ないと言わんばかりに、押し潰す。

そして――。

ガコンツ!!

一際大きな音と共に、グレモリーのフレームを昭弘は潰しきつた。潰されたグレモリーは機能を停止し、動きを止める。そして“昭弘のグシオンに吸い込まれてしまった”。

「は?なんだこりゃ?」

昭弘はそう呟きながら、“グシオンに吸収されたグレモリー”を見て呟くが、三日月はそんな昭弘に言った。

「昭弘、ありがとう。やっぱり昭弘だと安心して戦える」

「おう。三日月もサンキューな。しっかし、さつきグシオンにコイツが吸い込まれたんだが、なんか意味があんのか?」

「・・・さあ?」

昭弘の質問に対し、三日月はそう答えながら、三日月は今後どうするか昭弘に聞いた。

「昭弘はこの後、どうすんの?」

「とりあえずは三日月と行動する。後のことは地上に出てからだ。三日月は?」

「俺はこの後、街に戻るかな。フィンやアイズ達に何も言わないで来ちゃったし」

「お前な・・・」

三日月の言葉に昭弘は若干呆れながら言うが、彼等にとってはいつ

もの会話だった。

と。

ドオオン!!

「!!」

「!!」

突然の爆音に三日月と昭弘は顔を音が聞こえた方へ向けた。

「・・・聞こえたか三日月」

「うん、街の方角から聞こえた」

「なら、さっさと行くぞ。街で戦闘があつたら洒落にならねえ」

「分かった」

昭弘の言葉に三日月はそう答え、すぐさま二人は森の中を走り出した。

## 第十五話

「目覚めよ」

アイズはそう言つて〈デスペレート〉に風を纏わせ、ヴィダールに向けて疾走する。

「ふっ！」

アイズは軽く息を吐きながら、ヴィダールに剣を振り抜く。

だが、その斬撃にヴィダールは身体を反らし、アイズの斬撃を躲す。

「まだっ！」

アイズはそう言いながら、アイズは〈デスペレート〉を切り返した。

「！！」

アイズの切り返しにヴィダールはバーストサーベルの刃を盾にし、その斬撃を防いだ。

ギイン!!と金属音が周りに響き渡る。

ギチギチと火花を散らしながら、アイズは更に〈デスペレート〉を押し込む。

そんなアイズにヴィダールは脚の装甲を変化させ、アイズを蹴り飛ばし、腰のハンドガンを引き抜き、アイズ目掛けて発砲する。

「——っ、吹き荒れるー！」

アイズは剣に纏わせた風を一気に解放した。

「ゴウツ」と暴風がアイズを中心に巻き起こる。

巻き起こった風により、ヴィダールから放たれた魔力の弾丸を四方八方へと撒き散らす。

一瞬の攻防にアイズは「ふう」と息を吐いて、ヴィダールを見つめる。

「・・・強い」

アイズはそう呟きながら、〈デスペレート〉を構え直した。

確かに、三日月が苦戦する理由がよく分かる。

反応の一瞬一瞬が、凄まじく速い。

アイズの放った風にすぐに反応し、回避した怪物に見てアイズは頬に汗を流す。

「!!」

ヴィダールが咆哮を上げる。

「っ!」

ヴィダールの咆哮にアイズは身構える。

身構えたアイズに対し、ヴィダールは足元を爆発させながら、脚部のスラスターを吹かせ、アイズ目掛けて突進する。

「くっ!」

アイズは自身目掛けて突進してきたヴィダールに対し、防御姿勢を取る。

器用に〈デスペレート〉の刀身の腹でヴィダールのバーストサーベルを受け止める。

再度、火花を散らしながらアイズは吹き飛ばされるように後方へ跳躍した。

ヴィダールはそんなアイズを追跡するように執拗に追いかける。

アイズの肩に、脚に、身体に、頬に次々と傷をつける。

「これじゃあ・・・」

拉致があかない。魔法を使わせてもらえない以上、防戦一方としか言いようがなかった。

「あっ・・・」

キーン!と音を鳴らせながらアイズの手から〈デスペレート〉が弾き飛ばされる。

〈デスペレート〉を弾き飛ばされたアイズは風を足へ纏わせ、跳躍し、距離を取ろうとするが――。

「ドスツ」  
とアイズの右脚に激痛が走った。

「うっ!」

アイズの右脚にヴィダールのサーベルが突き刺さる。

その痛みに、アイズは思わず足を止めてしまう。

そんなアイズに、ヴィダールは勢いよく蹴り飛ばした。

「ガッ!」

蹴り飛ばされたアイズはゴロゴロと地面を転がっていく。

土と砂埃、そして血で汚れたアイズにヴィダールがゆつくりと近



付いてくる。

「——っ吹き荒れろ!!」

アイズはそう叫び、身体の精神力を一気に開放した。  
凄まじい爆音とともに、暴風が荒れ狂う。

だが——。

「……う……そ……」

アイズは呆然と、目の前を歩く『ヴィダール』に目を見開いた。

あの暴風の中を平然と歩いてくる怪物にもはやなすすべがなかった。

これが三日月が戦っていた相手。

そして、アイズと三日月との実力の差。

その圧倒的な力の差。だが、アイズは諦めなかった。

近くに弾き飛ばされたヘデスペレートへに手を伸ばす。

まだこんな所で諦めたくない。こんな所で終わりたくない。

愛剣に手を伸ばす。だが——。

アイズの伸ばされた手をヴィダールは勢いよく踏みつけた。

「~~~~~!!」

『ゴリツ』と嫌な音と共にアイズは声にならない悲鳴を上げる。

そんなアイズにヴィダールはバーストサーベルを逆手に持ち、期待はずれと言わんばかりにアイズに止めを刺そうと振り上げた瞬間——。

『キュルルル!』

そんな音と共に、細い影がヴィダールを弾き飛ばした。

「……えっ?」

そしてアイズの目の前に着地する白色の背中。

その背中を見て、アイズは顔を上げ、声を出す。

「三……..日月?」

そんなアイズの声が届いたのか、三日月は顔をこちらに少しだけ向けて言った。

「生きてる?」

「……うん」

三日月の言葉にアイズはそう答えると、三日月が言葉が続けた。

「そつか。ならアイズ動けそう?」

「まだ、ちよつと・・・無理」

アイズは三日月にそう言うと、三日月は分かっていたと答えて言った。

「なら、〃昭弘〃。アイズが回復するまで護衛任していい?」

「・・・アキヒロ?」

アイズは疑問を浮かべる。アキヒロ。一体誰なのだろうか?

アイズのその疑問はすぐに分かることとなった。

「ああ、任せろ」

アイズの後ろから現れる茶色の鎧。一つ目のような頭部に、鎧の背  
中部分は角張ったコンテナがくつついたように見える。

そして後ろ腰に装備された巨大な盾。

まるで、三日月や先程戦っていた怪物と同じような鎧だった。

「あ・・・あなた・・・は?」

アイズはそう言いながら、顔を昭弘へ向ける。

そんなアイズの問いに昭弘は言った。

「昭弘・アルトランド。三日月の〃家族〃だ。それより、傷を治す。コ  
イツを飲め」

「・・・んっ」

そう言われながら、アイズは口にポーションの瓶を突っ込まれる。

「じゃあ、昭弘。俺はコイツをやるから昭弘はアイズが回復次第手  
伝って。アイズはそこで休んでいいよ」

「三日月・・・私はっ!」

まだ戦える。と言おうとした時、三日月は言った。

「そんな状態で戦ったって〃邪魔〃。だから、アイズはそこで〃待っ  
てて〃」

三日月のその言葉に――。

〃ビキリ〃とアイズの何かにヒビが入った。

## 第十六話 求める強さ

『!!』  
三日月の姿を見たヴィダールは視線をアイズから三日月へと向け  
て突撃する。

人間らしくない常識外れた動きで三日月を翻弄するようにバース  
トサーベルを突きだす。が――。

「ごちやぐちやうるさいよ。オマエ」

三日月はそう言いながらバルバトスの巨大な手でバーストサーベ  
ルを握り潰した。

その事にヴィダールはまるで驚くように距離を取ろうとする。

が、その瞬間を三日月は見逃さなかった。

「ふっ!!」

三日月は手にしていた巨大メイスをフルスイングでヴィダールに  
叩きこんだ。

ガギイン!!と火花と金属音が辺りに撒き散らされる。

それと共にヴィダールが勢いよく森の奥まで吹っ飛んでいった。

それを見た三日月は一瞬だけアイズ達に視線を向ける。

そして彼女の近くにいた昭弘に三日月は言った。

「じゃあ、昭弘。アイズが回復するまで、守ってあげて」

「おう、まかせろ」

三日月の言葉に昭弘はそう答えると、その言葉を聞いた三日月は  
ヴィダールを吹き飛ばした方向へとスラスタを吹かせてその場か  
ら跳躍していった。



三日月の言葉に「ビキリ」とアイズの内側から何かがヒビ割れる  
音が聞こえた。

「・・・あ」

アイズは小さく声を上げる。

そしてアイズは三日月の言葉を理解した。

“邪魔”。つまり、“私が一緒に戦った所で足手まといになる”。

三日月はそう言ったのだ。

「おいお前、大丈夫か？」

昭弘がアイズに声をかける。だが、アイズの耳に昭弘のその声は届かなかった。

三日月の言葉がアイズの中をグルグルと渦巻く。

そして――

「……もつと強くならなくちゃ……」

三日月に見捨てられないようにもつと。誰より強くならなくちゃいけない。

アイズは誰にも聞こえない声でそう呟き、フラフラとした足取りで歩いていく。

「お、おい！どこ行くんだよ!」

昭弘は立ち上がり、止めようと手をかける。が――。

「――うるさい」

「……!」

アイズは昭弘にそう言って振り向く。そんなアイズに昭弘は眉を顰めた。そしてアイズは、昭弘に言った。

「ねえ、貴方のその力……どうやったら手に入れられる?」

アイズは昭弘にそう聞いて見る。

「……っ、いえねえ」

昭弘はアイズにそう答えた。何故なら答えてしまったら最後、この女が元に戻れないような気がしたからだ。

「……そう。ならもう貴方に聞かない」

アイズは昭弘にそう言って足取りを進める。

「おい！どこに行くつもりだ!」

「……貴方に関係ない」

昭弘の静止を止めずにアイズは三日月が跳躍して行った方向へと歩いて行った。



三日月は眼の前にいるヴィダールを見てポツリと呟く。

「コイツ、すばしっこいから苦手なんだけどな。まあ、なんとかなるか」

三日月はそうぼやきながらも、ヴィダール目掛けてテイルブレードを射出する。

テイルブレードはしなりながら、ヴィダールに随時するように伸びていく。そんなテイルブレードにヴィダールは手に持ったハンドガンで応戦していきながらも、三日月目掛けて牽制するように射撃をする。

「無駄」

その牽制射撃を三日月はあえて受け、三日月はヴィダールに急接近し、巨大メイスをヴィダールへと叩き込む。

「ゴシャ!!」と鈍い音と共に金属音と火花が辺りに散った。

三日月の攻撃をもろに受けたヴィダールは三日月を蹴り飛ばして距離を取り、さらに三日月から距離を取ろうとする。が――  
「今度は逃がすわけないだろ」

三日月はそう呟くと、テイルブレードがヴィダールの背中のスラスターを貫く。

爆煙が上がる中、三日月は巨大メイスから違う武器に持ち替える。その武器は一言で言えば巨大だ。

先程手にしていた巨大メイスとほぼ大きさは同じだが、先端部分が金属製の巨大な塊で出来ていた。

そして真ん中辺りから開閉出来る継ぎ目の部分からチェーンソーが獲物を求めるようにその刃をギリリと覗かせている。

まるで肉食恐竜のアギトのように見えるソレはかつて「グレイズ・アイン」の時に使った「レンチメイス」だった。

未だに爆煙が上がる中、三日月はレンチ・メイスを片手に煙の中にいるであろうヴィダールへ向けてスラスターを吹かせる。

そして爆煙の中にいたヴィダール目掛けてレンチメイスを全力で

振り下ろした。

『!!』

それにすぐに気づいたヴィダールであったが、動くことよりも早く、三日月はヴィダールを地面へと叩きつける。

三日月の全力攻撃がクリーンヒットしたヴィダールの装甲がフレームが破損し、砕け散る。

そんなヴィダールに三日月はさらに追撃をかけた。

レンチメイスのコンテナが展開され、そしてその中からはチェーンソーがギリリとその刃を煌めかせる。

そしてヴィダールを逃げられないように挟み込むと、そのままチェーンソーを起動させた。

「キュイイイイイイイイイ!!」

チェーンソーの刃が高速回転し、挟み込んだヴィダールを解体していく。周りに火花と金属片を撒き散らし、腕を脚を切り落とした後、三日月はそんなヴィダールにレンチメイスを叩きこんだ。

「ドゴオオン!!という音とともに周りに土煙が巻き起こる。」

「・・・これだけやっとけば、もう動けないだろ」

パラパラと土が落ちる中、三日月はスクラップにヴィダールを一目見た後、アイズ達がいる場所へと帰っていった。

そして誰もいなくなった森の中、スクラップにされたヴィダールに近づく一人の人影。

そして、その人影はスクラップになったヴィダールを見てポツリと眩いた。

「・・・ねえ、私を強くして。強くなれるなら何でもいいから。三日月に振り向いて欲しいから。だから貴方の力、私にちょうだい?」

アイズはそう眩いてヴィダールに手を伸ばし、そして——意識を失った。

## 第十七話

「う……」

闇の中、アイズは目を覚ます。

「ここは……?」

アイズは周りを見渡しながらそう呟くが、周りに見えるのは闇だけだ。アイズは若干不安を抱きながら歩いていく。

そしてふと、足元に違和感を抱く。

「?」

冷たいドロツとした液体に脚を入れたかのような感触にアイズは足元を見た。

「……っ!?!」

アイズは驚愕し息を呑む。違和感の正体は大量の血だった。

辺りを見渡して見れば、そこにあるのは大量の死体と巨大な金属の塊、そして海のように広がった血だ。

アイズはその真ん中に一人立っていた。

「——っ!?!」

アイズはこの場所にいるのが怖くなり、走り出す。

だが、足元に広がった大量の血が足を絡めてうまく走る事が出来ない。

そんなアイズを何者かが、アイズの足首を掴んだ。

「……っ!?!」

急に足首を掴まれた事により、アイズは転倒する。

「……ケホッ、ケホッ!」

血の池に身体全身を浸かりながら、アイズは咳き込んだ。

口の中が鉄の味で充満する。だが、そんなことを気にする余裕はなく、アイズは今も自身の足首を掴むものに視線を向ける。

「……っ!?!」

アイズは自身の足を掴んでいたもの正体に悲鳴を上げた。

そう、それは—— 〃血まみれになったレフイーヤだった。〃

アイズはさらに周りを見渡す。その周りに沈んでいる死体は全て

自身が知っている人達のものだった。

フィン、リヴェリア、ティオネ、ティオナ、ガレス、ベート、にロキ・・・自分の家族が血の池に沈んでいる。

そしてその先に二人の人影があった。

それは一人の“少年と少女だった”。

黒髪の小さな少年と長い金髪の少女が手を繋いで、血で濡れた道を歩いていく。

待つて。と、アイズは言葉を出そうとするが声が出ない。

そんなアイズの後ろで赤い一つの光が光る。

アイズが後ろを振り向くとそこにいたのは——

巨大な、一つ目の“悪魔”だった。

そしてアイズの身体がズブズブと、血の池に沈んでいく。

「・・・!?やだ・・・!?」

沈んでいく自身の身体にアイズはもがき、抜け出そうとする。が、“もう遅い”。

アイズは更に沈んでいく身体を必死に動かす。だが、身体の半分以上が沈んでしまっているアイズには何も出来なかった。

アイズは右腕を少年と少女に必死に手を伸ばす。

助けてと、そう叫ぶ。だが、その少年達には聞こえていないのだらう。その少年達は自身に気づかないまま、闇の中に消えて行った。

そしてアイズは顔に絶望の表情を浮かべながら沈んでいった。

そして全て忘れていく。

此処であつた出来事を——。この先起こりゆくであろう、未来図を。

アイズの意識が覚める。

「あれ・・・？確か私は・・・」

力を求めて敵だった鎧姿の相手に手を伸ばしたはずだ。

それから——意識を失っていたのか。と、アイズは激しく痛む頭痛に頭を抑えながら立ち上がる。

周りを見渡すと、ヴィダールの残骸が一つもない。

だが、ヴィダールが“自分の中にいる”と言う事がアイズは感じ



た。

「・・・これで、私も三日月みたいに強くなったのかな」

そう呟くアイズだったが、三日月達が心配しているだろうし、早く戻らないと。そう思いながら、アイズは来た道を引き返していった。



三日月がアイズ達がいる場所に戻る道中、バルバトスが何かに反応した。

「ん？なんだ？」

三日月が反応がある場所に視線を向けると、そこにいたのは昭弘だった。

「あれ？昭弘？」

三日月はそう呟き、昭弘の元へと向かう。

うまくスラスターを使いながら木々の間をすり抜け、昭弘の前へと着地した。

「・・・っ、三日月か!？」

「どうしたの？昭弘？」

何か焦っているような昭弘に三日月はそう聞き返す。

そんな三日月に昭弘が言った。

「悪い三日月。あのアイズってヤツがどっか行っちゃまった!!この辺りの方角に向かったんだが、どこにもいねえんだ!!」

「分かった。俺も探す」

昭弘の言葉に三日月はすぐに頷いて跳躍しようとする。

が、その時だった。

ガサガサ!!

「・・・!!」

ガサガサと茂みが揺れる。二人は警戒しながらその茂みを見つめる。すぐに戦闘が出来るよう構える二人はその茂みを見つめていると――

「・・・三日月？」

茂みから出てきたのはアイズだった。

「アイズ？」

三日月が訝しげにアイズを見る。どこか「普段のアイズ」と違って、そのような気がしたからだ。

だが、それも一瞬の出来事でアイズ「いつものように」三日月に言った。

「三日月？よかった・・・無事で。みんな心配してるよ？」

「アイズも大丈夫？ケガはもうない？」

あれだけの大怪我をしていたのだ。きつと何処かまだ怪我が残っているはず・・・と思ったのだが、アイズは首を縦に振って言った。

「うん、私は「もう大丈夫」だよ」

アイズはそう言つて、「不自然なくらいに傷がない」一度砕かれた右手を見せる。

「そっか、ならよかった」

三日月はそう呟いた瞬間――。

ドオオン!!

「!!」

リヴィラの街の方から大きな瓦解音が聞こえてくる。

そんな様子を遠目で見た三日月達は、それを見て言った。

「襲撃？急いで戻るよ。昭弘、アイズ」

「おう！」

「うん」

三日月の言葉を聞いて二人は返事をし、走り始めた。

その時、三日月と昭弘は知らなかった。

アイズの背中には「キマリス」の紋章があることを。

## 第十八話

「なにモンスターの侵入を許してやがる!? 見張りは何やってんだ!」  
ボールスの怒号が響き渡る。

高い街壁を乗り越え、街の至るところから吠声を上げる食人花のモンスター達に、街中央部の広場は騒然となっていた。冒険者達が集まるこの水晶広場を目指し、その長駆を蛇行させ、蠢かし、周囲からモンスターの群れが殺到してくる。

一部破壊された街壁の方角からは見張りの者と思わしき絶叫も響く中、天幕や小屋を押し潰す破壊音が押し寄せてきた。

『アアツツ!!』

水晶の柱を破壊し、光り輝く破片の雨をばらまきながら、一輪の食人花が広場へと到達した。

それを皮切りに、一挙、他のモンスターたちも雪崩れ込む。

触手を振り回すモンスターの群れに悲鳴が連鎖するのは、瞬く間のことだった。

「テイオネ、彼らを守れ!」

フィンの指示とともにテイオネが疾走した。

ククリナイフを手に入込みを飛び越え、食人花のモンスターに接敵し、敵の頭部と触手を切断する。

「フィリア祭の時と言い、こいつ等どこから現れるのよ! テイオナやアイズ達も何処にもいないし!」

いぜんの戦闘とは異なり、己の得物を駆使し、敵の身体を断絶するテイオネの斬撃。

彼女達の攻撃が有効打を与える一方で、周囲の冒険者達はモンスターの群れに蹴散らされていった。無数の触手に叩きつけられ、体当たりによって宙を飛び、その醜悪な大顎に捕まり、咀嚼される者もいる。中には、連携を行い奮闘する者たちもいるものの、食人花のモンスターの方が街の冒険者達より能力が高い。

敵わぬ相手と知り、ばらばらに逃走する冒険者達。

パニックを来たした彼等は広場の外、街の各所へと散らばってしま

う。

止むなくテイオネは疾走し、逃げ惑う冒険者達とモンスターを追った。

「リヴェリア、敵は魔力に反応する。できる限り大規模な魔法で付近のモンスターを集めろ！ボールス、五人一組で小隊を作らせるんだ、数で当たれば各班一匹は抑えられる！」

「わかった」

「お、おう!？」

戦域内の視界情報を一瞬で精査、判断し、フィンは適切な指示を周りに繰り出した。

リヴェリアが広場の中央で魔法円を広げ、ボールスが周囲の冒険者に怒鳴り散らす。ハイエルフの美しい詠声によつて広場近辺のモンスターが引き寄せられる中、フィン自身も全面に立ち長槍で多くのモンスターを屠っていく。

口腔の奥にある『魔石』を正確に一突き。跳躍し、あるいは長駆を駆け上がりモンスターに一撃必殺を見舞う小人族の勇姿と、そして喉が枯れんばかりのその鼓舞の声に、冒険者達は奮い立った。

混乱が収まり、彼等は次々と迎撃に乗り出すわ、

「でき過ぎているな・・・！」

広場での戦況が立て直されていく光景を脇に、フィンはモンスター達の襲撃に目を細める。

ここから確認できるだけでも、街を暴れまわる敵の数は五十以上、まだ増えるか。島の断崖の上に築き上げられた天然の要塞でもあるこのリヴェリアに、接近の予兆さえ感じさせず現れたモンスターの大群に果てしない違和感と、奇怪な感情を覚える。

いや、あまりにも『作想的過ぎる』。

フィンは走り出し、なぎ倒された水晶の柱や大岩の上を跳んで、広場から街中を真っ直ぐ縦断した。

あっという間に崖際まで到達し、欄干から身を乗り出す。

「っ・・・」

崖下を見下ろしたフィンの碧眼が、驚愕に揺れた。

高さ二百M以上ある絶壁の下、今は闇の蒼色に揺れる湖の中から、夥しい数の食人花のモンスターが水面を突き破り断崖をよじのぼっている。

湖の中に、いや安全階層に群れをなして潜伏——モンスターのありえない行動に、フィンの頭の中に衝撃と確信の光が走り抜ける。今まで姿を隠し、一斉に襲いかかってきたこのタイミング。

怪物には不可能である戦略的行動。介在している人の意思。

これだけのモンスターの統率、信じられない。が、だがそれしか考えられない。

フィンは顔を歪め、導き出された答えを口にした。

「まさか、調教師か……！」

◇◇◇◇◇

「……なに……あれ」

アイズは崖下に見える光景と、街を見てそう呟く。

街が大量のモンスターに襲われている。その光景を前にして、昭弘も驚愕した顔のまま、口を開いた。

「こりゃあ、一体どういう事だ！」

「街が襲われてる。それにアイツは前に戦ったやつと同じやつだ」

三日月の視線の先、湖からは怪物祭の時に出てきたあの食人花が大量にひしめきながら、崖を登って街に向かっていている。

「このままいくと街が全滅だ！三日月、先に行かせてもらう！」

「わかった。俺達も後で合流するから、昭弘も気を付けて。アイツら見た目の割にやたら硬いから」

「おう、三日月も早く来いよ！」

昭弘は三日月達にそう言つて、先行していく。

先に行った昭弘を三日月は見た後、アイズに視線を変えて三日月は口を開く。

「アイズ、本当にもう大丈夫？」

「えっ……？大丈夫だよ」

三日月の訳の分からない気遣いにアイズは三日月に視線を向けながらそう言う。だが、三日月はそんなアイズに言った。

「大丈夫ならそれでいいけど、気分とか悪くなったら言っただけ。すぐに向かうから」

三日月はそう言った後、バルバトスがすぐに顕現する。

「じゃあ、昭弘が正面を押しさえてるから、俺達は崖下のアイツらをやろう。アイズも好きに動いたらいいよ」

「わかった」

アイズは〈デスペレート〉を手から引き抜き、三日月と共に最前線へ跳躍する。

一つだけ、心の奥底では自分にまだ〈悪魔〉の力を使えないのを不満に思いながら――。

## 第十九話

「あーもうーしつこい!!」

ティオナはそう叫びながら手にした大双刃で食人花を叩き斬る。

食人花は動きを止め、倒れるが量が量だ。

一体倒せば別の個体が出てくるのできりが無い。

「どれだけでてくるのさーきりないじゃん!!」

倒しても倒しても湧いて出てくるモンスターの群れにティオナはそう叫び、大双刃を振り回す。

モンスターは次々と斬り裂かれ、灰と化していくが、それよりも更にモンスターの数は増えていった。

そんなジリ貧の中に一人の影が乱入した。

「おおおおおらああ!!」

その人影はティオナの後ろにいたモンスターを手にしたハルバードで叩き割る。

「えっ?」

ティオナは後ろを振り返ると、薄い茶色の装甲が特徴的な鎧の人物だった。その鎧はまるで三日月のような鎧にティオナは困惑する。

「えつと・・・ありがとう?」

困惑気味のティオナの言葉に昭弘は言った。

「気にすんな。それより挨拶は後だ。まずはコイツらをやるぞー!」

「う、うん」

三日月ではない暑苦しい男の声に更に困惑する。

モンスターの群れに突っ込む昭弘にそれを追いかけるようにティオナは駆け抜けていった。

それが、ティオナと昭弘の出会い(?)だった。

◇◇◇◇◇

三日月と別行動となったアイズは広場に向かっていた。

激戦区となっているだろうが、遠目でフィン達がいるあの場所が街の安全地帯でもあるからだ。

「まずは、他の冒険者を助けないと」

アイズはそう眩きながら、食人花モンスターへと斬りかかる。あつという間に斬り倒されるモンスターだったが、アイズの内側は不満しかなかった。

「・・・まだ足りない」

まだ、自身の中に眠る悪魔はアイズにその力を貸そうとしない。

その事がアイズにとっての苛立ちの原因となっていた。

まるで、誰かが悪魔の力を抑えている。『ような感じにアイズはそう感じたのだ。』

と、遠くの方から凄まじい轟音と、大炎の極柱が中央から連続して昇った。

「あれは・・・リヴェリアの魔法？」

アイズはそちらに視線を向ける中、周りから夥しい火の粉と共に、うおおおおつ、と歓声も響いてくる。

アイズはリヴェリアが多くのレストランを撃破したのだろうかとう悟った。

「・・・もつと強い奴を倒さなきゃ」

アイズがそう呟くと同時、アイズはふと後ろを振り返る。

「・・・？」

街が、空が、燃え立つように赤く染まる最中。

火のかけらが降りそそぐ水晶の道に、一人の影が、アイズの前に現れた。

脚具、籠手、胸甲。

手足の先から胸元まで厚い黒鎧に包まれた冒険者。

アイズは目を細めると同時、後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「ア、アイズさん!!」

その声にアイズは視線をそちらに向けると、そこにいたのはレフィーヤだった。その隣には大人である獣人の少女が立っている。

逃げ遅れた冒険者だろうか？と、アイズの後ろから黒鎧の冒険者がアイズの懐に踏み込む。が――

「ツツ！」



アイズは咄嗟に「蹴り」を入れた。

「えっ？」

黒鎧の冒険者は瓦礫に突っ込んでいくが、レフイーヤはアイズの行動にそう眩く。

「アイズらしくない」のだ。先程の行動は。

本来のアイズであれば手にしたサーベルで迎撃しようとするだろうが、アイズは蹴りを入れて相手を迎撃した。

その事が、レフイーヤに疑問を抱かせた。それともう一つ違う所があるとするれば……

「雰囲気もアイズさんらしくない……」

正直に言ってその辺りは分からないのだが、どこかアイズらしくない。その雰囲気にもレフイーヤはボソツと眩く。

そんな中、アイズは鎧姿の冒険者を観察する。

自身が後ろに視線を向けただけで懐にまで入れるその敏捷性といい、手際の良さといい、アイズは問いかける。

「……貴方が、ハシャーナさんを殺した人？」

遠方から木霊するように冒険者達の声が届いて来る中、アイズは目の前の人物を睨みつける。

情報によれば女性とのことだが、アイズの勘が目の前の人物がハシャーナ殺害の犯人であると告げている。

アイズ達が見据える中、鎧姿の冒険者が口を開いた。

「だったらどうした？」

その声を聞いた瞬間、レフイーヤは目を大きく見張り、アイズは目を更に細める。

高く響いたその声は外見通りのものではなく———「女性のものだったからだ」。

「あ、貴方は男性の筈じゃあ……!？」

明らかに男性の顔立ちである相貌をまじまじと見つめながら、レフイーヤが戸惑いの声を上げる。

包帯で半分隠れているとはいえ疑う余地がない。薄ら寒いほど表情と言えるものが存在しないが、浅黒い肌の精悍な顔は間違っても女

性には見えなかった。

無表情な相手は淡々と話す。

「引き剥がしたただけだ」

「えっ……?」

「死体から顔の皮を引き剥がして」、被っているだけだ」

レフィーヤは、絶句した。

アイズでさえもその発言に息を呑む。

「ポイズン・ウエルミスの体液に浸せば人の皮の腐敗は防げる……知らなかったか？」

抑揚のない口調で告げられる彼、いや「彼女」の言葉に、寒気が背筋を走り抜けると同時、「アイズの中に眠る悪魔」がアイズに訴えかける。《契約》をしろと。

「それじゃあ、その顔はハシヤーナさんの……?」

そこまで言いかけたレフィーヤは顔を蒼白にさせ、口元を押さええる。

肉の仮面を被っている人物——鎧の女は否定も肯定もしなかった。今更答える必要などないというかのように。

アイズは注意深くその顔を観察する。今も顔半分に巻かれている包帯は、恐らく仮面の大きさが合わない為に生じている歪みを隠す為のものだろう。

「ああ、くそ、きつくてかなわん」

女はアイズ達を無視し、苛立ったように身につけている鎧をぬぎ始める。

プレストプレートを掴み、砕く。あっさりとは破壊して取り外すと、剥がれた鎧の内からインナーに包まれた豊満な胸がまろび出る。襟巻きや他の鎧の一部も強引に引き剥がし、白い首筋やそのしなやかな肢体をあらわにした。

男の顔の印象、先入観が強すぎた。その見た目から女性などと欠片も怪しまれることなく、容疑者の候補から外れていたのだ。

そしてぐずり、と。

腐敗防止の作用が切れたのか、肉の仮面の一部が音を立てて溶け

る。そして肌が剥がれたところから白い女性の肌があらわになった。やがて彼女は兜、膝当て、籠手を残した状態で、顔を上げる。

「いい加減、宝玉を渡してもらおう」

そう告げ、女は腰に装備している長剣を抜き放った。

次には一気に飛び出し、アイズへと襲いかかる。

「っ！」

「ああ、やはり強いな」

ガギイイン!!

衝突する。

レフイーヤ達のもとから疾走し自らも斬りかかるアイズ。《デスペレート》が相手の長剣とぶつかり合い、火花を散らせる。

己の高速度に反応してみせたアイズに女は目を細め、そこから更に連撃を繰り出す。

「……っ!?!」

言葉を失うレフイーヤ達を置き去りにし、激しい剣戟が巻き起さる。

振り下ろされる長剣、横に滑るサーベル。剣と剣が打ち鳴らされ、銀の斬撃が宙を何度も行き交う。

狭くない道の中で何度も立ち位置が入替った。

——強い!!

眼前の敵の実力アイズは瞠目する。

磨き抜いてきた自身の剣技に引けを取らない戦闘技術にアイズは驚愕する。籠手の拳撃が黒い残像を生み、長剣と足刀がアイズの身体を断とうと弧を描く。アイズはサーベルで応戦しつつ、輝く金の長髪がなびいて回避の軌跡を刻んだ。

そんな中、アイズは内心焦る。

このままいくと、負ける。

今の状態でギリギリのラインだが、このままさらに相手がギアを上げてくるとなると厳しくなってくる。

もし負けたら？

三日月に今度は本当に「私はいらない」と言われてしまう？  
そんなのは「絶対に嫌だ」。

だから――

「ねえ、ちょうだい。「貴方の力」。対価は……私自身で払うから」

アイズは悪魔に自分を対価に力を求めた。

それにキマリスは答える。そして――――忌まわしきあの怪物の  
力もアイズは手にした。



「これは……私のレギンレイズ！これがあれば私は無敵だ！」  
そしてどこぞのアホも事を起こそうとしていた。

## 第二十話

「な、なに？」

レフィーヤは戸惑いの声を上げる。だが、それも無理もない。なぜなら、アイズの身体の周りから黒い靄がアイズを包み込むように現れたからだ。

「——っ！」

鎧の女はそんなアイズに対して距離を取る。そんな中、レフィーヤはアイズに叫ぶ。

「アイズさん!!」

だが、レフィーヤの声はアイズに届く事はなかった。

アイズを包み込んだ黒い靄は次第に薄くなっていき、そして——  
—アイズが黒い靄をかき消した。

「——っ！」

「……え？」

女とレフィーヤはお互いに違う反応を見せた。

女の方は警戒と強烈な殺気を。レフィーヤは困惑と驚きを隠せない顔を作る。

そこに現れたアイズは一言で言えば、黒かった。

白と青を基調とした服は黒と紫が混じった青色に染まり、白銀の鎧は光沢のある青に変化していた。

そして何より変化があるのは、左右の腰部に装備された大型のバインダーだった。そこには剣の柄らしきモノが収納されており、恐らく剣帯になっているのだろう。

二人がそんなアイズの変化に戸惑う中、アイズはポツリと呟く。

「……これが、三日月と一緒の力……私の力……」

形は少し違うが、間違いなくこれは三日月達と同じものだ。

アイズは表情を変える事はなかったが、これで三日月と同じ土俵に立てる事を思うと嬉しかった。

だが——

「……ん、でもちよつと気持ち悪い」

アイズの身体が不調を訴えかけてくる。

つい先程まで、アイズの頭の中に前の人物の記憶が流れこんできたからだ。

そして、その中には『三日月に殺された』人の記憶もあった。

その記憶を本当に体験したように見せられたものだから、アイズは吐き気や精神的にもキツイものがあつたが、アイズは自身に言い聞かせるように呟く。

「・・・でも、私は『貴方達じゃない』」

アイズはそう言い切つて、腰のバインダーに収納されている『デスペレート』ではなく、『バーストサーベル』を抜き放つた。

その行動に女は身構える。

アイズはゆつくりとした動作でサーベルの切っ先を女に向け、そして――

一瞬で女の懐へ飛び込んだ。

「なっ!？」

アイズの目にも止まらぬ速さに女は驚愕する。

一瞬のすきに入り込まれたが、女はアイズの手を持つ『バーストサーベル』による突きを捌いていく。

一方アイズは若干内心では不満を漏らしていた。

「・・・使いにくい」

アイズのメインとした『デスペレート』はレイピアだ。突くことや切り払う事をメインにした剣に対して、アイズの手を持つ『バーストサーベル』はエストックと呼ばれる刃が無い突く事に特化した剣だ。刃がない剣で切り払ってもダメージがないのは分かつてはいるが、こうも突きだけに特化した武器はどうにもまだ慣れない。

その事がアイズにとってハンデとなっている。ゆえに、攻めようにも攻める事ができないのだ。

劣勢ではないものの、優勢でもない。膠着状態に対し、アイズはレフイーヤ達の為、早期決着に持ち込んだ。

対人戦では三日月以外使つたことのない、己の魔法を。

「【目覚めよ】」

紡がれた呪文が気流を呼んだ。

アイズの唇が大きな一声を打つと同時に「エアリアル」が発動し、剣に、全身に風の力が付与される瞬間――。

「――っ」

アイズは自身の魔力が、〃普段魔法を使っているより〃急激に減つたの感じて顔を顰めた。

爆発的に高まった速度とその風の暴風によって、敵を押し返す。

「なっ!?!」

女の左眼が驚愕するように開かれる。

咄嗟に防御するも相手の体は耐えきれず、凄まじい勢いで後方へ飛ばされた。

巻き起こる風の咆哮。斬撃の余波、その風圧によって敵の兜が宙を舞い、肉の仮面が裂けて飛ぶ。

ガガガガガッ!と石畳を削りながら大きく後退した冒険者の女はやつとのことで停止すると、顔をゆつくりと上げた。

血のように赤い髪。

兜を失い流れ出た鮮やかな細糸の束は、もともと長髪だったのか、雑に切り落とした跡が残っている。

そして、貴石のごとき緑色の瞳。

千切れかかった包帯を残した顔半分、あらわになる女の素顔。白い肌の美貌は、その切れ長な左眼を愕然と見開いていた。

「今の風・・・そうか、お前が『アリア』か」

その眩かれた名前に――アイズは金の双眸を大きく見張る。  
ドクンツ、と胸を揺らす一際高い鼓動の音。声も発せぬ程の衝撃が全身を襲い、何故、という言葉が頭の中を埋め尽くした。

どちらも驚愕を浮かべる中、一瞬、奇妙な沈黙が両者の間に走る。

『――アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

そこで、突如。

地面に転がっていた宝玉が――雌の胎児が、叫喚を上げる。

「!?!」

背後からの甲高い叫び声にアイズは即座に振り向いた。

同じくその声を聞き、焦燥をあらわにした赤髪の女が、動き出すより早く。

胎児は宝玉の中でもがくように身体を動かし、その極小の手が、異様な眼球の埋まる頭部が、緑色の膜を突き破った。

『アアアアアアア!!』

あたかもアイズの魔法がきつかけだったかのように活動を開始した胎児は、その小さな身体はどこにあるのか、自分の総身の何倍以上もの飛距離を飛礫のように飛んだ。

「——っ!!」

アイズは自身の顔に迫った不気味な眼球を撃ち落とそうとして、腰部に装備されたハンドガンを取り出そうとするが、使い方が分からず、断念して回避行動に入る。

魔力を大きく消耗し、重くなった身体に鞭を入れながら回避すると、胎児はそのまま宙を飛び、全身から液体を滴らせながら。

水晶の壁に埋まる食人花のモンスターへ、「寄生した」。

「なっ——」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

アイズの赤髪の女の間、瀕死だった筈の食人花が絶叫を上げる。

長軀の一部に張り付いた胎児はあたかも刻印するかのようになり、モンスターの体皮と同化していき、さらにそこを中心に変化が始まった。血管が浮き出ると同時に赤い脈状の線が長軀を走り抜けていき、それと連動するようにモンスターの叫びが高くなっていく。

道の片隅でレフィーヤは凍りついていた。悶え苦しみながら変化を続けるおぞましいモンスターの姿が彼女の瞳の中に映りこんでいる。

『オオオオオツツ!!』

のたうち回るモンスターは未だに変容の途中で前触れもなく襲いかかってきた。

無作為に暴れ狂い攻撃を仕掛けてくるその巨体にアイズは走り抜け、レフィーヤと隣で気絶している少女をを拾い上げる。

そして風で一気に駆け抜けようとした瞬間。



「——っ!?ケホツケホツ!」

アイズは突如気分が悪くなり、レフィーヤ達を降ろして「吐いた」。

「アイズさん!?大丈夫ですか!」

レフィーヤが心配するように声を掛けてくるが、アイズはそれどころではなかった。

アイズは一度楽になろうとして、呼吸を落ち着けようとする。

「はあ、はあ、はあ・・・う・・・」

魔法を使おうとした瞬間、まるで「マインドダウンした」ような症状にアイズは足を膝に突く。

「アイズさん!!私がアイズさん達を運びますから、手を貸してください!!」

「・・・レフィーヤ?」

「いいから、はやく!!」

レフィーヤの言葉にアイズはレフィーヤに自身の身体を渡す。

そして一緒にこの場より離れていく中、アイズの瞳に写ったのは——  
羽化を遂げたかのように、モンスターの体皮を被った女体の姿

が見えた。

## 第二十一話

「なにあれ、蛸!?!」

「タコ!?!なんだそりや!!」

各所で戦闘が続く街の中、突如出現したその巨体に、ティオナと昭弘は声を上げる。

ティオナの言葉通り、そこは巨大な蛸に似た姿をしていた。十本以上もの足は食人花のモンスターからなり、それぞれが意思を持っているかのようにくねり、うねり、蠢いている。複数の足のつけ根より上は極彩色の身体——女体を象った上半身が存在し、遠目から確認できるその全容は、あたかも海辺にひそむと言われているスキュラのようだ。

ぶるぶると震えていた上半身が動きを止め、ゆっくりと無貌の顔を上げると、食人花の女体型は移動を開始した。

都市中央部、水晶広場へ進路を取る超大型級のモンスターにティオナと昭弘は広場へと向かう。

「おい!アンタ!あのデカブツの事知ってるのか!!このままだと街にアイツが向かっちゃうぞ!」

「似たようなのは知ってるけど、よく分かんない!!だから、えーと、ガチムチも手伝って!」

「が、ガチムチ?」

昭弘はティオナの言葉に困惑しながらも、ティオナと一緒に街の中心へ向かった。



「どこから現れた、と問いただしたいところだが……始末する方が先決だな」

「ああ、そうだね」

「何でてめえ等はそんな冷静なんだ!?!ちったあ慌てる!」

ボールスの悲鳴が響き渡る横で、リヴェリアとフィンはその巨体を

見上げた。

アイズとルルネを支えながら逃げ込んできたレフィーヤに続き、その食人花の足を侵入させ、轟音とともに女体型が広場へ到達する。リヴェリアの火炎魔法により数が激減したとはいえ、未だモンスターと交戦している冒険者達は、その圧倒的かつ醜悪な威容に息を止める。

蝟足のごとき食人花達は細長かった身体を一回り以上も太く、大きくさせ、まるで巨木の幹のような直径を誇っている。

幾重もの破鐘の吠声を上げる下半身とは打って変わって、極彩色の上半身は泰然としていた。目と鼻のない顔は人の頭を丸呑みできそうな唇が薄く開いており、後頭部からは波打つ緑髪が腰まで届いている。

「50階層のモンスターも、あの胎児のせいでこんな風に……？」

レフィーヤはアイズ達を支えたまま、そう呟く。

すると、フィンにはレフィーヤに支えられたアイズを見て疑問の言葉を投げる。

「アイズ？その格好はどうしたんだい？それに、その武器も……」

「……なんでもない」

「……はあ。なら、後で聞かせてもらうよ」

フィンという言葉にアイズは視線を逸してそう言うが、フィンは追求は後で聞くとアイズに言っただけ息を吐いた。

「やっと着いた！うわ、近くで見るとさらに気持ち悪い」

「此処が街の中心か」

ティオナと昭弘が広場に到着する。

「……ティオナ？ソイツ誰よ？」

ティオナが昭弘を見て言うが、ティオナが答えるよりも前にアイズが反応した。

「あ……アキヒロ」

「おう、アンタ。無事だったか。てか、そいつは……」

昭弘が言い終わる前に、リヴェリアがアイズに聞く。

「アイズ、この男とは知り合いなのか？」

リヴェリアの鋭い視線がアイズに突き刺さる。

リヴェリアの問いにアイズは答えた。

「・・・私の知り合いつて言うより、三日月の仲間だつて・・・」  
「なに？」

リヴェリアは問いただそうとしたが、食人花の足が一斉にアイズへと襲いかかるのを察知して、全員がその場から離脱する。

「アイズと三日月には色々聞きたい事が増えたけど、今はコイツの相手が先だよ。リヴェリア」

「ああ、それが先決のようだ」

アイズが発動している魔法に今は反応しているようだが、なにやらアイズの様子がおかしい。

普段なら連発している魔法も、今のアイズは必要最低限にまで使用を抑えている。魔法を使うたびにアイズも苦しそうな表情を浮かべているのも、妙に気になった。

食人花全てがアイズに殺到する光景に、リヴェリアとフィン杖と槍を掲げてモンスターのもとへ接近する。

そして彼等より先に急行するティオナとティオネ、昭弘がアイズを追う足に対応していた。

「そりゃあ——ッ!!」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

振り下ろされたティオナの大双刃が、食人花の首を切断する。

大銀塊の斬撃を浴びて断たれた足から絶叫が迸った。

花部を失った足は斬られた断面から血を流しつつ、そこからティオナを弾き飛ばす。

「痛ったあー!?!」

大双刃がの極厚の刀身を盾にした彼女は、一度地面を転がりすぎさま立ち上がる。

「力めちやくちや強くなってるんだけどー!?!しかも首落としたのに動くのー!?!」

「ありゃあもう足の一本に過ぎないでしょうが、そりゃ動くわよ!」

妹とは異なり冷静に足の一本を料理するティオネが叫ぶ。

動きの精細を失う足をここぞとばかりに再起不能に追い込もうとするテイオネだったが、そこで女体型の上半身が動いた。

アイズを追っていた顔を彼女に向け、腕の触手を槍のごとく放出する。

「くそッ！」

押し寄せる無数の触手を二刀のククリナイフで切り払う。

「リヴェリア、先に行く」

「ああ。———そのエルフ、背の弓を貸せ！」

「は、はい!？」

フィンが加速して足の一本に長槍を突き立てる中、リヴェリアが一人のエルフの男を呼ぶ。

王族の声には彼は無条件に従った。副武装であった大型の破碎弓を矢筒ごと、走ってくるリヴェリアに受け渡す。

素早く矢筒を腰に固定したりヴェリアはその濃紺色の弓を構え、立て続けに矢を連射した。

上半身に射った矢をわざと触手に弾かせ、本命であるフィンの支援攻撃を次々と着弾させていった。

そして遠距離からはリヴェリアとレファイヤ以外にもう一人、彼等をサポートする人物が横に立っていた。

三日月と同様の鎧を身に纏い、〃四本の腕〃に持ったライフルがフィン達を正確に援護射撃を行っていた。

「・・・やるな。援護射撃が得意なのか」

「三日月に背中を任せると、いつもこうだからな！アンタもやるじゃねえか！」

「当然だ」

昭弘の言葉にフツとリヴェリアは笑うと、そのまま彼女達の援護に回った。

昭弘は変なやつだと考えていたが、すぐに考えるのを止め、目の前の敵に集中した。

## 第二十二話

アイズ達が大型モンスターと戦っている頃——  
超硬レアアロイで出来た巨大な鉄塊が食人花に振り下ろされる。  
轟音と共に食人花の魔石は食人花と粉碎され、灰へと変わった。  
街を覆い尽くさんといった食人花は一匹の狼王によつて壊滅させられようとしていた。

「ふっ！」

三日月は手に持つ巨大メイスを近くにいた食人花に向けて、フルスイングで振り回す。直撃した食人花はグチャリと頭部にあたる部分を一撃で吹き飛ばされた。

血のように吹き出す体液を無視し、近くの地面から伸びている触手を三日月は掴み取ると、それを全力で引き千切る。

『——オオオオオ!』

遠方の方でモンスターが悲鳴を上げる。

だが、そんなモンスターに対し、三日月は両腕に装備された腕部砲で、モンスターを撃ち抜いた。

撃ち抜かれたモンスターは巨体を揺らしながら地へと倒れ伏し、灰へと変わる。

みるみるうちにモンスターの数を減らしながら三日月はボソツと呟く。

「何体出てくるんだ?こいつら」

三日月は半分うんざりするような声でそう言つて、近くにいた食人花の頭部らしき部分を太刀で上から突き刺し、地面へと縫いつける。口を開ける事が出来ずに触手を周りに叩きつける食人花に三日月は大型のレールガンの銃口をつきつけると、迷わず撃ち抜いた。

“<sup>パ</sup>アン!”とモンスターの上顎が吹き飛び、その肉片が辺りに散らばる。

グロテスクな下顎と舌らしき肉の塊が飛び出てくるが、三日月は気にすることなく、その肉片の中で光輝いている魔石を抜き取ると、周りを見渡した。

敵、敵、敵。

どこを見渡しても敵だらけのその光景に三日月は諦める事もなく

「まあ、一匹一匹プチ潰すしかないか」

そう呟いて、モンスターが蠢く群れの中に一人、突っ込んでいく。テイルブレードが遠方の食人花の触手よりも不規則な動きで、根元部分に突き刺さり、そして引き千切った。

三日月の近くにいたモンスターには、巨大な腕から放たれたレクスネイルによる貫手がモンスターを貫き、魔石をえぐり取る。

数の暴力で攻めるモンスターの猛攻も、三日月の圧倒的な個人の力の暴力が上回り、どんどんと数を減らしていく。

「これなら、あと少しで終わるか」

少なくなつたモンスターを見て、三日月はそう言いながら一人、湖沿いで防衛戦を行うのだった。

◆◆◆◆◆

三日月が一人で防衛戦を貼る頃、アイズ達は大型モンスターを倒すため、走り出す。

「レフィーヤ、以前やった連携を覚えているな？あれをやるぞ」

「わ、わかりました！」

近づいてきたリヴェリアにレフィーヤは頷く。

お互いに別方向へ走り出し、女体型の前後に回った。

『!!』

アイズが広場から離れていった一方、大型のモンスターとの戦闘が続いていく。

フィン達を中心に女体型攻略が進められていく中、手の空いた冒険者達は勇み、戦列に加わろうとした。

後衛の位置で魔道士が詠唱を始め、そして昭弘を含む前衛壁役が、敵の攻撃を受け止めようとするが——昭弘以外、モンスターに取っては意味をなさなかった。

健在である十以上もの食人花の足を広げ、纏わりつく蟻を吹き飛ばすがごとく、冒険者達を薙ぎ払っていく。

「うおおおおおおっ!? や、やべえっ!」

「ちよつと、周りのやつ等避難させなさい! 庇いきれないわよ!」

広場を破壊していく衝撃と強風にボールスが悲鳴を上げ、ティオネも叫ぶ。

その混乱の中、一人女体型の食人花の足を捌いている昭弘は、苦悶の声を出す。

「くそっ!! 数が多い!!」

ハルバードを片手に両腕とサブアームを駆使して、捌いていくいくが、いかんせん手数が圧倒的に違った。

「ガチムチ! もうちよつとだけ抑えられる!?!」

ティオナの叫び声が昭弘の耳に聞こえてくる。

「やっている!!」

昭弘はそう言って、ハルバードで食人花の足を切り落とす。

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ!」

広域に展開する魔法円。

何重もの翡翠色の円が輝きを放ち、その存在を誇示するかのようまばゆい光粒と光条が足元から立ち昇る。

同じ魔道士達を震撼させるほどの魔力が、彼女の身から発散されていった。

「押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ!」

「!!」

ぐるんつ、と女体型が顔と上半身を振り向かせた。

莫大な魔力に反応し、広場の中心から這いながら猛進する。

「帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢!」

「ツッ!!」

食人花の足が大きく吠え、目標の魔力に飛びかかるとする。

そしてお互いの距離が二十Mを切ったところで——リヴェリアは退避した。

魔法円の中心から矢のように真横へ跳び、女体型の前面から消え失



せる。当然のように光の円は消失し、魔法に装填されていた魔力もただ消費するだけに終わった。

あっさり魔法を中断し、モンスターの突撃を回避する。

側面へ逃げるリヴェリアを食人花の足が追う中、女体型の上半身は腑に落ちないように後頭部の緑髪を揺らした。

「――【雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】」

『!?!』

女体型が、震えた。

中断された筈の詠唱が未だ続き、その美しい声音が空間に鳴り響く。

モンスターが後方を振り返ると、広場の最奥、たった一人で山吹色の魔法円を展開するエルフの少女の姿があった。

リヴェリアは囧だ。

彼女の抜き出た魔力の出力を隠れ蓑にすることで、レフィーヤがモンスターの意識の外で魔法の構築を着々と進めていたのである。

強力な魔道士を二枚用いた囧攻撃。

リヴェリアの詠唱と重ねて響いていたレフィーヤの玉音の音が、最後の詠唱文を唱える。

「総員、退避だ!」

「でけえのが来るぞおっ?!」

フィンとボールの呼びかけに全冒険者が射線から撤退する中。

モンスターを残し誰もいなくなった広大な視界へ、レフィーヤは砲撃を繰り出した。

「【ヒュゼレイド・ファラリーカ】!!」

『アアアアア!?!』

炎矢の豪雨が女体型に降り注いだ。

夥しい紅蓮の魔力弾がモンスターの全身を削り取る。花部を断たれた足が、ずたずたに切り裂かれた体皮が、触手が、爆砕しながら弾け飛んでいく。

「たたみかけさせてもらおうか」

「お供します、団長!」

「——せえーのッ!!」

砲撃終了から、秒を待たず、三つの影が女体型に肉薄する。長槍を持ったフィンが、二刀のククリナイフを打ち鳴らすティオネが、そして大双刃を振り上げるティオナがモンスターへと跳躍した。神速の刺突が見舞われ、二振りの斬撃が交差し、破壊の一撃が黄緑の身体に叩きこまれる。

繰り返される攻撃は止まることなく、燃え盛る敵の身体を解体しようとする三人の第一級冒険者は嵐のように傷を刻みこんでいった。

『アアアアアアアッ!?!』

悲鳴とともにぐらりと仰け反る女体型は、フィン達の攻撃から逃れるように重心を後方へ傾けていく。

そして次の瞬間、極彩色の上半身を下半身から切り離した。

「逃げた!?!」

「あいつ、湖に飛び込む気!?!」

広場を越え、街の斜面へ転がり落ちていく女体型の上半身。

それを追いかけるように三人は疾走するが、女体型が転げ落ちるスピードの方が早い。

そんな中で、一つの影が三人を追い抜いた。

その疾走する影は凄まじいスピードで、女体型に向かっていく。

その影の正体は三人に見覚えがある人物だった。

「三日月!?!」

「ごめん、遅れた」

ティオナがそう叫ぶ。

そう。今の今まで、行方不明になっていた三日月が合流したのだ。驚くティオナ達に対し、三日月は手にしたランスメイスを女体型に向けて投擲した。

螺旋を描きながら、凄まじい速度で投擲されたそのランスメイスは女体型モンスターに吸い込まれるように進んでいき——。

ランスメイスの先端が女体型に突き刺さり、その部分から先端につけられた大量の火薬が衝撃によって大爆発を引き起こした。

魔石もろとも爆散した女体型を見て、三日月は「あつ」と呟く。

「ちよ、三日月！魔石ごと吹き飛ばしてどうすんのよ！」  
「ゴメン」

ティオネに三日月はバツが悪そうにいいながらも、視線をアイズが  
いる方角へ向ける。

バルバトス越しで映るアイズの姿に三日月は何も喋らずにただ、  
じっと見つめていた。

## 第二十三話

破鐘の啼き声が街の中から消える。

食人花のモンスターが全滅する一方で、アイズと赤髪の女は都市の西に戦場を移していた。

東へ向かっていく斜面を駆け上がり、西端の街壁に迫る場所へ出る。街の最も高所である西部は平地が続いているが、今やモンスターの侵攻に遭ったため、岩も、店舗も、水晶も全て押し潰され更地のような様相になっている。

火片が舞う紅の空から離れ、場は再び蒼い薄闇に包まれた。視界の奥の街壁にはモンスターが破壊した跡が刻まれている中、こちらでも荒れ果てた街並みを進み、アイズ達は高速で行き交わっていく。

「……っ！」

「便利な風だな」

剣の切れ味、速度ともに上昇させる【エアリアル】に赤髪の女は表情を変えず呟く。

「……っ！」

だが、アイズはそれどころではない。

風の付与魔法をかけたレイピアが彼女の化け物じみた強撃を弾き返す。

だが、アイズは身体の負担もそして精神的にもかなり限界が来ている。まず、【エアリアル】が通常の倍以上の出力にしないと風を全身に纏わせる事が出来ない事がアイズにとってかなりの負担になっていた。

そしてもう一つが――

「『アリア』――その名前をどこで!？」

滅多にない感情の発露をするアイズ。

相手を見据えるその顔には鬼気迫るものが浮かび上がっている。

剣撃が飛び交う中、テイオナ達でさえ、耳にしたことがない大きな声音に、横並びに走る赤髪の女は口を開いた。

「さあな」

「っ……っ!!」

アイズは柳眉を立て再び斬りかかった。

目にも止まらない速さで鈍色の斬撃や突きが放たれる。瞬きする間に十をも超える攻撃が、両者の間で乱舞し、刀身と刀身があまりの衝撃に軋んだ。

アイズの藍色の手甲が浅く傷が付き、赤髪の女の髪を数本断ち切り、互いの肌に細い血の線を一線を刻んでいく。

恐らくは『深層』のモンスターの長牙をそのまま武器にしたのか、柄と鉛色の刀身のみで長剣はまるで野太刀のようでもあった。薄闇に鈍い残光を何度も描きながら、アイズの手にあるレイピアと互角に打ち合う。

——いや、敵はアイズの倍以上にした『風』を圧倒している。付与された風は使うにつれてどんどん小さく、そして精度が落ちていく。

自身の疲弊が一気に襲ってくる中でも、アイズはその眦を吊り上げた。

相手は何かを——『アリア』という名前を——知っている。

早瀬のごとく胸の奥の心が逸る。柄を握りしめる手の力が増し、一段と剣速が上がった。

『戦姫』という渾名で呼ばれるに相応しい仮面を被り、アイズは視界から全てのものを取り除き、目の前の敵に剣を振るう。

「——人形のような顔をしていると思ったが」

そして。

激しい心の動きにより、常時より前のめりになったアイズの剣筋を赤髪の女は見逃さなかった。

大振りになったアイズの剣を躲し、風を引き千切る一撃を見舞った。

すくい上げるような拳砲。

籠手を失った左手が気流の鎧ごと腹部を強打し、アイズの細身の体を後方へ殴り飛ばされた。

「うっっ!?!」

吹き飛ばされたアイズは轟音と共に背中から瓦礫に叩きつけられた。

肺から空気を引きずりだされたアイズの体は、神経が断線したかのように一瞬言うことを聞かなくなる。

カランツ、と手から《バーストサーベル》が音を鳴らしながら、地面へと転がった。

「全力で放ったつもりだったが：：鎧は少し歪んだだけか。だが、やつと終わりだ」

先程の一撃で刀身が爆発し粉々に砕け散った長剣を捨て、赤髪の女はアイズめがけて疾駆する。

地面に膝をつくアイズに向かって突撃し、その右腕を背に溜める。対応できない。

顔を歪めるアイズ目かけ、籠手に包まれた掌底が撃ち出された――  
――次の瞬間。

「なにっ?」

攻撃を防ぐ、激しい金属音が響き渡った。

瞠目するアイズの目と鼻の先、交差くる長槍と杖が、敵の掌底を寸前で止めている。

槍と杖の先端を地面に埋め、視界の左右に控えるのは、小人族の少年とエルフの麗人だった。

まるで姫を守護する騎士のように、フィンとリヴェリアが、アイズの目の前に現れた敵の攻撃を受け止めている。

「フィン、リヴェリア・・・」

アイズが掠れた眩きを落とすと同時、二人は交差した槍と杖を力任せに切り払った。

右腕を押され後退する赤髪の女を二人は見据えている。

「アイズさん!」

「レフィーヤ・・・?」

胸と背中に細い手が当てられる。

横を向くと、駆け付けてきたレフィーヤがアイズの体を支えるように手を添えていた。

「レフィーヤ、アイズを治療しろ！」

「はい！」

リヴェリアが振り返りながらアイズ達に指示を飛ばすと同時、空から一つの影がアイズ達の前に落ちてくる。

土煙を上げながら着地したのは三日月と同じ鎧を着た昭弘だった。右手の巨大なハルバードの先端を地面に叩きつけながら、昭弘は赤髪の女を見据える。

「ごいつか。アンタらの、三日月の仲間をやった奴は」

昭弘の問いにリヴェリアが答える。

「ああ、だが油断はするなよ。アイズをここまで追い詰めた奴だ。相当の手練だろう」

「関係ねえ」

昭弘はそう言って赤髪の女に目掛けて最高速度で突進する。

「なんだ、お前は？」

赤髪の女が昭弘を迎撃しようとして疾走した。

女は籠手がある右腕に力を入れ、昭弘目掛けてアイズを打ちのめした掌底が襲いかかる。

だが――

「うおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

その掌底を昭弘は腕の分厚い装甲で受け止めながら、女の顔に目掛けて強烈な一撃を入れた。

「くっ、これしきー」

女はそう言って昭弘に蹴りや拳を叩き込む。だが、昭弘は怯む事なく両腕で女の顔や身体に拳を叩きつける。

そして昭弘は三日月が来る前に決着をつけるべく、背中サブアームを展開した。

「・・・なっ?」

背中から突如出てきた腕に赤髪の女は驚愕の声を上げる。

「おおおおおおおおおお!!」

昭弘はそんな女の反応を気にすることなくサブアームを含め、四本の腕で殴りにかかる。

「ぬうーふんーふんー！おおおおお!!」

女の拳を昭弘は二本の腕で受け止めながら、残りの二本の腕が赤髪の女に襲いかかった。

赤髪の女は血を頭から流しながら分が悪いと悟ったのか、昭弘にタツクルをかけてバランスを崩した後、距離を取る。

「分が悪いか・・・」

ぽつり、と眩き、女は脇目も振らず速やかに逃走した。

「くそー待ちやがれー」

昭弘は叫ぶが、女は足を止めない。

アイズは、身体の痛みを耐えてその場から駆け出した。

「アイズさん!？」

レフィーヤの叫びを後方に置き、フィンとリヴェリア、そして昭弘も抜く。

彼等の追走する気配が続いてくる中、アイズは赤髪の女の後を追った。

「・・・!!」

女はモンスターが破壊した街壁を抜けて街の外へ出る。

岩と水晶が粉碎された破壊跡を越えてアイズも『リヴェリアの街』の西方、島の中心部へ向かう。背中からリヴェリア達の制止の声が何度も背中を叩いてくるが、止まらない。魔法も発動させてさらに加速し、視界に移る血の色のように赤い髪の後ろを疲弊しながらも猛追する。

街を一步離れると、そこには荒野と言うべき野原が広がっていた。でこぼことした不安定な地面に大小の岩が転がり、雑草と低木が生えている。月夜のような薄闇が辺りに満ちる中、背の短い青水晶が淡く発光していた。

魔法の力を借りて激しく追いかけるアイズだったが、残りわずかと言える程の距離まで差を縮めたところで、赤髪の女は荒野を駆け抜け、島の西端に到達した。

ちらりとこちらを左眼だけで見やった彼女は、躊躇いなく踏み切り、崖下へ。



眉を歪めるアイズが崖際で急停止し身を乗り出すと、女は壁を走って湖に突き進んだ。フィンとリヴェリアがアイズの隣に駆け付けるのと、その姿は既に石の粒ほどもなく、少し遅れて昭弘達が到着した頃には、水飛沫が上がった。

「何てやつだ・・・」

崖下を見下ろしながらリヴェリアが呟く。

湖の底を泳いでいるのか、アイズ達がどんなに目を凝らしてもこの崖際からその姿を確認できない。ここで行方をくらませてしまえば追跡は不可能だった。

「・・・」

アイズは唇を引き結ぶ。表情は抑えられていたが、その右手がギュツと拳を作った。

眼下に視線を固定しながら、アイズは忘れて久しかったあの感情――悔しさを、胸の中に刻み込まれた。

敗戦の後の無力感にも似た空気が、一人、少女の体を包み込む。

階層の天井、蒼い薄闇を生む水晶の薄明かりが、その金の髪を儚く濡らしていた。

そして――

「もつと強くならなくちゃ・・・」

呪いにも似た彼女の呟きが他の人に聞こえる事なく、闇の中に消えていった。

## 第二十四話

風のような人だった。

子供のように純粹で、まだ幼かった自分よりも無邪気で、人の悪意というものを知らず、知らされず。

白い雲と一緒にたゆたう、あの青い空の流れのように。

誰よりも自由な、風のような人だった。

そして自分は。

そんな風のように振る舞い、温かく、優しくかった彼女が好きだった。屈託のない笑みを浮かべる母親のことが、大好きだった。

頭を撫でる手付きを覚えている。

頬に添えられる指の温もりを覚えている。

耳朶をくすぐってくる綺麗な声音を覚えている。

彼女が何度も語る、優しくして幸福な物語を、覚えている。

彼女の胸の中、物語を聞き終えた自分が、抱きしめられながら振り返ると、無邪気な微笑みがあった。

頬を染め、自分の顔にも笑みが浮かぶ。

彼女は魔法使いだと、信じて疑わなかった。

彼女の前では誰でも笑顔になれる。誰もを笑顔にすることができ

る。慈愛の眼差しで見下ろしてくる彼女に、貴方のようになりたいと、幼い声音が口にする。

風のような貴方に、私もなりたいたい。

『あなたはあなただから、私にはなれないよ?』

首を傾げながら、自分とそっくりな声音で、彼女はそう言った。

そういうことじゃないよ、と丸い頬が膨らむと、彼女は何がおかしいのかころと笑った。

頬を膨らませていた自分も、その笑みに引き寄せられるように相好を崩す。

優しく抱きしめ、抱きしめられ、顔に笑みを浮かべ合い、二人で笑い声を溶かしていく。

やがて、彼女は振り返った。

肩から顔を出すと、そこには青年が現れていた。

黒い襟巻きに薄手の防具、そして鞘に収められた銀の長剣。

彼の顔を見て、彼女は抱くのを止め、自分を胸の中から降ろす。最後に頭を撫で、ゆっくりと立ち上がった。

自分に向けるものとはまた違う笑みを浮かべ、青年に微笑みかける。彼もぎこちなく笑って、何かを告げるように頷いた。

自分の寂しげな視線に気づくと、青年はもう一度不器用に笑う。すまない、と父親は謝った。

そして踵を返し、母親を呼ぶ。

『行くぞ——アリア』

自分を置き、二人は寄り添って、白い光の先へ行ってしまった。

◆◆◆◆

「……」

夢の靄が、薄れていく。

意識が白い森の中を抜けると、辿り着いたのは瞼の裏に溜まる暗闇だった。狭間を越えて、過去から現在へと時間が舞い戻ってくる。

小さく肩が揺らされていた。ひやりとした冷たい空気も頬に感じ、意識がはつきりとした輪郭を象っていく。

アイズは、ゆっくりと瞼を開けた。

「平気、アイズ？」

「……うん」

テイオナの声に、間を置いて頷く。

視線を上げると、彼女が横からこちらを覗き込んでいた。

「休憩の時間、終わるらしいよ。もうそろそろ出発するって」  
「ん……」

夢の残滓が残り、少々夢現のような状態で返事をするその姿に、テイオナは苦笑する。頭を軽く振ることで、僅かに残っている眠気を飛ばし、アイズは今度こそ視線をはつきりと巡らせた。

最初に飛び込んでくるのは揺れ動く魔石灯の光だ。携帯用の照明の周りで円を作っているのは、フィン、リヴェリア、ティオネ、レフィーヤ、そしてアイズとティオナ。みな一様にして腰を下ろし、今では武器の整備や道具の確認を行っている。どうやら今の今まで眠りこけていたのは自分だけだったらしい。

薄闇と、そして白濁色の壁面に囲まれている現在地は小規模の広間。アイズ達のもとを離れた場所では三日月と昭弘が見張りを行っており、彼らの他にも同派閥であるもう一人の団員が立っている。

アイズ達は、広大な迷宮の一角で休息を取っていた。

『リヴェイラの街』で勃発した事件から、既に六日が経とうとしている。

あの騒ぎの後、アイズ達は一度地上へ帰還した。同時に、事件の中心にいた彼女達は様々な後始末に追われる羽目にもなっていた。

負傷者の救護や地上撤収に際しての護衛は勿論のこと、事件の顛末をギルドや主神であるロキに報告した。街を襲った赤髪の女——調教師の情報も回そうとしたが、ロキの「まだ待って」という指示によって一時保留となっている。一方で女はハシャーナ殺害の犯人として、【ガネーシャ・ファミア】の強い要望もあつて指名手配——ブラックリストに記載されることとなった。

そして、アイズが手に入れた「悪魔」の力の事も。

ロキからの指示はただ一つ。

どういふものか分からない以上、この力の使用を禁止される事となった。

最初、アイズは反発しようとしたが、ロキの他にもフィン達が使う事を反対した為、しばらくは三日月と昭弘がツーマンセルで、アイズに指導をしている。

もつとも、二人は感覚で動かしているらしいのであまり参考になっていないのが現状だった。

事件についてはもみ消されるがごとく、事件のほとぼりは急速に冷めつつある。

『リヴェイラの街』、もう直され始めてたね。ほんと早いな——

「あそこまで金根性が突き抜けていると、感心するわね……まあ、助

かるって言えば助かるんだけど」

「魔石灯を囲み迷宮探索の準備を進める傍ら、テイオナとテイオネが思い出したように世間話をする。

そんな中で、フィンとリヴェリアの話も耳に入ってきた。

「食人花のモンスター……あの調教師も目立った動きは見せていないな」

「ソー、流石に動きが派手だったからね。主神が手綱を握っているなら、自重するように言い含められているだろう。それに、あれだけの数のモンスターを新しく調教することは短時間じゃ不可能に近い。今回みたいなのはまず起きないと思うよ。三日月がほぼ全滅させたしね」

「まだ調教済みの尖兵が残されているとは思いたくないけどね、とフィンはリヴェリアの言葉に返す。

「食人花のモンスターの襲撃は以後なく、赤髪の調教師は鳴りをひそめているようだった。

「依頼書の情報を調査するためハシャーナの向かったとされる30階層にアイズ達は足を運び、ぎつと調べるも、得られるものはなかった。ハシャーナがどこであるの宝玉を発見し持ち帰ったのか、結局わからずじまいである。無事生存しているルルネもまた、例の依頼人とは連絡が取れなくなったらしい。

「さて、そろそろ出発しようか。三日月、昭弘、ラクタ、大丈夫かい？」  
「ん？問題ないよ」

「三日月は昭弘と何か話をしていたのか、反応に少し遅れて返事を返す。

「現在、アイズ達は本来の目的であった資金稼ぎ、迷宮探索を再開させている。

「一度地上に戻った際、レフィーヤの他にもサポーターを一人加え、別のファミリアに所属しているらしい昭弘も含めた計、九人のパーティだ。

「現在地は37階層。

「『下層』を越えた『深層域』だ。

そんな中、ティオナはアイズの顔を見て心配そうに言った。

「アイズ、何も食べないでぐっすりだったけど、いいの？あたし、食べ物まだちよこつと残ってるよ？」

「ありがたい、ティオナ・・・大丈夫だから」

立ち上がり武器を装備し始める中、ティオナの心づかいをアイズはやんわりと断る。

そして魔石灯や寝袋などの野営道具をレフイーヤ達のバックパックにしまい、アイズ達は休息を行った『ルーム』から出発した。

「でもアダマンタイトがああ『ルーム』から出てきた時は、びつくりしたな。壁を壊してたらぼろって出てきてすごいラッキーだったよね」

「あのアダマンタイトだけでも、結構なお金になりそうですね」

「うん、ちよつと大双刃の代金の足しになるかも！」

ティオナとレフイーヤの会話が隣で交わされているその一方で、アイズは、一人押し黙って内面に意識を落としていた。

『アリア』、という名前と。

あの赤髪の調教師の姿が。

音を立ててぐるぐると頭の中で回っている。

(強かった・・・)

強い、強かった。

あの赤髪の調教師の実力を、激しく襲いかかってくるその苛烈な姿を思い出しながら、アイズは何度もそう呟く。

もし彼女を倒すことができたら、何か聞き出せたかもしれない。

何故『アリア』のことを知っているのか、分かったかもしれない。

(もつと、力があつたら・・・)

弱い。

まだ弱い。

アイズ・ヴァレンシュタインは、何て弱い。

呪詛のように、アイズは己のことをそう評し続ける。彼女より強ければ、よりこの手に力があつたら、三日月達と同じ「悪魔」の力を使

いこなす事ができたならと思ってしまう。

無意識のうちに、アイズの手は強く握りしめられていた。

と、そんな中で――

ポンツとアイズの頭に三日月が手を置いた。

「……三日月？」

普段はしない三日月の突然の行動にアイズは困惑する。

「難しい顔してるけどさ、俺や昭弘だって始めから強かった訳じゃないよ」

「……？」

三日月の言葉にアイズは更に困惑する。そこまで自分を思い詰めていたのだろうか？とアイズは考えようとする一方で三日月の言葉がアイズの耳に入ってくる。

「昭弘は俺とは違って元々ヒューマン・デブリなんだ」

「……ヒューマン・デブリ？」

聞いたことのない単語にアイズは三日月に聞き返す。ヒューマン・デブリと一体なんなのだろうか？と、三日月はすぐに答えをくれた。

「ゴミみたいな安い金で売られる消耗品扱いされる人間だよ。俺だってそうならなかっただけで、それと似たようなもんだけど」

一言で言ってしまうえばゴミ同然の奴隷。

三日月は自分達の事をそう言った。

そんな驚愕するような過去に対して、三日月はアイズに言う。

「俺や昭弘は、仲間が死ぬのが嫌で今みたいに強くなったんだ。生きる為だけに精一杯で子供の頃からなんだってやった。生きる為に他の奴を殺すことも、盗みも、なんだってさ」

「俺はオルガに『此処じゃない何処か』に連れてくれるって言われたから俺は強くなった。俺には戦う事しか出来ないからさ、自分に出る事をやるだけだって今でも思ってる」

三日月はそう言いつつも、口を開いて話していく。

「アイズには、『まだ時間はあるから』慌てなくていいよ」  
強くなる意味をゆっくり考えてね。

アイズは三日月にそう言われてポカンとする。

三日月達には考える時間がなかった。生きるか死ぬかの選択肢だけだったから。だから自分には良く考えろと彼は言う。だから何の道を選べばいいのか——分からなくなってしまうた。



## 第二十五話

37階層は『白宮殿』とも呼ばれている。

その名の謂われは白濁色に染まった壁面と、そしてあまりにも巨大な迷宮構造だ。これまでの階層とはスケールそのものが異なり、通路や広間、壁に至るまでの全ての要素が広く大きい。アイズ達が休息に使用した小部屋など例外も存在するが、ほとんどの道や『ルーム』は幅十Mを優に超えている。

また円形の階層全体が城塞のごとく五層もの大円壁で構成されており、階層中心に次層への階段が存在する。

冒険者達は大円壁の間にある開放的な通路やいくつもの段差を昇り降りして中心部を目指さねばならない。オラリオに匹敵しようかというその範囲領域は、正規ルートが確立されているとはいえ、迷い込んだ瞬間二度と出てこれなくなるほどだ。

頭の上に存在する空間も果てしなく高く、上級冒険者の視力をもつてしても天井を確認できないほどである。暗澹とした闇に塞がれていることで、薄暗さも際だっており、白濁色の壁面に等間隔で灯る燐光だけが冒険者の横顔を照らした。

「やっぱり街の事件からアイズ、ちょっと怖いわね。鬼気迫っているというか。そんなに調教師の女って強かったのかしら？」

「アキヒロと一回模擬戦をやったけどさー、アキヒロのあれ、ズルでしょ!!腕四本とか!!そんなアキヒロとやりあってたんだから相当強かったと思うよ?あ、あたしも前、行くね!」

二十以上のモンスターの大量に襲われる中、ティオナが大双刃を振り回し強引に道を開け、アイズのいる前方へ駆け出していく。

妹の分まで敵を受け持つことになったティオナは、遠ざかっていく背中に見送りを叫び散らした。

37階層はその広大さもあってモンスターの数は40階層以上の領域では郡を抜いており、インターバルも非常に短い。

モンスターが階層の各所に均等に散らばっている事が唯一の救いだ、気まぐれのように固まっている群れへぶつかってしまおうと、第

一級冒険者とはいえ手を焼く事になる。

広大な通路内で前面から押し寄せるモンスター達に対し、テイオネやフィン、リヴェリアは二名のサポーターを守るに迎撃していた。三日月と昭弘に関しては、アイズ達とローテーションで戦闘を行っていた為、今は休憩中である。

『ウオオオオオオオオオオオツ!!』

「っ!」

パーティ前方奥の敵を一手に引き受けるアイズは、巨身のモンスター『バーバリアン』の天然武器を回避する。両手に装備された棍棒が地面に叩きつける中、アイズはサーベルの一振りで相手を灰に変えた。

『ハアアツ!』

「!」

その大顎を開け、長い舌を打ち出してくる『バーバリアン』。

ねじれ曲がった角を生やすモンスターの舌撃を切り払い、打ち上げる悲鳴ごと斬り伏せる。

すかさずアイズは走り、ずんぐりした黒石の塊である『オブシディアン・ソルジャー』を両断した。

アイズの足もとにモンスターの亡骸が、灰がうずたかく折り重なっていく。サーベルが銀の射線を刻めばたちま血複数の相手が散り、血しぶきを飛ばした。

意思の炎に燃える金の瞳はどこまでも敵を求めた。眦を吊り上げ彼女は円を描くように足を捌き、旋風のごとく、四方のモンスターをまとめて横一線に切り飛ばす。

円状に断末魔が巻き起こった。

「流石に腰が引けるなあ・・・リヴェリア、何も話を聞いていないのかい?一度辛酸を舐めさせられたくらいで、ああにはならないだろう」  
「駄目だ。『何でもない』の一点張りで、何も話そうとしない」

フィンが困ったように目を細め、リヴェリアはその心労を語るように盛大に嘆息する。

もはや手持ち無沙汰に陥る彼らの視線の先で、金髪金眼の少女は

テイオナとともに時間をかけず残った敵を殲滅していった。

「今、灸を据えても意味はなさそうだね・・・やれやれ」

「あの、団長、リヴェリア様・・・アイズさん、大丈夫なんでしょうか？」

「ああいった状態の時は、大抵空腹になれば治まるが・・・腹を空かせた素振りを見せたら、すかさず餌付けをしてみろ。落ち着くかもしれない」

「は、はいっ」

勝手知ったる様子で話すリヴェリアに、レフィーヤは汗を流して頷く。

そんな中で、フィンはアイズの戦闘を黙ってみていた三日月に聞いてみる。

「三日月、アイズの今の状態を見てどう思う？」

フィンの言葉に対し、三日月は答えた。

「別に。しばらくほっとけば？ 酷くなるようだったら俺が無理矢理止めるけど」

三日月はそう言った後、ポケットからゲーツを取り出して口に含んだ。

そんな三日月にフィンは息を吐く。そして隣にいる昭弘にも聞いてみた。

「アキヒロはどうだい？」

話を振られた昭弘は筋トレの手を休めると、アイズを見て答えた。

「何かに対して焦っているように見えるな」

「焦ってる？」

「ああ、それが何かはわからないが・・・そんな感じがするだけだ」

昭弘はそう言った後、筋トレを止めて身体を起こす。

そんな彼らに対し、レフィーヤはアイズ達の元へ向かい、戦利品を回収する。

一行は階層の奥へ進み、最も内側の大円壁を越え階層の中心部で探索を続けた。

37階層には闘技場と呼ばれる、一定数を上限にモンスターが無限

のごとく湧き出る大型空間も存在する。アイズが一度単身で乗り込もうとした際には流石に止めたが、以降は無難な探索が続いた。

アイズも仲間達を危険に晒す真似はせず、積極的にモンスターと戦闘をこなすものの、行動そのものはパーティの一員に沿ったものだった。戦闘が終了すれば、普段の感情に乏しい表情を纏い、テイオナ達の会話にもはつきりと受け答えをする。

唯一その剣の冴えだけが、普段とは異なっていた。

「もう相当モンスター達を倒してるし、結構お金も溜まったんじゃない？ダンジョンに五日くらいもぐって探索してるしさあ」

「そう、かな」

「地上で普通に換金すれば、三千万くらいはいくんじゃないの？レフィーヤ、今持っている証文はどのくらいの金額？」

「待つてください、えーと・・・『リヴィラの街』で買い取ってもらったのだけど、一千万ヴァリスには届かないくらいです。三日月さんとアキヒロさんの集めた分も含めれば別なのですが・・・」

話題を探すようにして、テイオナが明るくアイズに話しかける。アイズとテイオナはもともと代剣と大双刃の借金の為にダンジョンに赴いたのだ。当初の目的を今更のように思いだしたアイズは、そこでふと引き寄せられるようにある少年の謝罪も思い出したが、頭を振って思考から追い出した。気にかける暇はないとそう言い聞かせる――その一方で、今の自分が彼の目の前に出る瞬間を想像すると・・・まるで宝物を汚すかのような思いに囚われてしまい、どうしてか、怖かった。

そして今、一番怖いのが今、三日月が自分に向けてくる「視線」だ。時々自分に向けられるあの目。まるで考え込む自分を見定めているようなあの視線。

その見定められる視線がアイズにはプレッシャーとなっていた。

強さを求める選択。

その選択を間違えると、三日月が離れていってしまいそうで、「怖い」という脅迫概念がアイズを包み込んでいた。

ただの思い込みだろうと思っても、その視線が消えることがな

い。

「期待を裏切らないようにしなきゃ・・・」

その責任感に、アイズは地中から生まれた『スパルトイ』に《デスペレート》を振り鳴らし、戦闘に臨んだ。

## 第二十六話

僅かな油断も許さず、自身へ緊張感を課しながらモンスターの集団と剣を交えること五分。

残る最後のスパルトイへ、アイズは大上段から《デスペレート》を振り下ろした。

『グオオオオオオオオオオオオッ!?』

頭頂から股下まで一直線に両断されたモンスターは断末魔の後、破壊された『魔石』の後を追うように灰へと変わる。

スパルトイ達を全滅させたアイズは、ヒュンツと剣を振り鳴らし、切っ先を地面に向ける。

辺りには滑らかに切断された骨の一部が数え切れないほど散乱しており、未だ上半身に付着している魔石が紫紺の輝きを散らしていた。

十を超すモンスターの亡骸の中心で、アイズは一人、戦闘の余韻に身を預けるように無言でたたずんだ。

「結局一人でやっちゃったし・・・」

「ちよつと苦戦でもしてくれれば、もつと可愛げも出てくるのにな・・・」

どこか非難がましい言葉と、皮肉めいた溜息をティオナとティオネがそれぞれ口からこぼす中、アイズは先に戦闘を終わらせていた彼女達のもとへ向かった。

《デスペレート》を鞘に収めて歩いていくと、レフィーヤともう一名の団員とすれ違う。

「・・・アイズさん、お疲れ様です」

「うん・・・後はお願ひ、レフィーヤ」

眉を下げながら笑いかけてくるレフィーヤに、アイズは背後のスパルトイの戦利品収拾を任せた。

もう一人のサポーターにも声をかけ、彼女達にモンスターの魔石処理をお願ひする。

「はいはい、お疲れアイズ〜！回復薬いる？万能薬は？アイズの大好

きな小豆クリーム味のジャガ丸くんはどう!？」

「そもそも、傷一つ付けられてないんだから、回復薬も何も必要ないわ」

気を取り直したように明るく、ティオナが自らも歩み寄って迎えてくる。

姉に軽く突っ込まれる中、彼女はまるで戦闘をこなし消費したアイズの腹を見越していたかのような、絶妙なタイミングで、ジャガ丸くんという名の餌付けを行った。

微妙に声の調子が高い。

「大丈夫、ティオナ。ありがとう。・・・最後のは欲しい」

休息の前から何も入れていなかったせいか、くう、とその細い臍の辺りから音が鳴る。

アイズはきりつと顔を構えながらも、少々耳を火照らせながら、ティオナからジャガ丸くんを受け取った。

保存状態が整っていなかったようで、腐りかけて食べられない事が分かる、しゅんと落胆の反動が大きかったが。

「アイズ」

「・・・三日月」

久しぶりに三日月の方から声をかけられる。

若干嬉しく思いながらも、アイズは何の用だろうと首を傾げる。

「ん」

三日月がアイズに手を出す。

アイズは不思議そうに手の平を差し出すと、三日月はアイズの手に袋に入った何かとチョコレートを渡した。

「いいの?」

「飯、食べて無かったでしょ。ならそれ食べて次に備えて置いたら?」

三日月はそう言つてポケットに手をつ突っ込むと、デザートを一つ取り出して口の中に入れた。

三日月の咀嚼と共に、アイズは銀色の袋の先端をピリツと破ると、中から出てきたのは棒状のクッキー生地のような何かだった。

アイズはおそろおそろソレを口にする。

「おいしい・・・」

サクサクとした生地ながらも、店などに出される肉料理の濃い目の風味が口に広がる。

アイズがそれを一口、二口と食べているのを見て、三日月が口を開く。

「美味しいですよ。それ」

「うん。美味しかった」

そんな三日月を端に、アイズは三日月から貰ったチョコレートを入れた。チョコレート程よい甘さが、アイズの口の中を満たす。

そんな二人に対し、リヴェリアがフィンを見下ろす。

くまなくとは言わずとも37階層は一通り踏破した。階層中央付近であるここから先に進むとなると、必然的に38階層へ向かうことになる。

迷宮は階層一つ下がるごとに危険度が増す。心もとない手もとの物資の量、そして武器の損耗具合も顧みた上で、彼女はパーティーのリーダーに意見を仰いだ。

「ン、そろそろ帰ろうか？今回はお遊びみたいなものだし、ここで長居して、帰り道でダラダラと煩うのも面倒だ。リヴェリア、君の意見は？」

フィンもリヴェリアと同意見だったようで、撤収の潮時だと口にする。

「団長の指示なら従うさ。・・・お前達、撤収するぞ！」

「はーい！」

リヴェリアの指示にテイオナとテイオネが返事をし、サポーター業に精を出しているレファイヤー達からも「わかりましたー！」と声が返ってきた。

そんな中で、アイズが口を開いた。

「・・・フィン、リヴェリア。私だけまだ残らせてほしい」

アイズがそう申し出た。

驚いてばつと振り返るテイオナとテイオネ。



彼女達の視線を浴びながら、その感情に乏しい表情は顔色一つ変えず、むしろ確かな意志を窺わせていた。

「食料も分けてくれなくていい。みんなには迷惑かけないから。お願い」

最後には懇願するように、アイズは階層への居残りを彼等に願う。

「ちよ、ちよっとく！アイズ、そんなこと言う時点であたし達に迷惑かけてる！こんなところにアイズ取り残していったら、あたし達ずっと心配してるようだよ！」

心配するティオナ達に三日月がアイズに向けて言った。

「何でアイズはそんなに強くなるうとするの？」

「……っ」

三日月の問いに、アイズは黙り込む事しか出来なかった。

そんな彼等の視線が集まる中、三日月は「はあ」と息を吐く。

そして、フィンに言った。

「なら、俺も残るよ」

「三日月!?!」

三日月の言葉に、ティオナが驚いた声音で三日月に視線を向ける。

「ここまで来るのに殆ど何もしなかったし、アイズがまだ『扱えきれない力』を使わないように監視するのも必要でしょ」

そう言う三日月にフィンは顎に手を添える。

その様子を見た昭弘も、彼に言った。

「三日月が残るなら、俺も残る。この二人だと何処までも突っ走って行きそうだからな。なら、ソレを止めるのが俺の仕事だ」

「シー……」

唸るフィンに対し、一步離れて見守っていたリヴェリアは息をつく。

彼女はフィンに振り向いた。

「フィン、私からも頼もう。アイズの意思を尊重してやってくれ」

「リヴェリア!?!」

まさかというティオナとティオネの声が響き渡る。

アイズもまた内心で驚いていた。

リヴェリアには、必ず戒められ、反対されると思っていたからだ。  
「シー……？」

そんなリヴェリアの真意を問うように美しい顔を見上げる。

「アイズが滅多に言わない我がままだ。聞き入れてやってほしい」  
「……分かった、許可するよ」

フィンももったいぶるように頷いた。

「アイズが一人だったら、駄目だって答えていたけどね、三日月と昭弘  
が一緒にいるなら大丈夫って判断するよ？ だけど、リヴェリア、君も  
ついて上げて欲しい。昭弘だけだとちよつと心配だからね」

「もとよりそのつもりだ」

そんな二人の会話を余所にティオナ達が、不服そうな顔で抗議を上  
げる。

「えー！ それならあたしも残るー！ 何だ、簡単じゃん！」

「ア、アイズが残るなら私も残ります！ 絶対に足手まといにはならな  
いのでっ、サポーターをやらせてください！」

「物資が残ってないって言ってるでしょ。三日月達は自分達で買って  
いたからまだしも、分け合う食料と水はアイズ達にも私達にも残って  
ないわよ」

「うう~~~~~~~~っ……」

ティオネの指摘にレフィーヤとティオナの首が仲良く惨たらしく  
折れた。

レフィーヤとティオナは泣く泣く退くのだった。

## 第二十七話

「……ありがとう、リヴェリア、三日月、昭弘」

四人しかいなくなったルームで、アイズは口を開いた。  
隣合っているリヴェリアは見返すこともなく、淡々と答える。

「これつきりにしてほしいところだが、今更だな。あまり手をかけさせるなどだけ、愚痴を言わせてもらおう」

「……ごめん」

リヴェリアの前では、あやゆる意味で自然体の自分となっている、とアイズは自覚があった。

フィンや主神を前にする時とは違う、それこそテイオナ達や三日月という時とも異なる、赤裸々に近い自分だ。

彼女の小言にも、自分の謝罪にも、心を通い合わせているような二人だけの繋がりが確かにある。

上手く言葉にはできないが、それは仲間に寄せる信頼とも少し違った、温かい何かだ。

「……」

暗い広間の中で、何かをするわけでもなくしばらく沈黙を重ねる。  
モンスターの雄叫びは遠かった。この広大な『ルーム』に近付こうとする気配は何もなく、不自然とも思える静寂がアイズ達のもとに流れ込んでくる。

防具と戦闘衣を包む階層の空気は肌寒い。頭上が高く、燐光も乏しい37階層には体をひやりとさせる冷気があった。

寒気を喚起するダンジョンの吐息に、首筋を撫でられる。

「……なんだ？」

「……どうした？三日月」

三日月が顔を上げる。

顔を上げた三日月に昭弘も戦闘態勢に入る。

アイズも少し遅れてバツと顔を上げた。

思考を働かせるアイズが、息を凝らしその時を待ち続けていると、不意に。

小さな、本当に僅かな震動が、身につけているブーツを揺らした。

——やはり。

「来た」

「なに？」

アイズはやなぎ眉を鋭く構え広間の中心を見据える。リヴェリアが問いたださそうと口を開きかけたが、彼女も気付いたようだった。

地面が揺れ、少しづつその震動は大きくなっていることに。

「まさか……」

リヴェリアの呟きが下さい落ちるのと同様、『ルーム』の中心の地面一帯が隆起する。

そして——ビキッ、と。

岩の悲鳴とともに、夥しい亀裂が生じた。

地割れのごとく、大地が割れる。周囲に走り抜ける裂け目はとどまることが知らず、次には目を疑うような漆黒の巨体が地面を破り、遙か頭上までその身を伸ばしていく。

「なんだ……コイツは……」

昭弘は呆気にとられた表情でその怪物を見る。

三日月に関しては、表情から感情を読み取る事は出来なかったが、驚いているのは確かだろう。

巨体に引つかかった岩と土砂が揺れ落ち、土石流のように降り注いだ。広間の揺れは一向に収まらず、鼓膜が潰れるような轟音を撒き散らしながら、やがてそれは完全に姿を現す。

アイズ達の視線の先で、その漆黒のモンスターは闇に塞がった天を仰いだ。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

果てしない産声を上げるのは超大型、『リヴェラの街』に出現した食人花の女体型にも劣らない巨大なモンスター。そして全身から放たれる圧倒的な威圧感、女体型を倍するほどと言っている。

他ならない階層主。

37階層に君臨する『迷宮の孤王』。

L v. 6、『ウダイオス』。

「そうか。もう、三ヶ月経ったか・・・」

一定周期のインターバルを必要とする『迷宮の孤王』は一度撃破されると、時が満ちるまで迷宮に姿を現さない。

約三ヶ月前、他ならない「ロキ・ファミリア」が全戦力をつぎ込んで打ち倒した存在に、リヴェリアはその巨軀を見上げながら半ば呆然とこぼす。

昭弘達が呆然と『ウダイオス』を見上げている次の瞬間。

凄まじく巨大な弾丸が『ウダイオス』の頭部に直撃した。

爆煙と共に、ウダイオスが身体を仰け反らせる。

『オオオオオオオオオオッ!』

あまりの威力からか、ノックバツクし、上半身しか出ていないウダイオスの巨軀が地面に激突した。

「は？」

「えっ？」

昭弘、リヴェリア、アイズはさつき起こった出来事に目を丸くする。

そして先程、攻撃を仕掛けたであろう三日月に顔を向けた。

「やっぱりあんまり効果ないか」

大型レールガンを腰だめに持ちながら、三日月はそう呟く。

そんな三日月に対し、昭弘が三日月にこの場の全員が思っているであろう言葉を口にする。

「・・・撃ってよかったのか？」

「？当たり前じゃん」

半ば無防備に近い状態で三日月の不意打ちを食らったウダイオスが地面に倒れ伏している中、三日月の声が部屋に響き渡った。

## 第二十八話

夜の採石場で、イオク・クジヤンはレギンレイズに乗り、前に鎮座する巨大な物体を見て、目を見開ける。

「あれは、モビルアーマー!!」

モビルアーマーが反応する距離の一步手前、イオクはレギンレイズのコックピットの中で叫ぶ。

「私の部下の仇を討たせてもらうー!」

イオクはそう言つて、レギンレイズに装備されたナイトブレードを引き抜き、モビルアーマーの元へ向かった。

ここで、この男（アホ）が起こした致命的な事が二つ。

まず、前回も同じようにモビルスーツをモビルアーマーに近づけてはいけないという事を忘れているのが一つ。

そして、もう一つは。

「私が成敗してくれる!!」

自分には実力があると死んでも勘違いをしたままであったという事である。

その二つの致命的な地雷により――。

モビルアーマーが「エイハブ・リアクターを感知」した。

微かな機械音と共に、モビルアーマーがスリープ状態から起動する。

キユイイイイイイイイイイ――

機械音が大きくなっていく。イオクが操るレギンレイズがモビルアーマーの目の前で剣を振り下ろそうとした瞬間だった。

モビルアーマーの咆哮が、イオクが乗るレギンレイズを襲った。

「な、なんだ!?これは!」

ピンク色のビームがレギンレイズの装甲を焼いていく。だが、ナノラミネートアーマーによって弾かれていきビームの本流が採石場や辺りの森を破壊の限りを尽くした。

モビルアーマーが目覚めたその採石場は地獄だった。

辺りは炎が燻り、周りを焼き焦がしていた。

森は火の海に変わり、動物達が慌てるように逃げ、夜の森は昼のよう  
に明るかった。

「くっ…これがビーム兵器と言うものか！だが、私のレギンレイズに  
は効かなかったようだな！」

そう叫びながらガチャガチャと、レバーやペダルを踏むが反応しな  
い。

「な、何故だ!?何故反応しない!?!」

動かなくなつたレギンレイズに対し、焦るイオク。

いくらナノラミネートアーマーにビームによる耐性があつたとし  
ても、超至近距離からのビームの圧力と碌な保存状態で無かつたのが  
災いし、いくら丈夫なフレームでも耐えきれるので精一杯だった。

ハシユマルは目の前で動かなくなつたレギンレイズに頭部とおも  
しき部分を向ける。

そして、その巨大な右腕部を持ち上げた。

「くっ…動け…レギンレイズ!?!」

イオクの叫びは届かず、レギンレイズは動かない。

そんなレギンレイズにハシユマルは、右腕部を振り下ろした。

「ガゴオオン!!」

金属同士がぶつかる鈍い音が辺りに広がり、地面に叩きつけられ  
た。

「くっ!!、この程度!!」

イオクは今頃になつて動き始めたレギンレイズをどうにか動かそ  
うとするが、ハシユマルによる拘束が解けない。

そんなイオクに対し、ハシユマルは腕部内に装填された鉄杭を超至  
近距離でコックピットに発射した。

「バゴオオン!!」

一撃。

たったそれだけでナノラミネートアーマーを貫き、コックピットを潰し、イオクの身体に巨大な穴を開けた。

「ゴオ!?グフウ!?」

胴体に巨大な風穴を開けられ、上半身と下半身が二つに別れる。

そんな状態でも、イオクはまだ「生きていた」。

瀕死の重症の中、イオクは赤くなった視界で割れてノイズだらけになった画面を見る。

その光景は――。

大量のブルーマが尻部に装備された大型のドリルで、レギンレイズを解体し、コックピットに向けて群がっている光景が広がっていた。

「ギユイイイイイイイ!!」

大型ドリルの先がコックピットに伸びてくる。

凄まじい摩擦により、イオクが着ている服が摩擦熱で燃え上がり、そして高熱で溶けていく。

「アッアッあああああ!?熱い!?イダイ!?わだしはこんなところで!?!」

イオクは燃える自身の身体に悲鳴を上げながら、やがて息絶えた。

そんな叫びを聞き届ける事なく、ハシユマルは焼き尽くした森の先に見える都市を見据えながらハシユマルは頭部を開ける。

そこから覗く砲身が都市に狙いを定めると、プラズマと共にその破壊の一撃を発射した。

◇◇◇◇◇

「火災?」

一人の獣人の少女が、明るくなった森を見てそう呟く。

そして、その明るくなった森に見える巨大は鳥が此方に口を開けているのを見て、首を傾げた。

その少女はその様子を見てみると、視線の先にいた鳥が明るいピンク色の光を吐き出した。

轟音と共に熱気が街を襲う。



爆炎が舞い上がり、溶けた石や岩、燃え尽きた木材が地面に叩きつけられるように散らばった。

「っ……!!」

少女が反射的に目をつむり、蹲る。

着弾時の衝撃波が獣人の少女を襲い吹き飛ばされた。

すさまじい速度で吹き飛ばされる少女。

そんな彼女を何者かが受け止めた。

「あつぶねえ!!」

若い男性の声。

少女は痛む身体に鞭を打ちながら顔をあげると、そこに居たのは全身の鎧が『ピンク色』の男性?だった。

特徴的な兜には目の模様が描かれており、背中には何かの砲身が伸びている。

全身がピンク色の男性?は彼女に言った。

「悪いがこのまま逃げるぞ!!あのデケエのは『三日月』がいねえと流石にやべえ!!」

男性はそう叫び、街とは反対方向へと走り抜ける。

「ねえ!?!お父さんとお母さんは!?!まだ、あそこにいるの!?!」

少女はそう叫び、バタバタと暴れ始める。

「悪い!!あの状態じゃあ探しに行けねえ!!」

男はそう叫び、更にスピードを加速させる。

「離して!!お願い!お願いだから!!」

そう叫びながら少女の目に写る目の前の光景は――。

燃え盛る故郷とその中で破壊を尽くす、巨大な天使の姿があった。

## 第二十九話

「リヴェリア、三日月、昭弘、手を出さないで」

三日月の不意打ちを受けて倒れ伏すウダイオスにアイズは歩みだす。

今の状態で既に打ち止めとなった己の器を昇華させるため、アイズはアイズの限界を超越する。

より強く、もつと強く、もう誰にも負けず屈しないように。

弱い己から脱却するために、更なる力を手に入れるために。

脳裏に浮かぶ赤髪の女の姿を、目の前の漆黒のモンスターに重ね合わせ、アイズは金の瞳を吊り上げた。

「アイズ、本当に一人でやるつもりか？」

アイズの背に、リヴェリアが強張った声を飛ばす。

起き上がったウダイオスは、上下の顎骨を開口し、凄まじい咆哮を放ってくる。アイズは剣の銀光を静かに散らした。

そんなアイズに昭弘が声を投げる。

「サポートはいるか？」

「ううん。大丈夫」

アイズは絶対の決意を胸に、唇を開く。

「すぐに終わらせるから」

黒骨の巨身が震えた。

射程圏内へと一人足を踏み入れたことで、凶悪な戦意が開放される。

全身の骨格を軋ませ、臨戦状態へと移行する最強の敵を前に。

アイズは地を蹴って、その無謀な戦いへと身を投じた。



一直線、敵のもとへ駆け抜ける。

数々の死闘をくぐり抜けた愛剣を右手に提げ、アイズは見上げるほどの大巨躯の懐へ、真正面から疾走した。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

突貫してくるアイズに、ウダイオスは大気を震わす雄叫びを上げる。

揺らめく朱色の怪火で金色の影を睨め付け、剥き出しの長骨が黒く照る歪な左腕、その巨大な鈍器を背に溜めた。

大気を抉りながら、矮小な影に向かい、横薙ぎの一撃を繰り出す。

「目覚めよ!」

押し寄せる一撃必殺に対し、アイズは超短文詠唱を唱えた。

またたく間に風の気流が防具ごと体を包み込む。伴って速度が増したアイズは、叩きつける左足で地面を爆発させ、一気に加速した。

ぐんと体を前に倒し、ウダイオスの左腕が体を捉える前に懐に入り込む。攻撃の範囲外である至近距離、視界の死角へとかき消える速度で侵入されたモンスターは、一瞬アイズの姿を見失う。

一方で空洞の肋を眼前にするアイズは、跳んだ。

宙を貫き接近するのは敵の左脇中段。腕が薙ぎ払われたことでもら空きになった左の胸部目が剣を構える。更に剣身に付与される風の出力を上げ、威力と射程を底上げした。

腰をひねり、右手の《テスペレート》を左肩に溜め、お返しとばかりに音速の横切りを放つ。

『ウウウツ?!』

「!」

胸骨内部に存在する巨大な『魔石』、肋の隙間を狙って滑り込ませようとした風剣の一撃を、第五肋骨が上下動することで阻んだ。いきなり己の中枢を奇襲してきたアイズに、ウダイオスは索敵と反応を一瞬にしてのけ防衛行動を取る。

——— 惜しい。

切り裂くことはおろか掠り傷も走らない漆黒の肋骨を横目で観やりながら、アイズは無表情で呟く。

中枢にヒビの一つでも入れることができたなら、相手の動きは格段に鈍る。そうそう好機は訪れないだろうが狙えるものなら果敢に攻め込むべきだ。

体の左脇を抜けてウダイオスの後方に出るアイズは地面に着地し、すかさず反転する。

隙だらけの背後、背骨を晒す階層主へ斬りかかった——次の瞬間。

走るアイズの足元から、伸び上がる槍のごとく漆黒の柱が放出された。

「っー！」

顎の下から突き上がる鋭い一撃を、上半身の動きだけで回避する。耳朶を掠める漆黒の柱によつて金の長髪が乱れる中、続いて地面より射出された五本の矛からアイズは素早く横手へと逃げた。

地面を破つて現れる槍衾、あるいは剣山は執拗にアイズを追いかけ、眼下から攻撃を加える。

——これだ。

旋回能力が乏しい階層主に、大人数の攻略隊でさえも一気に攻めかかる事ができない理由。

この地面から放たれる無尽蔵の逆杭によつて、敵を近付けさせないのだ。迂闊に飛び込もうものなら相手を連続で串刺しにする剣山は、ウダイオスの攻守一体の武装である。

上半身しか出現させていないウダイオスは、下半身を無意味に埋めているわけではない。

いや、正確にはウダイオスに下半身は存在しない。

巨大な根を地中へ張り巡らせる大樹のごとく、骨盤から夥しく派生した体の一部をこの広間全域の床へ広げているのだ。つまりアイズの足もとには、ウダイオスが設置した剣山の地雷が数え切れないほど埋まっている。

『ルウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

「くっっ！」

巨体に見合った鈍重さで振り返る上半身とは相反するように、恐ろしい速度で射出される剣山が途切れることなくアイズに襲いかかる。今や既にアイズの周りには無数の漆黒の柱が立ち並んでいた。

「アイズ！」

手を出さないと懇願されているリヴェリアが外から叫んだ。

昭弘もいつでもサポート出来るように大型の滑腔砲を手にしている。だが、三日月は他の二人とは違い、ただ私を見るだけだ。

ジリ貧となるこの戦局に対し、アイズが決定打を入れようとしたその時――。

「ドス」と鈍い音とともに右足に鋭い痛みが走った。

「ッッ!!」

剣山のその先端がアイズを捉えたのだ。

そしてアイズに向けて振り下ろされる巨大な拳。間に合わないと思ったその時だった。

「ゴッ!」とアイズの鎧越しから「誰かに蹴り飛ばされる」。

その勢いのついた衝撃でアイズの足から杭が抜けて吹き飛ばされた。アイズは着地姿勢を取り、着地すると一体誰がと思ってアイズが視線を向けた。そこにいたのは「三日月」だった。

あの一瞬で三日月はアイズの元へ向かい、アイズを蹴り飛ばしたのだ。そして――

ウダイオスの拳が三日月に直撃する。

「三日月イイイイイイ!!」

アイズは自分を守った三日月に絶叫した。

## 第三十話

アイズの絶叫がルームに響き渡る。

そして飛び出すアイズに昭弘が叫ぶ。

「お、おい待て！」

昭弘の静止の声を無視し、アイズはウダイオスの腕に向けて突貫した。

「【吹き荒れる】!!」

アイズの言葉と同時に剣身に纏わせていた風が一気に開放される。

豪風と共に、アイズはウダイオスの左腕を押し返した。

『オオオオオオオオオオ!!』

押し返されたウダイオスはその巨大な身体を仰け反らせながらも、左腕をアイズ目掛けて振りかぶる。

避けられない!!

アイズがそう思った瞬間――。

アイズの時間が止まった。

◇◇◇◇◇

「おい、起きろ。こんな所で寝るんじゃない」

いつの間に眠ってしまったのだろう。アイズが目を開けると、目の前に青い髪の男性が立っていた。

「・・・貴方は？」

「俺か？俺はお前が勝手に使ってるキマリスの持ち主って言えばいいか？そもそも、お前は俺の事を知っているだろう」

「ッ」

ズキン、と頭が痛む。

そうだ、この人は三日月と戦った――。

「ガリガリ・ボードウィンさん？」

「ガエリオ・ボードウィンだ!!お前、あのガキに似ているな!」

アイズの言い間違いにガエリオは叫ぶ。

「・・・ごめんなさい」

謝るアイズにガエリオは息を吐く。

「まあいい。それで？お前、どうしても使わないと決めた俺のキマリスに手を出した？」あの鉄華団の子供に壊された「筈だが？」

「……」

アイズは言えなかった。

三日月に追いつきたいがために、手を出して結局は扱うことなど出来なかったと言うことなど。

そんなアイズを見て、ガエリオは言う。

「大方、力に溺れて扱えきれなかったのが原因だろうな。『アイン』とキマリスはお前との相性は最悪と言っている」

「ならっ！」

使い方を教えて欲しい。アイズが言う瞬間に、ガエリオはアイズに言った。

「キマリスの使い方ならあのガキにでも教えて貰え。お前はただ、アインに呑まれないようにすればいい」

「……アイン？」

アイズはガエリオに問う。アイズのその問いにガエリオは答えた。

「ああ、俺の優秀な部下だ。だが、アインはあのガキの事が嫌いだからな。だからアインに呑まれるなと警告しているんだ。その状態であるのガキと会ってみろ。殺し合いが始まるだけだ」

「……」

言葉を詰まらせるアイズにガエリオは言葉を続ける。

「今回は俺がアインとキマリスをどうにかしてやる。だが、それ以降はお前の力でなんとかしろ。俺が出来るのはそこまでだからな」

「ありがとうございます」

礼を言うアイズにガエリオは言った。

「お前が、キマリスとアインが認めるかは知らん。だが、力を扱う意味を忘れるなよ。間違えたら、それはただの暴力と代わりはせんからな」

ガエリオはそう言って消えていく。

そして、アイズはヴィダールを使用した。



アイズの視界が一瞬、*「振れた」*。

突如起こった急激な加速によってアイズは直撃するはずだったウダイオスの攻撃を回避し、*「カウンター」*を入れる。

*「なっ!？」*

リヴェリアが目を見開ける。

隙だらけだったアイズが急に凄まじい加速をし、なおかつウダイオスにカウンターを仕掛けたのだ。それが余裕を持って躲したのたら  
まだしも、攻撃が当たる直前でだ。

そして、リヴェリアが驚いたのはもう一つ。

それは、*「ヴィダール」*をアイズが使っていたからだ。

その様子を三日月は遠くで見つめる。

*「今の動き……見たことあるやつだ」*

三日月は瓦礫を押し返しながら、先程のアイズを見て呟く。

昔、三日月が戦ったあのでかいグレイズ。

あのグレイズと今のアイズの動きが重なったのだ。

三日月は今のアイズを見て、呟く。

*「……使い方を間違えないといいけど」*

そう呟く三日月の言葉は誰の耳にも届かなかった。



## 第三十一話

アイズは先程のウダイオスの攻撃を回避した時、自身の身体がまるで操り人形のように動かされ、アイズは戸惑いの表情をつくる。

自分の意思と関係なく動く自身の身体に、アイズは抵抗しようと体を動かすが思うように身体が動かずにアイズの身体はそのまま敵に目掛けて疾走した。

振り下ろされるウダイオスの拳を直撃寸前の所で回避し、振り下ろされた腕を氷の上を滑るように駆け上がる。

あつという間にウダイオスの肩にまで駆け上がったアイズはゴライアスの関節目掛けて《バーストサーベル》と《デスペレート》を捻じり入れこんだ。

『ゴッツ!?!』

ウダイオスは叫びながらも首を蠢かせ、朱色の怪火を怒りで燃えたぎらせる。

だがそんなウダイオスに対し、アイズは自身の意思とは関係なく動く身体を取り戻そうと必死になる。

「なんで・・・なんで勝手に動くのっ!!」

アイズは首をふるふると首を横に振りながら叫ぶ。

こんなの、こんなのは”自分が欲しい力じゃない”。

自分が欲しかったのは、自分の意思で強くなる力だ。こんな”訳のわからない”力じゃない。

人間離れた動きをするアイズにウダイオスは迎撃をしているが、そのスピードに追いつかずドンドンとその巨体に傷を増やしていく。

『オオオオオオオオオオオオオオ!?!』

アイズの放たれた蹴りにより、ウダイオスは身体のバランスを崩す。そして何度も攻撃を続けていた腰部の奥に見える核関節に向けて、攻撃を叩きこんだ。

バーストサーベルを突き刺し切り離れた後、アイズは離脱する。そしてバーストサーベルが核に突き刺さったまま起爆した。

『オオオオオオオオオオオオオオ!!?!』

腰部を破壊され、バランスを失った上半身が前のめりになり、地面へと倒れ込む。

『グウウウウウウツ!?』

ウダイオスは上半身を激しく動かし近付けさせまいとする。更に倒れ込んだ体の側からでたらめに逆杭の射出を行い、視認できない敵を退けようとした。

だが――。

アイズはそれら全てをやり過ごし、迎撃が手薄のモンスターの右肩に着地する。そして《デスペレート》の切っ先を下に向け、隙間から覗く核関節へと、直下させた。

剣先から伝わる硬質な感触。凄まじい硬度を誇り、刃がそれ以上進まない事が分かる。

だが――。

アイズの今や操り人形のように制御の聞かない身体はそんな硬質な核に向けて《デスペレート》の柄を全力で蹴り飛ばした。

刃に埋まった核関節は瞬く間にヒビ割れ――撃砕した。

『――ツツ!?』

ウダイオスの顎骨から絶叫が迸る。

砕け散った右肩がゆっくりと離れ、肩から先の上腕が轟音を立てて脱落する。

右腕一本、丸ごとウダイオスは失うこととなった。

「……あ」

ただ見ることにしか出来ないアイズは、声を出す。

地面に着地したアイズは手の《バーストサーベル》の刃を付け替える。

苦痛と怒りで燃え狂うウダイオスの瞳が、そんなアイズを睥睨する。

階層主は逆杭を連続で打ち出すと、自分の体を覆わせた。

関節を守るように無数の剣山が節々の上に入り組む。

アイズの狙いを悟って防御を固めてきた。

おそらくは身体の回復に時間を費やそうとしているのだろう。

だが、〃アイズを操っているアインは〃そんな時間を与えなかった。

アイズの手から《バーストサーベル》が消え、〃巨大な槍〃と盾が顕現した。

そして槍の穴に装填された〃巨大な杭〃がウダイオスに狙いを定める。

そして、身を固めるウダイオス目掛けて〃魔剣の名を持つ矢〃が無慈悲に発射された。

轟音が響き渡る。

アイズの腕に凄まじい衝撃が走り、ビリビリと腕が痺れ始める。

射出された〃ダインスレイヴ〃はウダイオスの杭をへし折り、硬質な骨を砕き、魔石を一撃で貫いた。

だが〃ダインスレイヴ〃の勢いは止まる無く、ウダイオスを貫いた後ダンジョンの壁に勢いよく突き刺さった。

その衝撃が『ルーム』全体に響き渡る。

一撃でウダイオスを屠った〃ダインスレイヴ〃を見て、リヴェリアは驚愕し、三日月達は顔を顰めさせた。

そしてウダイオスを屠り、キマリスが消え去った後、アイズは――

「.....」

深く頭を項垂れさせたままその場に座り込んだ。

## 第二章 エピローグ

アイズがウダイオスを倒した後、リヴェリア達はアイズが倒したモンスター、魔石やドロップアイテムを回収していた。

アイズにいたっては、戦闘の疲弊とそして自身が手にした力が望んでいたものとは違う事にショックを受け、その場に顔を埋めて座り込んでいた。

そんなアイズに近づいてくる足音があった。

そしてその足音はアイズの前で止まると、布のすれるような音と共にアイズの隣に座り込んだ。

アイズは隣に座る人物に合わせる顔が無かった。

力を求めた癖に、その力が自身が欲していたものとは違う、他人に頼るだけの力を手に入れてしまったその事に。

そんな自己嫌悪に苛まれているアイズに三日月が口を開く。

「その力を手に入れて後悔してるの？」

「.....」

三日月のその言葉にアイズは顔を埋めた状態で首を縦に振る。

力ならなんでもいいと思っていた。だけど、こんな知らない誰かに頼るだけの力は欲しく無かった。

アイズの反応に三日月な黙ったまま、ポケットに手を入れる。

そして、未だに顔を埋めているアイズに言った。

「でも、後悔した所で何も変わらない。アイズはその力を受け入れて持つてなくちゃいけない」

悪魔との契約。その対価は必ず払わなければならない。

アイズがキマリスの力を手に入れた以上、それを受け入れて生き続けなきゃいけない。

そんな現実アイズは更に顔を深く埋めた。

アイズはその反応を見て、だげと三日月は言う。

「だけど、そこは俺達と一緒頑張つて」いこう。俺はこんな風になつて、昭弘は弟やラフタが死んじゃったけどさ、それでも俺達は前を向いて生きなくちゃいけない。アイズにはまだ「大切なモノ」が

残っているから、だから気を落とさなくていい」

三日月の言葉にアイズは顔を上げる。

「私の・・・大切なモノ？」

そう聞いてくるアイズに三日月は言った。

「アイズには、仲間っていう家族”がいるでしょ？だったらアイズはその家族を守る為に、その力を使えばいいと思う。俺達と同じようにね」

だからと三日月は言った。

「だから、一緒に頑張ろう。みんなを死なせない為に」

その言葉に、アイズは――

「・・・うん」

目に涙を浮かべながらも、力強く頷いた。

◆◆◆◆

ウダイオスを撃破し、37階層を後にしたアイズ達は、三日間ほどの時間をかけてダンジョンの『上層』に到達しようとしていた。

最短ルートを選択し、消耗したアイズを庇いながらも、三日月と昭弘が戦闘を円滑にこなしていたため、『深層』から『下層』、『中層』まで脱出するのは比較的速やかだった。また18階層の『リヴェイラの街』でゆっくり休息を挟んだこともあり、疲労の影も薄い。

アイズ達は現在、6階層を進んでいる最中だった。

「アイズ、本当にあのドロップアイテムを預けてしまつてよかったのか？」

「うん・・・私は、大剣はあまり使えないし」

リヴェリアの問いかけにアイズは答える。

「それに、またあの調教師に襲われるかもしれないから・・・強い武器があると、心強いって」

「全く、本当にものは言いようだな・・・」

自分に巡り帰っているようではないか、とボールスが口にしていた台詞をリヴェリアは吐息とともにこぼす。

そんな中、アイズは三日月達の会話に耳を傾けていた。

「昭弘。この後、上に出たらどうするの?」

「まあ、だいぶ長い間帰っていないから、一度帰るつもりだ。弟分にも顔を見せておかないとな。三日月は?」

「俺?俺はハツシユと一緒にトレーニングとか畑の水やりとか、あとは...仲間探しくらいかな。昭弘やハツシユがこうやっているから、他のみんなもいるかなって」

「そうか...なら、俺も一緒に探すぜ。三日月も最近トレーニングサボってねえようだから、模擬戦もやりてえしな」

「まだ根に持ってるの?」

「当然だ」

二人の会話もいつも通りらしく、そんな会話をしながら歩いていった。と――。

「.....?」

「どうした、アイズ」

やがて5階層に到達し、しばらく進んでいると。

アイズはルームの中でぼつねんと転がっている、冒険者の姿が発見した。

「人が倒れてる」

「モンスターにやられたか」

眉を曇らせるリヴェリアと三日月達と共に、アイズは冒険者に歩み寄る。

近付くにつれ、アイズと昭弘は驚きに顔が染まっていた。

下級冒険者を思わせる軽装に、まだ成熟仕切っていない細身の体、そして雪のような白髪。

倒れていた冒険者は、まさに、アイズが再会を望んでいた少年だったのだ。

「ベル!!」

昭弘はそう言って、少年の元へ駆け込む。

少年の体を起こす昭弘にリヴェリアは膝をついて少年の体を診断した。

「外傷は無し、治療および解毒の必要性も皆無……典型的なマイนด์ダウンだな」

「……そうか。ならよかった」

昭弘が安堵の声を出す中、アイズは食い入るように見ていたその白髪少年に対し、思わず呟きをこぼす。

「この子……」

「何だ、知り合いかアイズ？」

「ううん、直接話したことはないけど……あの、前に話したミノタウロスの……」

「……なるほど。あの馬鹿がそしつた少年か」

そう呟くりヴェリアに対しアイズは、以前から謝罪したいと願っていた思いに加え、今の少年の姿を見て、胸の中で感じるがままの言葉をこぼす。

「リヴェリア。私、この子に償いをしたい」

「……言いようは他にあるだろう」

以前に「お前はどうしたい？」と彼女に尋ねられた際の、そのはっきりした答えを伝えたつもりであったが、「硬すぎる」と溜息をつかれてしまった。

あれ？とアイズは瞬きをしてしまう。

「まあ、この場を助けるのは当然の礼儀として……」

こくこくと頷くアイズがリヴェリアと一緒に少年を見下ろしている。

リヴェリアは何かを考え、ちらりと横目でこちらを見やってきた。

「……アイズ、今から言うことを少年にしてやれ。償いなら、恐らくそれで十分だ」

「何？」

アイズが訪ねると、彼女は気軽そうに告げる。

「起きるまで、膝を使って寝かせてやるんだ」

再び、アイズは瞬きをした。

「……そんなことでもいいの？」

「確証はないがな。だが、この場を守ってもやるんだ、これ以上つくす

義理もないだろう。・・・それにお前なら喜ばない男はいないさ」

自分のなら、と言うリヴェエリアに、戸惑うアイズは正直な気持ちを伝える。

「よく、わからないよ・・・」

「わからなくてもいいさ」

考え込むアイズに、昭弘は言った。

「俺からも頼んでいいか。コイツはお前に憧れていまもこうやって頑張っているんだ。だから、俺からも頼む」

「私に憧れて・・・？」

そう呟きをこぼすアイズに対し、リヴェエリアは立ち上がる。

「私は戻る。残っていても邪魔になるだけだろう」

「俺達はどうする？昭弘？」

三日月の言葉に対し、昭弘は言葉を返した。

「なら、俺達はベル達の邪魔にならないように周りのモンスターを狩るか。どっちが多く倒すか勝負だ三日月」

「いいね。負けないよ昭弘」

そう言って三日月達は部屋から出ていった。

「はじめをつけたいのなら、二人きりで行え」

「うん。ありがとう、リヴェエリア」

「ああ」

礼を告げると、リヴェエリアはその場を後にする。

その後ろ姿を見送ったアイズは、再び倒れた少年の後頭部を見つめ、膝を折り。

おずおずと、ちよこんと、その場に腰を下ろした。

◆◆◆◆◆

？・・・」

細い腿にかかる重みは、どこか新鮮なものだった。

少年に膝枕をするアイズは、今は瞼が閉じられているその顔を静かに見下ろす。



(・・・恥ずかしい、かな)

いざ少年の頭を乗せてみると、初々しくも、少々の羞恥を感じる。自分と彼の体勢に頬をうつすらと染めながら、アイズは軽く体を身動きさせた。眠りこける少年には、振動が伝わらないよう、小さく、優しく。

遠くでモンスターの叫び声が聞こえる。恐らくは三日月達がこの辺りのモンスターを倒しているのだろう。

アイズ達の前にモンスターが来ることはなく、ただ、静かな時間だけが過ぎていく。

「・・・頑張つて、るんだね」

以前見かけた軽装とは、防具が変わっているだろうか。

しかしそれも既に、かすり傷や欠けた跡など、使い込まれているのが見て取れる。おそらく毎日ダンジョンにもぐってモンスターと戦っているのだ。爪や牙にひっかかっている全ての跡を目で数えて、アイズはそう察する。

少し撫でたくなってしまうて、その兎のような髪や、額をそつと指でなぞった。

「・・・おかあさん？」

柔く撫で続けていると、少年の唇が、開いた。

その夢現のつぶやきに、アイズの肩が揺れる。

(・・・君も、いないの?)

抱いてはいけないと親近感と、少しの寂寥感を覚えながら。

アイズは、そつと白い前髪をよけながら、謝った。

「ごめんね。私は、君のお母さんじゃない・・・」

直後、寝ぼけ眼だった深紅の瞳が、見開かれた。

時間をかけて覚醒の光を宿していき、見下ろしているアイズの金の瞳と、真つ直ぐ見つめ合う。

視線を絡め、啞然と時を止めている少年の顔を、アイズは再びそつと撫でた。

髪をすき、脛に触れると、やがて彼はのろのろと体を起こす。

彼は腰を下ろしたまま、アイズに振り返った。

「……幻覚？」

「……幻覚じゃないよ」

間抜けな顔をして指してくる少年に、思わず、むっ、としてしまった。眉を少し斜めに上げて、普段は見せないような表情を作る。

少し、それは、失礼ではないだろうか。

この短い時間の間に色々なものをもらっていたアイズは、口を尖らせる思いで少年の顔をじっと見つめる。

——— そうだ、謝らなくちゃ。

アイズがそう思い立ち、口を開こうとすると。

少年は首から上がみるみる内に赤くなっていき。その様子に気付いたときには、あつという間に欄塾し過ぎた林檎が出来上がっていた。そして少年は立ち上がる。

そして、

「——— だあああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

全力で、アイズがから逃げ出した。

「………」

ぴよんぴよんと逃げる兎もかくやといった速度で、少年が広間から姿を消す。

膝を貸していた同じ体勢で、固まったアイズは全く動けない。

ゲエツ、ゲエツ、とどこからかモンスターの笑う声が聞こえたような気がした。

「……何で、いつも逃げちやうの?」

アイズはちよつぴり泣きそうになった。

## 第三章 第一話

多くの叫び声が轟いていた。

男達の絡み合う怒号は野太く、続く女の悲鳴は甲高い。鉄靴やブーツからなる無数の足音が入り乱れ、そして幾重もの怪物の咆哮が迫っていく。

「何なんだっ、あの数は!?!」

「つべこべ言っていないで走れ!!」

広大な通路を埋め尽くすモンスターの大量発生。

【ファミリア】の異なった複数のパーティが同時に巻き込まれ、一蓮托生とばかりの退却を強いられる。

通路上にいた新たな冒険者パーティも巻き添えを食らい、悲鳴の数が加速的に増加していった。

「どっかの馬鹿がモンスターどもを引っ張ってきたのか!?!」

巨大蜂、蜥蜴人、剣鹿、毒茸。階層中の様々なモンスターが迫りくる光景を顧みて、冒険者の一人が『怪物進行』——何者かにモンスターを押し付けられたのかと、そのように罵声を飛ばす。

「最近のこの階層はおかしいぞ...!?!モンスターとの遭遇の数が半端じゃない!」

『中層』の中でも深部に位置する、ダンジョン24階層。

現階層にもぐり慣れた冒険者達は悲鳴を上げながら、地上を目指すのだった。

24階層のモンスターの大量発生。

【剣姫】の手によってウダイオス撃破が成し遂げられた、二日後のことであった。



『!!』

“天使”が咆哮する。

その白い天使はその咆哮と同時に、淡いピンク色のビームを街に放つ。

鉄をも溶かすそのビームは天使の前に存在する街を一瞬にして焼き払った。

一瞬にして炎の海と化したその街には悲鳴と怒号が入り乱れる。

そんな中、天使は自身の一部でもある “プルーマ” を燃え盛る街に向かわせる。

プルーマ達は残っていた男、女、老人、子供、赤子にいたるまで全ての人間を殺戮していく。

ある者は轢かれ、ある者は背中から打たれ、ある者は、ある者は、ある者は――

そして、 “誰もいなくなった”。

血と鉄と炎とそして、肉の焼ける臭いが辺りに立ち込める。

誰もいなくなった街にもう用はないと言わんばかりにその天使は進行方向を変えて、次の街へと向かっていく。

かの天使を止められる方法はただ一つ。

“人間を止めた悪魔だけだ”



(また、謝れなかった・・・)

【ロキ・ファミリア】のホーム、黄昏の館の食堂にてアイズは部屋の端で落ち込んでいた。

純白の部屋着に包まれた膝へ顔を半分埋めて、盛大と言っていないほど意気消沈している。

塞ぎ込むアイズの脳裏に浮かぶのは、昨夜の光景であった。

37階層で階層主を倒した帰り道、アイズはダンジョンで行き倒れの冒険者――開会を望んでいた少年と出会った。

不始末によって取り逃してしまったミノタウロスから救い出し、そ

して酒場に傷付けてしまった、あの白髪の少年である。

気絶している彼をモンスターから護衛し、凶らずも謝罪する絶好のチャンスを手に入れたアイズだったが・・・結果は、惨敗。

脱兎のごとく逃走されるといいう、非情な現実が彼女をうちのめした。邂逅の時と全く同じ、悪夢の再来である。

—— やつとこのことで出会えた少年に、全力で！

悲しみと言うには生温いほどの衝撃を受け、アイズは失意のどん底に落ちた。派手に項垂れでホームへ帰ってきた彼女の姿に、他の団員は勿論、流石のテイオナとテイオネもぎよつとうろたえ、声をかけることさえかなわなかったほどだ。

ただ一人、少年を発見した直前まで同行していたリヴェリアにどうしたのだと問いかけられ、アイズはぽつりぽつりと訳を話した。

『・・・ちゃった』

『なに?』

『また、逃げられちゃった・・・』

『・・・くッ』

肩を揺らし確かに笑ったリヴェリアを、アイズはどんつ！と両手で突き飛ばし、そしてアイズは食堂まで逃げ出してきたのだ。

(リヴェリアがいけないんだ・・・)

ぐすん、とアイズは人知れず泣きべそをかく。

少年が逃げたのは、彼女が命じた膝枕、あれが原因だったに違いない。

実知らずの他人に膝枕をされ、少年は取り乱すほど仰天していたのだ。

きつと、きつとそうである。全てリヴェリアがいけないのである。両膝を抱えるアイズは幼児退行に走り、いじけてしまう。

(それに・・・三日月も三日月だ・・・)

今、この場にはいない三日月にもアイズはあたり始める。

昨日三日月と一緒に帰ってきた後、ハツシュが『俺、強くなったんで一緒にダンジョン行きましょう!!三日月さん!』と言って三日月はハツシュと一緒にダンジョンに行ってしまったのだ。

それ以降、アイズは三日月ともあつていない。  
いじけるアイズは椅子から立ち上がり、調理場へと向かう。

「こんな時はお酒を飲もう。」  
嫌な事はお酒を飲んでパーっと忘れるべきである。

フィンやロキ達からはお酒は禁止と言われているが、こういう時は許してくれるだろう。多分。

アイズはそう考え、調理場へ足を運んだ。

◇◇◇◇◇

「つたく、アイズたん何処行つたんや?」

ロキはそう呟きながら廊下を歩く。

リヴェリアの話聞いたかぎりだと、ダンジョンで謝りたい冒険者に会ったはいいものの、逃げられ、シヨックを受けて何処かに行ってしまったと聞いたが、何処に行ったのだろうか?

「はあー、用があんのに何処行つたんやろうなあ・・・」

ロキはボヤきながら食堂へと入る。

「なあ、アイズたんおらへんか?」

ロキがそう言いながら食堂を見渡す。

食堂を見渡すと、部屋の端の机に頭をつけているアイズを見つけた。  
た。

「おっ?おった、おった」

ロキは寝ているアイズに足を運ぶ。

机の上にコップと瓶が置かれているが、ジュースか何かを飲んでグズリ疲れて寝てしまったのだろうか。

そんなアイズにロキは肩を揺らす。

「おーい、アイズー、起きいや」

「・・・うにゅ」

肩を揺らされたアイズはロキの言葉に目を覚ます。

とろんとした目がロキを見つめる。

「おー、起きた起きた。起こして悪いんやけどこの後さ・・・」

ロキがそう言った瞬間――

「……ヒック」

「……え？」

アイズのしゃっくりにロキは冷や汗を流す。

そして――

「りる・らふぁーが」

呂律が回らない口でアイズはそう言って――――暴風がロキを襲った。

惨劇の始まりである。

## 第二話

深夜十一時。

三日月、昭弘、ハツシユは三人で【ロキ・ファミリア】へ続く道を歩いていた。

「悪いね、昭弘。手伝ってもらって」

「気にするな。それにこっちはベルに良い特訓になったんだ。ハツシユも腕を上げたな」

「は、はい。三日月さんがいない間も、練習やダンジョンに行ってたんで大分やれるようになりました！」

「特訓相手がガレスだっけ？アイツからも聞いたけど中々やるようになったってさ。良かったじゃん」

三日月の言葉にハツシユは「はい！」と頷くと、ハツシユは自身の手持っている袋を見ながら昭弘に言った。

「それはそうと、昭弘さん。これ本当に貰っていいんすか？結構な量ですけど・・・」

茶色の袋の中に入っているのはじゃが丸くんだ。それもかなりの量である。

ハツシユの問いに昭弘は頷いた。

「ああ。こっちだってお前等から金や魔石を貰って、だいぶ楽になったんだ。だからその礼だ」

「殆ど、あの白いのとハツシユに任せてたけどね。魔石とかも拾ったものあの小さい女だし」

三日月はそう言うと、昭弘は何とも言えない顔をする。

「まあ、そうなんだが・・・ベルのヤツも俺がいない間に結構無茶をしてな。今は大丈夫だが、このあとも無茶をしなきゃいいが」

昭弘のその言葉に、三日月は「無理でしょ」と答えながらデーツを口に入れる。

「ああ言う奴は自分から首突っ込むタイプだからアイツ自身が強くないといつか死ぬよ？」

「・・・分かってる」



三日月の言葉に昭弘はそう返事を返し、街頭の光が灯る道を歩いていく。そんな中、三日月は「ファミリア」の異変に気が付いた。

「ん？」

「どうした？」

「どうかしました？三日月さん？」

足を止めた三日月に昭弘とハツシユは立ち止まり、三日月に問いを投げる。

その二人に対し、三日月は口を開いた。

「・・・明かりがついてない」

「え？・・・あ、本当っすね。いつもなら明かりはまだついてんのに：ハツシユがそう眩きながら扉を開けると、その光景を見て絶句する。」

「どうした？」

昭弘は怪訝そうに顔を覗かせると、目の前の光景を見て言葉を漏らした。

「お、おい。どんな状況だ？こりゃあ・・・」

「・・・？どうしたの？」

三日月はそんな二人の反応に首を傾げながらも、ハツシユ達の間にある隙間から目を覗かせる。

そして目に写る光景を見て、感想を漏らした。

「なにこれ？」

黄昏の館のエントランス、そこには「ロキ・ファミリア」の顔見知った面々が死屍累々のように倒れ伏している。

部屋の彼方此方に穴が空き、ガラス細工は割れ、机はひっくり返り、椅子とおもしき残骸も彼方此方に転がっている。

そして、中央に居るのは顔を真っ赤にしながら船を漕いでいるアイズが一人。

と、三日月は近くで倒れ伏す、フィンの背中を揺らす。

「生きてる？」

三日月から投げられる言葉から数秒した後、フィンはゆっくりと顔を上げた。

「・・・ああ、お帰り三日月・・・」

かなりボロボロになつているフィンに三日月は言った。

「何があつたの？」

他の二人が倒れ伏している皆を担いで部屋から移動させている中、

三日月はフィンに状況を聞く。

「アイズが・・・お酒を飲んだんだ」

「酒？」

三日月はそう返すと、フィンは頷く。

「ああ、アイズはお酒を飲むと悪酔いするんだ・・・。前に飲んだ時、ロキを半殺しに仕掛けた事があつたからアイズには飲まないように言っていたんだけど・・・どうやら勝手に飲んだみたいで・・・止めようとしたけど、【ヴィダール】まで使つてきてこのざまだよ」

「そういうことか」

三日月はフィンから話を聞いて状況を把握する。そんな三日月は立ち上がり、フィンに言った。

「もうすぐ昭弘達が他の皆を部屋から移動させる頃合いだから、フィンも後少し待つてね。俺は、アイズを何とかして見るから」

「・・・ああ、頼んだよ」

三日月の言葉を聞いて、フィンは安心したように倒れ伏した。

ロキ・ファミリア屈指の英雄もこんなザマだ。面倒事上ないだろう。

三日月はそう思いながら、船を漕ぎ続けているアイズのもとへ向かう。

そして、アイズの肩を揺らした。

「アイズ、こんなところで寝てると風邪ひくよ」

「・・・んう・・・」

肩を揺らされたアイズはそう寝言を呟いたまま、目を覚まそうとしない。そんなアイズを三日月は更に揺らす。

「アイズ、寝るなら自分の部屋で寝てよ。ここじゃ邪魔になるから」

「・・・んうー？」

揺らされるアイズは二回目の三日月の言葉に目を覚ました。

寝ぼけ眼のアイズの瞳が三日月を映す。

そんなアイズに対し、三日月は言った。

「ほら、部屋行くよ」

そう言いながら、三日月はアイズの身体を起こそうとする。

そんな三日月に対し、アイズは――

「・・・みかづきい」

両手を三日月の身体に回し、ギューと抱きついた。

「はっ？」

三日月もこれには困惑する。

アイズはかなりの酒を飲んだのか、ものすごく酒臭かった。だが、そんな三日月に対し、アイズは三日月に言う。

「三日月・・・わたし・・・つよくなつた？」

三日月にそう聞いてくるアイズに困惑しながらも、三日月は答えた。

「まあ、最初にあつた時よりは強くなってるよ。後は、アイズがどう思ってるかだけど」

そう答える三日月にアイズは表情を崩し、眠そうな顔をしながらも笑みをつくる。

「そっか・・・わたし・・・もつとつよくなって・・・それで・・・三日月の・・・」

眠気の限界がきたのだろう。

アイズは目を閉じると、三日月を抱きまくらにしながらそのまま寝息を立てて眠ってしまった。

「・・・ちよつと？」

三日月は言うが、アイズはそれに反応する事なくすうすうと眠ってしまったている。

「三日月さん・・・って、何やってんすか？」

「アイズが離してくんないからしばらくこの状態でいいよ。下手に起こすと多分フィン達の二の舞だから」

三日月の言葉にハツシユは「うっす」と頷いてその場を後にする。そしてすぐに昭弘が此方に気付き、三日月に言った。

「三日月、全員部屋に連れて行ったがお前は どうする?」

「ありがとう昭弘。俺は別にこのままでいいよ」

「分かったよ。なら、これは此処に置いてくぜ」

昭弘はそう言って、机の上にじゃが丸くんが入った袋を置くとそのまま、出口へと向かった。

「じゃあな三日月。明日また来いよ」

「うん。またね」

三日月は短く返事を返し、昭弘を送り出す。

「・・・寝るか」

三日月はアイズの抱きまくらになりながらも、三日月は目を閉じて眠った。

◇◇◇◇◇◇

朝日が登る。

「・・・頭が痛い」

アイズは頭痛で目が覚める。昨日はお酒を少し飲みすぎた。

昨日の記憶が何もないが、それほどまでに飲んでしまったのだろうか?

アイズは身体を起こそうとした時、目の前に見える黒い髪にアイズは目を開ける。

「三日月?」

アイズは自身の胸の中で眠る三日月にアイズは困惑の声を上げる。その困惑する声に三日月が目を開いた。

「・・・」

三日月とアイズの目が合う。

アイズは三日月の青い瞳を見つめる中、三日月が口を開いた。

「おはよう」

「えっ?・・・お、おはよう」

状況がまだ分かっていない中で、アイズは三日月の挨拶を返す。

「えっと・・・どういう状況?」

「昨日帰ってきた後、酔ったアイズに抱きまくらにされただけだよ」

「・・・」

アイズは三日月の言葉に押し黙る。

三日月から聞かされてた昨日の事にアイズは顔を赤くする。

とそこに――

「おはよー、アイズ。昨日アイズが酔った後、大変だった・・・よ？」  
ティオナがソファで三日月を抱きまくらにしているアイズを見て、  
動きを止める。

「おはよう、ティオナ」

三日月だけは普通に挨拶を返すが、ティオナとしてはそれどころではない。

アイズ達の状況を見て、ティオナは言う。

「えーと・・・お楽しみ邪魔だったね。レフィーヤ達には言わないから、楽しんでね？」

そう言っただけで右をするティオナにアイズは身を固める。

そして――

廊下の向こうからロキ達の絶叫が黄昏の館に響いた。

### 第三話

「あ、そやアイズたん。昨日帰って来てから「ステイタス」の更新やってないやろ？今日やるか？」

朝一件からしばらく経ち、ロキがアイズに提案を上げてくる。

「・・・お願いします」

ロキの提案にアイズは頷いた。

昨日の傷心が癒えきつていないがまあ、三日月と一緒に寝られたから良しとしよう。

アイズは自身の中で、納得するように頷いていると、隣からロキの眩きが聞こえてくる。

「フヒヒ、久しぶりにアイズたんの柔肌を蹂躪したるわ・・・！」

「変な事をしたら斬ります」

「えっ、マジで？」

半ば反射的に女好きの主神に釘を刺しながら——その抑揚のない雰囲気にもロキが本気で怖気付きながら——アイズは応接間を後にする。去り際、近くにいたリヴェリア達に小さく一礼し、ロキに連れられとある別室へ向かった。

空部屋の一つで、応接間からさほど離れていない。使われていない椅子やテーブル、更には『遠征』であまった予備の武器や道具が押し込まれている。

今は倉庫同然となっている部屋からロキは椅子を引っ張り出した。

それに座らせてもらったアイズは、部屋着の背中ボタンを外し、上半身を露出させる。

「んー、昨日といい今日といい、アイズたん、冗談が通用しないで怖いわー。ホンマ何があったん？」

「・・・別に・・・なに、も」

晒された白い背筋に神血を垂らし、作業に取り掛かるロキ。

微妙に目を泳がせながら、アイズは彼女の質問を躲す。リヴェリアには散々笑われてしまったし、今朝の件もあり、今の心境では打ち明ける気にもなれない。

背中で踊るロキの指をどこか他人事のように感じながら、アイズは憂鬱な思いを引きずってしまおう。

「……?」

ふと、背を伝う指の動きが止まった。

ピタリと手を止めたロキにアイズは振り向くと、彼女はわなわなと震え始めている。

どうしたのだろうかと思っていると——女神はガバツと顔を上げ、歓声を放った。

「アイズたんLv. 6キタアアアアアアアアアア!!」

感情の赴くままの、大音声が打ち上がる。

ホームの奥まで響き渡る主神の喝采に、何かがひっくり返るような、慌ただしい騒音が館の至るところで生まれる。

うひょー!と子供のように小躍りする主神を前にしながら。

少年の事で今は頭が一杯になっているアイズは、きよとん、ととしてしまった。

アイズ・ヴァレンシュタイン

Lv. 5

力? D555↓564 耐久? D547↓553 器用? A82

5↓827 敏捷? A822↓824 魔力? A899↓S900

狩人? G 耐異常? G 剣士? I↓H

「これがLv. 5の最後の「ステイタス」な——!」

更新した「ステイタス」内容を流れるように共通語へ書き換え、ほいとロキが羊皮紙を手渡してくる。

(……あれ?)

渡された羊皮紙を見て、アイズは首を傾げた。

軒並み上昇している「ステイタス」は特に気にする所はない。

アビリティの最高評価Sに上り詰める者は全くと言っていいほどおらず、十分に誇つていい戦果だ。

だが、アイズが気になっているのはそれではない。

(……三日月の言つてた力の名前がない?)

そう、アイズが気に掛けるのはその事だった。

三日月から聞いた話ではなんでもスキルで「悪魔の鎧」とあるらしいのだが、羊皮紙に書かれた痕跡は一切ない。

疑問を浮かべるアイズに、ロキが言う。

「【ランクアップ】の特典、『発展アビリティ』も発現可能や！良かったなあアイズたんつ、Lv. 5ん時はなーんも手に入んなかったし！」

「……どんなアビリティですか？」

もしかしたらそっちの方なのかも知れない。

若干の不安と期待に身を寄せながらアイズはロキに聞く。

『精癒』や！あのリヴェリアだけが持つとるやつ！選べるのの一つだけやし、これを発現させてもええやろ!？」

興奮気味に確認してくるロキに、アイズは若干困惑の表情を作りながらも、こくりと頷く。

昇華が可能である事をつげるアイズの背中からは、中心から放射状に、そして断続的に波紋が生じていた。

朱色の碑文——【神聖文字】——が一定間隔で、深く、静かに波立ち発光している。

待機状態にしている【ステイタス】へ、ロキはさつそくとばかりに指を走らせた。うきうきわくわくと眷属の昇格を喜ぶ主神とは逆に、アイズは、いまいちピンと来ない表情を浮かべる。

アイズ・ヴァレンシユタイン

L v . 6

力？ I O 耐久？ I O 器用？ I O 敏捷？ I O 魔力？ I O

狩人？ G 耐異常？ G 剣士？ H 精癒？ I

滞りなく【ステイタス】の昇華を終えた後、部屋の隅に置いてある姿見を一瞥する。ロキに翻訳してもらうより先に、アイズは自身の背中を鏡越しに見て、左右反転した【神聖文字】を解読する。

(……ない……なんで?)

自身で確認したにもかかわらず、確かに「無い」。

ロキが書き忘れた？ いや、そんな事はないだろう。

疑問で顔を浮かばせる中、そんなアイズにロキが言う。



「どしたん、アイズたん？不思議そうな顔して？」

顔を近づけてくるロキにアイズは「なんでもないです」と短く答えると、そそくさと部屋から出ていった。

そんなアイズを見て、ロキが嘆息を吐きながら呟く。

「・・・アイズたん。アイズたんは、三日月のようになつたらアカンで。アレは、人間を辞める力、や。今やつたらまだ引き返せるし、使わなかったら特に問題はないからな。でもな、更にその先にいったらアカンで。最終的には、自分の命、も食い潰すからな。あの悪魔は」

ロキがそう呟いた後、ポケットに隠していた羊皮紙を取り出す。

そしてそこに書かれていた文字にロキは息を吐いた。

悪魔の鎧（キマリス）

展開時、自身のステータスアップ。

対魔法対物理攻撃の大幅軽減。

デメリット

リミッターの解除により代償が必要。

使用時、魔法の効果大幅弱体化。

■■■■■使用時、精神の汚染化

レベルアップまたは天使討伐時、キマリス自身の変化能力解放。

「つたく、とんでもない爆弾やで。これ・・・」

出来れば三日月やアイズを、処分、したくはない。

だが、神々にとって悪魔とは猛毒なのだ。

「嫌やなあ・・・そんな事すんのは・・・」

ロキはそう呟いた後、部屋から出ていった。

## 第四話

アイズがLv. 6に至った夜から次の日の朝、「ロキ・ファミリア」ホームでは彼女の「ランクアップ」の話題で持ちきりになった。

派閥幹部である孤高の少女の偉業に、多くの団員は口々にし、興奮で頬を彩る。

当の本人はというとドンヨリとした空気と考えているような仕草を取り、話しかけられても緑な反応を示さず早々に——ふらつきながら——朝の大食堂から姿を消したが、女性団員を中心にした下位構成員達は彼女が消えた後も色めき立った。

男性団員達も燃えるような口ぶりで熱く称え合う。強く美しい「劍姫」の存在は、これまで以上に「ロキ・ファミリア」の憧れと、誇らしさの対象になりつつあった。

一方で、アイズに近い者達の中では悔しがる者も多い。狼人の青年は不機嫌そうに肉を食いちぎりながら興奮して話しかけてくるラウルを蹴飛ばし、アマゾネス姉妹の妹は「先に行かれたー!!」と身体全体で悔しがって「やかましい」と姉をげんなりさせている。彼女たち達の側では後輩であるエルフの少女が紺碧色の瞳を揺らしながら、様々な思いを募らせていた。

朝から騒がしさが途切れないそんな団員達を尻目に、アイズはキョロキョロと首を振る。

三日月はどう思っているのだろうか？

アイズはその事が気になり、三日月とハツシユの姿を探す。

だがどこにも見当たらない二人に、アイズは畑かなと思ひ、応接間を後にしようと身を翻した時だった。

「・・・あ」

三日月とハツシユが玄関を出て行くのが見えたのと同時に、アイズは小走りで駆け出した。

応接間を抜けて、玄関の門へ手をかける。そして周りを見渡すと・・・いた。ダンジョンの方へと二人で歩いているのが見える。

そんな二人の行き先を知るべく二人の後を、アイズはバレないように

に後を付けていった。建物の壁を使ったり、樽の影へと隠れたり、ゆっくりとそして着実に近づいていく。

傍から見れば「剣姫」と呼ばれる程の彼女がストーキングまがいの事をしているのだ。その様子を見てしまった冒険者達は、驚きのような避けるような表情でその様子を眺めていた。

そんな中、三日月とハツシュ達はダンジョンの入口で足を止めると、その前で話始める。

「……誰か待っているの？」

近くの茂みで隠れるアイズに二人は気づく事なく数分間待っていると、別方向から昭弘が歩いてやってきた。そしてその隣には――

「!？」

自分が探していた『白髪の少年』だった。

その光景にアイズは息を呑む。

そんなアイズに四人は気づかないで、一緒にダンジョンの中へと入っていった。

「――」

その光景を間近に見たアイズは何も言えずにその場で立ち尽くす。そんな中で、アイズは最近三日月達がホームにいない時の事を思い出した。

そしてすぐに結論を出す。『そう言う事かと』。

自分があの少年の事で頭がいっぱいになっているというのに、三日月はハツシュ達と一緒にあの少年とダンジョンへ潜っていたと？

「……ずるい」

アイズがそう呟くのと同時、『バキイ!!』の街路樹の幹の一部を握り潰す。

そして――

「……私も行かなきゃ」

アイズはそう呟いたのと同時に一度、ホームへと足を向ける。

ダンジョンに行くとなるとそれなりの準備が必要だ。それに三日月の事だ。二人に合わせてそこまで深くは潜らない筈。

そんな事を考えながら、アイズはホームへと駆け足で戻っていつ

た。

三日月への嫉妬と、羨ましきで頭がいつぱいになりながら。

◇◇◇◇◇

「なあ、いつまで俺の後をついてくんだよ？そもそも『三日月達』が此処にいるのか分かんねえんだぜ？それなのによお・・・」

『シノ』はそう言いながら『彼女』を見る。

あのモバイルアーマーの件で助けた獣人の少女にあれからずっと付き纏われているシノは参った顔をしながら彼女を見る。

べっぴんな子供だとは思うが、まだ子供だ。自分達のように戦いに慣れていく訳でもなければ、長期間の長旅に慣れているわけでもないだろう。

そんなシノの言葉に、少女は唇を開く。

「・・・気にしなくていい。私はアイツを殺せるなら、それで」

「・・・」

シノは彼女の目を見て嘆息する。これは説得するのは無理だと。

今の彼女の目は昔、ヒューマン・デブリの連中と戦った時にソイツ等がしていた目だ。

仲間を殺されて復讐に走る奴等の目。鉄華団にもそんな連中にはいだが、最終的には鉄華団を止めていったものや戦場で死んだ奴が殆どだった。

いくら自身が女好きとはいえ、そんな彼女を近くに置きたくはない。だが下手に置いておいて、勝手に死なれたりでもしたら目覚めが悪すぎる。

そんな状態がしばらく続いたが、シノは諦めて彼女に言った。

「まあ・・・なんだ。嫌になったら何時でも言ってくれよな。一応聞くが、名前はなんつうんだ？流星にずっとついて来るんだったら知つていた方がいいだろ？」

シノの言葉に獣人の少女は少し考えた後、口を開いた。

「・・・ヨナ」

彼女の言葉にシノは歯を見せて笑いながら言う。

「ヨナか。いい名前じゃねえか！俺はノルバ・シノ！シノでいいぜ！」  
そんなシノの言葉に彼女はジト目で眩く。

「・・・うるさい人ですね。ノルバさん」  
「ヒツデエな!？」

そんな凹凸コンビは三日月達を探しに、彼方此方へ旅をする。

そして、あのモビルアーマーを一刻でも早く殺らないといけないのだ。人類が減びるのが先か、彼等悪魔が倒すのが先か。

彼等の旅はオラリオに辿り着くまで終わらない。

## 第五話

派閥の首脳陣は、朝食後、首領の執務室に集まっていた。

「アイズもとうとうLv. 6になりおったか」

「あの娘に触発され、テイオナ達もすぐに続くだろうな。・・・アイズのように無茶をやらかさなければいいが」

「はは、まあ周囲の士気があがるのはいいことだよ」

ドワーフのガレス、エルフのリヴェリア、小人族のフィンが順々に言葉を交わす。

フィンの執務室は複数の尖塔が固まってできたホーム、その真北の塔に位置している。大きな本棚や暖炉がある室内で、フィンは己の執務机につき、リヴェリアは壁際に佇み、ガレスは木製の丸椅子に腰を落としていた。

「フィンたちもうかうかしておれんとちやう？古参の面子を潰されんようになく」

そして、もう一人。

ニヤニヤと面白がるように、女神が朱色の瞳で彼等の事を見回した。

黒檀でできたフィンの執務机の上に腰を下ろす主神に、眷族達は瞑目や苦笑など、それぞれの反応を返す。

ロキは、背後の壁にかけられた道化師の旗とそっくりの、滑稽な笑みを浮かべた。

「そう言えば三日月は？最近姿を見ていないけど、何処にいるんだい？」

フィンがふとした疑問を浮かべて彼等に言うと、リヴェリアが答える。

「三日月なら、昭弘の所へハツシュと行っている。ダンジョンやトレーニングを一緒にやっていると聞いてはいるが、本当の事は分からん」

「実力がだいたい拮抗しておるからトレーニングとしては儂らよりやりごたえがあるんだろう」

ガレスの言葉を聞き、フィンはなるほどねと苦笑する。

もとより、【ロキ・ファミリア】の中でも彼は特に縛りなどしていないのだ。よっぽどの事をしない限り、こちらとしては何も言うことはない。

「じゃ、そろそろ始めようか、極彩色の『魔石』にまつわる話。最近はどうだたしとったし、詳しい情報を交換しとこ」

行儀悪く机の上に乗りながら、ロキが告げる。

彼女の言葉通り、フィン達が集まったのは近ごろ多発している事件——食人花のモンスターを始めとした騒動の情報を共有するためだった。安易に野放しにしておくことはできないほど、最近のオラリオには不穏な動きが表面化しつつある。

身内の者にも被害が及んでいる一連の事件に、ロキ達は本腰を入れて向かい始めた。

「極彩色の魔石……50階層の新種と、フィリア祭に出てきたと言った、食人花じゃな」

「この二種類のモンスターの関係は今置いておくとして……地下水路の方はどうだったんだい、ロキ？ ベートと一緒に向かったんだらう？」

ガレスの後に、フィンが声を続ける。

ロキは少年の顔を肩越しに一瞥し、問いに答えた。

「モンスターは出てきおったけど、碌な手がかりは見つけられんかったなあ。胡散臭い男神には面倒事を押し付けられたし……」

使用された形跡がある旧地下水路、食人花が出現した大貯水槽、そして調査の延長線上で遭遇した男神ディオニュソスと、彼が提供した情報。

十日前、ベートとともに地下水路で見てきたものを話すロキは、最後にギルドへと侵入しウラノスと接触したことを語った。

「ギルドは白と見ていいのか？」

「なんかは隠してそうやけど、今回の騒動には直接関係してないような気はするなあ……」

ロキがそう言うのならそうなのだろうと、フィン達は長い付き合い

からくる信頼を覗かせながら納得を示した。

「んじや、フィン達の方は？」

役を交代し、今度はフィンとリヴェリアが説明する側に回る。

18階層『リヴェイラの街』で発生した殺人事件と、食人花の大群による強襲。そして、アイズのあの魔法。

事件の元凶と判明している赤髪の、調教師の女。第二級冒険者を殺害してのける第一級冒険者並みの実力者であり、アイズをも圧倒した。街にモンスターを呼び寄せたのも彼女の仕業とみて間違いないだろう。

そして女の狙いだったのが、ハシャーナが謎の依頼人から指示され持ち帰ったとされる、不気味な胎児の『宝玉』だ。もつとも、三日月がランスメイスで爆散させてしまったが。

「モンスターを変異させる、とは……にわかには信じられんう。あの50階層の女体型も、その宝玉とやらで生まれ変わったということか？」

「恐らくはな。アイズとレファイヤしか目撃した者はいないが……」  
「うちはその調教師の女うちゅうやつの方が気になるなあ。フィンとリヴェリアの二人がかりでようやく辛勝って……フレイヤんとこの【猛者】やないんやから。まともにやっても勝てそうか、フィン？」

「負けるつもりはない……とは言いたいけど、真正面からやり合いたくない相手である事は間違いないかな」

髭をさするガレスにリヴェリアが、机の上で胡座をかくロキにフィンがそれぞれ答える。

「三日月とやりあつたらどっちが面倒だと思う？リヴェリア？」

「……三日月だな」

フィンの言葉にリヴェリアはそう答える。

「理由を聞いてもいいかい？」

大体は分かっているつもりだが、一応聞いて置いて損はない。

そう問うフィンにリヴェリアは口を開いた。

「三日月と模擬戦をした時だが、特に厄介なのが背中から伸びる尻尾だ。アレがある限り、碌に詠唱をさせてくれない。仮に詠唱無しで魔



法を使つても、あの装甲のせいではほぼ無力化されるから、スピードで劣っている私に一瞬で距離を詰められて終わりだ」

「そもそも問答無用で術師を先に潰しに来たしな」と言うリヴェリアに彼等は苦笑する。

すばしっこい奴が苦手と言う三日月にある程度善戦したのが、フィン、アイズ、ベートだが、フィンに関しては途中で面倒臭がつて無理矢理鏢迫り合いに持ち込み、力任せに叩きのめすという暴挙に出ている。

ベートに関しては尻尾から逃げ回るベートに回り込んでソードメイスをフルスイングでベートの脇腹に叩き込み、そのまま壁をブチ破るといふとんでもない事をしていたなど、ガレスは思い出す。

そう考えると、アイズはかなりいい線を行っていた。

そう考えると、調教師の女の実力としてはフィンとリヴェリアと恐らく互角・・・三日月未満と考えていいだろう。

そうになると、オラリオの中でも屈指のLv. 6である可能性が高い。

「・・・これは、先日アイズに聞き出したばかりなのだが」

おもむろに、リヴェリアが切り出す。

ウダイオスを撃破した直後によく聞き出したと前置きをし、言葉継いだ。

「調教師の女は、あの娘のことを『アリア』と呼んだそうだ」

その発言に、フィン達のみならずロキも目を見開く。

表情を真剣なものに変え、フィンがリヴェリアに聞いた。だした。

「間違いないのかい、リヴェリア？」

「ああ。アイズの魔法を見て、直後のことだそうだ。昭弘が割り込むまでは執拗にあの娘の事を襲い続けた」

まるで探し物が見つかったかのように——とリヴェリアは付け足す。

——敵の狙いにはアイズも含まれているのか？

フィン達の思考に同一の疑念が芽生える。

「・・・儂ら以外に、アイズの身の上を知る者がおるとは考えられんぞ」

「しかし、それでは何故、アイズの母親の名を相手が知っている？」

この場にいる四人しか知り得ないと眉をひそめるガレスと、リヴェリアのやり取りを横目に、フィンはロキを見た。

「ロキ、神々の中でアイズの事情を知る者は？」

「・・・それこそ気付いておるのは、ウラノスくらいやろうなあ」

その言葉を聞き、フィン達は主神のもとに半眼を向ける。やはりギルドが一番怪しいのではないか、という訴えが彼等の視線には乗っていた。

ひとまず、ギルドへの疑いは保留となった。

「でも、アイズを『アリア』と呼んだ・・・母親と間違えたのは気になるな」

「・・・仮に、敵がアイズの正体を知っていたとして、狙いはなんだ？」

リヴェリアの唇から、問いかけが落ちる。

その問いには誰も答える事は出来なかった。

## 第六話

「あの馬鹿は何処に行きましたああああああ!!」

「ロキ・ファミア」 黄昏の館にレフィーヤの怒号が館内に響き渡る。

その声を聞いて他の団員達は視線を声の発生源の場所へ向けた。

そこに居たのは左手に羊皮紙を握りしめ、怒りを浮かべたレフィーヤだった。

「どうしたの？レフィーヤ？そんなに怒ってさ？」

テイオナがレフィーヤに聞くと、レフィーヤは怒りながら口を開く。

「馬鹿が魔法の勉強をサボってガレスさんと模擬戦ばかりやってたって話を耳にしましてね!!折角、折角魔法を教えてくださいと頼まれたから、頑張つて文字を教えて！魔法書の勉強の仕方も教えて、復習もしてくださいってあれだけ言ったのに!!あの馬鹿はああああああ!!」

頭をガリガリとかくレフィーヤにテイオナはおそるおそる聞いてみる。

「あのさ、レフィーヤ。その馬鹿って……」

「ハツシユさん です！」

と、レフィーヤがそう言った瞬間、バアン!!と門の扉が開かれる。

その場にいた団員が今度はそちらへと視線を向けると、黒々としたオーラを纏ったアイズがそこにいた。

「ア、アイズ？」

「……」

テイオナがそんなアイズに声をかけるが、アイズはそれに答える事なく、カツカツと靴音を立てながら部屋へと戻っていく。

そんなアイズを横にいつの間にかレフィーヤもいなくなっていた。

動きが固まる団員達を他所に、その数分後、二人が戻ってきた。

アイズは愛剣を腰に、レフィーヤは杖を手に持っており、明らかにダンジョンへと向かう格好だ。

そんな二人にテイオナは冷や汗をかきながら、分かりきっている質

問を彼女達に聞いた。

「えつと・・・二人共、一応聞くけど何処に行くの？」

この場にいる団員の疑問をティオナが聞く。

そんなティオナに彼女達は答えた。

「ダンジョン」

アイズは三日月にあの男の子とどう言った関係なのか、聞いた  
為。

レフイーヤはあの馬鹿（ハツシユ）を連れ戻し説教をする為、二人  
はダンジョンへと向かった。

◇◇◇◇◇

「!?」

「どうしましたか？ハツシユさん？」

突如、顔を上げるハツシユにベルが首を傾げている。

そんなベルにハツシユは「何でもない」と答えて足を先に進める。

今強烈な寒気を覚えたハツシユだったが、気のせいだと思いベルに  
言葉を投げかける。

「ベルは凄いつすね。あんな魔法を使えるなんて」

ハツシユの言葉にベルは首を横へ振る。

「ハツシユさんだって凄いですよ!!モンスターの攻撃を盾で受け止め  
てから反撃出来るなんて！僕には出来ない事です！」

「お、おう・・・」

ベルの言葉の勢いに若干気圧されつつも、ハツシユは頷く。

そんな二人を少し離れた場所で、三日月と昭弘は二人の先程の戦闘  
を見て、互いの意見を交換しあう。

「ベルはどつちかというと、シノやライドみたいにスピードタイプだ  
ね。不意打ちするのも結構慣れてるみたいだし」

「ああ。だが、本人からしてみればそれが一番戦うのに楽なんだろう。

俺達とは違う戦い方だ。ハツシユとも、相性は良さそうだしな」

昭弘の言葉に三日月は軽く返事をしながら答える。

「そうだね」

ベルとハツシユはお互いがお互いの苦手な部分をカバーしあっている。

そんな二人を見て三日月は言う。

「まあ、でも。まだまだ成長するよ。あの二人は」

「ああ。そうだな」

三日月と昭弘はお互いにそう言いながら、二人の後を後ろから追っていた。

## 第七話

アイズとレフイーヤは『上層』の深部——10階層に向かっていた。そこに四人がいると言う情報を、他の冒険者から聞いたのだ。

聞いた話によると、この短期間の間に10階層に到達しているらしい。

たった二十日という日数で当時のアイズでも、一人で辿り着くまでに半年以上はかかったこの場所に。

(・・・成長、した?)

それは——ありえない。

(速過ぎる——)

いくらなんでも荒唐無稽だ。

そんな冒険者は、聞いたことがない。

いくら三日月達が一緒とは言え、短い期間とはいえ、三日月や昭弘の性格状、それをすることはないだろう。

そこまで考えたアイズは頭を振った。今はそのような思考に囚われているべきではないと、己を叱咤する。

階層間を繋ぐ階段を駆け下りながら、アイズは三日月に対する言葉を考える。

何時から彼と一緒にダンジョンへ潜るようになったのか。なぜ、自分に話してくれないのか。

聞きたいことは沢山あったが、氷解しない疑問と共にアイズは振り払った。

やがて、階段を下り終え10階層に到着する。

始点となる広間を飛び出すと、迷宮に立ち込めるのは白い霧だった。

視界を妨げるこの霧は『上層』における10階層からの特徴だ。ダンジョン・ギミックの一つと言ってもいい。

充滿する視野のベールは方向感覚や接近するモンスターの察知を鈍らせ、下位冒険者を苦しめる。人の探索が難しくなった環境の中、アイズとレフイーヤは地面に生える緑草を蹴りつけ、霧が立ち込める

迷宮を進んだ。

通路の出合い頭襲いかかってくる『インプ』をすれ違いざま瞬殺し、僅かにも速度を緩めない。

と、レフイーヤが顔を横へ向けた。

それにつられてアイズもそちらへ視線を向ける。先が見えない霧の奥。そこから神経を研ぎ澄ませていると——聞こえた。

「!」

モンスターの醜い雄叫びと、激しい戦闘音、そして人の咆哮が。

荒くれ者達の野太い声ではなく、少年のような高い声音に、鳴り響く火薬のような音。その二つの音で二人は確信し、アイズとレフイーヤは転進した。長い通路を疾走し、音の出どころである広間へ突入する。

広々とした広間の中央付近では、霧の中で複数の巨大な影が暴れ回っている。間違いなく大型級モンスターの『オーク』だ。そしてモンスター達と交戦するのは、見覚えのある四人の影。

『「ファイヤボルト」!!』

次の瞬間、砲声とともに繰り出された炎雷が、霧の海を切り裂いた。見開かれたアイズの金の瞳に映ったのは、爆砕するオーク、そして腕突き出した白髪の冒険者。そして、三日月。

アイズは三日月を見て目をキツ、と吊り上げる。

どうやってあの少年と一緒にダンジョンに行っているのか、聞いただしたい。何だったら、二人と一緒に冒険したい。

疑問半分、欲望半分……いや欲望八割と言った完璧な私情を胸に、アイズはその中へずかずかと急ぎ足で進んでいく。

オークを倒し終わった彼等を見ていると、白髪の冒険者はハツシユがハイタツチをしている。何だったら、昭弘や三日月とも。

「——ッ!!」

三日月の普段は見せない困惑の顔が浮かぶ中、アイズが声をかけようとしたその時。

「勉強をサボって随分と楽しそうですね？ハツシユさん？」

「!？」

レフィーヤのドスの聞いた黒い声に、ハツシユが顔を上げる。顔を上げるハツシユは、明らかにヤバいと言った表情を作りながら冷や汗を流し続けていた。

笑顔のまま近づいてくるレフィーヤに対し、ハツシユはウサギのように固まったままだ。何だったらあの白髪の少年はもういなくなっていた。

せつかく会えたのに。と、アイズは思いながらも、三日月へと近づいていく。

重い空気の中、レフィーヤはハツシユに言った。

「ダンジョンも良いですが、今日はさっさと帰って私と勉強です」

レフィーヤはハツシユに杖を頭に振り下ろした。

「ガスツ!!と嫌な音が鳴り、ハツシユが昏倒する。

そして――

「では、ハツシユは連れて帰りますので三日月さん。すみませんでした」

「あー・・・何サボったか知らないけど、ハツシユも悪いから。いいよ気にしなくて」

彼女から何かを察したのだろう。三日月はそれ以上何も言わなかった。

隣で昭弘が鬼かと言っていたが、気にしないでいいだろう。

ではと言ってハツシユを連れて帰るレフィーヤを横にアイズは三日月に向けてカツカツと靴音を鳴らし歩いていく。

そして――

「三日月。どうやってあの子と仲良くなったのか教えて」

「は?」

アイズは三日月の肩を掴んでそう言った。



## 第八話

「は？」

三日月はアイズの言葉にそう返事を返す。

「仲良くなつたつて、ベルの事？」

三日月がそう聞き返すと、アイズは頷く。

ジツと此方に視線を送り続けるアイズに、三日月は言った。

「アイツは昭弘が今、世話になつてゐる所の冒険者だからそれで知り合ひになつただけだよ」

「・・・本当？」

「あ、ああ。そうだが・・・」

アイズは顔を昭弘へと向ける。

昭弘は威圧的なアイズに少しだけ戸惑いながらも、そう答える。

「・・・分かつた」

アイズは短く返事をし、三日月の肩から手を放す。

そんなアイズを見て、三日月は言った。

「アイズはベルと仲良くなりたいてって考えてる？」

「・・・うん」

質問にアイズは頷く。

そんなアイズを見て、昭弘は言った。

「なら、まずはベルの方を何とかしないとね」

「そうだね」

「・・・？どういうこと？」

二人の言葉に首を傾げるアイズ。そんなアイズに昭弘は息を吐きながらアイズに理由を説明する。

「ベルの奴はな。アンタに憧れてんだとよ」

「憧れて？」

前にもその話を聞いたことがあるような気がする。だが、詳しい事は聞いていなかった。そんなアイズの考えている事を読み取つてか、昭弘は言葉を続ける。

「ああ。ベルの奴にとつて、アンタは目指す目標みたいなもんなんだ。

だから、ああやってアンタを見かけると逃げ出すんだとよ」

まあ、ベルのあの様子だと他にもあるだろうがな。と付け加える昭弘の言葉に、アイズはポツリと呟く。

「そう・・・なんだ」

「どうやら自分の思い違いだったらしい。」

でも、何度も逃げ出されるところ、胸にくるものがある。

「まあ、今度は俺からもベルに話してみるさ」

「・・・お願いします」

昭弘にアイズはそうお願いする。と――

視界の隅で、何か光るものを捉える。

「・・・これ」

「ん？」

歩み寄り、草原に落ちていた光のもと――防具を拾い上げる。

エメラルドの輝きを放つプロテクター。光源はどうやらこの盾のようだ。

「コイツは・・・ベルのヤツだ。落としていったのか」

昭弘がそう呟くと、アイズは昭弘に言った。

「あの・・・これ、私があの子に直接返してもいいですか？」

「！ああ。アイツも喜ぶだろうよ」

アイズの言葉を聞き、昭弘は頷く。と、さつきから一言も喋っていない三日月が視線を霧の奥に向けたまま見つめているのが視界に入った。

「・・・三日月？」

立ち込める霧にアイズは視線を向ける。

「くる」

「・・・！」

三日月の言葉と同時にアイズはプロテクターを右手で持ち、左手で鞘を収めた剣を再び抜剣した。昭弘も気づいたのか、ハルバードを両手に持つ。

三人の視線の霧の奥に「何かが」いる。

『・・・気付かれてしまうか。お見逸れする』

やがて霧が揺らめいた。

霧の送りから浮かび上がるのは、漆黒の影。

黒づくめのローブを全身に纏った、謎の人物。闇で塞がったフードの中身は何も見通せず、両手には複雑な紋様のグローブをはめている。肌の露出が一切存在しない。

性別も分からない黒衣の人物に、三日月は警戒を緩めず尋ねた。

「俺達になんか用？」

「ああ。正確には彼女にようがある。だが言う前に、その武器を下ろしてほしい。私は君に危害を加えるつもりはない」

確かに、敵意の欠片も感じられない。あえてアイズ達の間合いに入り、自身の生殺を此方に委ねている。

話をどうか聞いてほしい、という裏のない姿勢に、アイズと昭弘はひとまず武器を下げた。

「……貴方は、誰？」

「なに、しがない魔術師さ。……以前、ルルネ・ルーイに接触した人物、と言えはわかつてもらえるだろうか」

相手の発言に、アイズははっとした。

ルルネ・ルーイ。『リヴィラの街』で殺害されたハシャーナから荷物を受け取っていた、獣人の少女。彼女は謎の依頼人に依頼され、運び屋の任務を引き受けたと言っていた。

『真つ黒なローブ』『男か女かもよくわからない』……彼女が語った依頼人の情報が、目の前の人物と合致する。

「アイズ・ヴァレンシユタイン……君に冒険者依頼を託したい」

驚愕が抜け切らないアイズに、黒衣の人物は本題を切り出す。

「24階層でモンスターの大量発生、イレギュラーが起こっている。これを調査、あるいは鎮圧してほしい」

報酬は勿論用意しよう、と黒衣の人物は続けた。

「この原因の目星はついている。恐らく階層の最奥……食料庫」

アイズ達は黒衣の人物の言葉を黙って聞く。

「以前にも30階層——ハシャーナを向かわせた場所で、今回と酷似した現象が起こっていた。」

「二・二」

アイズの肩が、震える。

ここまで言えばもうわかるだろう、とあたかも告げるように。

『リヴィラの街』を襲撃した人物・・・例の『宝玉』と関係している可能性が高い」

息を呑む。

これは自身を釣る為の餌だ、と自覚しつつも、心は激しく揺れてしまった。

己の身体をざわつかせた不気味な『宝玉』。そして『アリア』と呼んできた赤髪の女。アイズの脳裏に一連の記憶が蘇る。

「事態は深刻だ。【剣姫】、どうか君の力を貸してほしい」

懇願する黒衣の前に、アイズな三日月に視線を向ける。

この問題に足をつっ込んでいいものなのかと。そんなアイズの視線に気づいてか三日月はアイズに言った。

「やるかやらないかはアイズが決めたよ。これはアイズが決める事だから」

「三日月・・・」

アイズは三日月の言葉を聞き、ややあって、その細い顎を引く。

「わかりました・・・」

そのクエストを、アイズは受託した。

アイズは赤髪の女と『宝玉』に関する手がかりが欲しい。

アイズの了承に黒衣の人物は「恩に着る」と礼を告げる。

「できれば今すぐにでも向かってほしい。いいだろうか？」

相手の要請に、アイズは返事をためらう。

このまま一人、独断で突き進んでもいいものかと悩む彼女に三日月は言った。

「なら、俺も行く」

「三日月、でも・・・」

この件に関係ない三日月を巻き込んでしまうのに躊躇いを覚えるアイズに三日月は言う。

「別に気にしなくていいよ。仲間がやるって言うなら俺も全力で手伝

うから。昭弘はベルを探してもらっていい？この辺りだとベル一人だと結構きつい筈だから」

「分かった。三日月、無茶するなよ」

「分かっている」

二人は短いやり取りをした後、昭弘はその場から離れていく。

「ごめんね。三日月」

「いいよ。俺が自分で首を突っ込んだんだし。気にしなくて」

二人のやり取りを黒衣の人物は見つめながらも、見えない口を開く。

「まず、『リヴィラの街』に寄ってくれ。『協力者』が既にいる」

「わかりました」

特定の酒場に向かい『合言葉』を言え、という指示の内容に、アイズは頷いた。

最初の目的地は18階層。

黒衣の人物が言う『協力者』と合流し、直ちに24階層へ向かう。

調教師の女や『宝玉』の事を思い浮かべながら、アイズ達は現在地から出発した。

## 第九話

10階層から出発したアイズと三日月は、早くも18階層へ到達した。

天井の水晶群が青空を形作る中、安全階層に広がる森林、大草原を越えて西部の湖畔に向かう。黒衣の人物の指示通り、巨岩の島の上に築かれた『リヴィラの街』へと立ち寄った。

つい最近までいた場所に三日月は周りを見渡しながら呟く。

「もうここまで直ってるのか。凄いな。ここの人」

三日月の言うとおり、ローグ・タウンは多くの店が修繕されていた。既に十日以上の前の出来事とはいえ、食人花の大群に襲われたにもかかわらずだ。

三日月の呟きに、アイズは同意しつつも、アイズはまず特定の酒場を探す。

喧騒から離れた街の小径を通り、簡潔に教え込まれた道筋へ。

やがて着いたのは街の北部、長大な水晶の谷間が形成された郡晶街路付近の裏道。

「ごつごつとした岩壁に口を開けた、洞窟だった。

「こんなところに、酒場があったんだ・・・」

狭い袋小路は階層天井の水晶光が届かず薄暗い。人氣が全くない場所でひっそりと構えている店にアイズは呟きを漏らす。『リヴィラの街』は長年利用しているが、こんな場所に酒場があるとは知らなかった。

黒衣の人物に指定された酒場は、『黄金の穴蔵亭』という店だった。洞窟の入り口には看板が飾られ、赤い矢印が斜め下の方向を示している。洞窟の中に設けられた木製の階段が奥へと続いていた。

洞窟の入り口で立ち止まるアイズを置いて、三日月が先に木製の階段をギシギシと音を鳴らしながら下っていく。

「・・・あ、待って」

そんな三日月の後を追うように、アイズもまたその木製の階段を下っていった。

階段を下り切り、扉も仕切りもない空洞へ二人は足を踏み入れると、そこには同業者がたむろする酒場の光景が広がっていた。

まず目につくのは空洞の中央に生える、黄の光を宿す水晶の柱だ。白や青の水晶は18階層の至る場所で散見できるが、このような黄水晶は初めて見た。きつとここにしか生えていない稀有なものなのだろう。

驚嘆しつつアイズは周囲を見回す。黒い岩が剥き出しの酒場は広さがほどほどと言ったところで、複数のテーブルと椅子が用意されている。天井や壁に設置された魔石灯と黄水晶に照らされる中、卓の上ではにやけた冒険者達がカードゲームに興じていた。

客の姿は存外によく、五つあるテーブル席は全て埋まっている。空いているのは酒場の隅のカウンターしかない。

繁盛しているのかもしれない、と思うアイズは、あまっているカウンター席へと向かった。

三日月は入り口の近くの壁に背中を預けながら周りを見渡している。どうやら、見張りをしてくれるらしい。

アイズが向かった先、長台の内側には色とりどりの瓶が置かれた酒棚と、無愛想なドワーフの主人。

そして一つだけ埋まっている席には、獣人の少女が腰掛けていた。

「んん？あれっ【剣姫】じゃないか!?こんなところで、奇遇だな!」

「……ルルネ、さん?」

アイズに気がついた犬人の少女——ルルネは、驚きの後に笑みを浮かべる。

件の『宝玉』を巡ってアイズとレフイーヤが一時的に行動を共にした他派閥の冒険者だ。今のアイズと同じように、黒衣の人物に雇われ運び屋を引き受けていた経緯がある。

アイズが不思議な縁を感じていると、彼女は気軽に話かけてきた。「前は世話になったな。おかげで死なずに済んだよ。あらためて礼を言わせてくれ」

「いえ……体は、大丈夫ですか?」

「あはは、この通りピンピンしてるよ」

にこやかに接してくるルルネの好意を辞退させてもらいつつ、アイズは黒衣の人物に言われた隅から二番目のカウンター席——ルルネの真隣に座る。

彼女は一瞬訝った顔をしたが、すぐに笑みを纏い直した。

「今日は一人で探索かい？この店を知っているなんて【剣姫】も通じやないか」

「いえ……今日は三日月と一緒です」

アイズがそう言っ入り口近くに居る三日月に顔を向ける。

ルルネもつられて三日月に視線を向けると、首を傾げた。

「あの人？見た感じ何も持っていないし、強そうに見えないけど」

「でも、私より強い」

彼女の訝しげな顔に対してアイズはそう答える。

「【剣姫】より強いって本当かよ？だったら名前が知れ渡っている筈だろ」

冗談はよせと笑う彼女にアイズはムツとしながらも、アイズはカウンターの中を見た。

ドワーフの主人は無愛想な顔のまま歩み寄り、問いかけてくる。

「注文は？」

「『ジャガ丸くん抹茶クリーム味』」

その時だった。

アイズが『合言葉』を伝えた瞬間——ガシャーンツ!!と。

隣の椅子が、盛大な音を立てて引っくり返る。

驚いて横を見れば、床に尻もちをついたルルネが信じられないといった顔で放心していた。

「……あ、あんたが、『援軍』？」

——まさか、とアイズが思っていると、周囲でも動きがあった。

酒を飲んでいたヒューマンが、カードゲームに興じていた獣人の達  
が、三日月以外の全ての客が一齐にテーブルから立ち上がりこちらを見つめる。身構えるようにアイズも椅子から離れた。

陽気に酒を飲んでいた姿勢を消し、真剣な眼差しを向けてくる彼等の姿を見て、アイズはようやくやく悟る。



つまり……ルルネを含めたこの酒場にいる客全員が、黒衣の人物の言う『協力者』だったのだ。

「彼女で本当に間違いないんですか、ルルネ」

「ア、アスファイ……」

アイズを囲むように立ち上がった者達の中で、一人の女性冒険者が歩み出てくる。

水色の滑らかな髪は一房だけ白く染まっている。瞳は髪の色に近い碧眼だ。銀製の眼鏡をかけた相貌は整っており、知的な印象を感じさせた。

装備は純白のマントに、金の翼の装飾が巻き付いた靴。マントから一部覗く腰のベルトには、短剣の他にも複数のホルスターが吊るされている。

彼女と視線を交わしながら——そして驚きを覚えながら——  
——アイズは眼前の美女が何者であるかを察した。

(アスファイ・アル・アンドロメダ……)

「ヘルメス・ファミリア」の首領でありオラリオに五人としない『神秘』保有者。

【万能者】の二つ名を持つ、稀代の魔道具作製者である。

都市屈指の実力を持つ第一級冒険者とはまた違った分野で、その名声は知れ渡っている。

アイズがアスファイを見つめる横で、問いかけられたルルネは「そうみたい……」と言って立ち上がる。

「……貴方達も、依頼を受けたんですか？」

こちらの質問に対し、アイズより年上だろうアスファイは、嘆息交じりに「ええ」と答える。

「この金に目がない駄犬のせいで、『ファミリア』全体が迷惑を被っています」

「ア、アスファイ」

容赦ない言葉にルルネが情けない声を出す。

アイズが目を向けると、彼女は決まりが悪そうな顔で事情を聞かせてくれた。

「【剣姫】も会ったと思うけど・・・ほんの何日か前にあの黒ローブのやつが現れてさ、『協力してほしい』って。最初は『もうご免だ』って突っぱねたんだけど・・・」

歯切れが悪くなったルルネを押しよけるように、アスファイが言葉を継いだ。

「L.V.を偽っていることをバラす、と脅されたそうです」

「・・・」

「その挙げ句、私達に皺寄せまで・・・」

「そこにいる奴は弱みを握られた訳か。で、ソイツの仲間のアンタらにツケが回ってきたんでしょ」

と、入り口の壁に背中を預けていた三日月が此方へと歩み寄ってくる。

「貴方は・・・」

「俺やあんた等の事情なんてどうでもいいよ。どうせ依頼された内容も俺達が知っている内容と同じなんでしょ。なら、さっさと終わらせよう」

三日月はアスファイに言葉を入れさせる時間も与えずに、依頼内容の話を進めるよう彼女に言う。

「・・・まあ、いいでしょう。今回の依頼内容を確認しますが、目的地は24階層の食料庫。モンスターの大量発生の原因を探り、それを排除する。間違いないありませんか？」

「はい」

「では、次にこちらの戦力を伝えておきます。私を合わせ総勢十五名、全て【ヘルメス・ファミリア】の人間です。能力は大半がL.V.3」  
依頼内容の照らし合わせと戦力の確認を進めていくアイズ達。

その中でも一番の問題点はやはり三日月だった。

「それで、貴方は一体何者ですか？三日月・オーガス。【ロキ・ファミリア】に新しい団員が入った事は【剣姫】から聞きましたが、そうすると貴方のL.V.は1の筈です。例えばL.V.が2に上がったばかりだとしても、戦力として足手纏いになるのは此方としては遠慮したいのですが」

アスファイの言葉に対し、三日月は言った。

「んじや、此処で確かめる？」

「確かめるとは・・・貴方の実力をですか？」

アスファイは三日月に問いを投げ返すが、三日月はそれに言葉は返さず、アイズに言った。

「アイズ。コイツ等を一旦納得させるから、全力で模擬戦やろう」

「え？う、うん。分かった」

アイズは三日月の言葉にキョトンとしながらから言葉返すのだった。

## 第十話

「フェルズ」

祭壇に重々しい声が響いた。

古代神殿の最奥部を思わせる石造りの広間。辺りに満ちている深い闇を、四炬の赤い松明が切り裂いている。

ギルド本文なし地下に設けられた、主神の祈禱の間である。

ローブとフードを被った巨身の神は祭壇中央の神座に腰掛けていた。火の粉が舞う松明の炎に囲まれるウラノスは、黒衣の人物、フェルズにその蒼色の瞳を向ける。

「何故【剣姫】に依頼を出した」

アイズ達が24階層調査の冒険者依頼を受託し既に数時間。やるべきことを終えこの祭壇に戻ってきたフェルズに、身じろぎ一つせず構える老神は問いかけた。

不動と厳粛の姿勢を崩さない彼の声音は、詰問のそれではなく確認に近い。以前、剣姫の主神であるロキに無用な疑いをかけられるのは望むところではない、と発言したのはフェルズ本人である。ウラノスはリスクを取ってまでアイズに接触したその真意を尋ねていた。

神座の正面に立つ黒衣の人物は答える。

「例の『宝玉』に対して、【剣姫】は過剰な反応を示したらしい」

冒険者依頼を授ける際、ルルネから聞き出した情報をフェルズは語った。胎児の宝玉を受け取った際に卒倒したほどの、アイズの反応をだ。

それを聞いたウラノスは、ぴくり、と眉を微動させる。

「アイズ・ヴァレンシユタインと宝玉には何か因縁があるのは、と判断してのことだ。宝玉の正体を解明する糸口になるかもしれない」

フェルズの考えを聞くウラノスは押し黙っていた。まるで自らも思考を働かせているように無言の時間が続く。

やがて彼を見つめていたフェルズは「それに」と言葉を繋ぐ。

「30階層での食料庫の一件はこちらだけで何とかなったが、同志達にも大きな被害が出た。彼等にこれ以上負担をかけさせるわけには

いけない」

30階層——ハシャーナが宝玉を收拾できた経緯に触れるフェルズ。

闇に塞がれたフードの奥からなおも声が続けられる。

「前は『番人』はいなかったが、30階層の件で相手も神経質になっているに違いない。あらゆる事態に備え、【剣姫】を含めた十分な戦力を揃えた」

「番人・・・例の調教師が出てくるか」

恐らくは、と答えるフェルズに、ウラノスは両ノ目を瞑る。

「ヘルメスの方は私から言い含めておこう」

「すまない、ウラノス」

アイズと同様、冒険者依頼に遣わされている【ヘルメス・ファミリア】の処置を受け持つと告げるウラノス。多くの冒険者を危険な案件に巻き込んだことに罪悪感を抱きつつ、フェルズは顔を上げた。

「そう言えば・・・『彼』はどうします?」

「あの『悪魔』か。『放っておけ』」

ウラノスの言葉にフェルズは首を傾げる。

「よろしいのですか?」

「構わん」

ウラノスはそう言ってフェルズを下がらせた。

そして

「そうか——あの『悪魔』が『貴様の家族』か」

ウラノスはこの場にいない人を思い出してそう呟いた。

◆◆◆◆◆

広い大空洞だった。

地上から遠のいたダンジョンの奥深く。中層域に位置する階層の最奥。

湿った空気と、異臭が漂っていた。

モンスター達の体臭でもなければ、血の香りでもない。怪物の腹の

中に放り込まれたとしてもきつと嗅ぐことはかなわないだろう、肉の腐ったような——昆虫を引き寄せるような腐臭。

死臭にも似た臭いが充満する一帯は、ダンジョンの一角でありながら、冒険者は愚か凶暴なモンスターの雄叫びも届いてこない。

まるでダンジョンそのものから切り離されたように、迷宮の騒がしさとは無縁だった。

不気味な静寂の中では、人が動き回る複数の足音と、何かが蠢く音、そして低い破鐘の鳴き声が断続的に響いている。

薄暗い空間は、血の色にも似た赤光によって照らし出されていた。

「.....」

赤光に焼かれる横顔が、シャリ、と奇怪な色の果実をかじる。

地面に伸びる影は、美しい肢体と豊満な双丘を持つ女性の体のものだ。

鋭い眼差しを浮かべる瞳は緑色。額にかかる前髪——光の色と同じ赤い髪が、揺れ動く。

アイズ達が調教師の女と呼ぶ、赤髪の女に違いなかった。

「——おいっ、モンスターがダンジョンに溢れて冒険者の間で騒ぎになっている、大丈夫なのか!？」

そんな女のもとに、駆け寄ってくる者がいた。

大型のローブで上半身を隠した男だった。口もとまで覆う頭巾の上に額当てを装備し、顔を隠している。

声を荒げる相手に対し、女は冷ややかな反応を返した。

「うるさい。騒ぐな」

「食人花を貸してやる。有象無象どもはお前達で何とかしろ」

視線も合わせず、突き放すように告げる女の言葉に、相手は舌打ちとともに踵を返す。

薄闇の奥へ頭巾の男が消えると、入れ替わるように、今度は別の人影が現れる。

赤い光に照らされるのは、全身を白づくめ衣装で包んだ男性だった。

「冒険者達に感づかれるとは、運がないな」

頭部にモンスタアの白骨を利用して作られた鎧兜。相貌をはつきり見せない出で立ちはいっそ薄気味悪かった。

「放っておいていいのか、レヴィス？」

赤髪の女——レヴィスと呼ばれた彼女は、すぐに視線を前に戻す。

「冒険者にいくら感づかれようが知ったことではない」

「闇派閥の連中に押し付ける気か？」

「ああ。私はここを動かん」

レヴィスは薄闇の奥で動きを見せる無数の人影を関心なさそうに眺める。

彼女のことを側で見下ろす男は、そこで語気を強めた。

「30階層のように、『彼女』を狙う連中が来たらどうする？」

ドクンツ、と音を立て赤い光の源が揺れ動いた。

「恐らく、地上では一部の者が我々の動きを察知しているぞ？」

「精鋭がこの場所を襲撃してくるやもしれない、という男の懸念に対し。」

レヴィスは端的に告げた。

「潰すだけだ」

◆◆◆◆◆

「財布・・・すっからかんだな」

「計画性なさすぎなんですよ」

焚き火を二人で囲みながらシノとヨナは野宿をしていた。

焚き火の炎が二人の顔を照らす。

「ノルバさん・・・私達、狩りや採取をしないとしばらくご飯抜きの可能性が・・・」

「・・・マジかよ」

ヨナの言葉にシノは短く答えるのであった。

## 第十一話

アイズ達は酒場では迷惑になるという事で、『リヴィラの街』の広場に來ていた。

周りには二人の模擬戦を一目見ようと、街中から冒険者達が集まっていた。

中には、どっちが勝つのか賭けをしているものもいる。

そんな周りを他所に三日月がアイズに言った。

「アイズ、変な手加減はしなくていいから。全力で来てね」

「うん」

三日月の言葉にアイズは頷いて、愛剣《デスペレート》を鞘から引き抜く。

三日月もそんなアイズに合わせるように《バルバトス》を出すと、その姿を見た周りの冒険者が、驚嘆や動揺の声が耳に届いてくる。

「おい、確かアイツって・・・」

「ああ・・・前の大進行の時に湖側のモンスターを一人で全滅させた奴だ・・・」

「まさか、あのガキが？」

そんな話が耳に入る中、アイズはジツと金の瞳で三日月を観察する。と——三日月の武器が何時もとは違うということにアイズは気が付いた。

竜のアギトの様な先端の巨大なレンチ。最初に見た印象はソレだった。

見た目がペンチの様な武器にアイズは困惑と疑問の表情を作りつつも、アイズは《デスペレート》を構えた。

——そして。

「——ッ!!」

アイズは三日月目掛けて駆け出した。

三日月もそれに合わせるように《バルバトス》のスラスタを吹かせる。

スピードだけで言えば、アイズが三日月の上を取っている。だが、



三日月にはそのアドバンテージを押しえつける程のパワーと耐久力があつた。

まずは先制攻撃を仕掛ける！

アイズは《デスペレート》を振るう。

銀色の一閃が三日月の腕目掛けて放たれた。だが――

ギイイーン!!

三日月の持つ《レンチメイス》の持ち手のグリップによって防がれた。アイズの先制攻撃を防いだ三日月はアイズめがけて拳を振るうが、アイズも後ろへ跳躍する事によつてその拳を回避する。

三日月から離れたアイズは着地すると同時に三日月を見据えた。

「――ッ!?!」

アイズの目と鼻の先。

巨大な金属の塊がアイズを叩き潰そうと迫ってくる。

「くっ……あッ……!!」

《デスペレート》でその一撃を防いだアイズだったが、愛剣で防いだその衝撃は《ハウダイオス》の一撃をも上回る威力だった。

つくづくその小さな身体から放たれるその力にアイズは羨ましいと思いつつも、アイズのその身体は吹き飛ばされた。

木製の壁を粉碎しながらアイズはその瓦礫に飲み込まれる。が――

「……………」

三日月は周囲の悲鳴と歓声が上がる中、アイズを飲み込んだ瓦礫の山から視線を外さない。

次の追撃に備えて、三日月が《レンチメイス》を構えた直後だった。

強烈な風が瓦礫を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた瓦礫の中から現れたアイズは剣に風を纏わせている。いつも使う魔法と言う奴だ。

三日月はそんな彼女に合わせるように《テイルブレード》をゆらゆらと揺らしながらアイズを見ると、先程までとの表情が違った。

最初は突っ込む気でいたのだろうが、《テイルブレード》が視界に入った瞬間、露骨に表情を変えたのだ。

「……ちよつと損したかもね」

三日月としては突っ込んで来てくれた方がありがたかったのだが、アイズがこうも警戒してくるとなつてくると話は変わつてくる。

嫌そうにするアイズに三日月はスラスターを吹かせて、アイズへ向けて勢いよく疾走した。

「……来る!!」

アイズは此方へと突撃してくる三日月へ全神経を集中させる。

下からかち上げるように振り上げられる巨大な鉄塊をアイズは後ろへ下がる事によつて回避し、振り上げた状態で隙だらけになつてい

る三日月に目掛けて愛剣を振るう。

だが、それを妨げるようにテイルブレードがアイズの《デスペレート》を三日月の直撃を妨害する。

姿勢を取り直した三日月は、今度はアイズ目掛けてレンチメイスを振り下ろす。

石畳の上に振り下ろされたレンチメイスは周囲の石畳を叩き割り、その細かい破片がアイズと三日月目掛けて散弾のように跳弾する。

「——っ!」

メイスの衝撃波でアイズは吹き飛ばされる。土煙の風を一瞬吹き飛ばそうと考えたアイズだったが、その考えを止め《ヴィダール》を使い、三日月に向けて全力で疾走した。

アイズの肌に石畳の破片が傷をつける。だが、それに気にすることなく走り続けた。

もうすぐ。もうすぐ三日月の姿が見える。

土煙の中、アイズは三日月の後ろ姿を捉えた。

まだ此方に気付いていない絶好のチャンス。

そんな三日月にアイズは《デスペレート》を振り上げる。

これなら三日月を……殺しきれる。”

(あ……れ……?)

なんで私はそんな事を考えて——

アイズはそう思いながら無意識に剣を振り降ろす。模擬戦だからこんな事をしなくてもいいのに。三日月に迫るサーベルを扱ってい

るアイズも止める事が出来ない。

このままだと三日月に直撃する。アイズはそう確信した瞬間だった。

ガキン!!

サーベルが火花を上げながら弾かれる。

三日月が背中に収納されたテイルブレードをアイズが手に持つ《テスペレート》の剣筋を勘で弾いたのだ。

コンマ一つ合わなかったらアイズの剣は《バルバトス》の装甲を切り裂いていただろう。

テイルブレードの一番硬い金属部分に刀身がヒットしたせいで腕がビリビリと痺れる。

そんなアイズに向けて三日月は拳を脇腹辺りに叩きこんだ。

「うツ・・・!?!」

鎧越しから衝撃が走る。

鈍い痛みがアイズの腹部から全身へと走る中、アイズは地面へと押し倒された。

そして両手を踏みつけられ拘束されると、アイズの視界にはバルバトスが自身を拘束している姿がはつきりと映っていた。

「みか・・・」

アイズがそう口を開いた瞬間。

「アイズ。今すぐそれを消した方がいいよ」

「え?」

三日月の言葉にアイズは開いた口を止める。

そんなアイズに三日月は周りを見回しながら言った。

「今、一瞬だけアイズ吞まれてたでしょ。だからさっさとソレを消した方がいい」

三日月の忠告にアイズは大人しく《ヴィダール》を使うのを止める。と、先程まで自身の中にあつた高揚感が一気に冷めていく。

アイズが元の調子に戻ったのを悟ってか、三日月もアイズの両手から拘束していた足を除ける。

そして三日月が近くにいたアスフィに言う。

「これでいいでしょ」

そう言う三日月にアスファイは少しだけ目を見開けながらも答える。

「・・・え、ええ」

『リヴィラの街』の冒険者達が『剣姫』が負けたとざわめく中、アイズは一人、三日月に対して負い目を感じるのだった。

## 第十二話

「も、もう無理・・・限界です」

ハツシユは机に突っ伏しながら、向かい側に座っているレフィーヤにそう返答を返す。

そんなハツシユにレフィーヤはニコニコと笑顔のまま、突っ伏すハツシユに言った。

「まだ休んじや駄目ですよ？ハツシユさん。まだこんなにもやる事があるんですから」

そう言つて、大量の辞書や魔導書に指を指しながら答えた。

それを聞いたハツシユはさらに深く顔を机に埋め込む。

「・・・うわあ」

その様子を離れた所で見っていたティオネとティオナも若干引き気味だ。

レフィーヤが気絶したハツシユを引きずつて帰つてきた時からずつとこうだ。

ハツシユが限界に近づいたときにレフィーヤの鞭の言葉が突き刺さる。ハツシユも半ば忘れかけていた魔法の勉強をツーマンセルでレフィーヤが行っているのだが、これはあまりにも鬼畜だ。

最初の頃は始めての生徒だと喜んでいたレフィーヤの姿が今や見る影もなく、今となつてはスパルタ先生だ。

見るに絶えない姿を晒すハツシユに助け舟を出すようにティオナがレフィーヤに言う。

「えーつと・・・レフィーヤ？ハツシユも限界だつて言ってるんだし、ちよつとは休ませてあげたら？帰ってからずつとやってるから流石にやりすぎだよ」

ハツシユに助け舟を出すティオナはレフィーヤにそう言うと、レフィーヤはティオナに答える。

「そうですね？私はそうは思いませんけど？」

そう答えるレフィーヤにティオナが口を開く。

「そう思うのはあんただけよ。ハツシユだつて、あんたみたいに頭が

いい訳じゃないんだから。一気に覚えさせても、すぐに忘れるだけよ」

ティオネの言葉を理解したのか、レフィーヤは苦い顔をする。

「どうやらある程度は理解していたようだが、そこまで頭が回っていなかったらしい。」

「なら、30分程休憩しましょうか」

「そう言うレフィーヤにハツシユがガバツと顔を上げる。

「うっす!!」

「まだあんだけ元気だったんだ・・・」

「それほど勉強が得意そうな顔でもないし、ただ苦痛なだけだったんじゃない?」

嬉しそうに顔を上げるハツシユに二人はそう呟いていると、ベートとロキが帰ってくるのが目に映った。

「あ、お帰りーロキ」

ティオナは頭だけを向けてロキに視線を向ける。

と、ベートがハツシユの向かい側に座っていたレフィーヤに言った。

「おい、レフィーヤ。今すぐダンジョンに行くぞ。24階層だ」

ベートがレフィーヤを誘うという、滅多にない事にティオナ達は目を開いた。

そんな二人を横にベートが言葉を続ける。

「アイズとあのガキが24階層に行きやがった」

ベートの言葉にレフィーヤは立ち上がった。

◆◆◆◆◆

銀の剣、《デスペレート》が唸る。

『オオオ——!?!』

放たれた斜め一閃の斬撃が雄鹿のモンスター——『ソード・スタッグ』の剣角を切断し、そのまま顔面を断ち切った。

モンスターの巨体がぐらりと傾き、音を立ててダンジョンの地面に横たわる。

「ひゃ〜。やつぱり強いなあ〜」

ソード・スタッグを瞬殺したアイズを見て、ルルネは感嘆した。得物を手にしたままアイズは油断なく周囲を警戒しつつ、彼女とその仲間を見やる。臨時パーティーの隊員達もまた、遭遇したモンスターの群れを倒し終えていた。

樹皮に一带が覆われた通路、幾多の光の粒を灯す苔。階層を経る事に強さが増していくモンスターを蹴散らし、アイズ達は目的地である24階層に足を踏み入れていた。

下層域が間近に迫った24階層は、通路一本取っても『上層』やこれまでの中層域と比べ物にならないほど広い。

アイズと三日月を含めた十七人規模のパーティーが贅沢に空間を使い、悠々と移動できるほどだ。

伴って一度に遭遇するモンスターの数も格段に増えているが、ルルネ達「ヘルメス・ファミリア」は苦もなく敵を片付けていた。

「ルルネさん達も、すごいですね・・・」

「ルルネ、でいいよ。私達、結構年近いだろ」

年齢を十八だと語る彼女は気軽に接するよう求めてくる。

アイズがこくりと頷いて応じていると、彼女達の前方からパーティーのリーダーであるアスファイが「前進します」と指示を出すところだった。

そんな中、アイズは三日月の姿を探す。

きよろきよろと、首を回すアイズはその視界に三日月の姿を視認できた。

パーティーのほぼ後ろ側。一人でただ黙々とついて来ていた。三日月の周りには誰も近寄ろうとはせず、それどころか距離を離す一方に見える。

なぜこんな事になっているのかと言うと、要するに他の冒険者達がアイズ達が『リヴィラの街』で行った模擬戦に文句を言い始めた人達がいいたからだ。

模擬戦で勝ったのは『剣姫』が手加減したからだ。

そんな事を言った冒険者達に三日月が彼等に言った言葉がその冒

険者達の神経を逆撫でしたのだ。

気に入らないなら纏めてかかってくれば?——と。

三日月の絹を隠さない言葉に冒険者達は激昂し、三日月と模擬戦をした結果——。

五分。その短い間で三日月は、十数人もの冒険者達を半殺しにした。

圧倒的な暴力による蹂躪。

一言で例えるならそれが一番しつくりくる。その模擬戦にもならない蹂躪劇を見て、「ヘルメス・ファミリア」の隊員達は三日月に話しかけるどころか、近づくこともしなくなったのだ。

一人になっている三日月にアイズは近づいていく。

三日月もアイズの姿が視界に入ったのか、顔を此方へ向けてきた。

「どうしたの? アイズ」

「アスフィさんが前進するって」

「そうなんだ。ありがとう」

アイズと三日月の短い会話のやり取り。だが、アイズにとって一番三日月と近くに居られると感じる一時だった。

そんなアイズに三日月が言う。

「アイズは彼奴等に前を任されてるんでしょ。ならもうそろそろ言ったら?」

「・・・うん」

三日月の言葉にアイズは名残惜しそうに頷いてルルネ達のもとへと戻っていった。



## 第十三話

「【劍姫】。貴方の立直な意見が聞きたいのですが、この依頼についてどう思いますか？」

「・・・どういう、意味ですか？」

歩いている最中、唐突にアイズはアスファイにそう言葉を投げられ、疑問を持ちながらも聞き返す。

そんなアイズにアスファイはさらに言葉を続けた。

「リヴィイラ襲撃の件に関してルルネから大まかな経緯は聞いています。謎の宝玉に執着する、黒ローブなる人物の依頼・・・今回の騒動も危険なものだと思いますか？」

「モンスターの大量発生は、『宝玉』にまつわる何らかの前触れであると、黒衣の人物からはそのように示唆されている。」

あわや街を壊滅手前まで追い込んだ先日的事件に匹敵するほど、今回のクエストは危険性を孕んでいるか意見を求めてくるアスファイに対し、アイズはどう答えようかと考えていると、ふと三日月が見張りをしているのが見えて、アイズは三日月に声をかける。

「・・・三日月」

「・・・なに？」

「三日月はこの依頼をどう思ってる？」

振り返る三日月に対し、アイズは先ほどアスファイに聞いた内容を説明すると、短く答える。

「別に、アイズが思ったことでいいんじゃない？俺がその事にどうこう言う事じゃないし、言った所で大して変わらないでしょ」

「・・・そっか」

三日月ならどんな意見が出てくるのか少しだけ期待していたアイズだったが、そこまで甘くはないらしい。

少しは自分で考えろと言う事なのだろうか？

アイズは少しだけ考えながらも冒険者としての考えを口にした。

「危険・・・だと思います」

その答えを聞いたアスファイは、溜息を堪えるような表情を浮かべ

た。

「本当に、厄介なことに巻き込まれてしまいましたね・・・」

話を横から聞いているルルネが肩身を狭そうにするが、アスフィはもう彼女を責めようとはしなかった。ただ、パーティのリーダーとして一層気を引き締めたようだ。

散発的に襲いかかってくるモンスター達を連携して相手取りながら、アイズ達は24階層の正規ルートを進んでいく。

安全階層18階層の中央樹を通じて進出する19階層から24階層の層域は、『大樹の迷宮』だ。

木肌でできた壁や天井、床は巨大な樹の内部を彷彿させる。燐光の代わりに発行する苔は無秩序に迷宮中で繁殖し、青い光を放っていた。

一方で出現するモンスターは既階層以上に一癖も二癖もあり、24階層となればLv. 2最上位の能力、そして何よりパーティの密度が求められるようになる。一部の例外を除くが。

「・・・！」

「全員、止まってください」

前方の通路にひそむ気配に、アイズを始めとするした冒険者達は反応した。ただちにアスフィが片手を上げて、パーティの進行をとどめる。

進路の先は巨大な十字路だった。発光する苔の密度が僅かに落ちている中、薄闇の中を無数の影が蠢いている。

目も当てられないほど、広い通路内を埋めつくしているモンスターの大量だ。

「うげえ・・・」

アイズの隣でルルネが呻いた。

うじやうじやといふ数え切れない醜悪な怪物が、巣穴のごとく溢れ返るその様は背筋を寒くさせるのには十分だった。

本当に不自然な集まり方をしていると、アイズは観察しながら思う。

これだけ特定のエリアに集まり、行列を成している光景には出会っ

た事がない。

「アスファイ、どうする?。」

「どうせ駆除しなければいけません。ここで始末します」

近づいてくる多数のモンスターを前に、ルルネが問いかけると、アスファイは「戦闘準備」と団員に呼びかけた。

パーティの者達は各々の得物を構え、前衛壁役の者が盾とともに前へ出る。

「後衛は詠唱を開始。接敵する前に数を――」

「待つて」

そこで、アイズの声がアスファイの砲撃指示を止めた。

怪訝そうな顔で振り返る彼女に歩み寄り、端的に告げる。

「私に行かせて」

「は?。」

装備する《デスペレート》を振り鳴らしたアイズは、一気に駆け出した。

「お、おいつ!?!」

「ほつといたら?。別にいつものことだし」

アスファイ達が呼び止めようと声を出す中、三日月は一人、アイズに好きにやらせればと言う。

泡を食ったルルネの叫びが背を叩いたのとほぼ同時、モンスターの  
大群とアイズの戦端は開かれた。

開戦一番、大薙された銀のサーベルに沿って、複数の断末魔が弾け  
飛ぶ。

『オオオオオオ——ツツ!?!』

掃討が始まった。

凄まじい斬撃の渦が殺到するモンスターを切り刻み、絶命へと至らせる。三体の敵を巻き込む一度の斬撃、回避行動の中に織り交ぜられる回転斬り、空中へ身を躍らせた美しい金の髪をモンスターが扇げば顔を一闪された。

おしよせる群れに対し、アイズは真つ向勝負、正面からぶつかり合う。

少女が前進する度に周囲からモンスターの姿はかき消え、埋め尽くされていた通路にはぽつかりと空間ができあがった。代わりに大量の屍と灰が地面に残る。

まるで剣の結界だ。近づく怪物は問答無用で八つ裂きにされ、首が、胸部が、胴体が切断される。

「……………」

「……………」

「…………もう全部彼女一人でいいんじゃないですかね」

「…………帰っちゃおう？」

「そういうわけにもいかないでしょう……………」

団員達と一緒に固まる中、アスファイがポツリと呟き、ルルネが尋ねる。アスファイは頷き返すのをなんとか堪えて返答した。

視界の中で一方的な殲滅戦を繰り広げるアイズの姿に、「ヘルメス・ファミリア」は『自分達は必要ないのではないか…………』と心の声を一つにしてしまう。

「っー」

遙か後方で呆然とするアスファイ達の視線を浴びながら、アイズは剣撃の手を緩めない。

モンスターの攻撃を一度も直撃させず、しかし時にはわざと防御を重ね、徐々に体の動きを加速させていく。

「！」

『ギッツ———!?!』

疾駆とともにモンスターを葬り、通路の端に辿り着いた途端、壁を蹴りつけ宙へ。

空中を舞っていた飛行モンスター『デッドリー・ホーネット』を両断する。

素早い敏捷性を誇る巨大蜂の体躯が二つに分かれ地面に墜落するのと同様、アイズは落下中に二頭の剣鹿を仕留めた。

寄って集めることもできないモンスター達に、自ら走り寄って斬り払う。

単身ならば第二級冒険者でさえいのちを一つ二つ落としてもおか

しくない過酷な戦場でなお、アイズは無傷で在り続け、モンスターを圧倒し続ける。

そして、ゴブリンの上位種である『ホブゴブリン』の断末魔を最後に、戦闘は終了した。

大型級の巨躯が地響きとともに地面に倒れた後、アイズは愛剣を鞘へと収める。

「……終わったよ」

アイズはそう言ってアスファイ達へ振り返ると、〃戦闘態勢に入っている三日月〃を見て、アイズはピタツと足を止めた。

バルバトスの手に持つレールガンの銃口がアイズへと向けられていたのだ。

そして――

放たれる砲弾と共に、轟音がダンジョンの中を駆け巡る。

レールガンの砲弾はアイズの顔の隣を通り過ぎ、いつの間にか後ろにいた『ボブ・ゴブリン』の上半身を粉碎した。

――

飛び散った大量の血が目の前にいたアイズに雨のように降り注ぐ。

アイズはかつてベルの時と同じように全身を真っ赤にして滴らせながらその場で立ち尽くす。

アスファイ達が呆然とその光景を見つめる中、三日月がアイズに申し訳無さそうに言った。

「ごめん」

「……うん」

返り血で真っ赤になったアイズはそう頷くしか他に無かった。

## 第十四話

「で、モンスターは片付けてもらったけど……アスフィ、これからどうする？」

死屍累々たる周囲——モンスターの死体の山を流石に放つてはおけず、サポーター他が手分けして『魔石』の抽出作業に取りかかる中、ルルネがアスフィに意見を求めた。

全身に返り血を浴びたアイズも顔を上げ、今後の動向に耳を傾ける。

「あの黒ローブのやつの話を信じるなら、食料庫に何かあるんだろう？ 24階層にある食料庫は三つ……南西に南東、後は北だ。どこのエリアから回る？」

「ごごご、とポーチをあさってルルネは一枚の羊皮紙を取り出した。

入り組んだ広大な迷宮が描かれた24階層の地図だ。

こうしてあらためて見ると、やはり広い。

下部の層域に下りれば下りるほど広大になるダンジョンにおいて、この24階層は既に都市の総面積の半分には届いているだろうか。階層最奥に存在する食料庫をもし三つ回る羽目になれば、モンスターとの遭遇も踏まえると、とても骨が折れる作業になるだろう。

リーダーの判断をパーティが待つ中、アスフィは口を開いた。

「モンスターがいるところを進みます」

「？」

「モンスターが押し寄せてくる方向へ向かえば、その近辺に恐らく原因がある筈です。食料庫が大量発生の端を発しているというのなら、我々はモンスターが教えてくれる方角に進むだけでいい」

おお、とアイズと三日月はアスフィの説明に納得をした。

モンスターの大量発生之源は食料庫にあるとアイズ達は既に当たりを付けている。なら、怪しい一帯をくまなく調査する必要はなく、方角さえ割り出せれば候補が絞れるのだ。

行列となってモンスターが押し寄せてきたのは、十字路のとある方

角の先……。

「……北か」

三日月の眩きに、全ての者は苔の光がうつすら続く北側通路の先を見据える。

「それにしても食料庫か……あそこからモンスターが沢山産まれてるってオチかな。どう思う、【剣姫】？」

「わからない……けど」

「けど？」

「多分……そんな単純なものじゃないと思う」

アイズはルルネにそう言って地図を見る。

そんなアイズにルルネは少し気まずい顔で言う。

「あのさ、少し気になってる事があるんだけど……」

「……？」

アイズの視線がルルネに向けられる。

「その……さ、【剣姫】。何時までその状態にいるの？」

「……え？」

ルルネの言葉にアイズは目をキョトンとする。

そして、視線を自身の返り血だらけの身体に向ける。

「流石に言うのもあれだけど、今の【剣姫】かなり血生臭いよ。早いでこ何かで拭いたら？出発する前に」

「……うん」

ルルネの言葉にアイズは頷いてルルネから布の切れ端を貰い、一旦近くの泉へと向かった。

## 第十五話

「……はあ」

アイズは一度アスファイから時間を取ってもらい、全身にこびり付いたモンスターを洗い流していた。

所々乾いてしまい取れなくなってしまう所もあるが、それは帰ってから洗い落とせばいい。誰もいないこの泉でアイズは水を髪にかける。

冷たい水が肌に流れていくが、それを気にせず髪にも付いた血を落とす。

洗い落とした血が泉へと流れていき、もとに戻った金色の髪がアイズの身体へと張り付いていく。

「……これでいいかな」

返り血を全て洗い流したアイズはそう呟いた後、泉からバシヤバシヤと音を立てながら服を乾かしてある岩場へと足を進めて、服を手を取ったその時。

「終わった？」

「……み、三日月？」

アイズのいる岩場の反対側から三日月の声が聞こえてきた事に、アイズは急いで身体をまだ着ていない服で隠す。

もしかして……と、アイズは思いながら岩場の反対側にいる三日月へと声をかけた。

「……なんで、そこにいる、の？」

困惑と羞恥を混ぜ合わせたような声がアイズの喉を震わせる。

そんなアイズに三日月は坦々と答えた。

「護衛。最初は眼鏡の人に任せてたけど、覗く奴らが多いからって言われて俺に回ってきた」

「……」

アイズは三日月の言葉に納得してしまう。

まあ有り得そうな事ではあったが、本当にやるとは。

今頃、アスファイが「ファミリア」の男性陣を捕まえている所だろう。



なんとなく予想出来る分、アスフィの苦労も目に浮かんだ。

そんな三日月にアイズは先ほどもしかしてと思つた事を口にする。

「三日月は・・・その・・・興味ないの?」

アイズは三日月に自分は興味があるのか聞いてみる。

そんなアイズの問いに三日月は言った。

「興味ない」

短く返された言葉にアイズは少しがっかりする。

せめてそこは嘘ついてでも言ってくれれば――

「・・・!・・・私、何考えていたんだろ」

アイズは首をブンブンと振りながらそう呟く。

そんな事を考えた事など一度も無かつたというのに、最近になって色々と頭の中がグチャグチャになってくる。

そんなアイズに三日月は言う。

「そう言うアイズはどうなの?」

「えっ?」

唐突な言葉にアイズは声を上げるが、そんなアイズに三日月は言った。

「最近、アイズ何か考えてるでしょ。そんなんじや戦う時に集中できないよ。この依頼を受けた時だって何か考えていたみたいだし。何かあつた?」

「・・・」

三日月の言葉にアイズは少しだけ息を呑む。どうやら三日月はあの程度分かつていたようだったが、事情の詳しい事を聞かないままアイズの様子を見ていたらしい。

そんな三日月にアイズはポツリと呟く。

「あの調教師の事・・・三日月は覚えてる?」

「ああ・・・あの赤い髪の奴?」

「・・・うん」

三日月の言葉にアイズは頷いた後、さらに言葉が続けた。

「あの調教師の人・・・私のお母さんの名前を言っていたから・・・どうして知っているのか気になったから、もしかしたらつて考えてた

の」

「・・・へえ」

三日月は短くそう答えると、アイズに言った。

「なら、アイズは親の手かがりを探す為にあの女を追っているのか」

「・・・うん」

そう頷くアイズに三日月はポケットから取り出したデーツを一口に含み咀嚼する。

そして飲み込んだ後、アイズに言った。

「なら、俺はアイズのやりたい事を手伝うよ」

「・・・え？」

三日月の言葉にアイズは顔を上げる。

そんなアイズの様子を知ってか知らずか、三日月は言葉が続ける。

「アイズだつて街にいる時、オルガの事を聞いて回ったりしているってフィンから聞いている。アイズがそうやって頑張ってるから、俺もアイズのやりたい事を一緒に手伝うよ」

「なら・・・私が困っている時は助けてくれる？」

そう言うアイズに三日月は岩陰で頷く。

「うん。その時は助けに行く」

三日月の言葉を聞いてアイズは小さく笑った。

「・・・ありがとう」

その言葉に三日月は何も返さなかった。だが立ち上がる音が反対側から耳に届く。

「俺は先に行くよ。それとアイズもそろそろ着替えた方がいいよ。皆待ってるみたいだし」

「うん・・・先に待ってて」

アイズは立ち去る三日月にそう言って着替え始めた。

三日月と話した事で少しだけ、胸の奥が軽くなるのを実感しながら。

## 第十六話

着替えが終わったアイズ達は目的地である北の食料庫へと足を進めた。

北への選択は正しかったのか、断続的にモンスターの行列が通路の奥から押し寄せる。乱戦と精神力の松皮を嫌うアスフィの頼みで、群れの相手はアイズと三日月が交互に受け持った。

お互いにローテーションをしながら足を進めていると、ダンジョンに変化が現れる。

大樹のごとき樹皮の天井や壁面が、ある場所を境にして、岩場のようなでこぼことした構造を作り始める。色は薄い赤色となり、道は完璧に洞窟然としたもの変わった。

食料庫に近づいている証拠である。腹を空かせたモンスターが集まる給養の間は大空洞の奥に石英の大柱が存在し、そこから栄養価の高い液体が流れ出す。これを中心に、食料庫近辺の迷宮は形状を変えるのだ。

モンスター大量発生の原因。

自分達を待ち受けるものは一体何なのか。

ルルネ達が今まで以上に緊張を纏い一步一步通路を進んでいく中、アイズも感覚を鋭敏にさせていく。モンスターの気配はいつの間にか途絶え、不気味な静寂が彼女達の耳を突き刺してきた。

そして、地図を持つルルネとアイズが先導する形で道を行き、パーティが進行することしばらく。

「なっ……」

冒険者達は、とうとう〃それ〃を目撃した。

「か、壁が……」

「……植物？」

アイズ達の目の前に現れたのは、通路を塞ぐ巨大な大壁だった。

不気味な光沢とぶよぶよと膨れ上がる表面。気色悪い緑色の肉壁はアイズ達の前に立ち上がり、進路を見事に遮っている。明らかに周囲の石質の壁面とは作りも性質も異なっていた。

生物のようであり、ともすれば誰かが眩いた通り植物のようである。あるいは、ダンジョンが患ったガンのような。

アスファイ達はもとより『深層』に何度も進行しているアイズでさえ、こんなもの、今までお目にかかったことがない。

目を疑うような光景に、パーティ全体がざわめく。

「・・・ルルネ、この道で確かなのですか」

「ま、間違いないよっ。私は食料庫に繋がる道を選んできたんだ、こんな障害物は存在しない・・・筈なんだ」

アスファイの確認に、慌てて地図を見直すルルネ。

食料庫が存在する大空洞まで、まだ道半ば。

自分達の行く手を阻む謎の肉壁を、アイズは瞠目しながら仰いだ。

「・・・他の経路を調べます。ファルガー、セイン、他の者を引き連れて二手に分かれてください。深入りは禁じます」

アスファイの指示に、大柄な虎人とエルフの青年は頷いた。

彼等は予備の地図を片手に五名ずつ団員を従え、来た道に戻る。

引き返していく彼等の姿を見送った後、アイズ達は肉壁を眺めた。

場にはアイズ、三日月、ルルネ、アスファイ、そしてサポーターの五人だけだ。

アイズ達はお互いに周囲を調べ始める。

周囲の広がる通常の壁に別段変わった所はない。ダンジョンが変調をきたしているというより、この肉壁本体が異質であるようだ。アイズは三日月とともに近付く。

24階層の巨大な通路を完全に塞いでいる肉壁はおよそ10Mといったところか。

鼻を突く異臭・・・腐臭がわずかに漂ってくる。

生理的嫌悪を催す肉壁に、アイズはそつと片腕を伸ばす。

それを見たルルネの止めておけという制止を他所に、壁の表面に触れた。

(生きている・・・)

確かな熱と、そして鼓動にも似た微かな律動が、手の平越しに伝わってくる。

警戒を絶えず払いながら、アイズはじつと壁を見据えた。

そんな中で、アイズの耳にアスファイ達の声が届く。

「アスファイ、戻った」

「どうでしたか」

調査を終えた彼らの話が断片的に聞こえてくる。

「あのモンスターの大群は大量発生が原因のものではなさそうですね」

「ど、どういうことだ？」

ルルネの疑問が耳に届く。

「食料庫には腹を空かせたモンスターが階層中から集まってきます。

もし、とある食料庫に入れない事態に直面したら・・・モンスターの群れはどのような行動を取ると思いますか？」

「あっ・・・」

ルルネが言葉を漏らすのと同時に三日月がアイズに言う。

「つまりあのモンスターは別の場所に向かう最中だったわけって事なんじゃない？」

「じゃあ・・・」

自分達の目的であるモンスター大量発生の原因はそれが原因だという事になる。

なら、この壁の向こう側にある物は？

アイズのその疑問に三日月はただ黙ったままだった。

## 第十七話

「……アスファイ、ここからは？」

「……行くしかないでしょう」

尻込みするルルネに、アスファイは溜息をついた。

乗り気ではなかったルルネも「だよな」と肩を落として、すぐに意識を切り替える。

「二応、『門』みたいなものはあるけど……」

肉壁の中心には花の花弁が折り重なったような『門』、あるいは『口』のような器官がある。

直径は大型級のモンスターでも優に通り抜けられるほどだ。これが入り口だとしたらいざいざ開く瞬間が訪れるかもしれないが……微動だにする気配もない。

「やはり、破壊するしかないさそうですね」

出入り口を含め、分厚そうな構造の肉壁をアスファイは注視する。

「植物を思わせる外見から、炎が有効そうですが……」

「斬りますか？」

「大人しそうな顔してさらっと物騒な事をいうな、剣姫……」

アイズは鞘から剣をひきぬくと、ルルネが呆れた視線を送ってくる。

「こいつを壊すなら俺も手伝おうか？」

三日月もそう言うが、アスファイは首を横に振る。

「いえ、ここは一度、魔法を使います」

彼女に命じられ、小人族の魔導士がパーティの前に出る。

みなに見守られる中、アイズの腰ほどの小柄な少女は小人族用の短い金属杖を構え、詠唱を始めた。

かぶっているトンがり帽子がびよこびよこ揺れる。

魔法円を展開する上位魔導士は、静かに魔法名を口ずさむと、炎の大火球を放った。

着弾と同時に、轟音と衝撃、そして炎上する。

燃烧音と共に火の粉を散らしながら、出入り口に当たる『門』の部

分が完全に焼け落ちた。

肉壁は焼け焦げた跡を残し、ぽっかりと口を開ける。

そしてアイズ達は内部へと侵入した。

「壁が……」

気色悪い音を立てて盛り上がっていく——修復していく肉壁に、ルルネが振り返る。

壁は時間をかけて完璧に塞がってしまった。

まるで自分達を閉じ込めるかのような動きに、ルルネと団員達は口を閉ざす。

「脱出出来なくなったわけではありません。帰路の際は、また風穴を開ければいいだけのことです」

呼びかけたアスファイの声に、ルルネ達はすぐに平静を取り戻したようだった。彼等と並んで、アイズもあらためて周囲を見回す。

まるで生物の体内を思わせる中に、アイズは壁の一角に歩み寄った。

《アスペレート》を持ち、壁面を斬りつける。

あっさりと切れた割れ目の先には、石壁——24階層本来の壁が視認できた。

（「何が ダンジョンの上に被さっている……？」）

まるで迷宮にこの肉壁が取り付いてみたいだと、アイズは思った。

「……ん？」

三日月が唐突に開けた通路でしゃがみ込む。

アイズも三日月の不自然な行動に首をかしげていると、三日月が言った。

「モンスターがここで死んでる。すぐ近くにいるよ」

三日月は灰の中から『魔石』の代わりに『ドロップアイテム』を見つけ出し、アイズへと投げてバルバトスを展開してから上を見上げる。

そのドロップアイテムをキャッチしたアイズは同時に、頭上を見上げた。

「——上」

アイズの眩きと同時に――

『オオオオオオオオオオオオッ!!』

破鐘の咆哮とともに迫る敵を前に、アスフィは叫ぶ。

「各自、迎撃しなさい！」

多数の巨躯の降下を回避し、アイズ達はモンスターに斬りかかった。

◇◇◇◇◇

「レヴィス、侵入者だ」

赤光に照らされる不気味な大空洞で、男の警告がもたらされる。

「モンスターか？」

「いや、冒険者だ」

赤髪の女、レヴィスの問いに、白ずくめの男は「やはり来た」と憎々しげに答える。

二人の周囲では、ローブに身を包んだ者達がにわかに浮足立っている。侵入者の存在を危ぶんでいるのか、互いに声を張り合いながら慌ただしく駆けずり回っている。

その光景を、レヴィスはくだらなさそうに一瞥した。

「相手は中規模のパーティ……全員手練のようだ」

肉壁の一部、月の表面を思わせる蒼白い水膜には、食人花と交戦する一団が映し出されていた。

興味の欠片も示していないレヴィスだったが――水膜の中に美しい金髪金眼の少女が現れた瞬間、目の色を変える。

座り込んだその場から、素早く立ち上がった。

「『アリア』だ」

「なにっ？」

彼女の眩きに、男も反応した。

レヴィスの緑色の瞳がアイズに食いついているとわかると、彼の口唇は解せないと言うように歪む。

「【剣姫】が『アリア』……？信じられん」



「確かだ」

短く返す赤髪の女は先ほどまでと打って変わって雰囲気を変えていた。

「私が行く。『アリア』の周りを奴等から引き剥がせ」

「・・・わかった。だが、あの 〃白いの 〃はどうする？アレを引き剥がすのは相当キツイぞ」

「やれ。無理矢理でもな」

返事を待たず背を向けて、女は大空洞から動き出す。

放たれる血のごとく赤い光が、彼女の姿を禍々しく照らし出した。

## 第十八話

「あらかた片付けましたね・・・」

長剣をサポーターに投げ返しながら、アスファイは周囲を見回す。

後方では最後の一体をちようどルルネが仕留め終えたところだった。灰の山から魔石を割ったダガーを回収し、ふいく、とアイズ達のもとに戻ってくる。

「落ち着いて戦えば、何とかなるもんだなあ」

「攻撃が通らなかつた時はどうなるかと思いましたが・・・まあ良しとしましょう」

街襲撃時、食人花に苦い記憶を植え付けられていたルルネは、パーティの連携のもと自信を取り戻したようだった。

アスファイも爆炸薬の消費を気にしつつ、戦果を前向きに捉える。

「聞いてはいましたが、あれが例の新種のモンスターですか・・・」  
「固くて、速くて・・・しかも数が多い。やになるよな」

そう呟く二人の話聞きながら、アイズは意識を周りから自身へと切り替える。

(食人花が出た・・・なら、この先に)

待ち受けている可能性は高い。

食人花のモンスターとともに連想される赤髪の女の姿のが、頭の中を過ぎる。

ぎゅつと握られる左手。

そんなアイズに三日月は口を開いた。

「少し力を抜けば？ずっとその状態だと疲れるよ」

「・・・え？」

三日月の言葉がアイズの耳に入る。

振り向いたアイズに対し、三日月は言った。

「ちゃんと休める時に休んどかないと、全力で戦えないし、ミスも増える。そんなに突き詰めてると肝心な時に戦えなくなるから、今は休んだら？」

三日月の言葉にアイズは黙り込む。確かにその通りなのかもしれない

ない。

「わかった。じゃあ、少しだけ休むね」

「じゃあ、前線は俺がやるね」

「うん」

アイズは頷いて、パーティの後ろ側へと下がる。

と、再び岐路に差しかかり、パーティの歩みが止まった。

広く左右に開けた二つの道を前に、ルルネがアスフィの指示を仰ぐ。

「アスフィ、今度はどつちに——」

その時だった。

ルルネの声を遮り、ずるずると体軀を引きずる音を響かせながら、左右の道からモンスター<sup>①</sup>の毒々しい花頭が現れる。

「両方からかよ……」

「違う。後ろからも来るよ」

「げっ」

三日月の声にアイズは振り向くと、そこにも食人花の花頭が覗かせていた。

左右後方、三方向から挟み撃ちだ。天井と地面を這って出現する多くの食人花に、「ヘルメス・ファミリア」の他団員も顔を顰める。

退路が完璧に断られた。

「……【劍姫】に三日月、片方の通路を受け持ってくれますか？」

「わかりました」

「わかった」

アスフィの要請をアイズと三日月は了承する。

ただ一人第一級冒険者であるアイズと三日月に片側の通路の敵を押しさえ込んでもらい、その間に二方向からのモンスターを殲滅する作戦だ。

間もなくアスフィの鋭い号令によって、総勢十六名の冒険者達は飛び出した。

後方に八、右に七、そして左にアイズと三日月が接敵する。

そして、誰よりも早くアイズの《デスペレート》が食人花を斬り伏

せた——次の瞬間。

見計らったかのように、天井より巨大な柱が彼女のもとへ落下した。

「つつ!?!」

すぐさま反応したアイズは緊急退避する。

地面を蹴りつけ後転飛び。ドンツ、ドンツ、となおも発射される巨大な緑柱を次々に回避し続け、気が付くと。

左方の道が完璧に塞がり、アスファイ達と隔離されてしまった。

「分断!?!」

「チツ。まずいな」

極厚の壁と化した柱の奥からルルネの悲鳴が届く。

三日月も短く舌打ちをしながらそう呟く。

アイズもまた金の双眸を見開いた。通常のダンジョンではありえない罠に、離れ離れになった仲間と同様驚愕に見舞われる。

——引き離された!

アイズはすぐさま残る食人花を斬り伏せると、三日月と合流しようと駆け抜ける。

だが——

「!!」

三日月の足元から、柱が三日月を呑み込むように伸びてくる。

「ツ!?!三日月!!」

アイズが手を伸ばすが三日月には届かず、三日月の姿はそのまま柱の先へと消えていった。

「ツ!」

アイズは壁にすぐさま駆け寄り、壁の奥へと閉じ込められた三日月を助けようと壁を破壊しようとする。

だが、放たれた獰猛な殺気が、それを許さなかった。

強烈な戦意に、アイズは肩を揺さぶられる。

振り返り、薄闇が続く通路の奥を見つめる。

あの暗がりの先にいる、無視できない、何より覚えのある圧倒的な存在感。

薄闇の通路の奥から闇を切り裂いて歩み出てくる人影が一つ。

「——そちらから出向いてくれるとはな。願ったりだ」  
そうして現れたのは、赤髪の、調教師の女だった。

## 第十九話

「・・・貴方は、ここで何をやっているの?」

アイズの問いに赤髪の女は答える。

「さあな」

「これは、このダンジョンは何? 貴方が作ったもの?」

「知る必要はない」

視線を絡め合い、油断なく構えながら、アイズは相手の様子を窺う。

あたかも追い剥ぎをしたかのように、どこか傷んだ形跡のある戦闘衣。防具を始め、武器は何も携行していない。

こちらの質問に対し、やはり相手はまともに取り合う気はなさそうだった。

以前遭遇した時と似たように、ぼつさり切り捨ててくる。

「お前は黙って付いてくればいい。会いたがっている奴がいる。来てもらうぞ、『アリア』」

その言葉に、アイズは視線を鋭くした。

「私は、『アリア』じゃない」

否定するアイズに、女は怪訝そうな顔付きをする。

「『アリア』は、私のお母さん」

「世迷い言を抜かすな。仮に・・・お前が『アリア』本人でなくとも、関係ないことだ」

言葉を交わす中、アイズは身を乗り出す。

「貴方は、どうして『アリア』を知っているの? 『アリア』の何を知っているの?」

「名を知っているだけだ。『アリア』に会いたいと何度もせつつかれてな・・・うざったらしい声に従って探していれば、お前に会った。それだけだ」

要らない言葉を吐いた、と言うように彼女は会話を切り上げる。

「無駄な話は終わりだ。お前を連れていく」

そう言つて、女は地面に片手を、突き刺さした。

ズズツ、と水が巻くような音が発せられる。

やがて勢いよく手を引き抜くと、赤い液体を撒き散らしながら長い棒状の塊が吐き出された。

柄が存在する、紛れもない『長剣』。

口を閉ざすアイズは、そんな長剣に視線を向けながらも、静かに身体から余計な力を抜いた。

三日月の事が心配だったが、今はその事に割ける思考はない。

臨戦態勢の強敵を前に、己の全てを愛剣へと委ねる。

もし——勝てなかった時の〈ヴィダール〉の力を使う事も考慮に入れて、アイズは剣を構える。

「行くぞ」

瞬時、女は突撃した。

赤い髪が血飛沫のような斜線を描きながら、長剣を振り下ろす。

アイズは真つ向から受け止め、《デスペレート》で弾き返した。

響き渡るサーベルの金属音と鉄塊を殴りつけたような鈍い音。

だが、その感触にアイズはいけると思った。

一発一発が三日月の攻撃より重くなく、それでいてバルバトスと違ってテイルブレードが飛んで来ないぶん随分とやりやすい。

激しく打ち合う最中、女の表情が怪訝なものに変わる。

眉を曲げていた彼女にアイズは切り払いの一閃。

体勢を崩すほど、長剣が大きく弾かれる。

「なっ!?!」

動揺する暇も与えず、アイズは無言で追撃する。

アイズの連撃を浴びる女はぎりぎりの防御を積み重ね、次の一撃で堪らず大きく後退した。

ようやく勢いが止まった時、女は呆然とした。

そして鋭い眼差しで依然自分を見据えてくるアイズに対し、次には、盛大に眉間を歪める。

「[ステイタス]を昇華させたか・・・!?!」

十日前とは見違えたアイズの能力に、相手もとうとう気づいたようだった。

「ああ、面倒なッ・・・!!」

吐き捨てられた言葉には、苛立ちが滲み出ていた。

忌々しそうに睨みつけてくる女に対し、アイズは静かに言い返した。

「貴方に負けたくないし、三日月に追いつきたいだけ」

己の意思を表すように、アイズは愛剣の切っ先を向けた。

「ちツ……」

舌打ちをし、長剣を構え直す女と睨み合う。

常に冷淡であった表情を打ち消し、相手はこちらを明確な敵として鋭い視線の矛で射抜いてくる。

そんな二人の睨み合いが続く中、  
「地面が揺れた」。

「……?」

「……なに?」

揺れる地面にアイズと赤髪の女は顔を壁へと向ける。その壁からは――

スブツ!!

壁の中から「巨大過ぎる大剣」が突き出してきた。

そして――

横に振られる巨大な幅広の大剣。そしてその先から現れたのは――

「邪魔」

そう言ってダンジョンの壁をぶち破って現れたバルバトスの姿がそこにあった。



## 第二十話

「邪魔」

三日月は目の前の肉壁をヴァルキュリアバスターソードで強引に切り裂きながらアイズと赤髪の女に視線を向ける。

先ほどアイズと自分を分断しようとしてきた正体不明の女。

実力はそれなりにありそうだが、今の三日月にはどうでも良かった。

「アンタ、確か前に上の街であったな。アイズとなんか関係あるみたいだけど」

三日月の言葉に対し、赤髪の女は言う。

「お前には関係ないことだ」

赤髪の女は紅剣をアイズに向けたまま、目だけは三日月を睨み続けている。

「あつそ。けどアンタは俺達の敵だろ。だったら、やることは変わらない」

三日月はバスターソードを大型メイスに持ち替えながら、赤髪の女に言った。

だが、女はそんな三日月に対し、口を開く。

「お前は一体なんだ？それにその鎧・・・見たこともない」

「別にアンタに言う必要ないだろ」

三日月はそう言つて、大型メイスを片手に赤髪の女へと突撃する。

「三日月ツ・・・！」

いくら三日月でも流星に一人では危ない。アイズは△テスペレート△の柄を強く握りながら駆け出そうとする。

そんなアイズに構いなく、赤髪の女が持つ紅剣と三日月の大型メイスが火花を上げて激突した。

「ぐツツ・・・!?!」

真つ先にうめき声を上げたのは赤髪の女だった。

三日月との鏖競り合いをした瞬間、顔を思いきり歪めて苦しそうな表情を作る。

そして彼女が手にしていた紅剣も一合の激突で刀身部分が目に見えてわかるくらいにひび割れ、歪んでいた。

三日月はそんな女に、大型メイスに更に力を込める。

大型メイスの圧倒的な質量と重量、そしてバルバトスのパワーが合わさり、一気に追い詰められていく。

「チツ・・・！」

力勝負では勝てないと悟った女は大型メイスに加えられたその力を利用して一気に後ろへと跳び、距離を取る。

だが、三日月はそんな女に対し、腕部砲を女に放ちながら一気に距離を詰めて、そのまま大型メイスを女へとフルスイングで振り回した。

「ッ!!」

とつぎに剣の脇腹でガードをするが、大型メイスはその剣を粉碎し、女の身体を捉え、そのまま壁へと勢いよく叩きつけた。

「――」

僅か二合。たったそれだけで赤髪の女を追い詰めた三日月にアイズは絶句する。三日月は視線を女に向けたままアイズに言った。

「アイズ、動ける?」

「えっ?う、うん」

三日月のその問いにアイズは頷くと、三日月は言う。

「ここは俺に任せていいよ。アイズは皆と合流して」

そう言う三日月に、アイズは首を横に振った。

「ううん、私がやる。だから三日月が皆の所へ行つて。この人は――

――私がやる」

アイズのその言葉に三日月は少し考えた素振りを見せると、赤髪の女に背を向ける。

「じゃあここは任せる。アイズはこつちに気にしないで戦うことに集中していいよ」

三日月はアイズにそう言ってあっさりと引き下がった。

「・・・ありがとう。三日月」

「気にしなくていいよ。皆は俺が守るから」

「うん。お願い」

アイズは背を向けた三日月にそう言つて、赤髪の女に《デスペレート》の切っ先を向ける。

「・・・あの男に任せておけば全てが片付いたものを」

「私は、三日月に並びたいって言った。だから————貴女に勝つ」

「ふん————舐めるな」

アイズのその言葉に女は、烈火のごとく、怒りを帯びた。

そして赤髪の女は刀身が半分になつた長剣の柄へ亀裂を疾走らせる。

これまでにない感情をさらけ出し、次の瞬間、地を蹴り碎いた。

弾丸となり迫りくる相手に、アイズも剣を振り上げろ疾駆する。

銀と紅の剣が、凄まじい勢いで交差した。

そして衝突し、互いの剣から火花が散つた。